

源氏物語

真木柱

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）帝^{みかど}

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一煩悶^{はんもん}

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3地上げ」

「#地から3地上げ」こひしさも悲しきことも知らぬなり真

「#地から3地上げ」木の柱にならまほしけれ （晶子）

「帝^{みかど}のお耳にはいって、御不快^{おほしめ}に思召すようなことがあってもおそれおおい。当分世間へ知らせないようになりたい」

と源氏からの注意はあっても、右大将は、恋の勝利者である誇りをいつまでも蔭^{かげ}のことにはしておかれないふうであった。時日がた

っても新しい夫人には打ち解けたところが見いだせないで、自身の運命はこれほどつまらないものであつたかと、気をめいらせてばかりいる玉鬘たまかすりを、大將は恨めしく思いながらも、この人と夫婦になれた前生の因縁が非常にありがたかつた。予想したにも過ぎた佳麗な人を見ては、自分が得なかつた場合にはこのすぐれた人は他人の妻になつているのであると、こんなことを想像する瞬間でさえ胸がとどろいた。石山寺の觀世音菩薩かんぜおんぼさつも、女房の弁も並べて拝みたいほどに大將は感激していたが、玉鬘からは最初の夜の彼を導き入れた女として憎まれていて、弁は新夫人の居間へ出て行くことを得しないで、部屋に引き込んでいた。仏の御心みこころにもその祈願は取り上げずにいられまいと思われた風流男たちの恋には効験ききめがなくて、荒削りな大將に石山觀音の靈驗が現われた結果になつた。源氏も快心のこととはこの問題を見られなかつたが、もう成立したことであつて、当人はもとより実父も許容した婿を自分だけが認めない態度をとることとは、自分の愛している玉鬘のためにもかわいそうであると思つて、新婦の家としてする儀式を華麗に行なつて、婿かしずきも重々しくした。早くそのうちに自邸へ新夫人を引き取つて行きたいと大將は思つているのであるが、源氏は簡単に良人おとこの家へ移るとしても、そこにはうれしく思つては迎えぬはずの第一夫人もいるのが、玉鬘のために気の毒であるということを理由にしてとめていた。

「何もかも穏やかに行くようにして、双方とも譏そしられたり、恨んだりすることを避けなければならぬ」

と源氏は言うのである。実父の大臣は、この結婚がかえつてあなたのために幸福だと思ふ。忠実な支持者がなくて派手はでな宮仕えに出

ては苦しいことであろうと自分は心配でならなかつた。助けたい志

は十分にあるが、もう後宮には女御にょごが出ているのであるから、私としてはどうしてあげようもないのだからと、こんな意味の手紙を玉鬘へ送った。それは真理である。相手が帝でありになっても、第一の寵ちやうはなくて、ただ御愛人であるにとめられて、あやふやな後宮の地位を与えられているようなことは、女として幸福なことではないのである。三日の夜の式に源氏が右大将と応酬おつしやうした歌のことなどを聞いた時に、内大臣は非常に源氏の好意を喜んだ。皆ともかくも人に知らずまいとした結婚であったが、まもなくおもしろい新事実として世間はこのことを話題にし出した。帝もお聞きになった。

「残念だが、しかしそうした因縁だった人も、一度自分の決めたことだから後宮にはいることとは違った尚侍なishiのかみの職は辞める必要がない」という仰せを源氏へ下された。

十月になった。神事が多くて内侍所ないしどころが繁忙をきわめる時節で、内侍以下の女官なども長官の尚侍の意見を自邸へ聞きに来たりするこ
とで、派手はでに人の出入りの多くなった所に、大将が昼も帰らずに暮らしていたりすることで尚侍は困っていた。失恋の悲しみをした人のたくさんある中にも兵部卿ひょうぶきやうの宮などはことに残念がつておいでになる一人であった。左兵衛督さひやうえのかみは姉の大将夫人のこともいっしょにして世間体を悪く思ったが、恨みを言っても今さら何にもならぬのを知って沈黙していた。大将は以前からまじめで通った人で、過去においては何らの恋愛問題も起こさずに来たことなどは忘れたように、生まれ変わったような恋の奴やつこの役に満足して、風流男らしく宵暁よいあかつきに新夫人の六条院へ出入りする様子をおもしろく人々は見ていた。玉鬘たまがははなやかな心も引き込めて思い悩んでいた。自発的にできた結

果でないことは第三者にもわかることであるが、源氏がどう思っているであろうということが玉鬘にはやる瀬なく苦しく思われるのであった。兵部卿の宮のお志が最も深く思われたことなどを思い出すと恥ずかしくやさしい気ばかりがされて、大将を愛することがまだできない。源氏は幾十度となく一步をそこへまで進めようとした自身を引きとめ、世間も疑った関係が美しく清いもので終わったことを思つて、自身ながらも正しくないことはできない性質であることを知つた。紫夫人にも、

「あなたは疑つてもいたではありませんか」

と言つたのであつた。しかし常識的には考えられないこともする物好きがあるのであるから、この先はどうなることかと源氏はみずから危うく思いながらも、恋しくてならなかつた人であつた玉鬘の所へ、大将のいない昼ごろに行つてみた。玉鬘はずつと病氣のようになつていて、朗らかでいる時間もなくしおれてばかりいるのであつたが、源氏が来たので、少し起き上がつて、几帳きちょうに隠れるようにしてすわつた。源氏も以前と違つた父の威厳というようなものを少し見せて、普通の話をしていろいろした。平凡な大将の姿ばかりを見ているこのごろの玉鬘の目に、源氏の高雅さがつくづく映るについても、意外な運命に従っている自分がきまり悪く恥ずかしくて涙がこぼれるのであつた。繊細な人情の扱われる話になつてから、玉鬘は脇息きよせきによりかかりながら、几帳きちょうの外の源氏のほうをのぞくようにして返辞を言つていた。少し瘦やせて可憐かれんさの添つた顔を見ながら源氏は、それを他人に譲るとは、自身ながらもあまりに善人過ぎたことであると残念に思われた。

「#ここから1字下げ」

「下り立ちて汲みは見ねども渡り川人のせとはた契らざりしを

「#ここで字下げ終わり」

意外なことになりましたね」

涙をのみながらこう言う源氏がなつかしく思われた。女は顔を隠しながら言う。

「#ここから2字下げ」

みつせ川渡らぬさきにいかでなほ涙のみをの泡と消えなん

「#ここで字下げ終わり」

源氏は微笑を見せて、

「悪い場所で消えようというのですね。しかし三途さんずの川はどうしても渡らなければならぬそうですから、その時は手の先だけを私に引かせてくださいますか」

と言った。また、

「あなたはお心の中でわかっている者で、類のないお人よしの、そして信頼のできる者は私で、他の男性のすることはそんなものでないことを経験なすつたでしょう。と思うと私はみずから慰めることもできません」

こんなことも言われて、苦しそうに見える玉鬘たまかすらに同情して、源氏は話を言い紛らせてしまった。

「陛下は御同情のされるもつたいない仰せを下さいましたから、形式的にだけでもあなたを参内させようと思っています。家庭の妻に

なつてしまつては、そうした務めのために御所へ出るようなことは困難らしい。単なる尚侍であることは最初の私の精神とは違つても、三条の大臣はかえつて満足しておいでになることですから安心です」

などと源氏は情味のこもつた話をしていた。身にしむとも思い、恥ずかしいとも聞かれることは多いが、玉璽はただ涙にとらわれていた。こんなに悲觀的になつてゐるのが哀れで、源氏は恋をささやくこともできなかつた。ただ今後の大将と、その一家に対する態度などをよく教えていた。ただそのほうへ行つてしまふことは急に許そうとしないふうが見えた。

御所へ尚侍を出すことで大将は不安をさらに多く感じるのであるが、それを機会に御所から自邸へ尚侍を退出させようと思ふようになった。短時日の間だけを宮廷へ出ることを許すようになった。こんなふうに婿として通つて来る様式などは馴れないことで大將には苦しいことであつたから、自邸を修繕させ、いつさいを完全に設けて一日も早く玉璽を迎えようとばかり思つていた。今日までは邸の中も荒れてゆくに任せてあつたのである。夫人の悲しむ心も知らず、愛していた子供たちも大将の眼中にはもうなかつた。好色な風流男というものは、ただ一人の人だけを愛するものでなしに、だれのため、彼のためも考えて思いやりのある処置をとるものであるが、生一本な人のこうした場合の態度には一方の夫人としてはたまるまいと憐まれるものがあつた。夫人は人に劣つた女性でもなかつた。身分は尊貴な式部卿の宮の最も大切にされた長女であつて、世の中から敬われてもいた。美人でもあつたが、ひどい物怪がついて、この何年来は尋常人のようでもないのである。狂つている時が

多くて、夫婦の中も遠くなっていたが、なお唯一の妻として尊重していた大将に新しい夫人ができ、それがすぐれた美しい人である点ではなくて、世間も疑っていた源氏との関係もないことであつた清い処女であつた点に大将の愛は強く惹かれてしまった。それで第一夫人はそれだけの愛を損しているわけである。式部卿の宮はこの事情をお聞きになつて、

「今後そうした若い夫人を入れて派手に暮らせようとしている邸の片すみに小さくなつて住んでいるようなことをしては、世間体もよろしくない。私の生きている間はそんな屈辱的な待遇を受けて良人の家にいる必要はない」

と御意見をお言いになつた。御自邸の東の対を掃除させて、大将夫人の移つて来る場所に決めておいでになるのであつた。親の家ではあつても、良人の愛を失つた女になつて帰つて行くことは、夫人の決心のできかねることであつた。性質の静かな善良な人で、子供らしいおおようさもある人でいながら、時々人からうとまれるような病的な発作があるのである。住居なども始終だらしなくなつていて、きれいなことは何一つ残っていない家にいる夫人を、玉鬘の六条院にいるのとは比べようもないのであるが、青年時代から持ち続けた大将の愛は根を張つていて、一朝一夕に変わるものでも、変えられるものでもないから、今も心では非常に妻を哀れに思つていた。

「ただ昨日今日にできた夫婦でも、貴族の人たちは気に入らないことも、気に入らないふうを見せずに済ますものなのだ。全然人を捨ててしまうようなことをわれわれの階級の者はしないものなのだ。あなたには病苦というものがつきまとい、それを見るだけで

も気の毒で、私の恋愛問題などを話しておこうとしても話す時がなかったのだよ。以前からあなたと約束していることでしょう、あなたに病気はあっても私は一生あなたといふつもりだって、私はどんな辛抱しんぼうも続けてするつもりなのに、あなたはほかのことを考え出したのですね。別れてしまうようなことは考えずに私を愛してください。子供もあるのだから、その点から言っても私は一生あなたを大事にすると言っているのに、女の人には困った嫉妬しっとというものがあって、私を恨んでばかりあなたはいる。現在だけを見ておれば、あるいはそのほうが道理かもしれないが、私を信用してしばらく冷静に見ていてくれたなら、私のあなたを思う志はどんなものかが理解できる日があるだろうと思う。宮様が不快にお思いになって、今すぐにお邸やしきへあなたをつれて帰ろうとお言いになるのは、かえってそのほうが軽率なことでないだろうか。実際別れさせてしまおうと思っておいでになるのだろうか。しばらく懲らしめてやろうとお思いになるのだろうか」

と笑いながら言う大将の様子には、だれからも反感を持たれるのに十分な利己主義者らしいところがあった。

大将の妾しよづのようにもなっていた木工もくの君や中将の君なども、それ相応に大将を恨めしく思っていたが、夫人は普通な精神状態になっている時で、なつかしいふうを見せて泣いていた。

「私を老いぼけた、病的な女だと侮辱なさいますのはごもつともなことですが、そんなお言葉の中に宮様のことをお混ぜになるのを聞きますと、私のような者と親子でおありになるばかりにと思われて宮様がお気の毒でなりません。私はあなたのお噂うわさを聞くことが近ごろ始まったことでも何でもないのでですから、悲しみはいたしません」

と言つて横向く顔が可憐であつた。小柄な人が持病のために痩せ衰えて、弱々しくなり、きれいに長い髪が分け取られたかと思うほど薄くなつて、しかもその髪はよく梳くこともされないで、涙に固まつているのが哀れであつた。一つ一つの顔の道具が美しいのではなくて、式部卿の宮によく似て、全体に艶なところのある顔を、構わないままにしてあつては、はなやかな、若々しいというような点はこの人に全然見られない。

「宮様のことを軽々しくなど私が言うものですか。人に聞かれても恐ろしいようなことを言うものでない」

などと大将はなだめて、

「私の通つて行く所はいわゆる玉の台なのだからね。そんな場所へ不風流な私が入りすることは、よけいに人目を引くことだろうと片腹痛くてね、自分の邸へ早くつれて来ようと私は思うのだ。太政大臣が今日の時代にどれだけ勢力のある方だというようなことは今さらなことだが、あのりっぱな人格者の所へ、ここの嫉妬騒ぎが聞こえて行くようではあの方に済まない。穏やかに仲よく暮らすように心がけなければならぬよ。宮のお邸へあなたが行つてしまったからといつても、私はやはりあなたを愛するだろう。夫婦の形はどうなつても今さら愛のなくなることはないのだが、世間があなたを軽率なように言うだろうし、私のためにも軽々しいことになる。長い間愛し合つてきた二人なのだから、これからも私のためになることをあなたも考えて、世話をし合おうじゃありませんか」

とも言つた。

「あなたの冷酷なことがいいことか悪いことか私はもう考えません。

何とも思いません。ただ私が健全な女でないことを悲しんでいます。宮様がお案じになって、娘の私の名誉などをたいそうにお考えになつたり、御一煩悶はんもんをなすつたりするのがお気の毒で、私は邸へ帰りたくないと思つています。六条の大臣の奥様は私のために他人ではありません。よそで育つたその人が大人おとなになって、養女のために姉の私の良人おっとを婿に取つたりするということでお気ななどは恨んでいらつしやるのですが、私はそんなことも思いませんよ。あちらでしていらつしやることをながめているだけ」

「こんなにあなたはよく筋道の立つ話ができるのだがね。病気の起こることがあつて、取り返しもつかないようなことがこれからも起こるだろうと気の毒だね。この問題に六条院の女王にょおうは関係してられないのだよ。今でもたいせつなお嬢様のように大臣から扱われていらつしやる方などが、よそから来た娘のことなどに關心を持たれるわけもないのだからね。まあまったく親らしくない継母様おまははだともいえるね。それだのに恨んだりしていることがお耳にはいつては済まないよ」

などと、終日夫人のそばにいて大将は語っていた。

日が暮れると大将の心はもう静めようもなく浮き立って、どうかして自邸から一刻も早く出たいとばかり願うのであつたが、大降りに雪が降つていた。こんな天候の時に家を出て行くことは人目に不人情なことに映ることであろうし、妻が見さかいなしの嫉妬しつとでもするのでもあれば自分のほうからも十分に抗争して家を出て行く機会も作れるのであるが、おおように静かにしていられては、ただ気の毒になるばかりであると、大将は煩悶はんもんして格子こうしも下おろさせずに、縁側へ近い所で庭をながめているのを、夫人が見て、

「あやにくな雪はだんだん深くなるようですよ。時間だってもうおそいでしょう」

と外出を促して、もう自分といることに全然良人は興味を失っているのであるから、とめてもむだであると考えているらしいのが哀れに見られた。

「こんな夜にどうして」

と大將は言ったのであるが、そのあとではまた反対な意味のことを、

「当分はこちらの心持ちを知らずに、そばにいる女房などからいろんなことを言われたりして疑ったりすることもあるだろうし、また両方で大臣がこちらの態度を監視していられもするのだから、間を置かないで行く必要がある。あなたは落ち着いて、気長に私を見ていてください。邸やしきへつれて来れば、それからはその人だけを偏愛するように見えることもしないで済むでしょう。今日のように病気が起こらないでいる時には、少し外へ向いているような心もなくなつて、あなたばかりが好きになる」

こんな言っていた。

「家においでになつても、お心だけは外へ行つては私も苦しゅうございます。よそにいらつしつてもこちらのことを思いやっていてさえくたされれば私の氷こおつた涙も解けるでしょう」

夫人は柔らかに言っていた。火入れを持って来させて夫人は良人おとこの外出の衣服に香を焚たきしめさせていた。夫人自身は構わない着ふるした衣服を着て、ほっそりとした弱々しい姿で、気のめいるふうにすわっているのをながめて、大將は心苦しく思った。目の泣きはらされているのだけは醜いのを、愛している良人の心にはそれも悪

いとは思えないのである。長い年月の間二人だけが愛し合ってきたのであると思うと、新しい妻に傾倒してしまった自分は軽薄な男である、大将は反省をしながらも、行って違おうとする新しい妻を思う興奮はどうすることもできない。心にもない歎息たんそくをしながら、着がえをして、なお小さい火入れを袖そでの中へ入れて香においをしめていた。ちよつどよいほどに着なれた衣服に身を装うた大将は、源氏の美貌びぼうの前にこそ光はないが、くつきりとした男性的な顔は、平凡な階級の男の顔ではなかった。貴族らしい風采ふうさいである。侍所さむらいに集っている人たちが、

「ちよつと雪もやんだようだ。もうおそかろう」

などと言って、さすがに真正面から促すのでなく、主人あるじの注意を引こうとするようなことを言う声が聞こえた。中將の君や木工もくなどは、

「悲しいことになってしまいましたね」

などと話して、歎なげきながら皆床にはいつていたが、夫人は静かにしていて、可憐なふうからだに身体を横たえたかと見るうちに、起き上がつて、大きな衣服のあぶり籠かこの下に置かれてあつた火入れを手につかんで、良人の後ろに寄り、それを投げかけた。人が見とがめる間も何もないほどの瞬間のことであつた。大将はこうした目にあつてただあきれていた。細かな灰が目にも鼻にもはいつて何もわからなくなつていた。やがて払い捨てたが、部屋じゆうにもうもうと灰が立っていたから大将は衣服も脱いでしまった。正気でこんなことをする夫人であつたら、だれも顧みる者はないであろうが、いつもの物怪もののけが夫人を憎ませようとしていることであるから、夫人は気の毒である。と女房らも見ていた。皆が大騒ぎをして大将に着がえをさせ

たりしたが、灰が髪などにもたくさん降りかかって、どこもかしこも灰になった気がするので、きれいな六条院へこのままで行けるわけのものではなかった。大將は爪弾きつまはじがされて、妻に対する憎悪そっおの念ばかりが心につのった。先刻愛を感じていた気持ちなどは跡かたもなくなくなったが、現在は荒だてるのに都合のよろしくない時である。どんな悪い影響が自分の新しい幸福の上に現われてくるかもしれないと、大將は夫人に腹をたてながらも、もう夜中であつたが僧などを招いて加持かじをさせたりしていた。夫人が上げるあさましい叫び声などを聞いては、大將がうとむのも道理であると思われた。夜通し夫人は僧から打たれたり、引きずられたりしていたあとで、少し眠つたのを見て、大將はその間に玉鬘たまかづらへ手紙を書いた。

「#ここから1字下げ」

昨夜から容体のよろしくない病人ができて、おりから降る雪もひどく、こんな時に出て行くことはどうかと、そちらへ行くのをやむなく断念することになりましたが、外界の雪のためでもなく、私の身の内は凍ってしまうほど寂しく思われました。あなたは信じていてくださるでしょうが、そばの者が何とかいいかげんなことを忖度そんたくして申し上げなかったであろうかと心配です。

「#ここで字下げ終わり」

という文学的でない文章であつた。

「#ここから2字下げ」

心さへそらに乱れし雪もよに一人さえつる片敷かたしきの袖そで

「#ここから1字下げ」

堪えがたいことです。

「#ここで字下げ終わり」

ともあった。白い薄様に重苦しい字で書かれてあった。字は能書であった。大將は学問のある人でもあった。尚侍は大將の来ないことと何の痛痒も感じていないのに、一方は一所懸命な言いわけがしてあるこの手紙も、玉鬘は無関心なふうに見てしまっただけであるから、返事は来なかった。大將は自宅で憂鬱な一日を暮らした。夫人はなお今日も苦しんでいたから、大將は修法などを始めさせた。大將自身の心の中でも、ここしばらくは夫人に発作のないようにと祈っていた。物怪につかれなほんとうの妻は愛すべき性質であるのを自分は知っているから我慢ができるのであるが、それでもなかつたら捨てて惜しくない気もすることであろうと大將は思っていた。大將は日が暮れるとすぐに出かける用意にかかったのである。大將の服装などについても、夫人は行き届いた妻らしい世話の十分でない人なのである。自分の着せられるものは流行おくれの調子のそろわないものだ。大將は不足を言っていたが、きれいな直衣などがすぐまにあわないで見苦しかった。昨夜のは焼け通って焦げ臭いにおいがした。小袖類にもその臭気は移っていたから、妻の嫉妬にあつたことを標榜しているようで、先方の反感を買うことになるであろうと思つて、一度着た衣服を脱いで、風呂を立てさせて入浴したりなどして大將は苦心した。木工の君は主人のために薰物をしながら言う、

「#ここから1字下げ」

「一人あて焦るる胸の苦しきに思ひ余れる焰とぞ見し

「#ここで字下げ終わり」

あまりに露骨な態度をおとりになりますから、拝見する私たちまでもお気の毒になってなりません」

袖で口をおおって言っている木工の君の目つきは大将を十分にとがめているのであったが、主人あるじのほうでは、どうして自分はこんな女などと情人関係を作ったのであろうとだけ思っていた。情けない話である。

「#ここから1字下げ」

「うきことを思ひ騒げばさまざまにくゆる煙ぞいとど立ち添ふ

「#ここで字下げ終わり」

ああした醜態つわなが噂うわさになれば、あちらの人も私を悪く思うようになって、どちらつかずの不幸な私になるだろうよ」

などと歎息たんそくを洩もらしながら大将は出て行った。中一夜置いただけで美しさがまた加わったように見える玉鬘であったから、大将の愛はいっそうこの一人に集まる気がして、自邸へ帰ることができずにそのままずっと玉鬘のほうにいた。大騒ぎして修法などをしていても夫人の病気は相変わらず起こって大声を上げて人をののしるようなことのある報知を得ている大将は、妻のためにもよくない、自分のためにも不名誉なことが必ず近くにいれば起こることを予想して、怖おそろしがって近づかないのである。邸やしきへ帰る時にもほかの対に離れていて、子供たちを呼び寄せて見るだけを楽しみにしていた。女の子が一人あって、それは十二、三になっていた。そのあとに男の子

が二人あつた。近年はもう夫婦の間も隔たりがちに暮らしていたが、ただ一人の夫人として尊重することは昔に変わらなかつたのが、こんなふうになつたのであるから、夫人ももう最後の時が来たのだと思ふし、女房たちもそう見て悲しむよりほかはなかつた。

父宮がそのことをお聞きになつて、

「そんな冷酷な扱いを受けてもまだ辛抱強くあなたはしているのですか。それは自尊心も名譽心もない女のすることです。私の生きている間はまだあなたはそう奴隷的になつていないでもいいのです」

と言うお言葉をお伝えさせになつて、にわかには迎えをお立てになつた。夫人はやつと常態になつていて、自身の不幸な境遇を悲しんでいる時に、このお言葉を聞いたのであつたから、今になつてまだ父宮のお言葉に従わずここにいて、まったく良人から捨てられてしまふ日を待つことは、現在以上の恥になることであらうなどと思つて、実家へ行くことにしたのであつた。夫人の弟の公子たちは、左兵衛督よつゑのかみは高官であるから人目を引くのを遠慮して、そのほかの中將侍従みんぶだゆう、民部大輔などで三つほどの車を用意して夫人を迎えに来たのであつた。結局はこうなることを予想していたものの、いよいよ今日限りにこの家を離れなければならぬかと思うと、女房たちは皆悲しくなつて泣き合つた。

「これまでのようでないかかり人ひとにおなりになるのだから、お狭いところにおおぜいがお付きしていることはできません。幾人かの人だけはお供してあとは自分たちの家へ下がることにして、とにかくお落ち着きになるのを待ちましょう」

などと女房たちは言つて、それぞれの荷物を自宅へ運ばせ、別れ別れになるものらしい。夫人の道具の運ばれる物は皆それぞれ荷作

りされて行く所で、上下の人が皆声を立てて泣いている光景は悲しいものであった。姫君と二人の男の子が何も知らぬふうは無邪気にかの中を歩きまわっているのを呼んで、夫人は前へすわらせた。

「お母様は不幸な運命でお父様から捨てられてしまったのだから、どちらかへ行ってしまうなければならぬ。あなたがたはまだ小さいのにお母様から離れてしまわなければならないのはかわいそうだね。姫君はどうなるかしれないお母様だけれど私といっしょにいることになさい。男の子も私について来て、時々ここへ来るようになってだけにしてはお父様がかわいがつてくださらないよ。大人になって出世もできないような不幸の原因にそれがなるかもしれないからね。お祖父様の宮様のいらっしゃる間は、ともかくも役人の端にはしてもらえないにもせよね、お父様が今度親類におなりになった二人の大臣次第の世の中なのだから、その方たちにきらわれている私についていてはあなたがたは損で、出世などはできませんよ。そうかといってお坊様になって山や林へはいつてしまうことは悲しいことだからね。それに不自然な出家をしては死んでからのちまで罪になります」

と言つて泣く母を見ては、深い意味はわからないままで子は皆悲しがつて泣く。

「昔の小説の中でも普通にお子様を愛していらっしゃるお父様でも片親ではね、いろんなことの影響を受けてだんだん子供に冷淡になつていくものですよ。そしてこちらの殿様は現在でさえもあしたふうをお見せになるじゃありませんか。お子様の将来を思つてくださるようなことはないと思います」

と乳母たちは乳母たちでいっしょに集まつて、悲しんでいた。日

も落ちたし雪も降り出しそうな空になって来た心細い夕べであった。

「天気がいぶん悪くなって来たそうです。早くお出かけになりませんか」

と夫人の弟たちは急がせながらも涙をふいて悲しい肉親たちをながめていた。姫君は大将が非常にかわいがっている子であったから、父に逢あわないままで行ってしまうことはできない、今日父とものを言っておかないでは、もう一度そうした機会はないかもしれぬと思つてうつぶしになって泣きながら行こうとしないふうであるのを夫人は見て、

「そんな氣にあなたの方なつてゐることはお母様を悲しくさせます」
 などとなだめていた。そのうち父君は帰るかもしれぬと姫君は思つてゐるのであるが、日が暮れて夜になつた時間に、どうして逆にこの家へ大将が帰ろう。

姫君は始終自身のよりかかつていた東の座敷の中の柱を、だれかに取られてしまふ氣のするのも悲しかった。姫君は檜皮色ひわだの紙を重ねて、小さい字で歌を書いたのを、笄こうがいの端で柱の破れ目へ押し込んで置こうと思つた。

「#ここから2字下げ」

今はとて宿借れぬとも馴なれ来つる真木の柱はわれを忘るな

「#ここで字下げ終わり」

この歌を書きかけては泣き泣いては書きしていた。夫人は、
 「そんなことを」

と言いながら、

「#ここから2字下げ」

馴れきとは思ひ出づとも何により立ちとまるべき真木の柱ぞ

「#ここで字下げ終わり」

と自身も歌ったのであった。女房たちの心もいろいろなことが悲しくした。心のない庭の草や木と別れることも、あとに思い出して悲しいことであろうと心が動いた。木工の君は初めからこの家の女房であとへ残る人であった。中将の君は夫人といっしょに行くのである。

「#ここから1字下げ」

「浅けれど石間いはまの水はすみはてて宿一守もる君やかげはなるべき

「#ここで字下げ終わり」

思いも寄らなかったことですね、こうしてあなたとお別れするようになるなどと

と中将の君が言うと、木工もくは、

「#ここから1字下げ」

「ともかくも石間いはまの水の結むすほほれかけとむべくも思ほえぬ世を

「#ここで字下げ終わり」

何が何だかどうなるのだから」

と言って泣いていた。

車が引き出されて人々は邸やしきの木立ちのなお見える間は、自分らは
 ともここを見る日はないであろうと悲しまれて、隠れてしまうま
 で顧みられた。住んでいる主人あるじのために家と別れるのが惜しいので
 はなくて、家そのものに愛着のある心がそうさせるのである。

大将夫人をお迎えになつて、宮は非常にお悲しみになつた。母の
 夫人は泣き騒いだ。

「太政大臣のことをよい親戚しんせきを持ったようにあなたは喜んでいらつ
 しゃいますが、私には前生にどんな仇敵かたきだった人かと思われま
 す。女御にょごなどにも何かの場合に好意のない態度を露骨にお見せになりま
 したが、そのころは須磨時代の恨みが忘られないのだろうとあなた
 がお言いになり、世間でもそう批評されたので私には腑ふに落ちな
 かつたのです。それだのにまた今になつて、養女を取つたりなどし
 て、自分が御一寵愛ちよつあいなすつて古くなすつた代償にまじめな堅い男を
 取り寄せて婿にするなどということをなさる。これが恨めしくなく
 て何ですか」

こう言い続けるのである。

「聞き苦しい。世間から何一つ批難をお受けにならない大臣を、出
 まかせな雑言ぞつごんで悪く言うのはおよしなさい。聡明そうめいな人はこちらの罪
 を目前でどうしようとはしないで、自然の罰にあうがいいと考えて
 いられたのだろう。そう思われる私自身が不幸なのだ。冷静にして
 いられるようで、そしてあの時代の報いとして、ある時はよくした
 り、ある時はきびしくしたりしようと考えていられるのだろう。私
 一人は妻の親だとお思いになつて、いつかも驚くべき派手はでな賀宴を
 私のためにしてください。まあそれだけを生きがいのあること

として、そのほかのことはあきらめなければならぬのだらう」

と宮がお言いになるのを聞いて、夫人はいよいよ猛り立つばかりで、源氏夫婦への詛いの言葉を吐き散らした。この夫人だけは善良なところのない人であった。

大將は夫人が宮家へ帰ったことを聞いてほんとうらしくもなく、若夫婦の中でもあるような争議を起こすものである、自分の妻はそうした愛情を無視するような態度のとれる性質ではないのであるが、宮が軽率な計らいをされるのであると思つて、子供もあることであつたし、夫人のために世間体も考慮してやらねばならないと煩悶してのちに、こうした奇怪な出来事が家のほうであつたと話して、

「かえつてさつぱりとした気もしないではありませんが、しかしそのままでおとなしく家の一隅に暮らして行けるはずの善良さを私は妻に認めていたのですよ。にわかには無理な宮が迎えをおよこしになつたのであろうと想像されます。世間へ聞こえても私を誤解させることだから、とにかく一応の交渉を試みます」

とも言つて出かけるのであつた。よいできの袍を着て、柳の色の下襲を用い、青鈍色の支那の錦の指貫を穿いて整えた姿は重々しい大官らしかった。決して不似合いな姫君の良人でないと女房たちは見ているのであつたが、尚侍は家庭の悲劇の伝えられたことでも、自分の立場がたつらなくなつて、大將の好意がうるさく思われて、あとを見送ろうともしなかつた。

宮へ抗議をしに大將は出かけようとしているのであつたが、先に邸のほうへ寄つて見た。木工の君などが出て来て、夫人の去つた日の光景をいろいろと語つた。姫君のことを聞いた時に、どこまでも

自制していた大将も堪えられないようにほろほろと涙をこぼすのが哀れであつた。

「どうしたことだろう。常人でない病氣のある人を、長い間どんなにいたわつて私が来たかがわかつてもらえないのだね。軽薄な男なら今日までだつて決して連れ添つてはいなかつたろう。でもしかたがない、あの人はどこにいても庶人なのだから同じだ。子供たちをどうしようというのだろう」

大将は泣きながら真木柱の歌を読んでいた。字はまずいが優しい娘の感情はそのまま受け取れることができ、途中も車の中で涙をふきふき宮邸へ向かつた。夫人は逢あおうとしなかつた。

「逢う必要はない。新しい女に心の移つていくという話は、今度始まつたことでもない。あの人が若い妻をほしがっている話を聞いてから長い月日もたっている。そんな良人の愛があなたへ帰つてくることなどは期待されないことだ。そして健全な女でないという点だけをいよいよ認めさせることになります」

と言う宮の御注意が大将夫人へあつたのである。もつともなことである。

「何だか若い夫婦の仲で起こつた事件のようで勝手の違つた気がします。二人の中には愛すべき子もあるのだからと信頼を持ち過ぎてのんきであつた私のあやまちは、どんな言葉でも許してもらえないだろうと思ひますが、それはそれとして穩便にだけはしてください、今後私のほうによくないことがあれば世間も許さないでしょうから、その時に断然としたこういう処置もとられたらいいでしょう」

などと大将は困りながら取り次がせていた。姫君にだけでも逢い

たいと言ったのであるが出しそうもない。男の子の十歳とおになつてゐるのは童殿わらわでんじょう上じやうをしていて、愛らしい子であつた。人にもほめられていて、容貌ようぼうなどはよくもないが、貴族の子らしいところがあつて、その子はもう父母の争いに関心が持てるほどになつていた。二男は八つくらいである。かわいい顔で姫君にも似ていたから、大臣は髪をなでてやりながら、

「おまえだけを恋しい形見にこれからは見て行くのだねお父様は」
などと泣きながら言つていた。大將は宮へ御面会を願つたのであるが、

「風邪かぜで引きこもつてゐる時ですから」

と断ことわられて、きまりが悪くなつて宮邸を出た。二人の男の子を車に乗せて話しながら来たのであつたが、六条院へつれて行くことはできないので、自邸へ置いて、

「ここにおいて。お父様は始終来て見ることが出来るから」

と大將は言つていた。悲しそうに心細いふうで父を見送つていたのが哀れに思われて、大將は予期しなかつた物思いの加わつた気がしたものの、美しい玉鬘たまかすらと、廃人同様であつた妻を比べて思うと、やはり何があつても今の幸福は大きいと感ぜられた。それきり夫人のほうへ大將は何とも言つてやらなかつた。侮辱的なあの日の待遇がもたらした反動的な現象のように、冷淡にしていると宮邸の人をくやしがらせていた。紫の女王じよおうもその情報を耳にした。

「私までも恨まれることになるのがつらい」

と歎なげいてゐるのを源氏はかわいそうに思った。

「むつかしいものですよ。自分の思いどおりにもできない人なのだから、この問題で陛下も御不快おほしめに思召すようだし、兵部卿ひょうぶきやうの宮も恨

んでおいでになると聞いたが、あの方は思いやりがあるから、事情をお聞きになって、もう了解されたようだ。恋愛問題というものは秘密にしても真相が知れやすいものだから、結局は私が罪を負わないでもいいことになると思っっている」

とも言っていた。

大将のものと夫人とのそうしたいきさつはいつそう玉鬘を憂鬱にした。大将はそれを哀れに思っつて慰めようとする心から、尚侍として宮中へ出ることをこれまででは反対をし続けたのであるが、陛下がこの態度を無礼であると思召すふうもあるし、両大臣もいったん思っ立ったことであるから、自分らとしていえば公職を持つ女の良人である人も世間にあることであり、構わないことと考へて宮中へ出仕することに賛成すると言い出したので、春になっていよいよ尚侍の出仕のことが実現された。男踏歌があつたので、それを機会として玉鬘は御所へ参つたのである。すべての儀式が派手に行なわれた。二人の大臣の勢力を背景にしている上に大将の勢いが添つたのであるから、はなばなしくなるのが道理である。源宰相中將は忠実に世話をしていた。兄弟たちも玉鬘に接近するよい機会であると、誠意を見せようとして集まつて来て、うらやましいほどにぎわしかつた。承香殿の東のほう一帯が尚侍の曹司にあてられてあつた。西のほう一帯には式部卿の宮の王女御がいるのである。一つの中廊下だけが隔てになつていても、二人の女性の気持ちははるかに遠く離れていたことであろうと思われる。後宮の人たちは競い合つて、ますます宮廷を洗練されたものにしていくようなはなやかな時代であつた。あまりよい身分でない更衣などは多くも出ていながつた。中宮、弘徽殿の女御、この王女御、左大臣の娘の女御などが後宮の女性であ

る。そのほかに中納言の娘と宰相の娘とが二人の更衣で侍していた。踏歌は女御がたの所へ実家の人がたくさん見物に来ていた。これは御所の行事のうちでもおもしろいにぎやかなものであったから、見物の人たちも服装などに華奢を競った。東宮の母君の女御も人に負けぬ派手な方であった。東宮はまだ御幼年であったから、そのほうの中心は母君の女御であった。御前、中宮、朱雀院へまわるのに夜が更けるために、今度は六条院へ寄ることを源氏が辞退してあった。朱雀院から引き返して、東宮の御殿を二か所まわったところに夜が明けた。ほのぼのと白む朝ぼらけに、酔い乱れて「竹河」を歌っている中に、内大臣の子息たちが四、五人もいた。それはことに声がよく容貌がそろってすぐれていた。童形である八郎君は正妻から生まれた子で、非常に大事がられているのであったが、愛らしかった。大将の長男と並んでいるこの二人を尚侍も他人とは思えないで目にとどめられた。宮中の生活に馴れた女御たちの曹司よりも、新しい尚侍の見物する御殿の様子の方がはなやかで、同じような物ではあるが、女房の袖口の重ねの色目も、ここのがすぐれたように公達は思った。尚侍自身も女房たちもこうした、悪いことが悪く見え、よいことはことによく見える御所の中の生活をしばらくは続けてみたいと思っていた。どちらでも纏頭に出すのは定った真綿であるが、それらなどにも尚侍のほうのはおもしろい意匠が加えられてあった。こちらはちょっと寄るだけの所なのであるが、はなやかな空気のかかわれる曹司であったから、公達は晴れがましく思い、緊張した踏歌をした。饗応の法則は越えないようにして、ことに手厚く演者はねぎらわれたのであった。それは大将の計らいであった。大将は禁中の詰め所において、終日尚侍の所へ、

「#ここから1字下げ」

退出を今夜のことにしたと思います。出仕した以上はなおとまっていたいと、あなたが考えるであろう宮仕えというものは、私にとって苦痛です。

「#ここで字下げ終わり」

こんなことばかりを書いて送るのであったが、玉鬘たまかすらは何とも返事を書かない。女房たちから、

「#ここから1字下げ」

源氏の大臣が、あまり短時日でなく、たまたま上がったのであるから、陛下がもう帰ってもよいと仰せになるまで上がっていて帰るようにとおっしゃいましたことですから。それに今晚とはあまり御無愛想なことになりませんかと私たちは存じます。

「#ここで字下げ終わり」

と大将の所へ書いて来た。大将は尚侍ないしのかみを恨めしがって、

「あんなに言っておいたのに、自分の意志などは少しも尊重されない」

と歎息たんそくをしていた。

兵部卿の宮は御前の音楽の席に、その一員として列席しておいでになったのであるが、お心持ちは平静でありえなかった。尚侍の曹司ばかりがお思われになってならないのであった。堪えがたくなつて宮は手紙をお書きになった。大将は自身の直廬じきろのほうにいたのである。宮の御消息であるといって使いから女房が渡されたものを、尚侍はしづしづ読んだ。

「#ここから2字下げ」

深山木みやまぎに翅はねうち交かはしめる鳥とりのまたなく妬ねたき春はるにもあるかな

「#ここから1字下げ」

さえずる声にも耳がとどめられてなりません。

「#ここで字下げ終わり」

とあった。気の毒なほど顔を赤めて、何と返事もできないように尚侍が思っている所へ帝みかどがおいでになった。明るい月の光にお美しい竜顔りゅうがんがよく拝された。源氏の顔をただそのまま写したようで、こうしたお顔がもう一つあったのかというような気が玉鬘たまむすめにされるのであった。源氏の愛は深かったがこの人が受け入れるのに障害になるものがあまりに多かった。帝との間にはそうしたものはないのである。帝はなつかしい御様子で、お志であったことが違ってしまったたという恨みをお告げになるのであったが、尚侍は恥ずかしくて顔の置き場もない気がした。顔を隠して、お返辞もできないでいると、

「たよりない方だね。好意を受けてもらおうと思ったことにも無関心でおいでになるのですね。何にもそうなのですね。あなたの癖なのです」

と仰せになって、

「#ここから1字下げ」

「などてかくはひ合ひがたき紫を心に深く思そひ初はめけん

「#ここで字下げ終わり」

濃くはなれない運命だろうか」

若々しくておきれいな所は源氏と同じである。源氏と思ってお話を申し上げようと尚侍は思った。陛下が好意と仰せられるのは、去年尚侍になつて以来、まだ勤勞らしいことも積まずに、三位に玉鬘たまかすらを陞叙しょうじょされたことである。紫は三位の男子の制服の色であつた。

「#ここから1字下げ」

「いかならん色とも知らぬ紫を心してこそ人はそめけれ

「#ここで字下げ終わり」

ただ今から改めて御恩を思います」

と尚侍が言つと、帝は微笑をあそばして、

「その今からということがだめになつたのだからね。私に抗議する人があれば理論が聞きたい。私のほうが先にあなたを愛していたのだから」

と恨みをお告げになる。言葉の遊戯ではなく皆まじめに思召おしめするしいのであつたから、尚侍は困つたことであると思つた。自分が陛下の愛に感激しているほんとうの気持ちなどはお見せすべきでない。帝といえども男性に共通した弱点は持つておいでになるのであるからと考へて、玉鬘たまかすらはただきまじめなふうで黙つて侍していた。帝はもう少し突込んだ恋の話もしたく思召してここへおいでになつたのであるが、それがお言い出せにならないで、そのうち馴なれてくるであらうからと見ておいでになつた。大將は帝が曹司へおいでになつたと聞いて危険がることがいよいよ急になつて、退出を早くするようつとしきりに催促をしてきた。もっともらしい口実も作つて実父の大臣を上手じょうずに賛成させ、いろいろと策動した結果、ようやく今夜

退出する勅許を得た。

「今夜あなたの出て行くのを許さなければ、懲りてしまって、これきりあなたをよこしてくれない人があるからね。だれよりも先にあなたを愛した人が、人に負けて、勝った男の機嫌をとるといふようなことをしている。昔の何とかいった男（時平に妻を奪われた平貞文の歌、昔せしわがかねごとの悲しきはいかに契りし名残なるらん）のように、まったく悲観的な気持ちになりますよ」

と仰せになって、真底からくやしいふうをお見せになった。聞こし召したのに数倍した美貌の持ち主であったから、初めにそうした思召しはなくつても、この人を御覧になっては公職の尚侍としてだけでお許しにならなかつたであろうと思われるが、まして初めの事情がそうでもなかつたのであつたから、帝は妬ましくてならぬ御感情がおりになつて、最初の求婚者の権利を主張あそばしたくなるのを、あさはかな恋と思われたくないと御自制をあそばして、熱情を認めさせようとしてのお言葉だけをいろいろに下された。こうしてなつげようとあそばす御好意がかたじけなくて、結婚しても自分の心は自分の物であるのに、良人にことごとく与えているものではないのにと玉璽は思っていた。轎車が寄せられて、内大臣家、大将家のために尚侍の退出に従つて行こうとする人たちが、出立ちを待ち遠しがり、大将自身もむつかしい顔をしながら、人々へ指図をするふうにしてその辺を歩きまわるまで帝は尚侍の曹司をお離れになることができなかった。

「近衛過ぎるね。これでは監視されているようではないか」

と帝はお憎みになった。

「#ここから2字下げ」

九重ここのへに霞隔かすみてば梅の花ただかばかりも匂にほひこじとや

「#ここで字下げ終わり」

何でもない御歌であるが、お美しい帝が仰せられたことであつたから、特別なもののように尚待には聞かれた。

「私は話し続けて夜が明かしたいのだが、惜しんでいる人にも、私の身に引きくらべて同情がされるからお帰りなさい。しかし、どうして手紙などはあげたらいいだろう」

と御心配げに仰せられるのがもったいなく思われた。

「#ここから2字下げ」

かばかりは風にもつてよ花の枝えに立ち並ぶべき匂にほひなくとも

「#ここで字下げ終わり」

と言って、さすがに忘れたくない様子の女に見えるのを哀れに思召しながら、顧みがちに帝はお立ち去りになつた。

すぐに大將は自邸へ玉鬘たまかすらを伴おうと思つていたのであるが、初めから言つては源氏の同意が得られないのを知つて、この時までは言わずに、突然、

「にわかかぜに風邪気味になりました、自宅で養生をしたく存じますが、別々になりましたは妻も気がかりでございましたから」

と穏やかに了解を求めて、大將はそのまま尚待なしいのかみをつれて帰つたのであつた。内大臣は婚家へ娘のにわかかぜな引き取られ方を、形式上不満にも思つたが、小さなことにこだわつては婿の大將の感情を

害することになるうと思つて、

「どちらでも私のほうの意志でどうすることもできない娘になつて
いるのですから」

という返事を内大臣はした。源氏は思いがけないことになつたと
失望を感じたが、それは無理なことのようなのである。玉鬘も心にな
い良人おとこを持つたことは苦しいと思ひながらも、盗んで行かれたのであ
ればあきらめるほかはないという氣になつて、大将家へ来たことで
はじめて心が落ち着いてうれしかった。帝が曹司に長くおいでにな
つたことで大将が非常に嫉妬しつとしているなことを言うのも、凡人
らしく思われて、良人を愛することのできない玉鬘の機嫌きげんはますま
す悪かつた。式部卿しきぶきょうの宮もあのように強い態度をおとりになつたも
の、大将がそれきりにしておくことで煩悶はんもんをしておいでになつた。
大将はもう交渉することを断念したふうである。一方では理想が実
現された氣になつて、明け暮れ玉鬘をかしづくことに心をつかつて
いた。

二月になつた。源氏は大将を無情な男に思われてならなかつた。

これほどはつきりと玉鬘を自分から引き放すこととは思わずに油断
をさせられていたことが、人聞きも不体裁に思われ、自身のために
も残念で、玉鬘が恋しくばかり思われた。宿縁は無視できないもの
であつても、自身の思いやりのあり過ぎたことからこうした苦し
みを買うことになつたのであると、日夜面影にその人を見ていた。風
流氣の少ない大将といふことを思つては、手紙で、戯れのようにし
て今日このごろの氣持ちを玉鬘に伝えることも氣が置かれて得しな
かつた。雨がよく降つて静かなころ、源氏はこうした退屈な時間も
紛らすことが玉鬘の所でできたこと、その時分の様子などが目に浮

かんできて、非常に恋しくなつて手紙を書いた。右近の所へそつとその手紙は送られたのであるが、そうはしながらも右近が怪しく思わないかということも考えられて、思うことはそのまま皆書き続けられなかった。ただ推察のできそうなことだけを書いたのであった。

「#ここから2字下げ」

かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかに忍ぶや

「#ここから1字下げ」

私も退屈なものですから、いろいろ恨めしくなつたりすることがあるのですが、どうしてもそれをお聞かせしてよいかわかりません。

「#ここで字下げ終わり」

などと書かれてあつた。人が玉鬘のそばにいない時を見計らつて右近はこの手紙を見せた。玉鬘も泣いた。自身の心にも時がたつままに思い出されることの多い源氏は、感情そのままに、恋しい、どつかして逢^あいたいというのを遠慮しないではならない親であつたら、実際問題として考えてもいつ逢^あえることもわからないので悲しかった。時々源氏の不純な愛撫^{あいぶ}の手が伸ばされようとして困つた話などは、だれにも言っていないことであつたが、右近は怪しく思つていた。ほんとうのことはまだわからないようにこの人は思つているのである。返事を、

「書くのが恥ずかしくてならないけれど、あげないでは失望をなさるだろうから」

と言つて、玉鬘^{たまかすら}は書いた。

「#ここから2字下げ」

ながめする軒の霰しゆくに袖そでぬれてうたかた人を忍しのばざらめや

「#ここから1字下げ」

それが長い時間でございますから、憂鬱ゆううつ的退屈と申すようなものもつのつてまいります。失礼をいたしました。

「#ここで字下げ終わり」

とうやうやしく書かれてあつた。それを前にひろげて、源氏はその雨だれが自分からこぼれ落ちる気もするのであつたが、人に悪い想像をさせてはならないと思つて、しいておさえていた。昔の尚侍を朱雀院すざくの母后が嚴重な監視をして、源氏に逢わせまいとされた時がちょうどこんなのであつたと、その当時の苦しさと今を比較して考えてみたが、これは現在のことであるせいか、その時にもまさつてやる瀬ないように思われた。好色な男はみずから求めて苦しみをするものである、もうこんなことに似合わしくない自分でないかと源氏は思つて、忘れようとする心から琴を弾ひいてみたが、なつかしいふうに弾いた玉璽つまおとの爪音がまた思い出されてならなかつた。和琴わこんを清搔すがきに弾いて、「玉藻たまもはな刈りそ」と歌っているこのふうを、恋しい人に見せることができたなら、どんな心にも動揺の起こらないことはないであろうと思われた。

帝もほのかに御覧になつた玉璽つまおとの美貌びぼうをお忘れにならずに、「赤あ裳かもた垂れ引きにし姿を」（立ちて思ひみてもぞ思ふくれなゐの赤裳垂れ引き）という古歌は露骨に感情を言っただけのものであるが、それを終始お口ずさみになつて物思いをあそばされた。お手紙がそ

つと何通も尚侍の手へ来た。玉鬘はもう自身の運命を悲観してしまつて、こうした心の遊びも不似合いになつたもののように思い、御好意に感激したようなお返事は差し上げないのであつた。玉鬘は今になつて源氏が清い愛で一貫してくれた親切がありがたくてならなかつた。

三月になつて、六条院の庭の藤ふじや山吹やまぶきがきれいに夕映ゆづはえの前に咲いているのを見ても、まずすぐれた玉鬘の容姿が忍ばれた。南の春の庭を捨てておいて、源氏は東の町の西の対に来て、さらに玉鬘に似た山吹をながめようとした。竹のませ垣がきに、自然に咲きかかるようになった山吹が感じよく思われた。「思ふとも恋ふとも言はじ山吹の色に衣を染めてこそ着め」この歌を源氏は口ずさんでいた。

「#ここから2字下げ」

思はずも井手の中みち隔つとも言はでぞ恋ふる山吹の花

「#ここで字下げ終わり」

とも言つていた。「夕されば野辺のへに鳴くてふかほ鳥の顔に見えつゝ忘れなくに」などとも口にしていたが、ここにはだれも聞く人がいなかった。こんなふうに徹底的に恋人として玉鬘を思うことはこれが初めてであつた。風変わりな源氏の君と言わねばならない。

雁がんの卵がほかからたくさん贈られてあつたのを源氏は見て、蜜柑みかんや橘たちばなの実を贈り物にするようにして卵を籠かごへ入れて玉鬘へ贈たまかすらつた。手紙もたびたび送つては人目を引くであろうかと思つて、内容を唯ただ事風ことに書いた。

「#ここから1字下げ」

お逢いできない月日が重なりました。あまりに同情がないというように恨んではいますが、しかし御良人の御同意がなければ万事あなたの御意志だけではできないことを承知していますから、何かの場合でなければお許しの出ることはなからうと残念に思っています。

「#ここで字下げ終わり」

などと親らしく言っているのである。

「#ここから2字下げ」

おなじ巢にかへりしかひの見えぬかなる人が手ににぎるらん

「#ここから1字下げ」

そんなにまでせずともとくやしがつたりしています。

「#ここで字下げ終わり」

この手紙を大将も見て笑いながら、

「女というものは実父の所へだつて理由がなくては行って逢うことをしないものになっているのに、どうしてこの大臣が始終逢えない逢えないと恨んでばかりおよこしになるだろう」

こんな批評めいたことを言うのも、玉鬘には憎く思われた。返事を、

「私は書けない」

と玉鬘が洩っていると、

「今日は私がお返事をしよう」

大将が代わろうとういのであるから、玉鬘が片腹痛く思ったのはもつともである。

「#ここから2字下げ」

巢隠れて数にもあらぬ雁の子をいづ方にかはとりかくすべき

「#ここから1字下げ」

御機嫌をそこねておりますようですからこんなことを申し上げます。
風流の真似をいたし過ぎるかもしれません。

「#ここで字下げ終わり」

大将の書いたものはこうであった。

「この人が戯談風に書いた手紙というものは珍品だ」

と源氏は笑ったが、心の中では玉鬘をわが物顔に言っているのを憎んだ。

もとの大将夫人は月日のたつにしたがって憂鬱になって、放心状態であることも多かった。生活費などはこまごまと行き届いた仕送り大将はしていた。子供たちをも以前と同じように大事がって育てていたから、前夫人の心は良人からまったく離れず唯一の頼みにもしていた。大将は姫君を非常に恋しがって逢いたく思うのであったが、宮家のほうでは少しもそれを許さない。少女の心には自身の愛する父を祖父も祖母も皆口をそろえて悪く言い、ますます逢わせてもらおう可能性がなくなっていくのを心細がっていた。男の子たちは始終一訪ねて来て、尚侍の様子なども話して、

「私たちなどもかわいがってください。毎日おもしろいことをして暮らしていらっしゃる」

などと言っているのを夫人は聞いて、うらやましくて、そんなふうな朗らかな心持ちで人生を楽しく見るようなことをすればできたものを、できなかつた自身の性格を悲しがっていた。男にも女にも

物思いをさせることの多い尚侍である。

その十一月には美しい子供さえも玉鬘たまかすらは生んだ。大將は何事も順調に行くと思いで、愛妻から生まれた子供を大事にしていた。産屋うぶやの祝いの派手はでに行なわれた様子などは書かないでも読者は想像するがよい。内大臣も玉鬘の幸福であることに満足していた。大將の大將にする長男、二男にも今度の幼児の顔は劣おとっていた。頭中かぶちゆう將も兄弟としてこの尚侍をことに愛していたが、幸福であると無条件で喜んでいられる大臣とは違って、少し尚侍のその境遇を物足りなく考えていた。尚侍として君側に侍した場合を想像して、生まれただ大將の三男の美しい顔を見ても、

「今まで皇子がいらつしやらない所へ、こんな小皇子をお生み申し上げたら、どんなに家門の名譽になることだろう」

となおこの上のことを言って残念がった。尚侍の公務を自宅で都合なく執とることにして、玉鬘はもう宮中へ出ることはないだろうと見られた。それでもよいことであった。

あの内大臣の令嬢で尚侍になりたがっていた近江おうみの君は、そうした低能な人の常で、恋愛に強い好奇心を持つようになって、周囲を不安がらせた。女御にょごも一家の恥になるようなことを近江の君が引き起こさないかと、そのことではつとさせられることが多く、神経を悩ませていたが、大臣から、

「もう女御の所へ行かないように」

と止められているのであったが、やはり出て来ることをやめない。どんな時であったか、女御の所へ殿上役人などがおおぜい来ていて選えりすぐったような人たちで音楽の遊びをしていたことがあった。

源宰相中將へげんさいしようちゆうじょうも来ていて、平生と違

つて気軽に女房などとも話しているのを、ほかの女房たちが、

「やはり出抜けていらつしやる方」

とも評していた時に、近江の君は女房たちの座の中を押し分けるようにして御簾みすの所へ出ようとしていた。女房らは危険に思つて、

「あさはかなことをお言い出しになるのじゃないかしら」

とひそかに肱ひじで言い合ったが、近江の君はこのまれな品行方正な若一公達きんたちを指さして、

「これでしょう、これでしょう」

と言つて源中将のきれいであることをほめて騒ぐ声が外の男の座へもよく聞こえるのであつた。女房たちが困つて苦しんでいる時、高く声を張り上げて、近江の君が、

「#ここから1字下げ」

「おきつ船よるべ浪路なみぢにただよはば棹さおさしよらん泊まりをしへよ

「#ここで字下げ終わり」

『たななし小舟こぶね漕こぎかへり』(同じ人にや恋ひやわたらん) いけな
いわね」

と言つた。源中将は異様なことであると思つた。女御の所には洗練された女房たちがそろつてゐるはずで、こうした露骨な戯れを言いかける人はないわけであると思つて、考えてみるとそれは噂うわさに聞いた令嬢であつた。

「#ここから2字下げ」

よるべなみ風の騒がす船人も思はぬ方に磯いそづたひせず

「#ここで字下げ終わり」

と源中将に言われた。

「そんなことをしては恥知らずです」とも。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年9月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

梅が枝

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）天地あめつち

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）紅梅一襲がさね

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」天地あめつちに春新しく来たりけり光源氏の

「#地から3字上げ」みむすめのため （晶子）

源氏が十一歳の姫君のもぎ装着の式をあげるために設けていたことは並み並みの仕度したくでなかった。東宮も同じ二月に御元服があることになつていたが、姫君の東宮へはいることもまた続いて行なわれて行くことらしい。一月の末のことで、公私とも閑暇ひまな季節に、源氏は

薫香くんこうの調合を思い立った。大式だいしきから贈られてあつた原料の香木類を出させてみたが、これよりも以前に渡つて来た物のほうがあるいはよいかもしれぬという疑問が生じて、二条の院の倉をあけさせて、支那しなから来た物を皆六条院へ持つて来させたのであつたが、源氏はそれらと新しい物とを比較してみた。

「織物などもやはり古い物のほうに芸術的なものが多い」

といつて、式場用の物の覆おおい、敷き物、褥しとねなどの端を付けさせるものなどに、故院の御代みよの初めに朝鮮人が献ささげた綾あやとか、緋金錦ひしんきとかいう織物で、近代の物よりもすぐれた味わいを持った切れ地のそれぞれを使い場所を決めたりした。今度大式のほうから来た綾や薄物うすものは他へ分けて贈つた。香の原料に昔のと今のとを両方取り混ぜて六条院内の夫人たちと、源氏の尊敬する女友だちに送つて、二種類ふたしゆずつの薫香を作らねと告げた。装着の式日の贈り物、高官たちへの纏頭てんとうの衣服類の製作を手分けして各夫人の所でしているかたわらで、またそれぞれ撰えらび出した香の原料の鉄臼かねうすでひかれる音も立つて忙しい気のされるころであつた。源氏は南の町の寝殿へ、夫人の所から離れてこもりながら、どうして習得したのか承和むかへの帝みかどの秘法ひぽうといわれる二つの合わせ方で熱心に薫香を作つていた。夫人は東たいの対たいのうちの離れへ人を避ける設備をして、そこで八条やちじょうの式部卿しきぶきやうの宮の秘伝ひでんの法で香を作つていた。こうして夫婦の中にも、秘密をうかがわれまいと苦心する香の優劣を勝負にしようと言つていた。姫君の親である人たちらしくない競争である。どの夫人の所にもこの調合の室に侍している女房は選ばれた少数の者であつた。式用の小道具を精巧をきわめて製作させた中でも、特に香合の箱の形、壺つぼ、火入れの作り方に源氏は意匠を凝こらさせていたが、その壺へ諸所ででき

た中のすぐれた薫香を、試みた上で入れようと思っ
た。

二月の十日であつた。雨が少し降つて、前の庭の紅梅が色も香もすぐれた名木ぶりを發揮している時に、兵部卿ひょうぶきやうの宮が訪問しておいでになつた。装着の式が今日明日のことになつてい
るために、心づかいをしてい
る源氏に見舞いをお述べになつた。昔からことに仲のよい御兄弟であつたから、いろいろな御相談をしながら花を愛して
いた時に、前齋院からといつて、半分ほど花の散つた梅の枝に付けた手紙がこの席へ持つて来られた。宮は源氏と前齋院との間に以前あつた噂うわさも知つておいでになつたので、

「どんなおたよりがあちらから来たのでしょう」

とお言ひになつて、好奇心を起こしておいでになるふうの見えるのを、源氏はただ、

「失礼なお願いを私がしましたのを、すぐにその香を作つてくださつたのです」

こう言つて、お手紙は隠してしまつた。沈しんの木の箱に瑠璃るりの脚付あしきの鉢はちを二つ置いて、薫香はやや大きく粒に丸めて入れてあつた。

贈り物としての飾りは紺瑠璃こんるりのほうには五葉の枝、白い瑠璃のほうには梅の花を添えて、結んである糸も皆優美であつた。

「艶えんにできていますね」

と宮は言つて、ながめておいでになつたが、

「#ここから2字下げ」

花の香は散りにし袖そでにとまらねどうつらん袖に浅くしまめや

「#ここで字下げ終わり」

という歌が小さく書かれてあるのにお目がついて、わざとらしくお読み上げになった。宰相の中将が来た使いを捜させ饗応した。紅梅一襲がさねの支那しなの切れ地でできた細長を添えた女の装束が纏頭てんとうに授けられた。返事も紅梅の色の紙に書いて、前の庭の紅梅を切つて枝に付けた。

「何だか内容の知りたくなるお手紙ですが、なぜそんなに秘密になさるのだろう」

と言って、宮は見たがつておいでになる。

「何があるものですか、そんなふうによけいな想像をなさるから困るのです」

と言って、齋院へ今書いた歌をまた紙にしたためて宮へお見せした。

「#ここから2字下げ」

花の枝えにいとど心をしむるかな人のとがむる香をばつつめど

「#ここで字下げ終わり」

というのであるらしい。

「少し物好きなようですが、一人娘の成年式だからやむをえないと自分では定めまして、こうした騒ぎをしているのですが、ほめたことではありませんから、ほかの方を頼むことはやめまして、中宮ちゅうぐうを御所から退出していただいて腰一結ゆいをお願いしようと思っっています。一家の方になつていらっしやっても、晴れがましい気のする人格を持つておられますから、並み並みの儀式にしておいてはもった

いない気がするのです」

などと源氏は言っていた。

「そうですね。あやかる人は選ばねばなりませんね。それにはこの上もない方ですよ」

と宮は源氏の計らいの当を得ていることをお言いになった。前齋院から香の届けられたことと、宮のおいでのになったのを機会にして、夫人らの調製した薫香くんこうも取り寄せる使いが出された。

「湿りけのある今日の空気が香の試験に適していると思えますから」

と言いやられたのである。夫人たちからは、いろいろに作られた香が、いろいろに飾られて来た。

「これを審判してください。あなたのほかに頼む人はない」

こう源氏は言つて、火入れなどを取り寄せて香をたき試みた。

「知る人（君ならでたれにか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る）でもないのですがね」

と宮は謙遜けんそんしておいでのになったが、においの繊細なよさ悪さを嗅かぎ分けて、微瑕びかも許さないふうに詮索せんさくされ、等級をおつけになるうとするのであった。源氏の二種の香はこの時になってはじめて取り寄せられた。右近衛府うこんえふの溝川みぞがわのあたりにうずめるということに代えて、西の渡殿わたどのの下から流れて出る園みやの川がわの汀みぎわにうずめてあったのを、惟光これみつ宰相の子の兵衛尉ひょうえのじょうが掘って持って来たのである。それを宰相中将が受け取って座へ運んで来た。

「苦しい審判者になったものですよ。第一けむい」

と宮は苦しそうに言つておいでのになった。同じ法が広く伝えられていても、個人個人の趣味がそれに加わってでき上がった薫香のよ

さ悪さを比較して嗅ぐことは興味の多いものであった。どれが第一の物とも決められない中にも齋院のお作りになった黒方香は心憎い静かな趣がすぐれていた。侍従香では源氏の製作がすぐれて艶で優美であると宮はお言いになった。紫の女王のは三種あった中で、梅花香ははなやかで若々しく、その上珍しく冴えた気の添っているものであった。

「このごろの微風に焚き混ぜる物としてはこれに越したにおいはないでしょう」

と宮はおほめになる。花散里夫人は皆の競争している中へはいることなどは無理であると、こんなことにまで遺憾なく内気さを見せて、荷葉香を一種だけ作って来た。変わった気分にするなつかしいにおいがそれから嗅がれた。冬の夫人である明石の君は、四季を代表する香は決まったものになっているのであるから、冬だけを卑下させておくのもよろしくないと考えて、薰衣香の製法の中にも、すぐれた物とされている以前の朱雀院の法を原則にして公忠朝臣が精製したといわれる百歩の処方などを参考として作った物は、製作に払われた苦心の効果の十分に表われた、優美な香を豊かに持たせたものであると、どれにも同情のある批評を宮があそばされるのを、「八方美人の審判者だ」と言って源氏は笑っていた。月が出てきたので酒が座に運ばれて、宮と源氏は昔の話を始めておいでになった。うるんだ月の光の艶な夜に、雨ののちの風が少し吹いて、花の香があたりを囲んでいた。だれも皆艶な気持ちに酔っていった。侍所のほうでは明日ある音楽の合奏のために、下ならしに楽器を出して、たくさん集まっていた

殿上役人などが鳴らしてみたり、おもしろい笛の音をたてたりしていた。内大臣の子の頭中將や弁の少將なども伺候の挨拶だけをしに來て帰ろうとしたのを、源氏はとめて、そして樂器を侍にこちらへ運ばせた。頭中將は和琴の役を命ぜられて、はなやかに掻き立てて合奏はおもしろいものになった。源宰相中將は横笛を受け持った。春の調子が空までも通るほどに吹き立てた。弁の少將が拍子を取って、美しい声で梅が枝を歌い出した。この人は子供の時一韻塞に父と來て高砂を歌った公子である。宮も源氏も時々歌を助けて、たいそうな音楽ではないが、おもしろい音楽の夜ではあった。酒杯がさされた時に、宮は、

「#ここから1字下げ」

「うぐひすの声にやいとどあくがれん心しめつる花のあたりに

「#ここで字下げ終わり」

千年もいたくなってます」

と源氏へお言いになった。

「#ここから2字下げ」

色も香もうつるばかりにこの春は花咲く宿をかれずもあらなん

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は歌ってから、杯を頭の中將へさした。中將は杯を受けたあとで宰相の中將へ杯をまわした。

「#ここから2字下げ」

うぐひすのねぐらの枝も摩なびくまでなほ吹き通せ夜半よはの笛竹

「#ここで字下げ終わり」

と頭の中将は歌ったのである。

「#ここから1字下げ」

「心ありて風がよくめる花の木にとりあへぬまで吹きやよるべき

「#ここで字下げ終わり」

少しひどいでしょうね」

と宰相中將が言うと言った。弁の少將が、

「#ここから2字下げ」

かすみだに月と花とを隔てずばねぐらの鳥もほころびなまし

「#ここで字下げ終わり」

と言った。長居のしたくなる所であると言いになったとおりに、
宮は明け方になってお帰りになるのであった。源氏は贈り物に、自
身のために作られてあった直衣のうし一領と、手の触れない薰香くんこう二壺ふたつぼを宮
のお車へ載せさせた。

「#ここから2字下げ」

花の香をえならぬ袖そでに移してもことあやまりと妹いもや咎とがめん

「#ここで字下げ終わり」

宮がこうお歌いになったと聞いて、

「何と言いわけをしようと御心配なのだね」

と源氏は笑った。お車はもう走り出そうとしていたのであったが、使いを追いつかせて、

「#ここから1字下げ」

「めづらしとふるさと人も待ちぞ見ん花の錦を着て帰る君

「#ここで字下げ終わり」

この上ないことだと御満足なさるでしょう」

と源氏がお伝えさせると宮は苦笑をあそばされた。頭中将や弁の少将などにも目だつほどの纏頭てんとうでなく、細長とか小袿こむすねとかを源氏は贈ったのであった。

装着ちぎの式を行なう西の町へ源氏夫婦と姫君は午後八時に行った。

中宮のおいでになる御殿の西の離れに式の設けがされてあつて、姫君のお髪くしあ上げ役の（正装の場合には前髪を少しくくるのである）内侍などもこちらへ来たのである。紫夫人もこのついでに中宮へお目にかかった。中宮付き、夫人付き、姫君付きの盛装した女房のすわっているのが数も知れぬほどに見えた。裳を付ける式は十二時に始まったのである。ほのかな灯ひの光で御覧になったのであるが、姫君を美しく中宮は思召おぼしめした。

「お愛しくださいますことを頼みにいたしまして、失礼な姿も御前へ出させましたのです。尊貴なあなた様がかようなお世話をくださいますことなどは例もないことであろうと感激に堪えません」

と源氏は申し上げていた。

「経験の少ない私が何もわからずにいたしておりますことに、そんな御一挨拶あいさつをしてくださいましてはかえって困ります」

と御一謙遜けんそんして仰せられる中宮の御様子は若々しくて愛嬌あいきょうに富んでおいでになるのを見て、この美しい人たちは皆自身の一家族であるという幸福を源氏は感じた。明石あかしが蔭かげにいてこの晴れの式も見ることのできないことを悲しむふうであつたのを哀れに思つて、こちらへ呼ぼうかとも源氏は思つたのであるが、やはり外聞をはばかつて実行はしなかつた。こうした式についての記事は名文で書かれていてもうるさいものであるのを、自分などがだらしなく書いていつては、かえつてきれいなことをこわしてしまふ結果になるのを恐れて、細かにはしるさない。

東宮の御元服は二十幾日にあつた。もうりつぱな大人のようにいらせられたから、だれも令嬢たちを後宮へ入れたい志望を持ったが、源氏がある自信を持つて、姫君を東宮へ奉ろうとしているのを知つては、強大な競争者のあるこの宮仕えはかえつて娘を不幸にすることではなからうかと、左大臣、左大将などもまた躊躇ちゆうじゆしていることを源氏は聞いて、

「それではお上かみへ済まないことになる。宮仕えは多数のうちで、ただ少しの御一愛寵あいちゆうの差を競うのに意義があるのだ。貴族がたのりつぱな姫君がお出にならないではこちらも張り合いのないことになる」

と言つて、姫君の宮仕えの時期を延ばした。たとえ娘を出すにしてもあとのことによつていた人たちはそれを聞いて、最初に左大臣が三女を東宮へ入れた。麗景殿れいげいでんと呼ばれることになつた。

源氏のほうは昔の宿直所とのいどころの桐壺きりつぼの室内装飾などを直させることなどで時日が延びているのを、東宮は待ち遠しく思召す御様子であったから、四月に参ることに定めた。姫君の手道具類なども、もとからあるのにまた新しく作り添えて、源氏自身が型を考えたり、図案をこしらえたりしては専門家の名人を集めて、美術的な製作を命じていた。草紙の箱というような物に入れる草紙で、いずれは製本もさせて書物になるようなものを源氏は選んでいた。故人で、書道のほうの大家と言われている人たちの書いた物も源氏のところにはたくさんあった。

「すべてのことは昔より悪くなっていく末世ではあっても、仮名の字だけは、どこまでおもしろくなっていくかと思われるほど、近ごろのほうがよくなった。昔の仮名は正確ではあるが、融通がきかないで、変化の妙がなく単調だ。巧妙な仮名を書く人は近代になってふえたが、私も仮名を習うのに熱心だったころ、無難な仮名字を手本にいろいろ集めたものだが、中宮の母君の御息所みやすどころが何ともなしに書かれた一行か二行の字が手にはいつて、最上の仮名字はこれだと心酔してしまったものです。それがもとになって浮き名を立てることにになり、私との関係をにがい経験だったように思って、くやしがつたままで亡なくなられたが、必ずしもそうではなかったのだ。今は中宮をお援けたすしていることで、聡明そつめいな人だったから、あの世でも私の誠意を認めておいでになることだろう。中宮のお字はきれいなようだけれど才気が少ない」

と源氏は夫人にささやいていた。

「入道の中宮様は最上の貴婦人らしい品のある字をお書きになったが、弱い所があつて、はなやかな気分はない。院の尚侍ないしのかみは現代の最

もすぐれた書き手だが、奔放すぎて癖が出てくる。しかし、ともかくも院の尚侍と前齋院と、あなたをこの草紙の書き手に擬していますよ」

源氏から認められたことで、夫人は、

「そんな方たちといっしょになすっては恥ずかしくてなりませんよ」

と言っていた。

「謙遜をしすぎますよ。柔らかな調子のとてもいい所がある。漢字は上手に書けますが、仮名には時々力の抜けた字の混じる欠点はありますね」

などとも源氏は言っていて、書かない無地の草紙もまた何帳か新しく綴じさせた。表紙や紐などを細かく精選したことは言うまでもない。

「兵部卿の宮とか左衛門督とかにもお頼みしよう。私も一冊書く。

気どつておられても私といっしょに書くことは晴れがましいだろう」

と源氏は自讃していた。墨も筆も選んだのを添えて、いつもそうした交渉のある所々へ執筆を源氏は頼んだのであったが、だれもこの委嘱に応じるのを困難なことに思つて、その中には辞退してくる人もあったが、そんな時に源氏は再三懇切な言葉で執筆を望んだ。

朝鮮紙の薄様風な非常に艶な感じのする紙の綴じられた帳を源氏は見て、

「風流好きな青年たちにこれを書かせてみよう」

と言つた。宰相中将、式部卿の宮の兵衛督、内大臣家の頭中将などに、蘆手とか、歌絵とか、何でも思い思いに書くようにと源氏は

言ったのであった。若い人たちは競って製作にかかった。

いつもこんな時にするように、源氏は寝殿のほうへ行っていて書いた。花の盛りが過ぎて淡い緑色がかつた空のうらかな日に、源氏は古い詩歌を静かに選びながら、みずから満足のできるだけの字を書こうと、漢字のも仮名のも熱心に書いていた。その部屋には女房も多くは置かずただ二、三人、墨をすらせたり、古い歌集の歌を命ぜられたとおりに捜し出したりするのに役にたつような者を呼んであった。部屋の御簾は皆上げて、脇息の上に帳を置いて、縁に近い所でゆるやかな姿で、筆の柄を口にくわえて思索する源氏はどこまでも美しかった。白とか赤とかきわだった片は、筆を取り直して特に注意して書いたりする態度なども、心のある者は敬意を払わずにいられないことであつた。兵部卿の宮がおいでになつたということを知り源氏は驚いて上に直衣を着たり、座敷へさらに褥を取り寄せたりしてお迎えした。この宮もきれいなお姿で、階段を艶に上つておいでになるのを、女房たちは御簾からのぞいていた。互いに正しい礼儀で御一挨拶がかわされた。

「引きこもっていますのが苦しいほど退屈なおりからでしたよ。よくおいでくださいました」

と源氏は言っていた。お頼まれになつた書き物を宮は持つておいでになつたのである。すぐこの席で源氏は拝見した。非常に巧妙な字というのではないが、一部分に澄み切つた芸術味の見えるものだった。歌も常識的なものは避けて、変わったものが選ばれてあつて、ただ三行ほどに字数を少なく感じよく書かれてあつた。源氏は予想に越えたおできばえに驚いた。

「これほどにもとは思いませんでした。自分の書くことなどはいや

になるほどです」

とも言っていた。

「大家たちの中へ混じって書く自信だけはえらいものだと思つていますよ」

と宮は戯談を言つておいでになる。すでにできた源氏の帳などもお隠しすべきでないから出して宮の御覽に入れた。支那の紙のじみな色をしたのへ、漢字を草書で書かれたのがすぐれて美しいと宮は見えておいでになつたが、またそのあとで、朝鮮紙の地のきめの細かい柔らかな感じのする、色などは派手でない艶なのへ、仮名文字が、しかも正しく熱の見える字で書かれてある絶妙な物をお見つけになつた。それは見る人の感動した涙も添つて流れる気をする墨蹟で、いつまでも目をお放しになることができないのであつたが、また日本製の紙屋紙の色紙の、はなやかな色をしたのへ奔放に散らし書きをした物には無限のおもしろさがあるようにもお思われになつて、乱れ書きにした端々にまで人を酔わせるような愛嬌がこもっているこの片以外の物はもう見ようともしないものであつた。

左衛門督の字は本格的に書いてあるのであるが、俗気が抜け切らずに、技巧が技巧として目についた。歌などもわざとらしいものが選ばれてある。女の手になつたほうの帳は少しよりお見せしなかつた。ことに齋院のなどはまったく隠してお出ししない源氏であつた。青年たちによつて蘆手の書かれた幾冊かの帳はとりどりにおもしろかつた。源中将のは水を豊かに描いて、そそけた蘆のはえた景色に浪速の浦が思われるのへ、そちらへあちらへ美しい歌の字が配られているような、澄んだ調子のもがあるかと思つと、また全然変わった奇岩の立つた風景に相応した雄健な仮名の書かれてある片もあ

るといふような蘆手であつた。

「驚いたものですね。これは見るのに時間を要するものですね」

と宮はおもしろがつておいでになつた。芸術家風の風流氣に富んだ方であつたから、お氣にいったものはどこまでもおほめになるのである。この日はまた書の話ばかりをしておいでになつて、色紙の継いだ巻き物が幾本となく席上へ現われるのであつたが、宮は子息の侍従を邸へおやりになつて、御蔵品もお取り寄せになつた。嵯峨帝が古万葉集から撰んでお置きになつた四巻、延喜の帝が古今集を支那の薄藍色の色紙を継いだ、同じ色の濃く模様の出た唐紙の表紙、同じ色の宝石の軸の巻き物へ、巻ごとに書風を変えてお書きになつたものなどがそれであつた。台を短くした灯を置いて二人で見えておいでになつたが、

「よくこんなにいるいろなふうにお書きになれたものですね。近ごろの人はほんのこの一部分の仕事をするのに骨を折つているという形ですね」

などと源氏はおほめしていた。この二種の物は宮から源氏へ御奇贈になつた。

「女の子を持つていたとしましても、たいしてこうした物の価値のわからないような子には残してやりたくない氣のする物ですからね。それに私には娘もありませんから、お手もとへ置いていただいたほうがよい」

などと宮はお言いになつたのである。源氏は侍従へ唐本のりっぱなのを沈の木の箱に入れたものへ高麗笛を添えて贈つた。

近ごろの源氏は書道といつてもことに仮名の字を鑑賞することに熱中して、よい字を書くと言われる人は上中下の階級にわたつてそ

れぞれの物を選んで書を頼んでいた。源氏の書いた帳のはいる箱には、高い階級に属した人たちの手になった書だけを、帳も巻き物も珍しい装幀そうていを加えて納めることにしていた。他の国の宮廷にもないと思われる華奢かしやを尽くした姫君の他の調度品よりも、この墨蹟ぼくせきの箱を若い人たちはうかがいたく思った。源氏は絵なども整理して姫君に与えるのであったが、須磨すまで日記のようにして書いた絵巻は姫君へ伝えたいとは思っていたが、もう少し複雑な人生がわかるまではそれをしないほうがよいという見解をもつてその中へは加えなかった。

内大臣は宮廷へはいる大がかりな仕度したくを、自家のことでなく源氏の姫君のこととして噂うわさに聞くのを、非常に物足らず寂しく思っていた。妙齢に達した雲井くもいの雁かりの姫君は美しくなっていた。結婚もせず結婚談もなくて引きこもっているこの娘が内大臣には苦勞の種であった。宰相中將は少しも焦燥しやうそうするふうを見せずに、冷静な態度を取り続けているのであったから、こちらから、結婚談をしかけることも世間体の悪いことと思われて、熱心に彼が娘を思っていた時に許せばよかつたなどと人知れず後悔もして、宰相中將の態度ばかりが悪いとも内大臣は思えないのであった。こんなふうにし少し気の折れてきたことも宰相中將は聞いているのであったが、まだしばらく恨めしい記憶のなくなるまでは落ち着いていないではならないと思つて、内大臣に求めることをしなかつた。しかも他の恋の対象を作ろうとするような気もしなかつた。自身ながらもこうした窮屈な考え方に反感を持つこともあつたが、宰相中將は六位であつたことを譏そしつた雲井の雁めいとの乳母めのとたちに対して納言なごんの地位に上ることが先決問題だと信じていた。源氏はどつちつかずに宙に浮いたふうで中將

が結婚もしないでいることを見かねて、

「あちらとの話をあきらめているのなら、左大臣とか、中務なかつかさの宮とかからのお話が来ているのだから、だれと結婚をするか決めてしま
うとよい」

とも言うのであったが、宰相中將は黙って恐縮したふうを見せて
いるだけであった。

「こんな問題ではお上かみの御忠告にも昔の私はお服しすることができ
なかつたのだから、口を出したくはないのだが、今になって考える
と、その時の御教訓は永久の真理だったとよくわかる。長く独身で
いれば、実現されない幻を描いているかのように人も見るだろうし、
それが宿命であるかはしらないが、ついには何の価値もない女とい
つしよになってしまふような結果を生むことにもなつては、初めよ
し、後のちわるしになつてしまふ。思い上がつていても若い間はほかか
ら誘惑があるからね、多情な行為におちやすいものだが、墮落をし
ないように心がけねばならない。宮中に育つて、自由らしいことは
何一つできずに、ただ過失らしいことが一つあるだけでも世間はや
かましく批難するだろうと戦々せんぜん競々きやうきやうとしていた青年の私でも、やは
り恋愛をあさる男のように言われて悪く思われたものなのだ。身分
が低くて注目するものがないなどと思つて放縦なことをしてはいけ
ないよ。驕慢きやうまんの心の盛んな時に、女の問題で賢い人が失敗するよう
なことは歴史の上にもあることだからね。思つてならない人と思つ
て、女の名も立て自身も人の恨みを負うようなことをしては一生の
心の負担になる。不運な結婚をして、女の欠点ばかりが目について
苦しいようなことがあつても、そうした時に忍耐をして万人を愛す
る人道的な心を習得するようにつとめるとか、もしくは娘の親たち

の好意を思うことで足りないことを補うとか、また親のない人と結婚した場合にも、不足な境遇も妻が価値のある女であればそれで補うに足ると認識すべきだよ。そうした同情を持つことは自身のためにも妻のためにも将来大きな幸福を得る過程になるのだ」

こんなことも言つて閑暇ひまのある時にはよく宰相中將を教える源氏であつた。この教訓の精神から言つても、仮にも初恋の人を忘れて他の女を思うようなことはできないように中將は思つていた。雲井の雁も近ごろになつてことさら父が愁色を見せることを知つて恥ずかしく思い、自分は不幸な女であると深く思われるのであつたが、表面は素知らぬふうを見せて、おおように物思ひをしていた。宰相中將は思い余る時々だけに情熱のこもつた手紙を雲井の雁へ書いた。だが誠をか（偽りと思ふものから今さらにたが誠をかわれは頼まん）と心に思つても、世ずれた人のようにむやみに人を疑うことのない純真な雲井の雁は、中將の手紙に沁しんで読まれるところが多いように思われた。

「中務なかつかさの宮がお嬢さんと宰相中將との縁組みを太政大臣へお申し込みになつて大臣も賛成されたようです」

とこんな噂うわさを内大臣に伝えた者のあつた時に、内大臣の心は愁うれいにふさがれた。大臣はそうした噂の耳にはいつたことを雲井の雁にそつと告げた。

「あの人がほかの結婚をしてもよいという気になるとはひどい。太政大臣も口をお入れになつたことがあるのに、それでも私が強硬だつたものだから、今になつて大臣はそんなふうに勧められるのだらう。しかしその場合に私が先方の言いなりに結婚を許しても体面上恥ずかしいことだつたのだから」

などと、目に涙を浮^うけて父が言うのを、雲井の雁は恥^かずかしく思
 って聞きながらも、一方では何とはなしに涙が流れ出してくるのを
 きまり悪く思^{おも}って、顔をそむけているのが可^か憐^{れん}であった。どうすれ
 ばいいだろう。やはりこちらから折れて出るべきであろうかなどと
 煩^{はん}悶^{もん}をしながら大臣の去ったあとまでも雲井の雁は庭をながめて物
 思^しいを続けていた。これはなんとという愚^{おろ}かな涙であろう、どう父は
 思^しったであろうなどと心を悩^{なや}ましている所へ、宰相中將の手紙が届
 いた。恨^{うら}めしく今まで思^{おも}っていた人ではあるが、さすがに手紙はす
 ぐあけて読^よんだ。情^{なさけ}のこもった手紙であった。

「#ここから2字下げ」

つれなさは浮き世の常になり行くを忘れぬ人や人にことなる

「#ここで字下げ終わり」

とも書いてある。父がした話のことなどは少しも書いてないこと
 を雲井の雁は恨^{うら}めしく思^{おも}ったが返事を書いた。

「#ここから2字下げ」

限りとして忘れがたきを忘るるもこや世に靡^{なび}く心なるらん

「#ここで字下げ終わり」

この歌の意味が腑^ふに落ちないで宰相中將はいつまでも首を傾^かけて
 いたということである。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2003年9月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

藤のうら葉

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）仕度^{したく}で

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）花一蔭^{かげ}では

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」ふぢばなのもとの根ざしは知らねども

「#地から3字上げ」枝をかはせる白と紫 （晶子）

六条院の姫君が太子の宮へはいる仕度^{したく}でだれも繁忙をきわめてい
る時にも、兄の宰相中将は物思いにとらわれていて、ぼんやりとし
ていることに自身で気がついていて。自身で自身がわからない気も
する中将であった。どうしてこんなに執拗^{しつよう}にその人を思っているの

であろう、これほど苦しむのであれば、二人の恋愛を認めてよいというほどに伯父おじが弱気になっっていることも聞いていたのであるから、もうずっと以前から進んで昔の関係を復活させればよかったのである。しかしできることなら、伯父のほうから正式に婿として迎えようと言って来る日までは昔の雪辱のために待っていたいと煩悶はんもんしているのである。雲井くもいの雁かりのほうでも父の大臣の洩もらした恋人の結婚話から苦しい物思ものしいをしていた。もしもそんなことになったならもう永久に自分などは顧みられないであろうと思うと悲しかった。接近をしようとはせずに、しかもこの二人のしているのは熱烈な相思の恋であった。内大臣も甥おいの価値をしいて認めようとせずに、結婚問題には冷淡な態度をとり続けてきたのであったが、雲井の雁の心は今も依然とその人にばかり傾かたいているのを知っては、親心として宰相中將の他家の息女と結婚するのを坐視ざしするに忍びなくなった。話が進行してしまつて、中務なかつかさの宮でも結婚の準備ができたあとでこちらの話を言い出しては中將を苦しめることにもなるし、自身の家のためにも不面目なことになつて世上の話題にされやすい。秘密にしているも昔あつた関係はもう人が皆知しっていることであろう、何かの口実を作つて、やはり自分のほうから負けて出ねばならないとまで大臣は決心するに至つた。表面は何もないふうをしていても、あのことがあつてからは心から親しめない間柄になつているのであるから、突然言い出すのも如何いかなものであると大臣ははばかられた。新しい婿迎むこむかえの形式をとるのも他人が見ておかしく思うことであるうから、そんなふうにはせずによい機会に直接話してみたほうがよいかもしいれないなどと思つていたが、三月の二十日はつかは大宮の御忌日おんきじつであつて、極楽寺へ一族の参詣さんけいすることがあつた。内大臣は子息た

ちを皆引き連れて行って、すばらしく権勢のある家のことであるから多数の高官たちも法会ほうえに参列したが、宰相中將はそうした高官たちに遜色そんじやくのない堂々とした風采ふうさいをしていて、容貌ようぼうなども今が盛りなようにもとのつていのであるから、高雅な最も貴い若い朝臣あそと見えた。恨めしかったあの時以来、いつも内大臣と逢うのは晴れがましいことに思われて、今日きょうなども親戚しんせきじゅうの長者としての敬意だけを十分に見せて、そしてきわめて冷静に落ち着いた態度をとっている宰相中將に、今日の内大臣は特に関心が持たれた。仏前の誦經ずきょうなどは源氏からもさせた。中將は最も愛された祖母の宮の法事であったから、経巻や仏像その他の供養のことに誠心まことこころをこめた奉仕ぶりを見せた。夕方になって参会者の次々に帰るころ、木の花は大部分終わりがたになって散り乱れた庭に霞かすみもよんで春の末の哀愁の深く身にしむ景色けしきを、大臣は顔を上げて母宮のおいでのになった昔の日を思いながら、雅趣のある姿でながめていた。宰相中將も身にしむ夕べの氣に仏事中よりもいっそうめいっただ心持ちになって、

「雨になりそうだ」

などと退散して行く人たちの言い合っている声も聞きながらなお庭のほうばかりがながめられた。好機会であるとも大臣は思ったのか、源中將の袖そでを引き寄せて、

「どうしてあなたはそんなに私を憎んでいるのですか。今日の御法会の仏様の縁故で私の罪はもう許してくれたまえ。老人になつてどんなに肉身が恋しいかshれない私に、あまり嚴罰をあなたが加え過ぎるのも恨めしいことです」

などと言うと、中將は畏かしこまって、

「お亡かくれになりました方の御遺志も、あなたを御信賴申して、庇護されてまいるようにということであつたように心得ておりましたが、私をお許しくださいませぬ御様子を拝見するものですから御遠慮しておりました」

と言つていた。天侯が悪くなつて雨風の中をこの人たちはそれぞれ急ぎ立てられるように家へ歸つた。宰相中將は大臣がどうして平生と違つた言葉を自分にかけたのであろうと、無関心でいる時のない恋人の家のことであるから、何でもないことも耳にとまつて、いろいろな想像を描いていた。

長い年月の間純情をもつて雲井の雁を思つていた宰相中將の心が通じたのか、内大臣は昔のその人とは思われぬほど謙遜けんそんな娘の親の心になつて宰相中將を招くのにわざとらしくない機会を、しかも最もふさわしいような機会のあるのを願つていたが、四月の初めに庭の藤ふじの花が美しく咲いて、すぐれた紫の花房はなぶさのなびき合うながめを、もてはやしもせずにごしてしまふのが残念になつて、音楽の遊びを家でした時に、藤の花が夕方になつていつそう鮮明に美しく見えるからといつて、長男の頭中將くわちゆうのを使いにして源中將を迎えにやつた。

「極楽寺の花一蔭かげではお話もゆつくりとする間のありませんでしたことが遺憾でなりませんでした。それでもしお閑暇ひまがあるようでしたらおいでくださいませんか」

というのが大臣の伝えさせた言葉である。手紙には、

「#ここから2字下げ」

わが宿の藤の色濃き黄昏たそがれにたづねやはこぬ春の名残なごりを

「#ここで字下げ終わり」

とあった。歌われてあるとおりにすぐれた藤の花の枝にそれは付けてあった。使いを受けた中將は心ときめくのを覚えた。そして恐縮の意を返事した。

「#ここから2字下げ」

なかなか折りやまどはん藤の花たそがれ時のたどたどしくば

「#ここで字下げ終わり」

というのである。

「気おくれがして歌になりませんよ。直してください」

と宰相中將は從兄いとこに言った。

「お供して行きましょう」

「窮屈すじけんな隨身ずいじんはいやですよ」

と言って、源中將は從兄を帰した。中將は父の源氏の居間へ行つて、頭中將が使いに來たことを言つて内大臣の歌を見せた。

「ほかの意味があつてお招きになるのかもしれない。そんなふうな態度に出てくればおもしろくなかつた旧恨というものも消されるだろう。どうだね」

と源氏は言った。婿の親として源氏はこんなに自尊心が強かつた。

「そんな意味でもないでしょう。対たいの前の藤が例年よりもみごとに咲いていますからこのごろの閑暇ひまなころに音楽の合奏でもしようとされるのでしょうか」

と宰相中將は父に言うのであった。

「特使がつかわされたのだから早く行くがよい」

と源氏は許した。中將はああは言っているも、心のうちは期待されることと、一種の不安とが一つになって苦しかった。

「その直衣のうしの色はあまり濃くて安っぽいよ。非参議級とかまだそれにならない若い人などに二藍ふたあいというものは似合うものだよ。きれいにして行くがよい」

と源氏は自身用に作らせてあったよい直衣に、その下へ着る小袖こそで類もつけて中將の供をして来ていた侍童に持たせてやった。中將は自身の居間のほうで念の入った化粧をしてから黄昏たそがれ時も過ぎて、待つほうで気のもまれる時刻に内大臣家へ行った。公達きんたちが中將をはじめとして七、八人出て来て宰相中將を座に招じた。皆きれいな公子たちであるが、その中にも源中將は最もすぐれた美貌びぼうを持っていた。気高けだかい貴人らしいところがことに目にたった。内大臣は若い甥おいのために座敷の中の差さし函ずなどをこまごまとしていた。大臣は夫人や若い女房などに、

「のぞいてごらん。ますますきれいになった人だよ。とりなしが静かで、堂々として鮮明な美しさは源氏の大臣以上だろう。お父様のほうはただただ艶えんで、愛嬌あいきょうがあつて、見ている者のほうも自然えがに笑顔おが作られるようで、人生の苦というようなものを忘れ去ることのできる力があつた。公務を執ることなどはそうまじめにできなかつたものだ。しかもこれが道理だと思われたものだ。この人のほうは学問が十分にできているし、性質がしっかりとしていてりっぱな官吏だと世間から認められているらしいよ」

などと言っていたが、身なりを正しく直して宰相中將に面会した。

まじめな話は挨拶あいさつに続いて少ししただけであとは藤の宴に移った。

「春の花というものは、どの花だって咲いた最初に目ざましい気のないものはないが、長くは人を楽しませずにどんどん散ってしまうのが恨めしい気のするところに、藤の花だけが一步遅れて、夏にまたがって咲くという点でいいものだ」と心が惹ひかれて、私はこの花を愛するのですよ。色だって人の深い愛情を象徴しているようではないものだから」

と言って微笑している大臣の顔も品がよくてきれいであった。月が出て藤の色を明らかに見せるほどの明りは持たないのであるが、ともかくも藤を愛する宴として酒杯が取りかわされ、音楽の遊びをした。しばらくして大臣は酔った振りになって宰相中将に酒をしようとした。源中将は酔いつぶされまいとして、それを辞し続けた。

「あなたは末世に過ぎた学才のある人物でいながら、年のいった者を憐あわれんでくれないのは恨めしい。書物にもあるでしょう、家の礼というものが。甥おいは伯父おじを愛して敬うべきものですよ。孔子の教えには最もよく通じていられるはずなのだが、私を悩まし抜かれたとそう恨みが言いたい」

などと言って、それは酒に酔って感傷的になっているのか源中将を少しばかり困らせた。

「伯父様を決して粗略には思っておりません。御恩のあるお祖父じい様の代わりと思えますだけでも、私の一身を伯父様の犠牲にしてもいいと信じているのですが、どんなことがお気に入らなかつたのでしよう。もともと頭がよくないのでございますから、自身でも気づかずに失礼をしていたのでございましょう」

とうやうやしく源中將は言うのであった。よいころを見て大臣は
 機嫌きげんよくはしゃぎ出して「藤のうら葉の」（春日さす藤のうら葉の
 うちとけて君し思はばわれも頼まん）と歌った。命ぜられて頭中將くづの
 が色の濃い、ことに房ふさの長い藤を折って来て源中將の杯の台に置き
 添えた。源中將は杯を取ったが、酒の注つがれる迷惑を顔に現わして
 いる時、大臣は、

「#ここから2字下げ」

紫にかことはかけん藤の花まつより過ぎてうれたけれども

「#ここで字下げ終わり」

と歌った。杯を持ちながら頭を下げ、謝意を表した源中將はよい
 形であった。

「#ここから2字下げ」

いく返り露けき春をすぐしきて花の紐ひもとく折あに逢あらん

「#ここで字下げ終わり」

と歌った源中將は杯を頭中將にさした。

「#ここから2字下げ」

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらん

「#ここで字下げ終わり」

頭中將の歌である。二男以下にもその型で杯がまわされ「みさか

な」の歌がそれぞれ出たわけであるが、酔っている人たちの作ったものであったから、以上の三首よりよいというものもなかった。七日の夕月夜の中に池がほの白く浮かんで見えた。大臣の言葉のように、春の花が皆散ったあとで若葉もありなしの木の梢しんがきの寂しいこのごろに、横が長く出た松の、たいして大木でないのへ咲きかかった藤の花は非常に美しかった。例の美音の弁べんの少将がなつかしい声で催馬楽さいばらの「葦垣あしがき」を歌うのであった。

「すばらしいね」

と大臣は戯談じょたんを言つて、「年経にけるこの家の」と上手うまじに声を添えた。おもしろい夕月夜の藤の宴に宰相中將の憂愁は余す所なく解消された。夜がふけてから源中將は酔いに悩むふうを作つて、

「あまり酔つて苦しくてなりません。無事に帰りうる自信も持てませんからあなたの寢室を拝借できませんか」

と頭中將に言つていた。大臣は、

「ねえ朝臣あそん、寢床をどこかで借りなさい。老人としよりは酔つぱらつてしまつて失礼だからもう引き込むよ」

と言ひ捨てて居間のほうへ行つてしまった。頭中將が、

「花の蔭かげの旅寢ですね。どうですか、あとで迷惑になる案内役ではないかしら」

「寄りかかつて松と同じ精神で咲く藤なのですから、これは軽薄な花なものですか。とにかくそんな縁起でもない言葉は使わないでおきましょう」

と言つて、中將の先導をなお求める宰相中將であった。頭中將は負けたような気がしなくてもなかつたが、源中將はりっぱな公子であつたから、ぜひ妹との結婚を成立させたいとはこの人の念願だつ

たことであつて、満足を感じながら従弟を妹の所へ導いた。宰相中将はこうした立場を与えられるに至つた夢のような運命の変わりようにも自己の優越を感じた。雲井の雁はすっかり恥ずかしがつていたのであつたが、別れた時に比べてさらに美しい貴女になつていたのである。

「みじめな失恋者で終わらなければならなかつた私が、こうして許しを受けてあなたの良人になり得たのは、あなたに対する熱誠がしからしめたのですよ。だのにあなたは無関心に冷ややかにしておいでになる」

と男は恨んだ。

「少将の歌われた『葦垣』の歌詞を聞きましたか。ひどい人だ。『河口の』(河口の関のあら垣や守れどもいでてわが寝ぬや忍び忍びに)と私は返しに謡いたかつた」

女はあらわな言葉に羞恥を感じて、

「#ここから1字下げ」

「浅き名を言ひ流しける河口はいかががもらしし関のあら垣

「#ここで字下げ終わり」

いけないことでしたわ」

と言う様子が娘らしい。男は少し笑つて、

「#ここから1字下げ」

「もりにけるきくだの関の河口の浅きにのみはおはせざらなん

「#ここで字下げ終わり」

長い年月に堆積たいせきした苦惱と、今夜の酒の酔いで私はもう何もわからなくなつた」

と酔いに託して帳台の内の人になつた。宰相中將は夜の明けるのも気がつかない長寝をしていた。女房たちが気をもんでいるのを見て、大臣は、

「得意になつた朝寝だね」

と言つていた。そしてすっかり明るくなってから源中將は歸つて行つた。この中將の寝起き姿を見た人は美しく思ったことであろう。

第一夜の翌朝の手紙も以前の続きで忍んで送られたのであるが、はばかり必要のない日になつて、かえつて雲井の雁が返事の書けなふうであるのを、蓮葉はすっぱな女房たちは肱ひじを突き合つて笑つている所へ大臣が出て来て手紙を読んでみた。雲井の雁はますます羞恥はづかしに堪えられなくなつた。

「#ここから1字下げ」

やはり昔と同じように冷ややかなあなたに逢つていよいよ自分が哀れな者に思われるのですが、おさえられぬ恋からまたこの手紙を書くのです。

「#ここから2字下げ」

咎とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみ今日あらはる袖そでのしづくを

「#ここで字下げ終わり」

などと手紙はなれなれしく書いてあつた。大臣は笑顔えがおをして、

「字が非常に上手になつたね」

などと言っていることも昔とはたいした変わりようである。返事の歌を詠みにくそうにしている娘を見て、

「どうしたというものだ。見苦しい」

と言つて、雲井の雁が父をはばかりる気持ちも察して大臣は去つてしまった。手紙の使いは派手な纏頭を得た。そして頭中將が饗応の役を勤めたのであつた。始終隠して手紙を届けに来た人は、始めて真人間として扱われる気がした。これは右近の丞で宰相中將の手もとに使っている男であつた。

源氏も内大臣邸であつた前夜のことを知つた。宰相中將が平生よりも輝いた顔をして出て来たのを見て、

「今朝はどうしたか、もう手紙は書いたか。聡明な人も恋愛では締まりのないことをするようにもなるものだが、最初の関係を尊重して、しかもあくせくとあせりもせず自然に解決される時を待つていた点で、平凡人でないことを認めるよ。内大臣があまりに強硬な態度をとり過ぎて、ついにはすっかり負けて出たということ。世間は何かと評をするだろう。しかしあまり優越感を持ち過ぎて慢心的に放縦なほうへ転向することのないようにしなくてはならない。今度の態度は寛大であつても、大臣の性格は、生一本でなくて気むずかしい点があるのだからね」

などとまた源氏は教訓した。円満な結果を得て、宰相中將につりあいのよい妻のできたことで源氏は満足しているのである。宰相中將は子のようにも見えなかつた。少し年上の兄というほどに源氏は見えるのである。別々に見る時は同じ顔を写し取つたように思われる中將と源氏の並んでいるのを見ると、二人の美貌には異なつた特

色があつた。源氏は薄色の直衣のうしの下に、白い支那風しなに見える地紋のつやつやと出た小袖こそでを着ていて、今も以前に変わらず艶えんに美しい。宰相中将は少し父よりは濃い直衣に、下は丁字染めちよつじのこげるほどにも薰物たきものの香を染しませた物や、白やを重ねて着ているのが、顔をことさら引き立てているように見えた。今日は御所からもたらされて灌かん仏ぶつが六条院でもあることになつていたが、導師の来るのが遅くなつて、日が暮れてから各夫人付きの童女たちが見物のために南の町へ送られてきて、それぞれ変わった布施ふせが夫人たちから出されたりした。御所の灌仏の作法と同じようにすべてのことが行なわれた。殿上役人である公達きんだちもおおぜい参会していたが、そうした人たちもかえつて六条院とする作法のほうを晴れがましく考えられて、気おくれが出るふうであつた。宰相中将は落ち着いてもいられなかつた。化粧をよくして身なりを引き繕つて新婦の所へ出かけるのであつた。情人として扱われてはいないが、少しの関係は持つている若い女房などで恨めしく思っているのもあつた。苦難を積んで護まもつて来た年月が背景になつている若夫婦の間には水が洩もるほどの間隙かんげきもないのである。内大臣も婿にしていよいよ宰相中将の美点が明瞭みんりょうに見えて非常に大事がつた。負けたほうは自分であると意識することで大臣の自尊心は傷つけられたのであるが、中将の娘に対する誠実さは、今までだれとの結婚談にも耳をかさず独身で通して来た点でも認められると思うことで、不満の償なぐさわれることは十分であつた。女御にょぎよりもかえつて雲井の雁のほうが幸福ではなやかな女性と見えるのを夫人や、そのほうの女房たちは不快がつたのであるが、そんなことなどは何でもない。雲井の雁の実母である按察使大納言あせちの夫人も、娘がよい婿を得たことで喜んだ。

源氏の姫君の太子の宮へはいることはこの二十日過ぎと日が決定した。姫君のために紫夫人は上賀茂の社へ参詣するのであったが、いつものように院内の夫人を誘つてみた。花散里、明石などである。その人たちは紫夫人といっしよに出かけることはかえつて自身の貧弱さを紫夫人に比べて人に見せるものであると思つてだれも参加しなかつたから、たいして目に立つような参詣ぶりではなかつたが、車が二十台ほどで、前駆も人数を多くはせず人を選り抜いてあつた。それは祭りの日であつたから、参詣したあとで一行は見物一棧敷にはいつて勅使の行列を見た。六条院の他の夫人たちのほうからも女房だけを車に乗せて祭り見物に出してあつた。その車が皆棧敷の前に立て並べられたのである。あれはだれのほう、それは何夫人のほうの車と遠目にも知れるほど華奢が尽くされてあつた。源氏は中宮の母君である、六条の御息所の見物車が左大臣家の人々のために押しこわされた時の葵祭りを思い出して夫人に語つていた。

「権勢をたのんでそうしたことをするのはいやなことだね。相手を
見くびつた人も、人の恨みにたたられたようになって亡くなつてしまつたのですよ」

と源氏はその点を曖昧に言つて、

「残した人だつてどうだろう、中將は人臣で少しずつ出世ができるだけの男だが、中宮は類のない御身分になつていられる。その時のことから言えば何という変わり方だろう。人生は元来そうしたものなのですよ。無常の世なのだから、生きている間はしたいようにして暮らしたいとは思つが、私の死んだあとであなたなどがにわかにな寂しい暮らしをするようなことがあつては、かえつて今一派手なことをしておかないほうがその場合に見苦しくないからと私はそんな

ことも思つて、十分まで物はせずにいる」

などと言つたのち源氏は高官なども棧敷さじきへ伺候して来るので男子席のほうへ出て行つた。今日きょう近衛このえの将官として加茂へ参向を命ぜられた勅使は頭中將くさうのであつた。内侍使いは藤典侍とうないしのすけである。勅使の出発する内大臣家へ人々はまず集まつたのであつた。宮中からも東宮からも今日の勅使には特別な下され物があつた。六条院からも贈り物があつて、勅使の頭中將の背景の大きさが思われた。宰相中將はいでたちのせわしい場所へ使いを出して典侍へ手紙を送つた。思い合つた恋人どうしであつたから、正当な夫人のできたことで典侍は悲観しているのである。

「#ここから2字下げ」

何とかや今日のかざしよかつ見つつかおぼめくまでもなりにけるかな

「#ここから1字下げ」

想像もしなかつたことです。

「#ここで字下げ終わり」

というのであつた。自分のためには晴れの日であることに男が関心を持っていたことだけがうれしかったか、あわただしい中で、もう車に乗らねばならぬ時であつたが、

「#ここから2字下げ」

かざしてもかつたどらるる草の名は桂かつらを折りし人や知るらん

「#ここから1字下げ」

博士はかせでなければわからないでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

と返事を書いた。ちよつとした手紙ではあつたが、気のきいたものであると宰相中將は思った。この人とだけは隠れた恋人として結婚後も関係が続いていくらしい。

姫君が東宮へ上がった時に母として始終紫の女王にょおうがついて行っていねばならないはずであるが、女王はそれに堪えまい、これを機会に明石あかしを姫君につけておくことにしようかと源氏は思った。紫夫人も、それが自然なことで、いずれそうした日のなければならぬ母と子が今のように引き分けられていることを明石夫人は悲しんでいるのであろうし、姫君も幼年時代とは違つてもう今はそのことを飽き足らぬことと悲しんでいるであろう、双方から一人の自分が恨まれることは苦しいと思うようになった。

「この機会に真実のお母様をつけておあげなさいませ。まだ小さいのですから心配でなりませんのに、女房たちといつても若い人が多いのでございますからね。また乳母めのとたちといつても、ああした人たちの周到さには限度があるのですものね、母がいなければと思ひますが、私がそうずつとつききつていられないあいだはあの方がいてくださつたら安心ができると思ひます」

と女王は良人おとこに言った。源氏は自身の心持ちと夫人の言葉とが一致したことを喜んで、明石へその話をした。明石は非常にうれしく思い、長い間の願ひの実現される気がして、自身の女房たちの衣裳いしやうその他の用意を、紫夫人のするのに劣らず派手はでに仕度したくし始めた。姫君の祖母の尼君は姫君の出世をどこまでも観望くわんぼうしたいと願つていた。そしてもう一度だけ顔を見たいと思う心から生き続けているのを、

明石は哀れに思っていた。その機会だけは得られまいと思うからである。最初は紫夫人が付き添って行った。紫夫人には轎車れんしゃも許されるであろうが、自身には御所のある場所を歩いて行かねばならない不体裁のあることなども、明石は自身のために歎なげかずに源氏夫婦が磨みがきたてて太子に奉る姫君に、自分という生母のあることが玉の瑕きずと見られるに違いないと心苦しがつていた。姫君が上がる式に人目を驚かすような華奢かしやはしたくないと源氏は質素にしたつもりであったが、やはり並み並みのこととは見えなかった。限りもなく美しく姫君を仕立てて、紫夫人は真心からかわいくながめながらも、これを生母に譲らねばならぬようなことがなくて、真実の子として持ちたかったという気がした。源氏も宰相中將もこの一点だけを飽き足らず思った。

三日たつて紫の女王は退出するのであったが、代わるために明石が御所へ来た。そして東宮の御息所みやすどの桐壺きりつぼの曹司せうしで二夫人をはじめて面会したのである。

「こんなに大人らしくおなりになった方で、私たちは長い以前からの知り合いであることが証明されるのですから、もう他人らしい遠慮はしないでおきたいと思います」

となつかしいふうに紫夫人は言つて、いろいろな話をした。これが初めて二夫人の友情は堅く結ばれていくであろうと思われた。明石のものを言う様子などに、あれだけでも源氏の愛を惹ひく力のあるのは道理である、すばらしい人であると夫人にはうなずかれるところがあった。今が盛りの気高けだかい貴女と見える女王の美に明石は驚いていて、たくさんな女性の中で最も源氏から愛されて、第一夫人の榮譽を与えているのは道理のあることであると思つたが、同時に、

この人と並ぶ夫人の地位を得ている自分の運命も悪いものでないという自信も持てたのであったが、入り代わって帰る女王はことさらはなばなしの人につき添われ、輦車も許されて出て行く様子などは陛下の女御の勢いに変わらないのを見ては、さすがに溜息もつかれた。

きれいな姫君を夢の中のような気持ちでながめながらも明石の涙はとまらなかつた。しかしこれはうれしい涙であつた。今までいろいろな場合に悲観して死にたい気のした命も、もつともつと長く生きねばならぬと思うような、朗らかな気分になることができて、いっさいが住吉の神の恩恵であると感謝されるのであつた。理想的な教養が与えられてあつて、足りない点などは何もないと見える姫君は、絶大な勢力のある源氏を父としているほかに、すぐれた麗質も備えていることで、若くいらせられる東宮ではあるがこの人を最も御一愛寵あそばされた。東宮に侍している他の御息所付きの女房などは、源氏の正夫人でない生母が付き添っていることをこの御息所の瑕のように噂するのであるが、それに影響されるようなことは何もなかつた。はなやかな空気が桐壺に作られて、芸術的なおいをこの曹司で嗅ぎうることを喜んで、殿上役人などもおもしろい遊び場と思ひ、ここのすぐれた女房を恋の対象にしてよく来るようになった。女房たちのとりなし、人への態度も洗練されたものであつた。紫夫人も何かのおりには出て来た。それで明石との間がおいおい打ち解けていった。しかも明石はなれなれしさの過ぎるほどにも出過ぎたことなどはせず、紫夫人はまた相手を軽蔑するようなことは少しもせず、怪しいほど雅致のある友情が聡明な二女性の間にかわされていた。源氏も、もう長くもいられないように思う自身の生きて

いる間に、姫君を東宮へ奉りたいと思つていたことが、予期以上に都合よく実現されたし、それは彼自身に考えのあつてのことではあるが、配偶者のない、たよりない男と見えた宰相中將も結婚して幸福になつたことに安心して、もう出家をしてもよい時が来たと思われるのであつた。紫夫人は気がかりであるが、養女の中宮がおいでになるから、何よりもそれが確かな寄りかかりである、また、姫君のためにも形式上の母は女王のほかにはないわけであるから、仕えるのに誠意を持つことであろうからと源氏は思つていたのであつた。花散里はなぢるさとのためには宰相中將がいるからよいとそれも安心してゐた。翌年源氏は四十になるのであつたから、四十の賀宴の用意は朝廷をはじめとして所々でしてゐた。

その秋三十九歳で源氏は準じゅん太上天皇たいてんじょうの位をお得になつた。官から支給されておいでになる物が多くなり、年官年爵の特権数がおふえになつたのである。それでなくても自由でないことは何一つないのでありになつたが、古例どおりに院司などが、それぞれ任命されて、しかもどの場合の院付きの役人よりも有為な、勢いのある人々が選ばれたのであつた。こんなことになつて心安く御所へ行くことのおできにならないことになつたのを六条院は物足らずお思いになつた。この御処置をあそばしてもまだ帝は不満足おほしめに思召され、世間をはばかりるために位をお譲りになることのできぬことを朝夕あさゆふお歎なげきになつた。

内大臣が太政大臣になつて、宰相中將は中納言になつた。任官の礼廻りをするために出かける中納言はいつそう光彩の添うた気がして、身のとりなし、容貌ようぼうの美に欠けた点のないのを、舅しゅうとの大臣は見て、後宮の競争に負けた形になつてゐるような宮仕えをさせるより

も、こうした婿をとるほうがよいことであるという気になった。雲井の雁の乳母の大輔が、

「姫君は六位の男と結婚をなさる御運だった」

とつぶやいた夜のことが中納言にはよく思い出されるのであったから、美しい白菊が紫を帯びて来た枝を大輔に渡して、

「#ここから1字下げ」

「あさみどりわか葉の菊をつゆにても濃き紫の色とかけきや

「#ここで字下げ終わり」

みじめな立場にいて聞いたあなたの言葉は忘れないよ」

と朗らかに微笑して言った。乳母は恥ずかしくも思ったが、気の毒なことだったとも思いおかわいらしい恨みであるとも思った。

「#ここから1字下げ」

「二葉より名だたる園の菊なればあさき色わく露もなかりき

「#ここで字下げ終わり」

どんなに憎らしく思召したでしょう」

と物一馴れたふうに言っつて心苦しがつた。納言になったために来客も多くなり、この住居が不便になって、源中納言はお亡くなりになった祖母の宮の三条殿へ引き移った。少し荒れていたのをよく修理して、宮の住んでおいでになった御殿の装飾を新しくして夫婦のいる所にした。二人にとっては昔を取り返しえた気のする家である。庭の木の小さかったのが大きくなって広い蔭を作るようになってい

たり、ひとむら薄^{すすき}が思うぞんぶんに拡^{ひろ}がってしまったりしたのを整理させ、流れの水草を掻^かき取らせもして快いながめもできるようになった。

美しい夕方の庭の景色^{けしき}を二人でながめながら、冷たい手に引き分けられてしまった少年の日の恋の思い出を語っていたが、恋しく思われることもまた多かつた。当時の女房たちは自分をどう思っていたであろうと雲井の雁は恥^はずかしく思っていた。祖母の宮に付いていた女房で、今までまだそれぞれの部屋^{へや}に住んでいた女房などが出て来て、新夫婦がここへ住むことになったのを喜んでいた。

源中納言、

「#ここから2字下げ」

なれこそは岩もるあるじ見し人の行くへは知るや宿の真清水^{ましみづ}

「#ここで字下げ終わり」

夫人、

「#ここから2字下げ」

なき人は影だに見えずつれなくて心をやれるいさらゐの水

「#ここで字下げ終わり」

などと言い合っている時に、太政大臣は宮中から出た帰途にこの家の前を通って、紅葉^{もみじ}の色に促されて立ち寄った。宮がお住まいになつた当時にも変わらず、幾つ^{いくつ}の棟^{むね}に分かれた建物を上手^{うまい}にはなやかに住みなしているのを見て大臣の心はしんみりと濡^ぬれていった。

中納言は美しい顔を少し赤らめて舅しゅうの前にいた。美しい若夫婦ではあるが、女のほうはこれほどの容貌うぶなまがほかにないわけではないと見える程度の美人であった。男はあくまでもきれいであった。老いた女房などは大臣の来訪に得意な気持ちになって、古い古い時代の話などをし出すのであった。そこに出たままになっていた二人の歌の書いた紙を取って、大臣は読んだが、しおれたふうになった。

「この水に聞きたいことが私にもあるが、今日は縁起を祝ってそれを言わないことにしよう」

と言って、大臣は、

「#ここから2字下げ」

そのかみの古い木はうべも朽ちにけり植うゑし小松も苔こけ生おひにけり

「#ここで字下げ終わり」

この歌を告げた。中納言の乳母めのとの宰相の君は、あの当時の大臣の処置に憤慨して、今も恨めしがっているのであったから、得意な気持ちで大臣に言った。

「#ここから2字下げ」

いづれをも蔭かげとぞ頼む二葉より根ざしかはせる松の末々

「#ここで字下げ終わり」

この感想がどの女房の歌にも出てくるのを中納言は快く思った。

雲井の雁はむやみに顔が赤くなって恥はずかしくてならなかった。

十月の二十日過ぎに六条院へ行幸みゆきがあった。興の多い日になるこ

とを予期されて、主人の院は朱雀院をも御招待あそばされたのであったから、珍しい盛儀であると世人も思つてこの日を待つていた。

六条院では遺漏のない準備ができていた。午前十時に行幸があつて、初めに馬場殿へ入御になつた。左馬寮、右馬寮の馬が前庭に並べられ、左近衛、右近衛の武官がそれに添つて列立した形は五月の節会せちえの作法によく似ていた。午後二時に南の寝殿へお移りになつたのであるが、その通御の道になる反橋や渡殿には錦を敷いて、あらわに思われる所は幕を引いて隠してあつた。東の池に船などを浮けて、御所の鵜飼うい役人、院の鵜飼いの者に鵜を下おろさせてお置きになつた。小さい鮒ふななどを鵜は取つた。観覧えいらんに供えらるゝというほどのことではなく、お通りすがりの興におさせになつたのである。山の紅葉もみじはどこのも美しいのであるが、西の町の庭はことさらにすぐれた色を見せているのを、南の町との間の廊の壁をくずさせ、中門をあけて、お目をさえぎる物を省いて御覧にお供えになつたのであつた。二つの御座おましが上に設けられてあつて、主人の院の御座が下がつて作られてあつたのを、宣旨せんじがあつてお直させになつた。これこそ限りもない光栄であるとお見えになるのであるが、帝みかどの御心みこころにはなお一段六条院を尊んでお扱いになれないことを残念に思召した。

池の魚を載せた台を左近少将が持ち、蔵人所くらうじんの鷹飼たかがいが北野で狩猟してきた一つがいの鳥を右近少将がささげて、寝殿の東のほうから南の庭へ出て、階段きざはしの左右に膝ひざをついて献上の趣を奏上した。太政大臣が命じてそれを大御着おおみさかなに調べさせた。親王がた、高官たちの饗膳きやうぜんにも、常の様式を変えた珍しい料理が供えられたのである。人々は陶然と酔つて夕べに近いころ、伶人れいじんが召し出された。大楽といふほどの大がかりなものでなく、感じのよいほどの奏楽の前で御所の

侍童たちが舞った。朱雀院の紅葉の賀の日がだれにも思い出された。「賀王恩」という曲が奏されて、太政大臣の子息の十歳ぐらいの子が非常におもしろく舞った。帝は御衣を脱いで賜い、父の太政大臣が階前でお礼の舞踏をした。主人の院はお折らせになった菊を大臣へお授けになるのであったが、青海波の時を思い出しておいでになった。

「#ここから2字下げ」

色まさる籬の菊もをりをりに袖打ちかけし秋を恋ふらし

「#ここで字下げ終わり」

当時ごいっしょに舞った大臣は、自身も人にすぐれた幸福は得ていながらも、帝の御子であらせられた院の到達された所と自身とは非常な相違のあることに気がついた。時雨は彼の出て来るおりをうかがっていたようにはらはらと降りそそいだ。

「#ここから1字下げ」

「紫の雲にまがへる菊の花濁りなき世の星かとぞ見る

「#ここで字下げ終わり」

最もふさわしい時に咲いた花でございます」

と大臣は院へ申し上げた。夕風が蒔き敷く紅葉のいろいろと、遠い渡殿に敷かれた錦の濃淡と、どれがどれとも見分けられない庭のほうに、美しい貴族の家の子などが、白楡、臙脂、赤紫などの上着を着て、ほんの額だけにみずらを結び、短い曲をほのかに舞って紅

葉の木蔭へはいつて行く、こんなことが夜の闇に消されてしまうかと惜しまれた。奏楽所などは大形に作ってはなくて、すぐに御前でかんげんの管絃の合奏が始まった。御書所の役人に御物の楽器が召された。夜がおもしろく更けたところに楽器類が御前にそろった。「宇陀うだの法師」の昔のままの音を朱雀院は珍しくお聞きになり、身にしむようにもお感じになった。

「#ここから2字下げ」

秋をへて時雨ふりぬる里人もかかる紅葉もみじの折りをこそみね

「#ここで字下げ終わり」

現今の御境遇を寂しがつておいでになるような御製である。

帝が、

「#ここから2字下げ」

世の常の紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を

「#ここで字下げ終わり」

と朱雀院へ御説明的に申された。帝の御容貌はますます美しくおなりになるばかりであった。今ではまったく六条院と同じお顔にお見えになるのであるが、侍している源中納言の顔までが同じ物に見えるのは、この人として過分なしあわせであった。気けだか高い美が思いなしによるのかいささか劣って見えた。鮮明にきわだつてきれいな所などはこの人がよけいに持っているように見えた。この人は笛の役をしたのである。合奏は非常におもしろく進んでいった。歌の

役を勤める殿上人は階段の所に集まっていたが、その中で弁へんの少将の声が最もすぐれていた。

前生の善果を持って生まれてきたような人たちというべきであろう。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

若菜（上）

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）天^{あめ}

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一年^{とし}齡よりも

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと

行数）

（例）皇 「# 鹿ノ章」、第3水準1-94-75」など

「#地から3字上げ」たちまちに知らぬ花さくおほつかな^{あめ}
「#地から3字上げ」よりこしをうたがはねども（晶子）

あの六条院の行幸^{みゆき}のあつた直後から朱雀院^{すざく}の帝^{みかど}は御病氣になつて
おいでになつた。平生から御病身な方ではあつたが、今度の病にお

なりになってからは非常に心細く前途を思召すのであった。

「私はもうずっと以前から信仰生活にはいりたかつたのだが、太后がおいでのなる間は自身の感情のおもむくままなことができないで今日に及んだのだが、これも仏の御催促なのか、もう余命のいくばくもないことばかりが思われてならない」

などと仰せになって、御出家をあそばされる場合の用意をしておいでになった。皇子は東宮のほかには女宮様がただけが四人おいでになった。その中で藤壺の女御と以前言われていたのは三代前の帝の皇女で源姓を得た人であるが、院がまだ東宮でいらせられた時代から侍していて、後の位にも上つてよい人であつたが、たいした後援をする人たちもなく、母方といつても無勢力で、更衣から生まれた人だつたから、競争のはげしい後宮の生活もこの人には苦しうであつて、一方では皇太后が尚侍をお入れになつて、第一人者の位置をそれ以外の人に与えまいという強い援助をなされたのであつたら、帝も御心の中では愍然に思召しながら後に擬してお考えになることもなく、しかもお若くて御退位をあそばされたあとでは、藤壺の女御にもう光明の夢を作らせる日もなくて、女御は悲観をしたままで病氣になり薨去したが、その人のお生みした女三の宮を御子の中のだれよりも院はお愛しになつた。このころは十三、四でいらせられる。世の中を捨てて山寺へはいつたあとに、残された内親王はだれをたよりに暮らすかと思召されることが院の第一の御苦痛であつた。西山に御堂の御建築ができて、お移りになる用意をあそばしながらも、一方では女三の宮の装束の拳式の仕度をさせておいでになつた。貴重な多くの御財産、美術の価値のあるお品々などはもとより、楽器や遊戯の具なども名品に近いような物は皆この宮へお譲

りになって、その他の御財産、お道具類を他の宮がたへ御分配あそばされた。

東宮は院の重い御病氣と、御出家の御用意のあることをお聞きになつて、お見舞いの行啓をあそばされた。母君の女御もお付き添いして行つた。殊寵しじゆほうがあつたわけではないが、東宮の御母となる宿縁のあつた人を御尊重あそばされて、院はこの方にもこまやかにお話をあそばされた。東宮にも帝王とおなりになる日のお心得事などをお教えあそばされるのであつた。御一年とし年齢よりも大人おとなびておいでになつたし、御後援をする人が母方のそばにも多くある方であつたから、院は御安心をしておいでになるのである。

「私はもうこの世に遺憾だと心に残るようなこともない。ただ内親王たちが幾人もいることで将来どうなるかと案ぜられることは、今の場合だけでなくこの世を離れる際にも絆ほだしになるであらうと思われ。今まで一般の世の中に見ていても、女というものは、その人の意志でもなしに、ほかから働きかける者のために悪名も立てられ、恥辱も受けるような運命になつていくのがかわいそうだ。どの姉妹きょうだいにもあなたの御代みよが来た時にはあたたかい庇護を加えてやつてもらいたい。その中でも後見をする母などのついている者は託して行く所があるような氣もしてまずいいが、女三の宮は年のゆかないのに母のない内親王なのだから、私だけをたよりにして育ててきたことを思うと、私が寺へはいつたあとではどんな心細い身の上になることかと気がかりでならない」

と、涙をお拭ぬぐいになりながら東宮へ後事をお頼みになるのであつた。母君の女御にも信じ切つたようにして院は女三の宮のことを仰せになつた。とはいつても昔宮中であつた時代には、内親王の御母

の女御は格別な御一寵愛ちちうあいを得ていて、この方にとっては強力な競争者だったのであるから、その宮にまで憎悪おしうを持つわけではないが真心からお世話をする気にはなれなかつたであろうと想像される。

院は明けても暮れても女三の宮の将来についてはかり御心配をあそばされるせいもあって、年末が近づいてから御容態がいちじるしくお悪くなり、御簾みすの外へおいでになることもなくなつた。これまでも妖気ものけがもとでおりおりお煩わづらひいになることはあつても、こんなに続いて永ながく御容態のすぐれぬようなことはなかつたのであるから、御自身では御命数の尽きる世が来たというように解釈をあそばすのであつた。御退位になつてからも御在位時代に恩顧を受けた人たちは、今も優しく寛容な御性質をお慕い申し上げて、屈託なことのあつた時の慰安を賜わる所のようにして参候する慣ないになつていて、その人たちは院の御惱ごのうの重いのを皆心から惜しみ悲しんでいた。六条院からもお見舞いの使いが常に来た。そのうち御自身でもおいでになりたいという御通知のあつた時、院は非常にお喜びになつた。六条院の御子の源中納言が参院した時に、御病室の御簾みすの中へお招きになり、朱雀院すさくはいろいろなお話をあそばされた。

「お崩かれになつた陛下が御一終焉しゆえんの前に私へいろいろな御遺言をなされたのだが、その中で特に六条院と今の陛下のことについては熱心に仰せられて私へお託しになつたのだが、帝王というものになつては、自分の意志を単純に実行へ移すことのできない点があつてね。個人としての愛は少しも変わらなかつたが、しかも私の過失によつて、あの方にとって私が恨めしかつただらうと思うこともしたのに、今日までそれに対する復讐的なことは何の端にもお見せにならない。どんな賢人でも自身の問題になると恨むことも憎むことも凡人どお

りにすることからいろいろな事件の起こるのは歴史の上にあることだからね。機会があれば私への復讐が姿になって現われることであるろうと、世人も言うことだったし、私自身も罰を受ける気でいたのだが、あの方に見たのは絶対の愛だけだった。東宮などにも好意をお寄せになったり、また現在では婿舅むこいもうの関係までも作っていたいでいるのを私はどんなに感激しているかshれないが、愚かな上に盲目的な親の愛までも暴露してお目にかけることも恥ずかしくて、父である私が東宮に対してかえって冷淡なふうをしている。陛下のことは院の御遺言どおりに万事計らって位をお譲り申し上げたから、この聖天子を国民がいただきうることになり、私の不名誉まで取り返していただいている。これだけは意志を強くして遂行なしえた善事だと信じて満足している。六条院にこの秋の行幸の節にお目にかかった時から、私の心にはしきりに青春時代の兄弟間の愛が再燃してお目にかかりたくてならない。直接お目にかかってお話し申したいこともある。ぜひ御自身でおいでくださるようになんたからもお勧めしてほしい」

などとしおれたふうで院が仰せられたのである。

「御過失でございましたか、正当な御処置でございましたか、昔のことは今になって御批評の申し上げようもございません。私が大人になりましたして一官吏の職を奉じますようになりましたから、私のために院がいろいろの注意を実例によってお与えくださいます際などにも、自分は冤罪えんざいによってどんなことが過去にあったというようなことを少しでも仰せになることはございません。一生を通じて陛下の御補佐をすべきであるのを、人生を静かに考えたい欲求から中途で閑散な地位に移らせていただいたために、故院の御遺言もお守り

できぬことになり、またあなた様に対しては御在位の節には若輩であり、力もなく、上のかたがたが多くおいでにもなつて、御自身の至誠をお尽くしする機会がなかつたと申されまして、静かな御環境においでになります今日はせめてたびたび御訪問も申し上げてお話も承りたいのを、さすがに事の大仰おおぎょうになるのに遠慮されて御無沙汰ごぶさたを申し上げているとこんなことをおりおり歎息たんそくしておいでになるのでございます」

などと中納言は申し上げた。二十歳はたちに少し足らぬのであるが、すべてが整つて美しいこの人に院の御目はとまつて、じつと顔をおながめになりながら、どう処置すべきかと御一煩悶はんもんあそばされる姫宮を、この中納言に嫁とつがせたならと人知れず思召おほしめされた。

「太政大臣の家に行つていそうだね。長い間私なども大臣の態度を腑ふに落ちなく思つていたところ、円満な結果を得てよいことと思つているが、またどうしたことが大臣がうらやまれもしてね」

との院の仰せを不思議に思つて中納言は考えてみたが、それは女三の宮のお身の上をとやかくとお案じになつて、相当な人があれば結婚をさせて安心して宗教の中へはいりたいという思召おほしめしが院におありになるといふことがほかから耳にもはいつていたことであつたから、その問題に触れて仰せられることかと気がついたものの、呑のみ込み顔なお返辞はできないことであつた。ただ、

「つまらない者でございますから、配偶者を得ますこともとかく困難くわんでございますして」

と申し上げるのにとどめた。

のぞき見をしていた若い女房たちが、

「珍しい美男でいらっしやる。御様子だつてねえ、なんとというこり

っぱさでしよう」

集まってこんなことを言っているのを、聞いていた老けたほうに属する女房らが、

「それでも六条院様のあのお年ごろのおきれいさというものはそんなものではありませんでしたよ。比較には、まあありませんね、それはね、目もくらんでしまうほどお美しかったものですよ」

と言つても、若い人たちは承知をしない。こうした争いのお耳にはいった院が、

「そのとおりだよ。あの人の美は普通の美の標準にはあてはまらないものだった。近ごろはまたいつそうりっぱになられて光彩そのもののような気がする。正しくしていられれば端麗であるし、打ち解けて冗談でも言われる時には愛嬌があふれて、二人とないなつかしさが出てくる。何事にもどうした前生の大きな報いを得ておられる人かとすぐれた点から想像させられる人だ。宮廷で育つて、帝王の愛を一身に集めるような幸福さがあつて、まったくだよ。故院は御自身の命にも代えたいほど御大切にあそばしたものだが、それで慢心せず謙遜で、二十歳までには納言にもならなかった。二十一になつて参議で大将を兼ねたかと思う。それに比べると中納言の官等の上がり方は早い。子になり孫になりして威福の盛んになる家らしい。實際中納言は秀才であり、確かな教養を受けている点で昔の光源氏にあまり劣るまい。父君の昔に越えて幸福な道を踏んでもそれが不当とも思えない偉さが彼にある」

と御一甥をほめておいでになつた。可憐な姫宮の美しく無邪気な御様子を御覧になつては、

「十分愛してくれて、足りない所は蔭で教育してくれるような、そ

して安心して託せるような人を婿に選びたい気がする」
などと仰せられた。

乳母めのとの中でも上級な人たちをお呼び出しになって、装着ちぎの式の用意についていろいろお命じになることであつたついでに、院は、

「六条院が式部卿しきぶきやうの宮の女王じやうを育て上げられたようにして、この宮の世話をする男はないのだろうか。普通人の中に私が選えらび出すような人格者はまずないらしい。宮中には中宮ちゆうぐうがおいでになる。その下の女御にょごたちもよい後援者のついている人ばかりだからね。たいした後ろだてがなくて後宮の生活をするのは苦勞の多いことに違ちがいない。今日の権中納言が独身でいたところに話をしてみるのだった。若いがりっぱな秀才で将来の頼もしい人らしいのに」

こんなこともお言いになった。

「中納言は初めからまじめ一方な方でございますから、今までも初恋のあの奥様のことばかりを思いつめて、失恋時代にもほかの話に耳をかさなかつた人でございました。そのお姫様とごいっしょにおりになつたただ今では、第二の結婚のお話がある方を動かさうるものでもございますまい。私もはかえつて六条院様にその可能性がおありになるように存じ上げます。恋愛好きで女性に好奇心をお持ちになることは今も昔のままのようだと申すことでございます。その中でも最高の貴女に興味をお持ちあそばして、前齋院様などを今になつても思つておいでになるそうでございます」

と女宮の乳母の一人が申し上げた。

「その今でも恋愛好きである点はありがたくないことだね」

院はこう仰せられたが、乳母が言うように六条院には多くの夫人や愛人があつて、唯一の妻と認めさせることはできないでも、やは

りその人を親代わりの良人おとこに選ぶのが最善のことであるかもしれぬというお考えを院はあそばしたようである。

「おまえの言うことはおもしろいよ。よい生き方をさせたいと思う女の子があつて、配偶を求めらるなら、あの院に愛されることを願うのがほんとうのようだ。人生は短いだから、生きがいのあることをだれも願うべきだよ。私が女であれば兄弟であつても兄弟以上の接近もすることだろう。真実若い時に私はそう思ったのだ。そうなのだから女が誘惑にかかるのは道理で、また自然なことなのだよ」

院は御心みこころの中に尚侍なしののみの事件を思い出し、おいでになつた。

この中の最も重立つた一人の乳母めのとの兄で、左中弁なにかしの某は六条院の恩顧を受けて、親しくお出入りしていたが、一方ではこの姫宮を尊敬する伺候者の一人であつた。この人の来た時に妹である乳母すざが朱雀院の御希望を語つた。

「この話をあなたから六条院様に機会おしがありましたら申し上げます。てください。内親王様は一生御独身が原則のようですが、婿君としてどんな場合にもお力の借りられる方をお持ちになるのは、御独身の宮様よりも頼もしく思われます。院のほかには誠意のあるお世話をお受けになる方をお持ちあそばさない宮様ですからね。私がどんなにお愛し申し上げていまして、それは限りのあることしかできないのですもの。それに私一人がお付きしているのでなくておおぜいの人がいるのですから、だれがいつどんな不心得をして失礼な媒介役を勤めるかもしれませぬ。そしてどんな御不幸なことになるかわかりませぬ。院がおいでになりますうちにこの問題が決まりますれば私は安心ができてどんなに楽だろうと思ひます。尊貴な方でも女の運命は予想することができませんから不安で不安でなりません。

幾人もおいでになる姫宮の中で特別に御秘蔵にあそばすことで、また嫉妬をお受けになることにもなりますから、私は気が気でもありません」

「お話はしますがよい結果が得られることかどうか。院は御恋愛の上で飽きやすいとか、気がよく変わるとかいうことはない方で、珍しい篤実性を持っておられます。仮にも愛人になすつた人は、お気に入った人らぬにかかわらず皆それ相応に居場所を作っておあげになつて、幾人も御夫人、愛姫というものを持っておいでになるというものの、煎じつめれば愛しておいでになる夫人はお一人だけということになる方がおいでになるのだから、そのために同じ院内においでになるというだけで寂しい思いをして暮らしておられる方も多いようですからね。もし御縁があつて姫宮があちらへお移りになつた場合には、紫の女王様がどんなにすぐれた奥様でも、これに勝ちになることは不可能でしょうとは思いますが、あるいは必ずしもそういかない場合も想像されます。しかしまた院が、自分はすべての幸福に恵まれているが、熱愛では人の批難を受けもしているし、私自身にも不満足を感じる点もあると何かの場合にお洩らしになるが、私らとしてもそう思われる節がないでもない。夫人がたといつても今までの方はただの女性で、内親王がたが一人も混じつておいでになりませんからね。私らとしては院の御身分として姫宮様級の御夫人があつてしかるべきだと思われまますからね。今度のことが実現されたらどんなにすばらしい御夫妻だろう」

と左中弁は言うのであつた。乳母は何かのことを朱雀院へ申し上げたついでに、自分が試みに前日兄の左中弁へした話を申し上げて、

「兄が申しますのには院は必ず御承諾あそばされることと思う。六条院は年来の御希望がかなうことと思召すおほしめに違いない御縁談であるから、こちらのお許しさえあればお伝えいたしましょうと申しました。どういたしたらよろしゅうございましょう。御愛人にはそれぞれの御身分に応じた御待遇をあそばしまして、思いやりの深いお方様と承りますけれど、普通の女の方でもほかに愛妻のある方と結婚をすることを幸福とはいたさないのでございますから、御不快な思いをあそばすことがないとも思われません。姫宮様をいただきたくと望む人はほかにもたくさんあるのでございますから、よくお考えあそばしましてお決めなさいますのがよろしゅうございましょう。宮様は最も尊貴な御身分でいらっしやいます、ただ今の世の中ではりりしく独身生活をりっぱにしていく婦人がたもありますのに、三の宮様はどうもその点で御安心申し上げられない強さが欠けておいてあそばすのですから、私たち侍女どもは一所懸命の御奉仕をいたしましても、それはたいした宮様のお力になることでもございませんから、世間の女の例によつて、変則な独身でお立ちになろうとあそばさないで、御結婚をあそばすほうが御安心のおできになると存じます。特別な御後見をなさいます方のないのはお心細いことでないかと存じ上げます」

と、自身の意見も述べた。

「私も宮のことをいろいろと考えて、内親王は神聖なものとしておきたくも思うし、また高い身分の者も結婚したがために、内輪のことも世評に上るようになるし、しないでよいはずの煩悶はんもんで自身を苦しめることにもなるのだからと否定に傾きもするのだが、また親兄弟にも別れたあとで、女が独身でいては、昔の時代の人は神聖なも

のは神聖なものとしておいたが、近代の男はそれを無視して強要的な結婚を行なうのに躊躇しない悪徳を平気でするようになったために、いろんな噂の種もまくのだがね。昨日までは尊貴な親の娘として尊敬されていた人が、つまらぬ男にだまされて浮き名を立て、あつて者は死んだ親の名譽をそこなうという類の話は幾つもあるから、姫宮であつても女であれば同じことで、宿命などということにはわからぬものだから、私が配偶者を選ばずに捨てておくことは不安だとも一方では考えられる。良くなつても悪くなつても、それは自発的に決めたことでなくて親や兄が選んだ結婚をしておれば、悪いことがあとにあつてもその人の責任にはならないで済むし、恋愛結婚のあとが良くなれば、ああしたことの結果も良くなるものであるとは見えても、その初めに噂の広まつたころには、親の同意も得ず、家族も許さないのに恋愛をして良人を持つたということは女の第一の恥と聞こえるからね。それは普通の家の娘の場合でも軽佻に思われることに違いない。また自分は自分の身体の持ち主であるのに、それを暴力で蹂躪された結果、意外な男の妻になるようなことも軽率で、その女を侮蔑したくなるが、姫宮も元来弱い、隙の見える性質ではないかと私は心配しているのだから、侍女どもが勝手なことを宮に押しつけるようなことをさせてはならないよ。そんな噂が世間へ聞こえては恥ずかしいからね」

などとお別れになったあとのことまでもお案じになつて仰せられることで、乳母たち、女房たちは責任の重さを苦勞に思った。

「もう少し大人になられるまで私がついていたいと、今まで念じ続けてきたものだが、このごろの健康状態でそうしては、信仰生活にはいることもできずに死んでしまうのではないかという気がさ

れるので、やむをえず出家を断行することにした。六条院に託しておくのが、なんといつてもいちばん安心のできることだと思う。幾人も侍している夫人はあつてもそれをいちいち念頭に置いてゆかねばならぬことでもなし、ただ主観的にこちらさえ寛大な心を持って臨めばよいことなのだ。はなやかな時代も過ぎて平淡な心境にあられるあの院に三の宮の良人となつていただくことは最も安心なことだと私は認めている。そのほかに適当な候補者はないよ。兵部卿の宮は風采も人物もひととおりはりっぱな人だがね、それに私としては兄弟のことだから他人のようにひどい批評はできないものの、とにかくあの人はあまりに柔弱で、芸術家に傾き過ぎて、世間の信望が少し薄いようだ。そんなふうな人は良人として頼もしくは思われない。また大納言が臣礼をもつて奉仕しようというのは親切な男とすべきだが、さてそれに許してやる気にはちよつとなれない。やはり普通の男の妻には与えにくい気がする。昔の時代にも帝王の婿にはある一事の傑出した人物が選ばれたようだ。ただ都合のよいとしようなことで人選するのは恥ずかしいことだ。右衛門督がやはりその希望を持っているということなしのがみを尚侍が言っていたが、あれだけはすぐれた人物だから、官位がもう少し進んでいたら私も大いに考慮するが、まだ今のところでは地位が不十分だ。理想が高くてだれとも結婚をせずはまだ独身でいて思い上がった精神が実によい。学問も相当なものだし、廟堂みやうどうに立って仕事のできる点で将来も有望だが、私には愛女の婿はそれでもないという心がある。相当に濃厚にある」

こんなふうに仰せられて院はお心を悩ませておいでになった。多い候補者の中の婿選むすまへびを困難くわんなんに思召おもほす女三にょさんの宮みや以外の姉宮がたに求

婚をする人はさてないのである。院がどんなにその一方ひとかたをお愛しになつて、よい配偶をお決めになることに専心しておいでになるかということが、院内から自然に外へ聞こえ、自身を候補に擬しているものが多いのである。太政大臣も長男の右衛門督がまだ独身でいて、妻は内親王でなければ結婚はせぬと思うふうであるから、御降嫁が決定してだれもお許しを願つて出た時に、院の御婿に長男が選ばれたなら、どんなに自身のためにも光栄であるかしれないと考え、院の御一寵ちよつぎ姫の尚侍の所へは、その人の姉である夫人から言わせて運動もし、一方では直接お話も申し上げて懇請もしていた。兵部卿の宮は左大将の夫人に失恋をあそばされたのであるから、その夫婦に対してもりつぱでない結婚はできないようにお思いになつて、夫人を選んでおいでになる場合であつたから、お心の動かないわけではない。非常に熱心な求婚者で宮はおありになつた。藤大納言とうは長い間院の別当をしていて、親しく奉仕して来た人であつたから、院が御寺みでらへおはいりになれば有力な保護者を失いたてまつることになるのを、内親王と結婚をして今後も地位の保証を得たいという功利的な考えからしきりにお許しを乞こうているのであつた。源中納言げんも院の御婿の候補者が続出するのを見ては、この人には間接でなく、あれほどにも明瞭めいりょうに御意のあるところをお見せになつたのであるから、中間によい人を得て姫宮をお望み申し上げた場合には冷淡な態度を院はおとりになるまいという自信もあつて、心がときめきもするものであるが、自身を信頼している妻を見ては、過ぎ去つたあの苦しい境地に置かれて、もう絶縁をしてもよかつた時代にさえなお自分はこの人以外の女を対象として考えようとせせず通して来て、二度目の結婚を今さらすればにわかには妻は物思ひをすることにならうし、

一方が尊貴な人であれば自分の行動は束縛されて、思っているもこちらを同じに扱うことができずに、左にも右にも不平があれば自分は苦しいことであろうという気になって、元来が多情な人ではないのであるから、動く心をしいておさえて何とも表面へは出さないのであるが、さすがに姫宮の婚約が他人と成り立つことは願われないで、この人のためには一つの心を離れぬ問題にはなった。東宮もこの婿選びのことをお聞きになって、

「目前のことよりも、そうしたことは後世への手本にもなることですから、よくお考えになった上で人を選定あそばされるがよろしく思われます。どんなにりっぱな人物でも普通人は普通人なのですから、結局は六条院へお託しになるのが最善のことと考えます」

とこれは表だった使いで進言されたのではないが、ある人をもつて申された。

「もつともな意見だ。非常によい忠告だ」

院はこうお言いになって、いよいよその心におなりになり、まず三の宮のお乳母めのとの兄である左中弁から六条院へあらましの話をおさせになった。女三の宮の結婚問題で院が御心痛をしておいでになることは以前から聞いておいでになったから、

「御同情する。お気の毒に存じ上げている。しかし院が御生命の不安をお感じになったとすれば、私だって同じことなのだからね。どれだけあとへお残りする自信をもって御後事がお引き受けできると思つかね。御兄が先で、弟があとというそれも決まっていもせぬことを仮にそうとして私が何年かでも生き残っている間は、どの宮だつて血縁のある方なのだから私はできるだけの御保護はするつもりなのに、しかも特別お心おほしめがかりに思召す方にはまた特別のお世話も

するが、しかしそれだつて無常の人生なのだから、自分の生命いのちが受け合われぬ

とお言いになつて、また、

「まして私の妻にしておくことはどんなによくないことかしれない。私が院に続いて亡なくなる時に、どんなにまたそれが私の気がかりになることか。私だけのことを考えても執着の残ること、なすべきことでないと思われる。私の子の中納言などは年も若くて軽い身分であつても、将来のある人物だからね。国家の柱石となる可能性を持つてゐるのだから、中納言などへ御降嫁になつてもそれが調和のとれないことは思われぬ。しかしあまりにまじめ過ぎる男で、一人の妻と円満に家庭を持つてゐるといふことで院は御遠慮になるだらうか」

こうもお言いになつて、御自身の結婚問題としてお取り上げにならないのを弁は見えて、朱雀院すずくのほうでは堅い御決意で申し入れをさせておいでになるのであるがと残念にも思い、朱雀院をお気の毒にも思つて、あちらの院がこのことの成り立つのを熱望しておいでなる事情をくわしく申し上げると、さすがに院は微笑をされて、

「非常な御愛子なのだらうから、いろいろと将来を御心配になつてのお考えだらう。宮中へお上げになればいいではないか。りっぱな後宮のかたがたがすでにおられるからといって、望みのないもののように思われるのは誤りだよ。故院の時に皇太后が東宮時代からの最初の女御にょごで、たいした勢力を持つておいでになつたが、それがずつとのちにお上がりになつた入道の宮様にその当時はけおとされておしまいになつた例もあるのだからね。その宮の母君の女御は入道の宮のお妹さんだつた。御容貌なども入道の宮に続いてお美しいと

いう評判のあつた方だから、御両親のどちらに似てもこの宮は平凡な美人ではおありになるまい」

などと言つておいでになつた。好奇心は持つておいでになるらしいのである。

歳暮に近くなつた。朱雀院では院の御病氣がそのまま続いてお悪いたために、姫宮の装着もぎの式をお急ぎになり、準備をいろいろとさせておいでになつたが、過去にも未来にもないような華美なお儀式になる模様で、だれもだれも騒ぎ立つていた。式場は院の栢殿かえどのの西向きのお座敷で御帳おんちやう、几帳きちやうその他に用いられた物も日本の織物はいつさいお使いにならず唐の后きんぎの居室の飾りを模して、派手はでで、りっぱで、輝くようにでき上がつていた。御腰一結ゆの役を太政大臣へ前から依頼しておありになつたが、もつたいぶつたこの人は氣は進まないままで、院のお言葉には昔からそむくことのなかつたほど好意をお示しする用意は常に持つて、御辞退ができずに参列したのであつた。そのほかの左右二大臣、高官らも万障を排し病氣もしいて忍ぶまでにして座に加わつたものである。親王様はお八方来ておいでになつた。いうまでもなく殿上人の数は多かつた。宮中の奉仕をする者も東宮の御殿へお勤めする者も残らず集まつたのであつて、盛大なお儀式と見えた。やがて出家をあそばされようとする院の最後のお催し事と見ておいでになつて、帝も東宮も御同情になり宮中の納殿おさめどのの支那渡来しなの物を多く御寄贈になつたのであつた。六条院からも多くの御贈り物があつた。それは来会者へ纏頭てんとうに出される衣服類、主寶の大臣への贈り物の品々等である。中宮からも姫宮のお装束、櫛くしの箱などを特に華麗に調製おさせになつて贈られた。院が昔このお后じゅだいの入内の時お贈りになつた髪上げくしあの用具に新しく加工され、し

かももとの形を失わせずに見せたものが添えてあつた。中宮一権亮ごんのすけは院の殿上へも出仕する人であつたから、それを使いにあそばして、姫宮のほうへ持参するように命ぜられたのであるが、次のようなお歌が中にあつた。

「#ここから2字下げ」

さしながら昔を今につたふれば玉の小櫛をくしぞ神さびにける

「#ここで字下げ終わり」

これを御覧になつた院は身にしむ思いをあそばされたはずである。縁起が悪くもないであろうと姫宮へお譲りになつた髪かみの具は珍重すべきものであると思召されて、青春の日の御思おもひい出にはお触れにならず、お悦よろこびの意味だけをお返事にあそばされて、

「#ここから2字下げ」

さしつぎに見るものにもが万代よろづよをつげの小櫛をくしも神さぶるまで

「#ここで字下げ終わり」

とお書きになつた。

御病気は決して御軽快になつていなかつたのを、無理あそばして御挙行になつた姫宮のお装着おしょうじやうの式から三日目に院は御髪みくしをお下おろしになつたのであつた。普通の家でも主人がいよいよ出家をするといふ時の家族の悲しみは大きなものであるのに、院の御ためには悲しみ歎なげく多くの後宮の人があつた。尚侍はじつとおそばを離れずなげに歎なげきに沈んでいるのを、院はなだめかねておいでになつた。

「子に対する愛は限度のあるものだが、あなたのこんなに悲しむのを見ては私はもう堪えられなく苦しい心になる」

と仰せになって、御心は冷静でありえなくおなりになるのであるが、じつと堪えて脇息によりかかっておいでになった。延暦寺の座主のほかに戒師を勤める僧が三人参っていて、法服に召し替えられる時、この世と絶縁をあそばされる儀式の時、それは皆悲しいきわみのことであつた。すでに恩愛の感情から超越している僧たちでさえとどめがたい涙が流れたのであるから、まして姫宮たち、女御、更衣、その他院内のあらゆる男女は上から下まで嗚咽の声をたてないでいられるものはない、こうした人間の声は聞いていずに、出家をすればすぐに寺へお移りになるはずの、以前の御計画をお変えになつたことを院は残念に思召して、皆女三の宮へ引かれる心がこうさせたのであるとかたわらの者へ仰せられた。宮中をはじめとしてお見舞いの使いの多く参つたことは言うまでもない。

六条院は朱雀院の御病気が少しおよろしい報せをお得になつて御自身で訪問あそばされた。宮廷から封地をはじめとして太上天皇と少しも変わりのない御待遇は受けておいでになるのであるが、正式の太上天皇として六条院は少しもおふるまいにならないのである。世人のささげている尊敬の意も信頼の心も並み並みではないのであるが、外出の儀式なども簡単にあそばして、たいそうでない車に召され、お供の高官などは車で従つて参つた。朱雀院法皇はこの御訪問を非常にお喜びになつて、御病苦も忍ぶようにあそばされて御面会になつた。形式にはかかわらずに御病室へ六条院の今一つの座をお設けになつて招ぜられたのである。御髪をお剃り捨てになつた御兄の院を御覧になつた時、すべての世界が暗くなつたように思召さ

れて、悲歎ひたんのとめようもない。ためらうことなくすぐにお言葉が出た。

「故院がお崩れかくになりましたところから、人生の無常が深く私にも思われまして、出家の願いを起こしながらも心弱く何かのことに次々引きとめられておりまして、ついにあなた様が先にこの姿をあそばすまでになつてしまいました。自分はなんというふがいなさであるうと恥ずかしくてなりません。一身だけでは何でもなく出離しゅじの決心はつくのでございますが、周囲を顧慮いたします点で実行はなかなかできないことでございます」

と、お言いになつて、慰めえないお悲しみを覚えておいでになるふうであつた。朱雀院すざくも御病氣であつて心細いお気持ちもあそばされる時であつたから、冷静なふうなどはお作りになることができずにしおしおとした御様子をお見せになり、昔の話、今話を弱々しい声であそばすのであつたが、

「今日か、明日かと思われるような重態でいて、しかも生き続けていることに油断をして、希望の出家も遂げないで亡なくなるようなことがあつてはと奮発ふんぱつをして実行したのですよ。こうなつても生命いのちがなければしたい仏勤めもできないでしょうが、まず仮にも一つの線を出ておいて、はげしいお勤めはできないでも念仏だけでもしておきたいと思ひます。私のような者が今日生きているということはこの志だけは遂げたいという望みに燃えていたのを仏が憐あわれんでくださったのだと自分でもわかっているのに、まだお勤めらしいこともしていないのを仏に相済まなく思ひます」

御出家についての感想をこうお述べあそばしたのに続いて、

「女の子を幾人も残して行くことが気がかりです。その中で母も添

っていない子で、だれに託しておけばよいかわからぬような子のために最も私は苦悶くもんしています」

と、仰せになった。正面からその問題をお出しにもならない御様子をお気の毒に六条院は思召おぼしめされた。お心の中でもその宮についていささかの好奇心も動いているのであるから、冷ややかにこのお話を聞き流しておしまいになることができないのであった。

「ごもつともです。普通の家の娘以上に内親王のお後ろだてのないのは心細いものでございます。ごりつばな儲君ちよくんとして天下の輿望よぼうを負うておいでになる東宮もおいでになるのでございますから、あなた様から特にお心がかかりに思召す方のことをお話にさえあそばされておけば、一事でもおろそかにあそばさないはずで、何も将来のことをそう御心配になることはなかるうと申しますものの、即位をなさいました場合にも天子は公の君ですから政まつじはお心のままになりましても、個人として女の御兄弟に親身のお世話をなされ、内親王が特別な御庇護をお受けになることはむずかしいでしょう。女の方のためにはやはり御結婚をなすつて、離れることのできない関係による男の助力をお得になるのが安全な道と思われませんが、御信仰にもさわるほどの御心配が残るのでございましたら、ひそかに婿君を御選定しておかれましてはと存じます」

「私もそうは思うのですが、それもまたなかなか困難なことですよ。昔の例を思ってもその時の天子の内親王がたにも配偶者をお選びになつて結婚をおさせになることも多かったですから、まして私のように出家までもする凋落ちやくらくに傾いた者の子の配偶者はむずかしい。資格をしいて言いませんが、またどうでもよいとすべてを言ってしまうこともできなくて煩悶はんもんばかりを多くして、病気はいよいよ重る

ばかりだし、取り返せぬ月日もどんたつていくのですから気が
 気でもない。お気の毒な頼みですが、幼い内親王を一人、特別な御
 好意で預かってくださつて、だれでもあなたの鑑識にかなつた人と
 縁組みをさせていただきたいと私はそのことをお話ししたかつたの
 です。権中納言などの独身時代にその話を持ち出せばよかつたなど
 と思うのです。太政大臣に先を越されてうらやましく思われます」
 と朱雀院は仰せられた。

「中納言はまじめで忠良な良人になりうるでしょうが、まだ位など
 も足りない若さですから、広く思いやりのある姫宮の御補佐として
 は役だちませんでしよう。失礼でございますが、私が深く愛してお
 世話を申し上げますれば、あなた様のお手もとにおられますのとた
 いした変化もなく平和なお気持ちでお暮らしになることができるで
 あらうと存じますが、ただそれはこの年齢の私でございますから、
 中途でお別れすることになるうという懸念が大きいのでございます」

こうお言いになつて、六条院は女三の宮との御結婚をお引き受け
 になつたのであつた。

夜になつたので御主人の院付きの高官も六条院に供奉して参つた
 高官たちにも御一饗応の膳が出た。正式なものでなくお料理は精進
 物の風流な趣のあるもので、席にはお居間が用いられた。朱雀院の
 は塗り物でない浅香の懸盤の上で、鉢へ御飯を盛る仏家の式のもの
 であつた。こうした昔に変わる光景に列席者は涙をこぼした。身に
 しむ気分の出た歌も人々によつて詠まれたのであつたが省略してお
 く。夜がふけてから六条院はお帰りになつたのである。それぞれ等
 差のある纏頭を供奉の人々はいただいた。別当大納言はお送りをし

て六条院へまで来た。

朱雀院は雪の降っていたこの日に起きておいでになったために、また風邪かぜをお引き添えになったのであるが、女三の宮の婚約が成り立ったことで御安心をあそばされた。

六条院も新しい御婚約についての責任感と、紫夫人との夫婦生活の形式が改められねばならぬことをお思いになる苦痛とがお心でいっしょになって煩悶はんもんをしておいでのになった。朱雀院がそうした考えを持っておいでになるといふことは女王にょおうの耳にもはいつていたのであるが、そんなことにもなるまい、前齋院にあれほど恋はしておられたがしいて結婚も院はなさらなかったのであるからなどと思つて、そうした問題のありなしも問わずにいて、疑つていないのを御覧になると、院は心苦しくて、何と思つてあるう、自分のこの人に対する愛は少しも変わらないばかりでなく、そういうことになればいよいよ深くなるであろうが、その見きわめがつくまでに、この人は疑つて自分自身を苦しめることであるうとお思いになると、お心が静かでありえない。今日になつてはもう二人の間に隔てというものは何一つ残さないことに馴なれた御夫妻であつたから、この話をすぐに話さずにおいでのになるのも院は苦痛にされながらその夜はお寝やすみになつた。

翌日はなお雪が降つて空も身にしむ色をしていた。六条院は紫の女王と来し方のこと、未来のことをしみじみと話しておいでのになった。

「院の御病気がお悪くて衰弱しておいでのなるのをお見舞いに上がつて、いろいろと身にしむことが多かつた。女三の宮のことでいまだに御心配をしておられて、私へこんなことを仰せられた」

院はその方を託したいと朱雀院の仰せられた話をくわしくあそばされた。

「あまりにお気の毒なので御辞退ができなかったのだが、これをまた世間は大仰に吹聴をするだろうね。私はもう今はそうした若い人と新しく結婚するような興味はなくなっているのだから、最初人を介してのお話の時は口実を設けてお断わり申していたのだが、直接お目にかかった際に、御親心というものがあまりに濃厚に見えて、冷淡に辞退をしてしまうことができなかつたのですよ。郊外の寺へいよいよ院がおはいりになる時になってここへ迎えようと思う。味気ないこととあなたは思うでしょう。そのためにどんな苦しいことが一方に起こっても、私があなたを思うことは現在と少しも変わらないだろうから不快に思つてはいけませんよ。宮のためにはかえつて不幸なことだと私は知っているが、それも体面は作つてあげることを上手にしますよ。そして双方平和な心でいてもらえれば私はうれしいだろう」

などと言われるのであつた。ちよつとした恋愛問題を起こしても自身が侮辱されたように思う女王であつたから、どんな気がするだろうとあやぶみながら話されたのであつたが、夫人は非常に冷静なふうでいて、

「親としての御愛情から出ましたお頼みでございましょうね。私が不快になど思うわけはございません。あちらで私を失礼な女だともなぜ遠慮をしてどこへでも行つてしまわないかともおとがめにならなければ、私は安心しております。お母様の女御は私の叔母様でいらつしやるわけですから、その続き合いで私を大目に見てくださいるでしょうか」

と卑下した。

「あなたのそれほど寛大過ぎるのもなぜだろうとかえって私に不安の念が起こる。それはまあ冗談だが。まあそんなふうにも見てあなたが許していてくれて、一方にもその心得でいてもらって、平和が得られれば私はいよいよあなたを尊敬するだろう。中傷する者があって何を言おうともほんとうと思つてはいけませんよ。すべて噂というものは、だれがためにするところがあつて言い出すというのでもなく、良いことは言わずに、悪いことを言うのがおもしろくて言いつらさせるものだが、そんなことから意外な悲劇がかもされもするのだから、人の言葉に動揺を受けないで、ただなるがままになつていのがいいのです。まだ実現されもせぬうちから物思いをして私をむやみに恨むようなことをしないでくださいね」

こう院はおさとしになった。女王は言葉だけでなく心の中でも、こんなふうに天から降つてきたような話で、院としては御辞退のなされようもない問題に対して嫉妬はすまい、言えばとてそのとおりになるものでもなく、成り立つた話をお破りになることはないであろう、院のお心から発した恋でもないから、やめようもないのに、無益な物思いをしているような噂は立てられたくないと思つた。継母である式部卿の宮の夫人が始終自分を誑うようなことを言つておいでになつて、左大将の結婚についても自分のせいでもあるように、曲がった恨みをかけておいでになるのであるから、この話を聞いた時に、誑いが成就したように思うことであろうなどと、穏やかな性質の夫人もこれくらいのごことは心の蔭では思われたのであつた。今になつてはもう幸福であることを疑わなかつた自分であつた。思ひ上がつて暮らした自分が今後はどんな屈辱に甘んじる女にならねば

ならぬかしれぬと紫の女王は愁いながらもおおようにしていた。

春になった。朱雀院では姫宮の六条院へおはいりになる準備がととのつた。今までの求婚者たちの失望したことは言うまでもない。帝も後宮にお入れになりたい思召しを伝えようとしておいでになったが、いよいよ今度のお話の決定したことを聞きし召されておやめになった。六条院はこの春で四十歳におなりになるのであったから、内廷からの賀宴を挙行させるべきであると、帝も春の初めから御心にかけてせられ、世間でも御賀を盛んにしたいと望む人の多いのを、院はお聞きになって、昔から御自身のことであつたいな式などをすることのおきらいな方だつたから話を片端から断わつておいでになった。

正月の二十三日は子の日であつたが、左大将の夫人から若菜の賀をささげたいという申し出があつた。少し前まではまったく秘密にして用意されていたことで、六条院が御辞退をあそばされる間がなかつたのであつた。目だたせないようにはしていたが、左大将家をもつてすることであつたから、玉鬘夫人の六条院へ出て来る際の従者の列などはたいしたものであつた。南の御殿の西の離れ座敷に賀をお受けになる院のお席が作られたのである。屏風も壁代の幕も皆新しい物で装らわれた。形式をたいそうにせず院の御座に椅子は立てなかつた。地敷きの織物が四十枚敷かれ、褥、脇息など今日の式場の装飾は皆左大将家からもたらした物であつて、趣味のよさできれいに整えられてあつた。螺鈿の置き棚二つへ院のお召し料の衣服箱四つを置いて、夏冬の装束、香壺、薬の箱、お硯、洗髪器、櫛の具の箱なども皆美術的な作品ばかりが選んであつた。御一挿頭の台は沈や紫檀の最上品が用いられ、飾りの金属も持ち色をいろいろに

使い分けてある上品な、そして派手はでなものであった。玉鬘夫人は芸術的な才能のある人で、工芸品を院のために新しく作りそろえたすぐれたものである。そのほかのことはきわだたせず質素に見せて実質のある賀宴をしたのであった。参列者を引見されるために客座敷へお出しになる時に玉鬘夫人と面会された。いろいろの過去の光景がお心に浮かんだことと思われる。院のお顔は若々しくおきれいで、四十の賀などは数え違いでないかと思われるほど艶えんで、賀を奉る夫人の養父でありになるとも思われぬのを見て、何年かを中に置いてお目にかかる玉鬘たまかすらの尚侍なしのかみは恥ずかしく思いながらも以前どおりに親しいお話をした。尚侍の幼児がかわいい顔をしていた。玉鬘夫人は続いて生まれた子供などをお目にかけるのをはばかりっていたが、良人おとこの左大将はこんな機会にでもお見せ申し上げておかねばお違あわせすることもできないからと言って、兄弟はほとんど同じほどの大きさで振り分け髪のうしに直衣のうしを着せられて来ていたのである。

「過ぎた年月のことというものは、自身の心には長い気などはしないもので、やはり昔のままの若々しい心が改められないのですが、こうした孫たちを見せてもらうことでにわかとに恥ずかしいまでに年齢しを考えさせられます。中納言にも子供ができてははずなのだが、うとい者に私をしているのかまだ見せませんよ。あなたがだれよりも先に数えてくださって年齢としの祝いをしてくださる子ねの日も、少し恨めしくないことはない。もう少し老いは忘れていたいのですがね」と、院は仰せられた。玉鬘もますますきれいになって、重味といようなものも添そってきてりっぱな貴婦人と見えた。

「#ここから2字下げ」

若葉さす野辺のへの小松をひきつれてもとの岩根を祈る今日かな

「#ここで字下げ終わり」

こう大人おとなびた御一挨拶あいさつをした。沈しんの木の四つの折敷おしきに若菜を形式的にだけ少し盛って出した。院は杯をお取りになって、

「#ここから2字下げ」

小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき

「#ここで字下げ終わり」

などとお歌いになった。高官たちは南の外座敷の席に着いた。式部卿の宮は参りにくく思召おぼしめしたのであるが、院から御招待をお受けになって、御一舅ごいしゅうでいらせられながら賀宴に出ないことは含むことでもあるようであるからお思いになり、ずっと時間をおくらせておいでになった。以前の婿の左大將が御養女の婿として得意な色を見せて、賀宴の主催者になっているのを御覧になる宮は、御不快なことであろうとも思われたが、御孫である左大將家の長男次男は紫夫人の甥おいとしても、主催者の子としても席上の用にいろいろと立ち働いていた。籠詰かこめの料理の付けられた枝が四十、折櫃おりびつに入れられた物が四十、それらを中納言をはじめとして御一親戚しんせきの若い役人たちが取り次いで御前へ持って出た。院の御前には沈しんの懸盤かけばんが四つ、優美な杯の台などがささげられた。朱雀院すざくがまだ御全快あそばさないので、この御宴席で専門の音楽者は呼ばれなかった。楽器類のことは玉鬘夫人の実父の太政大臣が引き受けて名高いものばかりが集

められてあつた。

「この世で六条院の賀宴のほかにも、高尚なもの集まってよい席と
いうものはない筈なのだ」

と言つて、大臣は当日の楽器を苦心して選んだ。それらで静かな
音楽の合奏があつた。和琴はこの大臣の秘蔵して来た物で、かつて
この名手が熱心に弾いた楽器は諸人がかき立てにくく思うようであ
つたから、かたく辞退していた右衛門督にぜひにと弾くことを院が
お求めになつたが、予想以上に巧みに名手の長男は弾いた。どう遣
伝があるものとしても、こうまで父の芸を継ぐことは困難なもので
あるがとだれも感動を隠せずにした。支那から伝わつた弾き方をす
る楽器はかえつて学びやすいが、和琴はただ清掻きだけで他の楽器
を統制していくものであるからむずかしい芸で、そしてまたおもし
ろいものなのである。右衛門督の爪音はよく響いた。一つのほうの
和琴は父の大臣が絃もゆるく、柱も低くおろして、余韻を重くして、
弾いていた。子息のははなやかに音がたつて、甘美な愛嬌があると
聞こえた。これほど上手であるという評判はなかつたのであるがと
親王がたも驚いておいでになつた。琴は兵部卿の宮があそばされた。
この琴は宮中の宜陽殿に納めておかれた御物であつて、どの時代に
も第一の名のあつた楽器であつたが、故院の御代の末ごろに御長皇
女の一品の宮が琴を好んでお弾きになつたので御下賜あそばされた
のを、今日の賀宴のために太政大臣が拝借してきたのである。この
楽器によつて御父帝の御時のこと、また御姉宮に賜わつた時のこと
が思召されて六条院はことさら身に沁んで音色に聞き入つておいで
になつた。兵部卿の宮も酔い泣きがとめられない御様子であつた。
そして院の御意をお伺いになつた上琴を御前へ移された。今夜の御

気分からお辞いなみになることはできずに院は珍しい曲を一つだけお弾きになった。そんなこともあつて大がかりな演奏ではないがおもしろい音楽の夜になったのである。階段きざしの所に声のよい若い殿上人たちの集められたのが、器楽のあとを歌曲に受け、「青柳」の歌われたところはもう塙なぐらに帰っていた驚おどろも驚おどろくほど派手はでなものになった。主催する人は別にあつた宴会ではあるが、院のほうでも纏頭の御用意があつて出された。

夜明けに尚侍は自邸へ帰るのであつた。院からのお贈り物があつた。

「私はもう世の中から離れた気にもなつて、勝手な生活をしていいますから、たつて行く月日もわからないのだが、こんなに年を数えてきてくださったことで、老いが急に來たような心細さが感ぜられます。おりおりはどんな老人になつたかとその時その時を見比べに來てください。老人でいながら自由に行動のできない窮屈な身の上とということにもかくもなつていいますから、自分の思うとおりに御訪問などができず、お目にかかる機会の少ないのを残念に思ひます」

などと院はお言いになつて、身にしむことも、恋しい日のこともお思いにならないのではないのに、玉鬘たまかすらがたまたま來ても早く去つて行くこととするのを物足らず思召すようであつた。玉鬘の尚侍も実父には肉親としての愛は持っているが、院のこまやかだつた御愛情に対しては、年月に添つて感謝の心が深くなるばかりであつた。今日の境遇の得られたのも院の恩恵であると思つていた。

二月の十幾日に朱雀院すざくの女三によさんの宮みやは六条院へおはいりになるのであつた。六条院でもその準備がされて、若菜の賀に使用された寢殿

の西の離れに帳台を立て、そこに属した一二の対の屋、渡殿^{わたどの}へかけて女房の部屋^{へや}も割り当てた華麗な設けができていた。宮中へはいる人の形式が取られて、朱雀院からもお道具類は運び込まれた。その夜の儀装の列ははなやかなものであった。供奉^{くぶさ}者には高官も多数に混じっていた。姫宮を主公として結婚をしたいと望んだ大納言も失敗した恨みの涙を飲みながらお付きして来た。お車の寄せられた所へ六条院が出てお行きになって、宮をお抱きおろしになったことなどは新例であった。天子でおいでのなるのではないから入内^{じゅたい}の式とも違い、親王夫人の入興^{にゅうきょう}とも違ったものである。

三日の間は御一鬮^{ごしゅう}の院のほうからも、また主人の院からも派手^{はで}な伺候者へのおもてなしがあった。紫の女王^{むらさきのじやう}もこうした雰囲^{ふんい}気の中にいては寂しい気のことであろうと思われた。夫人は静かにながめていながらも、院との間柄が不安なものになるうとは思わないのであるが、だれよりも愛される妻として動きのない地位をこれまで持った人も、若くて将来の長い内親王が競争者におなりになったのであるから、次第に自分が自分はずかしめていく気がしないでもない心を、おさえて、おおように姫宮の移っておいでのなる前の仕度^{した}なども院とごいっしょになってしたような可憐^{かれん}な態度に院は感激しておいでのになった。女三の宮はかねて話のあったようにまだきわめて小さくて、幼い人といってもあまりにまでお子供らしいのである。紫の女王を二条の院へお迎えになった時と院は思い比べて御覧になっても、その時の女王は才気が見えて、相手にしておもしろい少女^{おとめ}であったのに、これは単に子供らしいというのに尽きる方であったから、これもいいであろう、自尊心の多過ぎず出過ぎたことのできない点だけが安心であると、院はつとめて善意で見ようと

されながらも、あまりに言いがない新婦であるとお歎かれになった。

三日の間は続いてそちらへおいでになるのを、今日までそうしたことに馴れぬ女王であったから、忍ぼうとしても底から底から寂しさばかりが湧いてきた。新婚時代の新郎の衣服として宮のほうへおいでになる院のお召し物へ女房に命じて薫香をたきしめさせながら、自身は物思いにとらわれている様子が非常に美しく感ぜられた。何事があっても自分はもう一人の妻を持つべきではなかったのである。この問題だけを謝絶しきれずに締まりがなく受け入れた自分の弱さからこんな悲しい思いをすることにもなったと、院は御自身の心が恨めしくばかりおなりになって、涙ぐんで、

「もう一晩だけは世間並みの義理を私に立てさせてやると思っ、行くのを許してください。今日からあとに続けてあちらへばかり行くようなことをする私であったなら、私自身がまず自身を軽蔑するでしょうね。しかしまた院がどうお思いになることだから」

と、お言いになりながら煩悶をされる様子がお気の毒であった。夫人は少し微笑をして、

「それ御覧なさいませ。御自身のお心だってお決まりにならないのでしょう。ですもの、道理のあるのが強味ともいっておられませんか」

絶望的にこう女王に言われては、恥ずかしくさえ院はお思われになつて、頬杖を突きながらうつとりと横になつておいでになった。紫の女王は硯を引き寄せて無駄書きを始めていた。

「#ここから2字下げ」

目に近くうつれば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな

「#ここで字下げ終わり」

と書き、またそうした意味の古歌なども書かれていく紙を、院は手に取ってお読みになり夫人の気持ちをお憐あわれみになった。

「#ここから2字下げ」

命こそ絶ゆとも絶えぬ定めなき世の常ならぬ中の契りを

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌を書いて、急に立って行こうともされないのを見て、夫人が、

「おそくなつては済みませんことですよ」

と催促したのを機会に、柔らかな直衣のうしの、艶えんに薰香たきものの香をしませたものに着かえて院が出てお行きになるのを見ている女王の心は平静でありえまいと思われた。これまでにさらに新婦を得ようとされるらしい気けぶりはあつても、いよいよことが進行しそうな時に反省しておしまいになる院でおありになったから、ただもう何でもなく順調に幸福が続いていくとばかり信じていた末に、世間のものにも自分の位置をあやぶませるようなことが湧わいてきた。永久に不変なものなどはないこうしたこの世ではまたどんな運命に自分は遭遇するかもしれないと女王は思うようになった。表面にこの動揺した気持ちは見せないのであるが、女房たちも、

「意外なことになるものですね。ほかの奥様がたはおいでになつてもこちらの奥様の競争者などという自信を持つ方もなくて、御遠慮

をしていらつしやるから無事だったのですが、こんなふうはこの奥様をすら眼中にお置きあそばさないような方が出ていらつしつてはどうなることでしょうか。だれよりも優越性のある方に劣等者の役はお勤まりにはならないでしょう。そしてまたあちらから申せば、何でもないことに神経をおたかぶらせになるようなこともないとは言われませんかから、そこで苦しい争闘が起こって奥様は御苦勞をなさるでしょうね」

などと語つて歎なげいているのであつたが、少しも気にせぬふうで、機嫌きげんよく夫人は皆と話をして夜がふけるまで座敷に出ていたが、女房たちの中にあるそうした空気が外へ知れては醜みにくいように思つて言つた。

「院には何人も女性の女性が侍しておられるのだけれど、理想的な御配偶とお認めになるはなやかな身分の人はないとお思ひになつて、物足らず思召していらつしやつたのだから、宮様がおいでになつてこれで完全になつたのよ。私はまだ子供の気持ちになつていないと見えて、いっしょに遊んで楽しく暮らしたくばかり思つているのに、皆が私の気持ちを忖度そんたくして面倒な関係にしてしまわないかと心配よ。自分と同じほどの人とか、もっと下の人とかには、あの方が自分より多く愛されることは不愉快だというような気持ちは自然起こるものだけれど、あちらは高貴な方で、お気の毒な事情でこうしておいでになつたのだから、その方に悪くお思われしたくないと私は努めているのよ」

中將とか中務なかつかさとかいう女房は目を見合せて、

「あまりに思いやりがあまりになり過ぎるようね」

ともひそかに言つていた。この人たちは若いころに院の御愛人で

あつたが、須磨^{すま}へおいでになつた留守中から夫人付きになつていて、皆女王を愛していた。他の夫人の中には、どんなお気持ちかなさることでしょう、愛されない者のあきらめが平生からできている自分らとは違つておいでになつたのであるからという意味の慰問をする人もあるので、女王はそんな同情をされることがかえつて自分には苦痛になる。無常のこの世にいてそう夫婦愛に執着している自分でもないものと思つていた。あまりに長く寝ずにいるのも人が異様に思うであろうと我と心にとがめられて、帳台へはいると、女房は夜着を掛けてくれた。人から憐^{あわれ}まれておりに確かに自分は寂しい、自分の嘗^なめているものは苦^{にが}いほかの味のあるものではないと夫人は思つたが、須磨^{すま}へ源氏の君の行つたころを思い出して遠くに隔たつていようともし世界に生きておいでになることで心を慰めようとそのころはした、自分がどんなにみじめであるかは心で問題にせず源氏の君のせめて健在でいることだけを喜んだではないか、その時の悲しみがもとで源氏の君なり自分なりが死んでいたとしたら、それからのち今日までの幸福は享^うけられなかつたのであるともまた思い直されもするのであつた。外には風の吹いている夜の冷えて急には眠れない。近くに寝ている女房が寝返りの音を聞いて気をもむことがあるかもしれぬと思うことで、床の中でじつとしているのもまた女王に苦しいことであつた。一番一鶏^{どり}の声も身に沁^しんで聞かれた。恨んでばかりいるでもなかつたが、夫人のこんなに苦しんでいたことのおちらへ通じたのか、院は夫人の夢を御覧になつた。目がさめて胸騒ぎのあそばされる院は鶏の鳴くのを聞いておいでになつて、その声が終わるとすぐに宮の御殿をお出になるのであつたが、お若い宮であるために乳母たちが近くにやすんでいて、その人たち

が院の妻戸をあけて外へ出られるのをお見送りした。夜明け前のしばらくだけことさらに暗くなる時間で、わずかな雪の光で院のお姿がその人たちに見えるのである。院のお服から発散された香気がまだあとに濃く漂っているのに乳母たちは気づいて「春の夜の闇はあやなし梅の花」などとも古歌が思わず口を上りもした。院は所々にたまった雪の色も砂子の白さと差別のつきにくい庭をながめながら対のほうへ向いてお歩きになりながらなお「残れる雪」と口ずさんでおいでになった。対の格子をおたたきになったが、久しく夜明けの帰りなどをあそばされなかつたのであつたから、女房たちはくやししい気になってしばらく寝入ったふうをしていてやつとあとに格子をお上げた。

「長く外に待たされて、身体が冷え通る気がしたのも、それは私の心が済まぬとあなたを恐れる内部のせいで、女房に罪はなかつたのかもしいれない」

と、院はお言いになりながら、夫人の夜着を引きあけて御覧になると、少し涙で濡れている下の単衣の袖を隠そうとする様子が美しく心へお受け取られになった。しかも打ち解けぬものが夫人の心にあつて品よく艶な趣なのである。最高の貴女といつても完全にものとのわぬ憾みがあるのにと院は新婦の宮と紫の女王を心にくらべておいでになった。二人が来た道を振り返ってお話しになりながら、恨みの解けぬふうな夫人をなだめて翌日はずっとそばを離れずにおいでのになったあとでは、夜になつても宮のほうへお行きになれず手紙だけをお送りになった。

「#ここから1字下げ」

今暁の雪に健康をそこねて苦しい気がしますから、気楽な所で養生

をしようと思いません。

「#ここで字下げ終わり」

というのであった。乳母めのとの、

「そのとおりに申し上げました」

という言葉を使いが聞いて来た。平凡な返事であると院は思いになった。朱雀院すいよくがどうお思いになるかということが気がかりであるから、当分はあちらを立てるようにはしておきたいと院はお思いになっても、実行に伴う苦痛が堪えがたく、なんということであろうと悲しんでおいでになった。夫人も、

「あちらへ御同情心の欠けたことでございますよ」

と言いつつ自分の立場を苦しんでいた。次の日はこれまでのとおり自室でお目ざめになって、宮の御殿へ手紙をお書きになるのであった。晴れがましくは少しもお思いにならぬ相手ではあったが、筆を選んで白い紙へ、

「#ここから2字下げ」

中道を隔つるほどはなけれども心乱るる今朝けさのあは雪

「#ここで字下げ終わり」

と書いて、梅の枝へお付けになった。侍をお呼びになって、

「西の渡殿のほうから参って差し上げるように」

とお命じになった。そして院はそのまま縁に近い座敷で庭をながめておいでになった。白い服をお召しになって、梅の枝の残りを手にまさぐっておいでになるのである。仲間を待つ雪がほのかに白く残っている上に新しい雪も散っていた。若やかな声で驚うつくが近いとこ

るの紅梅の梢こすえで鳴くのがお耳にはいつて、「袖そでこそ匂にほへ」（折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに驚なぞ啼なく）と口ずさんで、花をお持ちになつた手を袖に引き入れながら、御簾みすを掲げて外を見ておいでになる姿は、ゆめにも院などという御位みくらいの方とは見えぬ若々しさである。寝殿から来るお返事が手間どるふうであつたから、院は居室いままのほうへおいでになつて夫人に梅の花をお見せになつた。

「花であればこれだけの香気かおりを持ちたいものです。桜の花にこの香かおりがあればその他の花は皆捨ててしまふでしょうね。こればかりがよくなつて」

「この花もただ今でこそ唯一の花で、梅はよいものだと思われのですよ。春の百花の盛りにほかのものと比較したらどうでしょうかしら」

などと夫人が言っている時に、宮のお返事が来た。紅あかい薄うす様ように包まれたお文ふみが目めにたつので院ははっとお思おもいになつた。幼稚な宮の手跡は当分女王に隠しておきたい。この人に隔て心はないがさげすむ思おもいをさせることがあつては宮の身分に対して済まないと思おもはる思おもいになるのであるが、隠しておしまひになることも夫人の不快がることであるうからと、半分は見せてもよいというようにおひらげになつた文ふみを、女王は横目に見ながら横たわつていた。

「#ここから2字下げ」

はかなくて上うへの空そらにぞ消えぬべき風に漂ふ春のあは雪

「#ここで字下げ終わり」

文字は實際幼稚なふうであつた。十五にもおなりになればこんな

ものではないはずであるがと目にとまらぬことでもなかったが、見ぬふりをしてしまった。他の女性のことであれば批評的な言葉も院は口にせられたであろうが御身分に敬意をお払いになって、

「あなたは安心していてよいとお思いなさいよ」

とだけ夫人に言っておいでになった。

今日は昼間に宮のほうへおいでになった。特にきれいに化粧をお施しになった院のお美しさに、この日はじめて近づいた女房は興奮していた。老いた女房などの中には、なんといつても幸福な奥様はあちらのお一方だけで、宮は御不快な目にもおあいになるのであると、こんなことを思う者もあった。姫宮は可憐で、たいそうなお居間の装飾などとは調和のとれぬ何でも無い無邪気な少女で、お召し物の中にうずもれておしまいになったような小柄な姿を持っておいでになるのである。格別恥ずかしがってもおいでにならない。人見知りをせぬ子供のようであつかいやすい気を院はお覚えになった。朱雀院は重い学問のほうは奥を究めておいでになると言われておいでにならないが、芸術的な趣味の豊かな方としてすぐれておいでになりながら、どうして御愛子をこう凡庸に思われるまでの女にお育てになったかと院は残念な気もあそばされたのであるが、御愛情が起こらないのでもなかった。院のお言いになるままになってなよなよとおとなしい。お返辞なども習っておありになることだけは子供らしく皆言っておしまいになって、自発的には何もおできにならぬらしい。昔の自分であれば厭気のさしてしまう相手であろうが、今日になっては完全なものは求めても得がたい、足らぬところを心で補って平凡なものに満足すべきであるという教訓を、多くの経験から得てしまった自分であるから、これをすら妻の一人と見ることが

できる。第三者は自分のことを好適な配偶を得たと見ることである
うとお考えになると、離れる日もなく見ておいでになった紫の女王
の価値が今になってよくわかりになる気がされて、御自身のお与
えになった教育の成功したことをお認めにならずにはおられなかつ
た。ただ一夜別れておいでになる翌朝の心はその人の恋しさに満た
され、しばらくして違いうる時間がもどかしく思われになって、
院の愛はその人へばかり傾いていった。なぜこんなにまで思うので
あろうかと院は御自身をお疑いになるほどであった。

朱雀院はそのうちに御寺へお移りになるのであって、このころは
御親心のこもったお手紙をたびたび六条院へつかわされた。姫宮の
ことをお頼みになるお言葉とともに、自分がどう思うかと心にお置
きになるようなことはないようにして、ともかくもお心にかけてい
てくださればよいという意味の仰せがあるのであった。そうは仰せ
られながらも御幼稚な宮がお気がかりでならぬ御様子が見えるお文
であった。紫夫人へもお手紙があった。

「#ここから1字下げ」

幼い娘が、何を理解することもまだできぬままでそちらへ行つてお
ります、邪気のないものとしてお許しになってお世話をおやきく
ださい。あなたには縁故がないわけでもないのですから。

「#ここから2字下げ」

そむきにしこの世に残る心こそ入る山みちの絆なりけれ

「#ここから1字下げ」

親の心の闇を隠そうともしませんでこの手紙を差し上げるのものはば

かり多く思われます。

「#ここで字下げ終わり」

というのであった。院も御覧になって、

「御同情すべきお手紙ですから、あなたからも丁寧にお返事を書いておあげなさい」

こうお言いになって、そのお使いへは女房を出して酒をお勧めになった。

「どう書いてよろしいのかわかりません。お返事がいたしにくうございます」

と女王は言っていたが、言葉を飾る必要のある場合のお返事でもなかつたから、ただ感じただけを、

「#ここから2字下げ」

そむく世のうしろめたくばさがたき絆ほだしを強しひてかけなはなれそ

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌にして書いた。女の装束ほそながに細長衣てんとうを添えた纏頭てんとうをお使いへ出した。女王の書いたお返事の字のりっぱであるのを院は御覧になつて、こんなにも物事の整つた夫人もある六条院へ、一人の夫人となつて幼稚な姫宮が行つておられることを心苦しく思召した。

御出家の際に悲しがつた女御にょじ、更衣こういは院が御寺みでらへお移りになることによつて、いよいよ散り散りにそれぞれの自邸へ帰るのであったが気の毒な人ばかりであった。尚侍なishのかみはお崩れかくになつた皇太后がお住みになつた二条の宮へはいつて住むことになつた。姫宮を心がかりに思召されたのに次いでは尚侍のことを院の帝は顧みがちにされた。

尼になりたい希望を前尚侍は持っていたが、この際それを実行するのは、人を慕って出家をすることで、悟った人のすることではないと院は御忠告をあそばして、ひたすら御自身の御寺の仏像の製作を急がせておいでになった。

六条院はこの臙月夜おぼろつきよの前尚侍と飽かぬ別れをあそばされたまま、今もその時に続いて長い恋をしておいでになり、どんな機会にまた逢うことができよう、今一度は逢って、その時の血のにじむほど苦しかった心をその人に告げたいと思召されるのであったが、双方とも世間の評のはばかられる身の上でもおありになって、女のためにも重い傷手いたでを負わせたあの騒動をお思いになると、積極的な御行動は取れないで院は忍んでおいでになったのであるが、朱雀院すざくともお別れして閑散な独身生活にはいつているそのこと自身がお心を惹いて、お逢いになりたくてならないのであった。あるまじいこととはお思いになりながら、ただ友情による手紙と見せて、忘れえぬ熱情をお洩もらしになることがたびたびになった。もう青春の男女のように、危険がる必要もないと思つては時々お返事も前尚侍は出した。昔に増してあらゆる点の完成されつつある跡の見える臙月夜の君の手紙がいつその魅力になって、昔の中納言の君の所へも、二人の逢う道を開かせようとする手紙を院は常に書いておいでになった。その女の兄である前一和泉守いずみのかみをお呼び寄せになつては、若い日へお歸りになったような相談をされた。

「取り次ぎをもつて話をするようなことでなく、そして直接といつても物越しでいいのだが話さねばならぬ用が私にあるのだ。尚侍の承諾を得るようになつてくれれば、私はそつと訪ねて行く。今はもう

絶対にそんなこともできない身の上になっている私が、そうしようと思うのだから、あちらでも秘密にしていただけだろうと安心はしている」

そのお話を中納言の君から聞いた時に、尚侍は、

「それは必要のない会見よ。私はもうあの時のような幼稚な心で人生を見ていない。昔から真実の欠けた愛しか私には持つてくたさならなかった方の御誘惑などに今さらかからない。お気の毒な御生活に法皇様をお置きして、あの方とする昔の話など私にはない。お言葉どおり秘密にはするとしても私自身の心に恥ずかしいことではないか」

と歎息たんそくして、なおそういうことは思いもよらぬことであるというお返事ばかりをしていた。すべてのものを無視して、苦しい中で愛し合った二人ではないか、出家をあそばされた院に対してやましいことではあるが、かつてなかったことではない関係なのだから、今になって清浄がっても昔の浮き名をあの人を取り返すことはできないのだと、こう院はお思いになって、にわかにかこの和泉守を案内役として朧月夜の尚侍の二条の宮を訪ねる決心を院はあそばされたのであった。夫人の女王へは、

「東の院にいる常陸ひたちの宮の女王がずっと病氣をしておられるのですが、ここの取り込みひたに紛れて見舞ってあげなかったのがかわいそうなのだが、昼間は人目に立ってよろしくないから夜になってから出かけてみようと思います。だれにも知らせないことだからそのつもりにしておくですよ」

と、お言いになって、院は外出の化粧におかかりになったが、ただ事とは思われなかった。平生はそんなにしてお行きになる所では

ないのであるから夫人は不審をいだいたが、思い合わされることもないではないのを、女三によさんの宮みやがおいでになってからは、以前のよう
に思うことをすぐに言う習慣も女王は改めていて、素知らぬふうを
作っているのであった。

この日は寝殿へもお行きにならないでただ手紙をお書きかわしに
なっただけである。熱心に薫香たきせのの香を袖そでにつけて、院は日の暮れる
のを待つておいでになった。そしてきわめて親しい人を四、五人だ
けおつれになり、昔の微行しゆぎあるまに用いられた簡単な網代車あじろぐへあまでお出かけに
なった。

六条院のおいでになったことが伝えられると、
「どうしてでしょう。私のお返事をどう聞き違えて申し上げたのだ
ろう」

尚侍は機嫌きげんを悪くしたが、

「いいかげんな口実を作りましてお帰しいたすことなどはもつたい
ないことでございますよう」

と中納言の君は言つて、無理な計らいまでして院を座敷へ御案内
してしまった。院は見舞いの挨拶あいさつなどをお取り次がせになったあと
で、

「ただここに近い所へまで出てくださつて、物越してもお話しくだ
さいませんか。今日はもう昔のような不都合なことをする心を持つ
ていませんから」

こう切に仰せられるので、尚侍はひどく歎息たんそくをしながら膝行いざつて出
た。だからこの人は軽率なのであると、満足を感じながらも院は批
評をしておいでになった。これは二人にとって絶えて久しい場面で
あった。遠い世の思い出が女の心によみがえらないことでもないの

である。東の対であった。東南の端の座敷に院はおいでになって、隣室の尚侍のいる所との間の襖からかみ子には懸金かねがねがしてあった。

「何だか若者としての御待遇を受けているようで、これでは心が落ち着かないではありませんか。あれからどれだけの年月、日は幾つたつということまでも忘れない私としては、あなたのこの冷たさが恨めしく思われてなりませんよ」

と、院はお恨みになった。夜はふけにふけてゆく。池の鴛鴦おしどりの声などが哀れに聞こえて、しめつぽく人けの少ない宮の中の空気が身にお感じられになり、人生はこんなに早く変わってしまうものかと昔の栄華の跡の邸やしきがお思われになると、女の心を動かそうとして嘘泣きをした平仲へいちやうではなくて真実の涙のこぼれるのをお覚えになった。昔に変わってあせらず老成なふうに恋を説きながら、

「これはいつまでもこのままにしておくことになるのですか」

と言って、襖子を引き動かしたまうのであった。

「#ここから2字下げ」

年月を中に隔てて逢坂あふさかのさもせきがたく落つる涙か

「#ここで字下げ終わり」

院がこうお言いになっても、

「#ここから2字下げ」

涙のみせきとめがたき清水しみづにて行き逢ふ道は早く絶えにき

「#ここで字下げ終わり」

というようなかげ離れた返辞を女はするにすぎなかつたが、昔を思つてはだれが原因になつてこの方は遠い国に漂泊さすらつておいでになつたか、一人で罪をお負いになつたこの方に、冷たい賢ないしのかみがつた女にだけなつて逢つていて済むだろうかと朧月夜おぼろつきよの尚侍ななしのかみの心は弱く傾いていった。もとから重厚な所の少ない性質のこの人は、源氏の君から離れていた年月の間昔の軽率を後悔していたし、清算のできた気にもなつていたのであるが、昔のとおりなような夜が眼前に現われきて、その時と今の間にあつた時がにわかには短縮された気をするままに、初めの態度は取り続けられなくなつた。

やはり最も艶えんな貴女きじよとしてなお若やかな尚侍を院は御覽になることができたのであつた。世に対し、人に対してはばかり煩悶はんもんが見えて歎息たんそくをしがちな尚侍を、今初めて得た恋人よりも珍しくお思いになり、海のような愛の湧わくのを院はお覚えになつた。夜の明けていくのが惜しまれて院は帰つて行く気が起こらない。朝ぼらけの艶な空からは小鳥の声がうららかに聞こえてきた。花は皆散つた春の暮れで、浅緑にかすんだ庭の木立ちをおながめになつて、この家で昔一藤花とうかの宴があつたのはちよつどこのころのことであつたと院はみずからお言いになつたことから、昔と今の間長いことも考えられ、青春の日が恋しく、現在のことが身に沁しんでお思われになつた。中納言の君がお見送りをするために妻戸をあけてすわっている所へ、いったん外へおいでになつた院が帰つて来られて、

「この藤ふじと私は深い因縁のある気がする。どんなにこの花は私の心を惹ひくか知っていますか。私はここを去つて行くことができないよ」

こうお私語ひまごになつたままで、なお花をながめて立ち去ろうとはな

されないのであった。山から出た日はなやかな光が院のお姿にさして目もくらむほど美しい。この昔にもまさった御一風采を長く見ることのできなかつた尚侍が見て、心の動いていかないわけはないのである。過失のあつたあとでは後宮に侍してはいても、表だつた後の位には上れない運命を負つた自分のために、姉君の皇太后はどんなに御苦勞をなすつたことか、あの事件を起こして永久にぬぐえない悪名までも取るにいたつた因縁の深い源氏の君であるなどとも尚侍は思っていた。名残の尽きぬ会見はこれきりのことにさせたくないことではあるが、今日の六条院が恋の微行などを続いて軽々しくあそばされるものでもないと思われた。院はこの邸における人目も恐ろしく思召されたし、日が昇つていくのにせきたてられるお気持ちも覚えておいでになつた。廊の戸口の下へ車が着けられて、供の人たちもひそかなお促し声もたてた。院は庭にいた者に長くしだれた藤の花を一枝お折らせになつた。

「#ここから2字下げ」

沈みしも忘れぬものを懲りずまに身も投げつべき宿の藤波

「#ここで字下げ終わり」

と歌いながら院はお悩ましいふうで戸口によりかかつておいでになるのを、中納言の君はお気の毒に思っていた。尚侍は再び作られた関係を恥じて思い乱れているのであつたが、やはり恋しく思う心はどうすることもできないのである。

「#ここから2字下げ」

身を投げん淵ふちもまことの淵ならで懸かけじやさらに懲りずまの波

「#ここで字下げ終わり」

と女は言った。青年がするような行動を院は御自身も肯定できなくお思いになるのであるが、女の情熱の冷却してはいないことがうれしくて、またの会合を遂げうるようによく語っておゆきになった。昔も多くの中のすぐれた志で愛しておいでになりながら、やむなくお別れになった仲に、この一夜があつたあとのお心はその人へ強くお惹ひかれにならぬわけもない。

院は非常に静かに忍んで自室へおはいりになった。こうした女の所からのお帰り姿を見て、相手は尚侍あたりであろうと、夫人には想像されるのであつたが、気のつかぬふうをしていた。かえつて妬ねたみを表へ出すことよりもこれを院は苦しくお思いになって、なぜこつまで妻を冷淡にあつかつたのであろうと歎息がされ、以前にまさつた熱情をもつて永久に変わらぬ愛を語ろうとあそばされるのに言葉を尽くしておいでになった。尚侍との間に復活させた情事は洩もらすべき性質のものではないのであるが、昔のこともくわしく知つてゐる女王にょおうであつたから、今度のことも真実のことまではお言いにならなかつたが、

「物越しでやつと違つてもらつただけでは心が残つてならない。人目を上手じょうずに繕つてもう一度だけは違いたい人だ」

とくらいにお話しになった。女王は笑つて、

「お若返りにばかりなりますわね。昔を今にまた新しくお加えになつては、いよいよ私の影は薄くばかりなります」

と言いながらも、涙ぐんだ目をしているのが可憐かれんであつた。

「いつもそんなふうには、寂しそうにはばかりあなたがするから、私はたまらなく苦しくなる。もっと荒削りに、私を打つとか捻ひねるとかして懲らしてくれたらどうですか。あなたにそうした水くさい態度をとらせるようには暮らして来なかつたはずだが、妙にあなたは変わってしまったね」

などとも言つて、機嫌きげんをお取りになるうちには前夜の真相も打ちあけて話しておしまいになることになった。姫宮のほうへお出かけにならずに、夫人をなだめるのに終日かかつておいでになった。それを宮は何ともお思いにならないのであるが、乳母たちだけは不快がつていろいろと言つていた。嫉妬しつとをお持ちになる傾向が宮にもあれば院はまして苦しい立場になるのであるが、おっとりとした少女おとめの宮を、人形のように気楽にお扱いになることはできるのであった。

東宮へ上がつておいでになる桐壺きりつばの方は退出を長く東宮がお許しにならぬので、姫君時代の自由が恋しく思われる若い心にはこれを苦しくばかり思うのであった。夏ごろになつては健康もすぐれなくなつたのであるが、なおも帰るお許しがないので困つていた。これは妊娠であつたのである。まだ十四、五の小さい人であつたから、この徴候を見てだれもだれも危険がつた。やつとのことでお許しがつがつて帰邸することになった。女三の宮のおいでになる寝殿の東側になつた座敷のほうに桐壺の方の一時の住居すまいが設けられたのである。明石夫人あかしも共に六条院へ帰つた。光る未来のある桐壺の方の身に添つて進退する実母夫人は幸運に恵まれた人と見えた。紫夫人はそちらへ行つて桐壺の方に逢おうとして、

「このついでに中の戸を通りまして姫宮へ御一挨拶あいさつをいたしましよ

う。前からそう思っていたのですが機会がなかったのですもの。わざわざ何うのもきまりが悪かったのですが、こんな時だと自然なことに見えていいと思います」

と院へ御相談をした。院は微笑をされながら、

「結構ですよ。まだ子供なのですから、よくいろんなことを教えておあげなさい」

と御同意をあそばされた。宮様よりも明石夫人という聡明な女に逢うことで夫人は晴れがましく思い、髪も洗い、粧いに念を入れた女王の美はこれに準じてよい人もないであろうと思われた。

院は宮のほうへおいでになって、

「今日の夕方対のほうにいる人が淑景舎を訪ねに来るついでにここへも来て、あなたと御交際の道を開きたいように言っていましたから、お許しになって話してごらんなさい。善良な性質の人ですよ。まだ若々しくてあなたの遊び相手もできそうですよ」

とお語りになった。

「恥ずかしいでしょうね。どんなお話をすればいいのでしょうか」とおおように宮は言っておられる。

「人にする返辞は先方の話次第で出てくるものです。ただ好意を持つてお逢いにならないではいけませんよ」

院はこまごまと御注意をされた。院は御両妻の間が平和であるように祈っておいでになるのである。あまりにたあいのない子供らしさを紫の女王に発見されることは、御自身としても恥ずかしいことにお思になるのであるが、夫人が望んでいることをとめるのもよろしくないとお考えになったのである。

紫の女王は内親王である良人の一人の妻の所へ伺候することにな

った自分を憐あわれんだ。二十年一同どうせい棲した自分より上の夫人は六条院に
 あつてはならないのであるが、少女時代から養われて来たために、
 自分は軽侮してよいものと見られて、良人は高貴な新妻をお迎えし
 たものであるうと思つたと寂しかった。手習いに字を書く時も、棄婦
 の歌、閨怨けいえんの歌が多く筆に上ることによつて、自分はこうした物思
 いをしているのかとみずから驚く女王であつた。院は自室のほうへ
 お帰りになつた。あちらで女三の宮、桐壺きりつぼの方などを御覽になつて、
 それぞれ異なつた美貌みほつに目を楽しませておいでになつたあとで、始
 終見一馴なれておいでになる夫人の美から受ける刺激は弱いはずで、
 それに比べてきわだつ感じをお受けになることもなからうと思われ
 るが、なお第一の嬋妍せんけんたる美人はこれであると院はこの時一驚きょうたん歎し
 ておいでになつた。気高けだかさ、貴女きじよらしさが十分備わつた上にはなや
 かで明るく愛嬌あいきやうがあつて、艶えんな姿の盛りと見えた。去年より今年
 美しく昨日より今日が珍しく見えて、飽くことも見て倦うむことも知
 らぬ人であつた。どうしてこんな欠点なく生まれた人だらうかと
 院はお思いになつた。手習いに書いた紙を夫人が硯すずりの下へ隠したの
 を、院はお見つけになつて引き出してお読みになつた。字は専門家
 風に上手すうじゆなのではなく、貴女らしい美しさを多く含んだものである。
 「#ここから2字下げ」
 身に近く秋や来ぬらん見るままに青葉の山もうつろひにけり
 「#ここで字下げ終わり」

と書かれてある所へ院のお目はとまつた。

「#ここから2字下げ」

水鳥の青羽は色も変はらぬを萩はぎの下こそけしきことなれ

「#ここで字下げ終わり」

など横へ書き添えておいでになった。何かの場合ごとに今日の夫人の懊惱おうのうする心の端は見えても、さりげなくおさえている心持ちに院は感謝しておいでになるのであった。今夜はどちらとも離れていてよい暇な時であったから、朧月夜おぼろつきよの君の二条邸へ院は微行でお出かけになった。あるまじいことであるとお思い返しになろうとしても、おさえきれぬ気持ちがあったのである。

東宮の淑景舎しゆけいしゃの方は実母よりも紫夫人を慕っていた。美しく成人した継娘まますめを女王は真実の親に変わらぬ心で愛した。なつかしく語り合ったあとで中の戸をあけて、宮のお座敷へ行き、はじめて女三にょさんの宮みやに御面会した。ただ少女とお見えになるだけの宮様に女王は好感が持たれて、軽い気持ちにもなり年長の人らしく、保護者らしいふうにものを言って、宮の母君と自身の血の続きを語ろうとして、中納言の乳母めのとというのをそばへ呼んで言った。

「さかのぼって言いますとそうなのです。私の父の宮とお母様は御兄弟なのです。ですからもつたいないことですが親しく思召おしめしていただきたいと申し上げたかったのですが、機会がございませんでね。これからはお心安く思召して、私どもの住んでおりますほうへもお遊びにおいでくださいまして、気のつきませんことがございまして、御注意をいただけたらうれしく存じます」

中納言の乳母が、

「お母様にもお死に別れになりますし、院の陛下は御出家をあそばしますし、お一人ぼっちのお心細い宮様ですから、御親切なお言葉をいただきますことは、この上なく幸福に思召すかと存ぜられます。法皇様も宮様があなた様を御信頼あそばして御保護の願えますようにとの思召しがおありあそばすらしく存じ上げました。私どもそのお言葉を承つてまいつたのでございます」

などと言った。

「もつたいないお手紙をあちらからくださいました時から、どうかしてお力にならなければと心がけてはいるのでございますが、何と申しても私が賢くなくて」

とあたたかい気持ちを見せて、姉が年少の妹に対するふうで、宮のお気に入りの絵の話をしたり、雑遊ひなびはいつまでもやめられないものであるとかいうことを若やかに語っているのを、宮は御覧になって、院のお言葉のように、若々しい気立ての優しい人であると少女おとめらしいお心にお思いになり、打ち解けておしまいになった。

これ以来手紙が通うようになって、友情が二人の夫人の間に成長していった。書信とする遊び事もなされた。世間はこうした高貴な家庭の中のことを話題にしたがるもので、初めごろは、

「対の奥様はなんとといっても以前ほどの御一寵愛ごしゅんあいにあつていられなくなるであろう。少しは院の御情が薄らぐはずだ」

こんなふうにも言ったものであるが、実際は以前に増して院がお愛しになる様子が見えることで、またそれについて宮へ御同情を寄せるといふ口ぶりになされる噂うわさが伝えられたものであるが、こんなふう寝殿の宮も対の夫人も睦まじくなられたのであるからもう問

題にしようがないのであった。

十月に紫夫人は院の四十の賀のために嵯峨の御堂で薬師仏の供養をすることになった。たいそうになることは院がとめておいでになつたから、目だたせない準備をしたのであった。それでも仏像、経箱、経巻の包みなどのりっぱさは極楽も想像されるばかりである。

そうした最勝王経、金剛、般若、寿命経などの読まれる頼もしい賀の営みであつた。高官が多く参列した。御堂のあたりの嵯峨野の秋のながめの美しさに半分は心が惹かれて集まつた人なのであるが、その日は霜枯れの野原を通る馬や車を無数に見ることができた。盛んな誦経の申し込みが各夫人からもあつた。二十三日が仏事の最後の日で、六条院は狭いまでに夫人らが集まつて住んでいるため、女王には自身だけの家のように思われる二条の院で賀の饗宴を開くことにしてあつた。賀の席上で奉る院のお服類をはじめとして当日用の仕度はすべて紫夫人の手でととのえられているのであつたが、花散里夫人や、明石夫人なども分担したいと言ひ出して手つだいをした。二条の院の対の屋を今は女房らの部屋などにも使わせることにしていたのであるが、それを片づけて殿上役人、五位の官人、院付きの人々の接待所にあてた。寝殿の離れ座敷を式場にして、螺鈿の椅子を院の御ために設けてあつた。西の座敷に衣裳の卓を十二置き、夏冬の服、夜着などの積まれたそれらの上を紫の綾で覆うてあるのも目に快かつた。中の品物の見えないのも感じがいいのである。椅子の前には置き物の卓が二つあつて、支那の羅の裾ぼかしの覆いがしてある。挿頭の台は沈の木の飾り脚の物で、蒔絵の金の鳥が銀の枝にとまっていた。これは東宮の桐壺の方が受け持つたので、明石夫人の手から調製させたものであるからきわめて高雅であつた。御

座の後ろの四つの屏風は式部卿の宮がお受け持ちになったもので、非常にりっぱなものだった。絵は例の四季の風景であるが、泉や滝の描き方に新しい味があった。北側の壁に添って置き棚が二つ据えられ、小物の並べてあることは定った形式である。南側の座敷に高官、左右の大臣、式部卿の宮をはじめとして親王がたのお席があった。舞台の左右に奏樂者の天幕ができ、庭の西と東には料理の箱詰めが八十、纏頭用の品のはいつた唐櫃を四十並べてあった。午後二時に樂人たちが参入した。万歳樂、皇「#「鹿ノ章」、第3水準1-94-7第3などが舞われ、日の暮れ時に高麗樂の乱声があつて、また続いて落躑の舞われたのも目一馴れず珍らしい見物であつたが、終わりに近づいた時に、権中納言と、右衛門督が出て短い舞をしたあとで紅葉の中へはいつて行つたのを陪觀者は興味深く思つた。昔の朱雀院の行幸に青海波が絶妙の技であつたのを覚えている人たちは、源氏の君と当時の頭中將のようにこの若い二人の高官がすぐれた後継者として現われてきたことを言い、世間から尊敬されていることも、りっぱさも美しさも昔の二人の貴公子に劣らず、官位などはその時の父君たち以上に進んでいることなどを年齢までも数えながら語つて、やはり前生の善果がある家の子息たちであると両家を祝福した。六条院も涙ぐまれるほど身にしむ追憶がおりになつた。夜になって樂人たちの退散していく時に紫の夫人付きの家職の長が下役たちを従えて出て、纏頭品の箱から一つずつ出して皆へ傾つた。白い纏頭の服を皆が肩にかけて山ぎわから池の岸を通つて行くのをはるかに見ては鶴の列かと思われた。席上での音楽が始まつておもしろい夜の宴になつた。樂器は東宮の御手から皆呈供されたのである。朱雀院からお譲られになつた琵琶、帝からお賜わりにな

つた十三一絃げんの琴などは六条院のためにお馴染なじみの深い音色ねいろを出して、何につけても昔の宮廷がお思われになる方であつたから、またさまざまの恋しい昔の夢をお描かかせした。入道の宮がおいでになつたなら四十の御賀も自分が主催して行なつたことであろう。今になつては何を志としてお見せすることができよう、すべて不可能な事になつたと院は御一歎息たんそくをあそばした。女院をお失いになつたことは何の上にも添う特殊な光の消えたことであると帝も寂しく思召すのであつて、せめて六条院だけを最高の地位に据すえたいというお望みも実現されないことを始終残念に思召す帝であつたが、今年は四十の賀に託して六条院へ行幸みゆきをあそばされたい思召しであつた。しかしそれも冗費は国家のためお慎みになるようにと六条院からの御進言があつておできにならぬためにくやくしく思召すばかりであつた。

十二月の二十日過ぎに中宮ちゆうぐうが宮中から退出しておいでになつて、六条院の四十歳の残りの日のための祈禱きとうに、奈良の七大寺へ布四千反わかを頒たつてお納めになつた。また京の四十寺へ絹四百一疋びきを布施にあそばされた。養父の院の深い愛を受けながら、お報いすることは何一つできなかつた自分とともに、御父の前皇太子、母一御息所みやすところの感謝しておられる志も、せめてこの際に現わしたいと中宮は思召したのであるが、宮中からの賀の御沙汰ごさたを院が御辞退されたあとであつたから、大仰おおぎやうになることは皆おやめになつた。

「四十の賀というものは、先例を考えますと、それがあつたあとをなお長く生きていられる人は少ないのですから、今度は内輪のことにしてこの次の賀をしていただく場合にお志を受けましょう」

と六条院は言つておいでになつたのであるが、やはりこれは半公式の賀宴はでで派手はでになつた。六条院の中宮のお住居すまいの町の寝殿が式場

になつていて、前にお受けになつた幾つかの賀の式に変わらぬ行き届いた設けがされてあつた。高官への纏頭はお后の大一饗宴の日の品々に準じて下された。親王がたには特に女の装束、非参議の四位、殿上役人などには白い細長衣一領、それ以下へは巻いた絹を賜わつた。院のためにとのえられた御衣服は限りもなくみごとなもので、そのほかに国宝とされている石帯、御剣を奉らせたもうたのである。この二品などは宮の御父の前皇太子の御遺品で、歴史的なものだつたから院のお喜びは深かつた。古い時代の名器、美術品が皆集まつたような賀宴になつたのであつた。昔の小説も贈り物をする最も善事のように書き立ててあるが、面倒で筆者にはいちいち書けない。

帝は六条院へ好意をお見せになろうとした賀宴をやむをえず御中止になつたかわりに、そのころ病氣のため右大将を辞した人のあとへ、中納言をにわかには抜擢しておすえになつた。院もお礼の御一挨拶をあそばされたが、それは、

「突然の御恩命はあまりに過分なお取り扱いで、若い彼が職に堪えますかどうか疑問にいたしております」

こんな謙遜なお言葉であつた。

帝はこの右大将を表面の主催者として院の四十の賀の最後の宴を北東の町の花散里夫人の住居に設けられた。派手になることを院は避けようとされたのであつたが、宮中の御内命によつて行なわれるこの賀宴は、すべて正式どおりに略したところのないすばらしいものになつた。幾つかの宴席の料理の仕度などは内廷からされた。屯食の用意などはお指図を受けて頭中将が皆したのである。親王お五方、左右の大臣、大納言二人、中納言三人、参議五人、これだけが

参列して、御所の殿上役人、東宮、院の殿上人もほとんど皆集まつて参っていた。院のお席の物、その室に備えられた道具類は太政大臣が聖旨を奉じて最高の技術者に製作させた物であった、そしてお言葉を受けてこの大臣もお式の場へ臨んだ。院はこれにもお驚きになつて恐縮の意を表されながら式の座へお着きになつた。中央の室に南面された院のお席に向き合つて太政大臣の座があつた。きれいで、りっぱによく肥ふとつていて、位人臣をきわめた貫禄かんろくの見える男盛りと見えた。院はまだ若い源氏の君とお見えになるのであつた。四つの屏風びょうぶには帝の御一筆蹟ひつせきが貼はられてあつた。薄地の支那綾しなあやに高雅な下絵のあるものである。四季の彩色絵よりもこのお屏風はりっぱに見えた。帝の御字は輝くばかりおみごとで、目もくらむかと思ひなしも添つて思われた。置き物の台、弾ひき物、吹ふき物の楽器は蔵人くらんどて所ところから給せられたのである。右大将の勢力も強大になつていたため今日の式のはなやかさはすぐれたものに思われた。四十匹の馬が左馬寮、右馬寮、六衛府りくえふの官人らによつて次々に引かれて出た。おそれ多いお贈り物である。そのうち夜になつた。例の万歳楽、賀皇恩がこうおんなどという舞を、形式的にだけ舞わせたあとで、お座敷の音楽のおもしろい場が開かれた。太政大臣という音楽の達人たてものが臨場していることにだれもだれも興奮しているのである。琵琶びわは例によつて兵部ひょうぶ卿ようの宮、院は琴きん、太政大臣は和琴わこんであつた。久しくお聞きにならぬせいか和琴の調べを絶妙のものとしてお聞きになる院は、御自身も琴を熱心にお弾ひきあそばされたのである。いかなる時にも聞きえなかつた妙音も出た。また昔の話が出て、子息の縁組みその他のこととで昔に増した濃い親戚しんせき関係を持つことにおなりになつた二人は、睦むつまじく酒杯をお重ねになつた。おもしろさも頂天に達した気がさ

れて、酔い泣きをされるのもこのかたがたであった。お贈り物には、すぐれた名器の和琴を一つ、それに大臣の好む高麗笛こまぶえを添え、また紫檀したんの箱一つには唐本と日本の草書の書かれた本などを入れて、院は帰ろうとする大臣の車へお積ませになった。馬を院方の人が受け取った時に右馬寮の人々は高麗樂を奏した。六衛府の官人たちへの纏頭てんとうは大将が出した。質素に質素にとして目だつことはおやめになったのであるが、宮中、東宮、朱雀院すざく、后きさの宮、このかたがたとの関係が深く、自然にはなやかさの作られる六条院は、こんな際に最も光る家と見えた。院には大将だけが一人息子で、ほかに男子のないことは寂しい気もされることであつたが、その一人の子が万人にすぐれた器量を持ち、君主の御覚えがめでたく、幸運の人というにほかならぬことが証あかしされていくにつけて、この人の母である夫人と、伊勢いせの御息所みやすどころとの双方の自尊心が強くて苦しく競い合った時代に次いで、中宮とこの大将が双方とも、院の大きい愛のもとでりっぱなかたがたになられたことが思わせられる。この日大将から院へ奉った衣服類は花散里夫人が引き受けて作ったのである。纏頭の物は皆三条の若夫人の手でできたようであつた。六条院のはなやかな催し事もよそのことに聞いていた花散里夫人には、こうした生きがいのある働きをする日はあることかと思われたものであるが、大将の母儀ぼぎになつていふことによつて光栄が分かれたたのである。

新年になつた。六条院では淑景舎しゆけいしやの方かたの産期が近づいたために不ふ断とぎようの読経が元日から始められていた。諸社、諸寺でも数知れぬ祈禱きとうをさせておいでになるのである。院は昔の葵夫人あおいが出産のあとで死んだことで懲りておいでになつて、恐ろしいものと子を産むことを感じておいでになり、紫夫人に出産のなかつたことは物足らぬお氣

持ちもしながらまたうれしくお思われにもなるのであったから、ただ少女といってよいほどの身体からだで、その女の大厄たいやくを突破せねばならぬ御女おんむすめのことを、早くから御心配になつていたが、二月ごろからは寝ついてしまうほどにも苦しくなつたふうであるのを院も女王こへいも不安がられないはずもない。陰陽師おんようしどもは場所を変えて謹慎をせねばならぬと進言するので、院外の離れた家へ移すのは気がかりに思召され、明石夫人あかしの北の町の一つの対の屋へ淑景舎の病室は移されることになった。こちらはただ大きい対の屋が二つと、そのほかは廊にして廻めぐらせた座敷ばかりの建物であつたから、廊座敷に祈祷の壇が幾つも築かれ、評判のよい祈祷僧は皆集められて祈つていた。明石夫人は桐壺きりつぼの方が平らかに出産されるか否かで自身の運命も決まると信じていて、一所懸命な看護をしていた。明石入道の尼夫人はもうぼけた老婆になつているはずである。姫君に接近のできることを夢のような幸福と思つて、移つて間もなくこの人がそばへ出てくるようになった。もう幾年か明石夫人は姫君に付き添つていたのであるが、桐壺の方の生まれてきた当時の事情などはまだ正確に話してなかつた。それを老尼はうれしさのあまりに病室へ来ては涙まじりに、昔の話を身じまいをしながら姫君へ語るのであつた。初めの間は無気味な老婆であると姫君は思つて、顔ばかり見つめているのを常としたが、実母にそうした母親があるといふことは何かの時に聞いたこともあつたのを思い出してからは好意を持つようになつた。明石で生まれた時のこと、また院がその海岸へ移つて来ておいでになつたころの様子などを尼君は言う、

「京へお帰りになりました時、一家の者はこれで御縁が切れてしまふのかとひどく悲しんだものでございますがね、お生まれになつた

お姫様が暗い運命から私たちを救い上げてくださったのでございますから、ありがたいことと御恩を思っております」

はらはらと涙をこぼしている。そんな哀れな昔の話がこの尼さんが聞かせてくれなければ、自分はただ疑ってみるだけで、真相は何もわからずにしまったかもしれぬと思つて桐壺の方は泣いた。心のうちでは、自分の身の上は決して欠け目ないものとは言えなかつたのを、養母の夫人の愛にみがかれて十分な尊敬も受ける院の御女ともなりえたのである、思ひ上がった心で東宮の後宮に侍していても、他の人たちを自分に劣つたもののように見たりしてきたのは過失である、表面に出して言わないでも、世間の人は自分のその態度を譏つたことであろうと反省もされるようになった。実母は少し劣つた家の出であるとは知つていても、生まれたのはそうした遠い田舎の家であつたなどとは思ひも寄らぬことだったのである。おおように育てられ過ぎたせいだつたかもしれぬが、自身の今まで知らぬとは思ひ議なことのように思われるのであつた。祖父である入道が現在では人間離れのした仙人せんじんのような生活をしていふということも若い心には悲しかった。姫君がにわかにわかにいるいろいろな物思ひを胸に持つて、寂しい顔をしている時に明石夫人が出て来た。昼の加持にあちらこちらから手つだいの者や僧が来て騒いでいるのを、この人は今まで監督していたのであるが、来てみると姫君のそばには他の者がいずに尼君だけが得意な気分を見せて近くにすわつていた。

「体裁が悪うございますよ。短い几帳きちょうで身体をお隠しになつてお付きしていらつしやればいいのに、風が吹いていますからお座敷の外から人がのぞけば、あなたはお医者のような恰好かっこうでおそばに出ているのですから恥ずかしい。こんなふうにしておいでになつてはね」

などと明石は片腹痛がつていた。品のよいとりなしでこうしているのであると尼君自身は信じているのであるが、もう耳もあまり聞こえなくて、娘の言葉も、

「ああよろしいよ」

などと言っていいかげんに聞いているのである。六十五、六である。しゃんとした尼姿で上品ではあるが、目を赤く泣きはらしているのを見ては、古い時代、つまり源氏の君の明石の涙を去ったところによくこうであつたことが思い出されて夫人ははっとした。

「間違いの多い昔話などを申していたのでしよう。怪しくなりました記憶から取り出します話には荒唐無稽な夢のようなこともあるのでございますよ」

と、微笑を作りながら夫人のながめる姫君は、艶えんにきれいな顔をしていて、しかも平生よりはめいっただふうが見えた。自身の子ながらももつたいたなく思われるこの人の心を、傷つけるような話を自身の母がして煩悶はんもんをしているのではないか、お后きさきの位にもこの人の上る時を待つて過去の真実を知らせようとしていたのであるが、現在はまだ若いこの人でも、昔話から母の自分をうとましく思うことはあるまいが、この人自身の悲観することにはなるうと明石夫人は憐あわれんだ。加持が済んで僧たちの去ったあとで、夫人は近く寄つて菓子などを勧め、

「少しでも召し上げれ」

と心苦しいふうきりつぽに姫君を扱っていた。尼君はりっぱな美しい桐壺きりつぽの方に視線をやつては感激の涙を流していた。顔全体に笑えみを作つて、口は見苦しく大きくなっているが、目は流れ出す涙で悲しい相あになつていた。困るといふように明石は目くばせをするが、気のつ

かないふうをしている。

「#ここから1字下げ」

「老いの波かひある浦に立ちいでてしほたるるあまをたれか咎めん

「#ここで字下げ終わり」

昔の聖代にも老齡者は罪されないことになっていたのでございませよ」

と尼君は言った。硯箱すずりばこに入れてあつた紙に、

「#ここから2字下げ」

しほたるるあまを波路のしるべにて尋ねも見ばや浜の苦屋くるやを

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌を姫君は書いた。明石も堪えがたくなって泣いた。

「#ここから2字下げ」

世を捨てて明石の浦に住む人も心の闇やみは晴るけしもせじ

「#ここで字下げ終わり」

などと言って、この場の悲しい空気の密度をより濃くすまいとした。姫君は祖父に別れた朝のことなどを、心には忘れていても、夢の中だけでも見たいのが見えぬのは残念であると思った。

三月の十幾日に桐壺の方は安産した。その時まではあぶないことのようにして、多くの祈祷が神仏にささげられていたのであるが、

たいした苦しみもなく、しかも男宮をお生みしたのであったから、この上の幸福もないようにで院のお心も落ち着いた。こちらは蔭かげの場所のようになっていた所で、ただ風流な座敷が幾つも作られてある建物では、いかめしい今後続いてあるはずの産養うぶやしなひの式などに不便であつて、老尼君のためにだけはうれしいことと見えても、外見へは不都合であるために、南の町へ産屋うぶやを移す計画ができていた。紫の女王にょおうも出て来た。白い服装をして母らしく若宮をお抱きしている姫君はかわいく見えた。紫夫人は自身に経験のないことであつたし、他の人の場合にもこうした産屋などに立ち合つたことはなかつたから、幼い宮を珍しくおかわいく思うふうが見えた。まだあぶないように思われるほどの小さい方を女王は始終手に抱いているので、ほんとうの祖母である明石あかし夫人は、養祖母に任せきりにして、産湯うぶゆの仕度したくなどにばかりかかつていた。東宮一宣せんげ下の際の宣旨拜受の役を勤めた典侍ないしのすけがお湯をお使わせするのであつた。迎え湯を盥たらひへ注ぎ入れる役を明石の勤めるのも気の毒で淑景舎しゆけいしやの方の生母がこの人であることは知らないこともない東宮がたの女房たちは目をとめて、どこかに欠点でもある人なら当然のこととも思つておられようが、あまりに気高けだかい明石の姿はこの人たちに畏敬いけいの念を起こさせて、未来の天子の御外祖母たる因縁を身に備えて生まれた人に違いないといふようなことも思わせた。お湯殿の式のくわしい記事は省略する。

六日めに以前の南の町の御殿へ桐壺の方は移つた。七日の夜には宮中からのお産養うぶやしなひがあつた。朱雀院すざくが世捨て人の御境遇へおはいりになつたために、そのお代わりにあそばされたことであつたらしい。宮中から頭の弁が宣旨で来て、この日の派手はでな祝宴を管理した。纏てん頭の品々は中宮のお志で慣例以上の物が出された。親王がた、諸大

臣家からもわれもわれもとはなやかな御祝い品の来るお産屋であつた。この際の祝宴については、いつも華奢かしやに流れることは遠慮したいとお言いになる院も、あまりお止めにはならなかつたために、目もくらむほどのお産養の日が続き、ほんやりとしていた筆者にその際の洗練された細かな物好みで製作されたおのの式の賀品などのことによく気がつかなかつた。

院は若宮をお抱きになつて、

「大將が幾人も持った子を今まで見せないのを恨めしく思つていたが、こんなかわいい方が授かつた」

と愛しておいでになるのはごもつともなことである。毎日物が引き伸ばされるように若宮は大きくおなりになるのであつた。乳母ちのめなどは新しい人をお見つけになることは当分されずに、これまでの六条院の女房の中から、身柄も性質もよい人ばかりを選んでお付けになつた。明石夫人が聡明そうめいで、気高けたかい、おおような心を持つていながら、ある場合に卑下することを忘れずに、自身が表に出ようとすることのない態度のとれることについてはほめない人はなかつた。紫夫人は顔をあらわに見せて話すようなことは今までこの人となかつたのであるが、今度はよく睦むつまじく話して、過去においては長く僭せん越えつな競争者であるとして見ていた人に好意を持ちうるようになり、若宮を愛する気持ちの交流があたたかい友情までも覚えさすことになつた。女王にょおうは子供好きであつたから、天児あまがつの人形などを自身で縫つたりしている時はことさら若々しく見えた。日夜を若宮のために心をつかう紫夫人であつた。明石の老尼は、若宮を満足できるほど拝見することのできないのを残念に思つていた。しかしそれがかえつて幸いであつたかもしれぬ、なおしばらくでもそばでお愛し申し上げ

るような時間が許されたものであれば、あとの恋しい思いで尼は死んだかもしれないから。

明石の入道も姫君の出産の報を得て、人間離れのした心にも非常にうれしく思われて、

「もうこれでこの世と別な境地へ自分の心を置くことができる」

と弟子どもに言い、明石の邸宅を寺にし、近くの領地は寺領に付けて以前から播磨はりまの奥の郡こおりに人も通いがたい深い山のある所を選定して、最後のこもり場所としてあったものの、少しまだ不安な点が残していく世にあつて、なおそこへは移らなかつた山の草庵そうあんへ、もう今後の子孫の運は仏神にお頼みするばかりであるとして入道は行ってしまふのであつた。近年はもう京の家族も順調に行っていることに安心して、使いを出してみることもなかつたのである。京から使いが送られた時にだけ短いたよりを尼君へ書いて来た。入道はいよいよ明石を立つ時に、娘の明石夫人へ手紙を書いた。

「#ここから1字下げ」

この幾年間はあなたと同じ世界にいながらすでに他界で生存するもののような気持ちでたいしたことのない限りはおたよりを聞こうともしませんでした。仮名書きの物を読むのは目に時間がかかり、念仏を怠ることになり、無益むちやくであるとしたのです。またこちらのたよりもあげませんでした。承ると姫君が東宮の後宮へはいられ、そして男宮をお生み申されたそうで、私は深くおよろこびを申し上げる。その理由はみじめな僧の身で今さら名利を思うのではありません。過去の私は恩愛の念から離れることができず、六時の勤行をいたしながらも、仏に願うことはただあなたに関するだけで、自身の浄土往生の願いは第二にしていましましたが、初めから言えば、あなた

が生まれてくる年の二月の某日の夜の夢に、こんなことを見たので
す、私自身は須弥山しゅみせんを右の手にささげているのです。その山の左右
から月と日の光がさしてあたりを照らしています。私には山の陰影かげ
が落ちて光のさしてくることはないのです。私はその山を広い海の
上に浮かべて置いて、自身は小さい船に乗って西のほうをさして行
くので終わったのです。その夢のさめた朝から私の心にはある自信
ができたのですが、何によってそうした夢に象徴されたような幸福
に近づきうるかという見当がつかなく、ちようどそのこ
ろから母の胎はらに妊はらまれたのがあなたです。普通の書物にも仏典にも
夢を信じてよいことが多く書かれてありますから、無力な親でいて
あなたをたいせつなものにして育てていましたが、そのために物質
的に不足なことのないようにと京の生活をやめて地方官の中へはい
ったのです。ここでまた私の身の上に悪いことが起こり、しまいに
土着して出家の人になり、あなたは姫君をお生みになったそのころ
のことは知っておいでのになるとおりです。その時代に私は多くの願
を立てていましたが、皆神仏のお容いれになることになり、あなたは
幸福な人になられました。姫君が国の母の御位みくらいをお占めになった暁
には住吉すみやしの神をはじめとして仏様への願果たしをなさるようと申
しておきます。私の大願がかなった今では、はるかに西方の十万億
の道を隔てた世界の、九階級の中の上の仏の座が得られることも信
じられます。今から蓮華れんげをお持ちになる迎えの仏にお逢あいする夕べ
までを私は水草の清い山にはいってお勤めをしています。

「#ここから2字下げ」

光いでん暁近くなりけり今ぞ見しよの夢語りする

「#ここで字下げ終わり」

そして日づけがある。またあとへ、

「#ここから1字下げ」

私の命の終わる月日もお知りになる必要はありません。人が古い習慣で親のために着る喪服などもあなたはお着けにならないでお置きなさい。人間の私の子ではなく、別な生命いのちを受けているものとお思いいになって、私のためにはただ人の功德くどくになることをなさればよしい。この世の愉楽をわが物としておいでになる時にも後世ごせのことを忘れぬようになさい。私の志す世界へ行っておれば必ずまた逢うことができるのです。娑婆しゃはのかなたの岸も再会の得られる期の現われてくることを思っておいでなさい。

「#ここで字下げ終わり」

こう書いて終わってあった。また入道が住吉やしきの社ひへ奉った多くの願文を集めて入れた沈しんの木の箱の封じものも添えてあった。尼君への手紙は細かなことは言わずに、ただ、

「#ここから1字下げ」

この月の十四日に今までの家を離れて深山みやまへはいります。つまりわが身を熊狼くまおおかみに施します。あなたはなお生きていて幸いの花の美しく咲く日におあいなさい。光明の中の世界でまた逢いましょう。

「#ここで字下げ終わり」

と書かれただけのものであった。読んだあとで尼君は使いの僧に入道のことを聞いた。

「お手紙をお書きになりましたから三日めに庵いおりを結んでおかれまして奥山へお移りになったのでございます。私どもはお見送りに山の

麓へまで参つたのですが、そこから皆をお歸しになりました、あちらへは僧を一人と少年を一人だけお供にしてお行きになりました。御出家をなさいました時を悲しみの終わりかと思いましたが、悲しいことはそれで済まなかつたのでございます。以前から仏勤めをなさいますひまひまに、お身体を楽になさいましてはお弾きになりました琴と琵琶を持ってよこさせになりました、仏前でお暇乞いにお弾きになりましたあとで、楽器を御堂へ寄進されました。そのほかのいろいろな物も御堂へ御寄付なさいまして、余りの分をお弟子の六十幾人、それは親しくお仕えした人数ですが、それへお分けになり、なお残りしました分を京の御財産へおつけになりました。いっさいをこんなふうに清算なさいまして深山の雲霞の中に紛れておはいりになりましたあとのわれわれ弟子どもはどんなに悲しんでいるか
しれません」

と播磨の僧は言った。これも少年侍として京からついて行った者で、今は老法師で主に取り残された悲哀を顔に見せている。仏の御弟子で堅い信仰を持ちながらこの人さえ主を失つた歎きから脱しうることができないのであるから、まして尼君の歎きは並み並みのことではなかつた。

明石夫人はたいてい南の町のほうへばかり行っていたが、明石の使いが入道の手紙をもたらしたことを尼君が報らせて来たため、そつと北の町へ帰つて来た。この人は自重して少したことによつて軽々しく往來することはしないのであるが、悲しいたよりがあつたというので忍びやかに出て来たのである。見ると尼君は非常に悲しいふうをしてすわっていた。燈を近くへ寄せさせて夫人は手紙を讀んでみると、自身からもとどめがたい涙が流れた。他人にとって

は何でもないことも子としては忘れがたい思い出になる昔のことが多くて、常に恋しくばかり思われた父は、こうして自分たちから永久に去ったのかと思うと、どうしようもない深い悲しみに落ちるばかりであった。この夢の話によつて、自分に不相応な未来を期待して、人並みの幸福を受けさせずに苦しめる父であるようにある時代の自分が恨んだのも、一つの夢を頼みにした父であつたからであると、はじめて理解のできた気もした。少したつて尼君は、

「あなたがあつたために輝かしい光栄にも私は浴しています。またあなたのためにどれほどの苦勞を心でしたことが。たいしたことのない家の子ではあつても、生まれた京を捨てて田舎へ行ったところも不運な私だと思われましたがね。あとになって生きながら別れなければならぬとは予想せずに、同じ蓮華の上へ生まれて行く時まで変わらぬ夫婦でいようと互いに思つて、愛の生活には満足して年月を送つたのですが、にわかにあなたの境遇が変わつて、私もそれといつしよに捨てた世の中へ帰り、あなたがたが幸福に恵まれるのを目に見ては喜びながらも、一方では別れ別れになつて寂しさを、たよりなさを常に思つて悲しんでいましたが、とうとう遠く隔たつたままでお別れしてしまつたのが残念に思われます。若い時代のあなた方も人並みな処世法はおとりにならずに、風変わりな人だつたが、縁あつて若い時から愛し合つた二人の中には深い信頼があつたものですよ。どうしてこの世の中でいながら逢ふことのできない所へあの方は行っておしまいなすつたのだらう」

と言つて泣いた。夫人も非常に泣いた。

「こうお言いになつても、すばらしい将来などというものが私にあるものですか。価値のない私がどうなりうるものでもないのですか

ら、私を愛してくだすつたお父様にお目にかかることもできずにいるこの悲しみにそれは代えられるほどのものと思われませんが、私たちは幸福な姫君をこの世にあらしめるために、悲しい思いも科せられていたものと思うよりほかはありません。そんなふうにして山へおはいりになつては、無常のこの世ですもの、知らぬまにおかれになるようなことになつては悲しゅうございますね」

とも言い、夜通し尼君と入道の話をしていた。

「昨日は私のあちらにいますのを院が見ていらつしやつたのですから、にわかになつたようにこちらへ来ていましては、軽率に思召すでしょう。私自身のためにはどうでもよろしゅうございますが、姫君に累を及ぼすのがおかわいそうで自由な行動ができませんから」
こう言つて夫人は夜明けに南の町へ行くのであつた。

「若宮はいかがでいらつしやいますか。お目にかかることはできないものですかね」

このことでも尼君は泣いた。

「そのうち拝見ができますよ。姫君もあなたを愛しておいでになつて、時々あなたのことをお話しになりますよ。院もよく何かの時に、自分らの希望が実現されていくものなら、そんなことを不安に思つては済まないが、なるべくは尼君を生きさせておいてみせたいと仰せになりますよ。御希望とはどんなことでしょう」

と夫人が言つと、尼君は急に笑顔になつて、

「だから私達の運命というものは常識で考えられない珍しいものなのですよ」

とよろこぶ。手紙の箱を女房に持たせて明石は淑景舎の方の所へ歸つた。

東宮から早く参るようという御催促のしきりにあるのを、

「ごもつともですわね。若宮様もいらっしゃるのですもの、どんなに早くお逢いあそばしたいでしょう」

と紫夫人も言つて、院は若宮を東宮へお上らせする用意をしておいでになった。桐壺の方は退出のお許しが容易に得られなかったのに懲りて、この機会に今しばらく実家の人になっていたい気持ちでいるのである。小さい身体で女の大難を経てきたのであったから、少し顔が痩せ細つて非常に艶な姿になっていた。

「はつきりとなさいませんか、もう少しこちらで御養生をなさいますほうがいいと思います」

と言うのは明石夫人の意見であつた。

「少し細られたこの姿をお目にかけるのはかえつてまたよい結果のあるものなのだ」

などと院は言つておいでになるのである。明石は紫の女王などが対へ帰つたあとの静かな夕方に、姫君のそばへ来て、文書のはいつた沈の木箱を見せ、入道のことを語るのであつた。

「すべてのことが成り終わりますまでは、こんな物をお目にかけないほうがいいのかもしれませんが、人の命は無常なものでございませからね。何も御承知にならぬうちに私が亡くなりますことがありまして、必ずしも臨終にあなた様のおいでがいただける身の上でございせんから、とにかく健在なうちにこうしたこともお聞かせしておくほうがよいと存じまして、それに字が悪くて読みにくいものでございますがこの手紙もお見せすることにいたしましたから、御覧なさいませ。この箱の中の願文はお居間の置き柵などへしまつてお置きになりました、何をなさることも可能な時がまいりました

ら、これに書かれてございます神様などへ入道がいたしました願のお酬むくいをなすってくださいませ。他人にはお話をなさらぬほうがよくしゅうございます。私はもうあなたのお身の上で何が不安ということもなくなつたのでございますから、尼になりたい気がしきりにいたすのでございまして、長くお世話を申し上げることはできないでございましょう。あなたは対のお母様の御恩をお忘れになつてはいけませんよ。ありがたい方でございます。拝見いたしましたして、ああしたりっぱな人格の方は必ず命も長くお恵まれになるだろうと思つております。あなたとごいっしょにおりますことはあなたの幸福でないと思ひまして、はじめて女王様にあなたをお譲り申し上げました時には、これほどまでの愛をあなたにお持ちになることは想像できませんで、それ以後もただ世間並みのよいといわれる継母ははぐらいのことと思ひましたが、あの方の御愛情はそんなものではありませんでした。あの方にお任せいたしますほど安心なことはいとよく私はわかつたのでございます」

などと明石は淑景しけい舎しゃに言った。姫君は涙ぐんで聞いていた。実母に対しても打ち解けたふうができず、おとなしくもの多く言われない姫君なのである。入道の手紙は若い心に無気味なこわい氣のされるようなことが、古檀紙の分厚い黄色がかった、それでも薰物たきものの香の染しんだのへ五、六枚に書かれてあるのを、姫君は身にしむふうで読んでいて額髪が涙にぬれていく様子が艶えんであった。

院は女三にょさんの宮みやのお座敷のほうにおいでになつたのであるが、中の戸をあけてにわかにかちらへお見えになつたのを知つて、明石夫人は急なことで姫君の前に出された文書類を隠すことができず、几帳きちょうを少し前のほうへ引き寄せ、自身もその蔭かげへ姿を隠してしまつた。

「若宮が私の足音でお目ざめになりませんでしたか。しばらくでも見ずにいては恋しいものだから」

と院がお言いになつても姫君は黙っているのを見て、明石が、
「対へおつれになつたのでございます」

と言つた。

「けしからんね、若宮をわが物顔にして懐中ふところからお放ししないのだから。始終自身の着物をぬらして脱ぎかえているのですよ。軽々しく宮様をあちらへおやりするようなことはよろしくない。こちらへ拝見に来ればいいではないか」

「思いやりのないことを仰せになります。内親王様であつてもあの女王様に御養育おされになるのがふさわしいことと存じられますのに、まして男宮様は、そんなに尊貴でありあそばしても、あちこちおつれ申すほどのことが何でございましょう。御冗談ごじょうだんにでも女王様のことをそんなふうにおっしゃつてはよろしくございません」

明石夫人はこう抗弁した。院はお笑いになつて、

「ではもうあなたがたにお任せきりにすべきだね。このごろはだれからも私は冷淡に扱われる。今のようなたしなめを言つたりする人もある。そうじゃありませんか、こんなに顔を隠して、私を悪くばかり」

と、お言いになつて、几帳を横へお引きになると、明石は清い顔をして中の柱に品よくよりかかっているのであつた。先刻さつきの箱もあわてて隠すのが恥ずかしく思われてそのままにしてあつた。

「何の箱ですか。恋する男が長い歌を詠よんで封じて来たもののような気がする」

院がこうお言いになると、

「いやな御想像でございますね。御自身がお若返りになりましたので、私どもさえまで承ったこともないような御冗談をこのごろは伺います」

と明石は言つて微笑を見せていたが、悲しそうな様子は瞭然とわかるのであつたから、不思議にお思ひになるふうのあるのに困つて、明石が言つた。

「あの明石の岩窟いわやから、そつとよこしました経巻とか、まだお酬むくいのできておりません願文の残りとかなのでございますが、姫君にも昔のことをお話しする時があれば、これもお目につけたらどうかと申してもまいっているのですが、ただ今はまだそうしたものを御覧なさいます時期でもないでございますから、お手をおつけになりません」

お聞きになつて、娘と母に悲しい表情の見えるのももつともであるとお思ひになつた。

「あれ以後ますます深い信仰の道を歩んでおいでになることである。長命をされて長い間のお勤めが仏にできたのだから結構だね。世間で有名になつていいる高僧という者もよく観察してみると、俗臭のない者は少なく、賢い点には尊敬の念も払われるが、私には飽き足らず思われる所がある、あの人だけはりっぱな僧だと私にも思われる。僧がらずにいながら、心持ちはこの世界以上の世界と交渉してゐるふうに見えた人ですよ。今ではまして係累もなくなつて、超然としておられるだろうあの人を想像される。手軽な身分であればそつと行つて違あいたい人だ」

院はこうお言ひになつた。

「ただ今はもうあの家も捨てまして、鳥の声もせぬ山へはいったそ

うでございます」

「ではその際に書き残されたものなのだね。あなたからもたよりはしていただけますか。尼さんはどんなに悲しんでおいでになるだろう。親子の仲とはまた違った深い愛情が夫婦の仲にはあるものだからね」
院も涙ぐんでおいでになった。

「あれからのちいろいな経験をし、いろいろな種類の人にも違つたが、昔のあの人ほど心を惹く人物はなくて、私にも恋しく思われる人なのだから、そんなことがあれば夫婦であつた尼君の心はいたむことだろう」

ともお言いになる院に、入道の夢の話をお思い合わせになることがあるうもしれぬと明石夫人はその手紙を取り出した。

「変わった梵字ほんじとか申すような字はこれに似ておりますが読みにくい字で書かれましたものでも御参考になることが混じっているようでございますからお目にかけます。昔の別れにももう今日のあることを申しております、あきらめたつもりでも、やはりまた悲しゅうございます」

と言い、感じの悪くない程度に泣いた。院は手にお取りになって、「りっぱじゃありませんか。老いぼけてなどいないいい字だ。どんな芸にも達しておられて、尊敬さるべき人なのだが、処世の術だけはどうまくゆかなかつた人だね。あの人の祖父の大臣は賢明な政治家だったのが、ある一つのこと失敗をされたために、その報いで子孫が栄えないなどと言う人もあつたが、女系をもつてすれば繁栄でないとは言われなくなったのも、あの人の信仰が御仏みほとけを動かしたと
いってよいことですね」

などと言ひ、涙をぬぐいながら読んでおいでになつたが、夢の話の所はことに院の御注意を惹いた。常人の行ないができずに、むやみに思い上がった望みを持つ男であると人の批難を受け、自分なども非常識に狂気じみて結婚を強要する人だと疑つて思つていたことも、姫君が生まれてきたことで、前生の因縁がかくあつた間柄であると認めたのであるが、なおそれ以外の未来にどんな望みを入道が持つてゐるかは知らずにいたが、これで見れば初めから君王の母がその家から出る確信があつたらしい。冤罪を蒙つて漂泊してまわる運命を自分が負つたことも、この姫君が明石で生まれるためなのであつた。神仏にかけた願はどんなものであつたのであろうと、心で拜をなされながらその箱を院はお取りになつた。

「これといつしよにあなたに見せておきたいものもありますから、またそのうち私からもお話しすることにしよう」

と院は姫君へお言いになつた。そのついでに、

「もうあなたは自分の生まれてきた事情を明らかに知ることができたでしょうが、あちらのお母様の好意をおろそかに思つてはなりませんよ。真実の親子、肉身の仲でなくて、他人が少しでも愛してくれ、親切にしてくれるのはありがたいことだと思わなければならぬ。まして実母があなたのそばへ来たあとまでも初めどおりにあなただを愛することが変わらずに、あなたに幸福があるようにとばかりあの人は願つています。昔からある継母話のように、表面だけを賢そうにして継子の世話をする、それはまあよいと見られている母親も、また曲がつた心で娘を苦しめている母親も、娘のほうで善意にばかりものを解釈して信頼してやれば、こんな人を憎んでは罪にならぬという気がして反省するのがありますし、またよい性格の人であ

れば、継娘ままこに気に入らぬ所はあつても、母として信頼される立場になつては、いつとなく最初の態度を変えるのもあるでしょう。何でもないことに難くせをつけ、愛の皆無な思いやりのない継母でとうてい娘のほうから近づけないのもあるでしょう。私はそうたくさん女の人を知っているのではないが、とにかく私の知っている人で、生まれもよく、婦人としての見識も備わつた人で、またそれぞれの長所を持った人でも、自分の娘を託しうる人をその中から選び出すのは困難です。真に心の癖のないよい女性は対のお母様以外にありません。これこそ善良な女性というべきだと私は信じている。善良といつても単にお人よしの締まりのない人は頼みになりません」

と訓おしえておいでになるのを聞いていて、紫夫人の偉さが明石にうなずかれた。

「あなただけはその訳もわかる人なのだから、仲よくしてこの方のお世話もいっしょにしてください」

とまた小声で明石へお言いになつた。

「ただ今まで仰せにはなりません女王様の御好意がよくわかるものでございますから、毎度そのことをお話しいたしております。私を失礼な女と思召おぼしめすのでございましたら、この方をこれほどにお愛しにもならないでございましょうが、自分で片腹痛く存じますまでに私を御同等な人のようにお扱ってくださいますから、私は恐縮いたすばかりでございます。何の価値もない私などが亡なくなりもしませずいつまでも姫君のおそばにおりますのは、世間の聞こえもよろしくないことと御遠慮がされますのを、女王様の御好意でどうやら邪魔者らしくなくしていられます」

と明石が言うつと、

「あなたに尽くす心などはないだろうが、姫君を母として愛する心を今になって分けてもらいたいために譲るところがあるのでしよう。あなたもまた実母の権利を主張なさらないから双方の間が円満にいつて、私はこれほど安心のできることはない。ちよつとしたことにもあさはかな邪推などする人が一人でもあれば周囲の人は迷惑するものですからね。あなたがたには欠点がないから私は苦心をすることもない」

この院のお言葉を聞いて、明石は謙遜けんそんをしてよかつたと思つた。院は対のほうへお帰りになつた。

「ますます女王様にょおうに御愛情が傾くようですね。實際だれよりもすぐれた、あらゆるものを具足した方なのですから、ごもつともだとわれわれでさえ思うといふのは幸福な方ですね。宮様を表面だけりつぱなお扱いをなすつても、あちらにおいてになることが多いのですもの、もつたいたないことともいわれます。御身分から申しても宮様が一段上の方なのですもの」

などと姫君に語りながらも、明石あかしはいささか自信を持つことができるのであつた。それは姫君を持つてゐることにおいてである。高貴な方でさえ飽き足らぬ待遇を受けておいでになる夫人の中の一人で、薄い院の御愛情などをとやかに自分などは思ふべきでない、そのことではあきらめができていて、明石の心に悲しく思われるのは深い山へはいつた父の入道のことだけであつた。尼君も終わりの文ふみに書かれた良人あつとの一言を頼みにして、未来の世を考えながらも物思わしくしていた。

源大將は女三の宮をあるいは得られたかもしれぬ立場にいた人であつたから、六条院に来ておいでになるのを無関心でいることもで

きなかつた。院の御子としてその御殿へ近づく機会もあつて、それとなく観察しているのであつたが、ただ若々しくおおようなという点だけのよさがある方のようで、壮麗な六条院の本殿へお住ませになつて、今後の例になるまで派手な御待遇をしておいでになつても、それだけの貴女たる価値のありなしをこの人には疑われた。女房なども落ち着いた年齢の人は少なく、若い美人風、派手な騒ぎをするようなのが数も知れぬほどお付きしていて、歡樂的な空氣の横溢しているお住居であつたから、そんな中に内気なおとなしい人が混じつて物思ひをしても輕佻に騒ぐ仲間けいちように引かれて、それも同じように朗らかなふうをしていたり、毎日幼稚なお遊びの相手ばかりをしている童女の教養なさなどを院は気持ちよくは思召さなかつたが、一つの趣味の目でもものを見ようとされぬ方であつたから、それはそれとして許して見ておいでになつて、御干涉もあそばさなかつた。

夫人になられた宮に対してだけはよくお教えになるのであつたから、以前よりは少しごりつぱな方らしくおなりになつた。そんなことが外聞にも知れてくるのを大將は見て、すぐれた人の少ない世だ、紫の女王がこんなに長い間ごいっしょにおられても、だれにもどんなふうな、どんな女性であるという想像もさせない重々しさがあつて、静かに深みのある女であることを願つて、またさすがに明朗な態度をとり、他を輕侮せず自身の自尊心を傷つけない用意があると思ひ、何年かの前に野分の夕べに見た面影が忘れがたかつた。自身の夫人を愛する心は変わらなかつたが、その人は相手にしがいのある優越した女性でなかつた。恋人を妻にしたあとの安心した気持ちと、その人ばかりを見ている目の倦怠さで、父君が異なつた幾人の夫人を集めておいでになる六条院の生活がうらやましくて、だれも皆自分

の妻よりも相手にしておもしろい人のように思われてならないのである。その中で姫宮は御身分からいっても最も若い思ひ上がった大将などには興味の惹かれる御存在ではあったが、表面をお飾りになるだけの愛情以外の何ものもないような院の御待遇がこの人によくわかつていて、あるまじい心を起こしたというでもなしに、お顔の見られる時があればよいとは願っていた。右衛門督も始終六条院へ参っている人であった。この宮を山の帝がどんなにお愛しあそばしたかもくわしく知っていて、御婿選びの時以来この宮に好意を持ち、この求婚者には院の帝も決してもつてのほかのこととは仰せられなかつたという報は得たのでありながら、宮は六条院へ入嫁されたのを残念に思い、心も傷つけられたほどに苦しんで、今でも衛門督は恋を捨てていなかった。そのころから心安くなつた女房によつて、宮の御様子を聞くのをはかない慰めにしていたのである。

「やはり対の夫人とは御競争がおできにならないようだ」

と世間の人の噂するのが耳にはいる時、もつたいなくても自分の妻に得ておれば、そうした物思ひはおさせしなかつたはずである。

二人とない六条院のようなりつばな男で自分はないのであるがと、こんなことを言つて、始終心安くなつている小侍従という宮の女房を煽動するようなことを言い、無常の世であるから、御出家のお志の深い院が御一遁世になる場合もあつたなら、自分は女三の宮を得たいと絶えず思つている右衛門督であつた。

三月ごろの空のうららかな日に、六条院へ兵部卿の宮がおいでになり、衛門督もお訪ねして来た。院はすぐに出てお逢いになつた。

「ひまな私の所などはこの時節などが最も退屈で、気を紛らすことができずに困っていましたよ。どこも皆無事平穩なのです。今日

はどうして暮らしたらいいだろう」

などと院はお言いになって、また、

「今朝大将が来ていたのだがどこにいるだろう。慰めに小弓でも射させたか思っている時にちょうどそれのできる人たちもまた来ていたようだったが、もう皆出て行ったのだろうか」

近侍にこうお聞きになった。大将は東の町の庭で蹴鞠をさせて見ているという報告をお聞きになって、

「乱暴な遊びのようだけれど、見た目に爽快なものでおもしろい」とお言いになり、

「こちらへ来るように」

と、院が大将を呼びにおやりになると、すぐに庭で蹴鞠をしていた人たちはこちらへ来た。若い公達が多かった。

「鞠もこちらへ持って来ましたか。だれとだれがあちらへ来ているのか」

大将の所にいた官人たちの名があげられ、

「それもこちらへ来させましょうか」

と大将は父君へ申した。寝殿の東側になった座敷には桐壺の方がいたのであるが、若宮をお伴いして東宮へ参ったあとで、そこは空き間になっていて静かだった。蹴鞠の人たちは流水を避けて競技によい場所を求めて皆庭へ出た。太政大臣家の公達は頭弁などという成年者も兵衛佐、太夫の君などという少年上がりの人も混じって来ているが、他に比べて皆一風采がきれいであつた。時間がたち日暮れになるまで、この競技に適して風も出ないよい日だと皆言つて庭上の遊びは続いていたが、頭弁も闘志がおさえられなくなつたらしくその中へ出て行つた。

「文官の誇りにする弁さえ傍観していられないのだから、高官になつていても若い衛府えふの人などはおとなしくしている必要もない。私の青春時代にもそうしたこと仲間にはいりえないのが残念に思われたものだ。しかし軽々しく人を見せるね、この遊びは」

院がお勧めになるので、大将も衛門督も皆出て、美しい桜の蔭かげを歩き歩いていたこの夕方の庭のながめはおもしろかった。あまり静かでないこの遊戯であるが、乱暴な運動とは見えないのも所がら人柄によるものなのであろう。趣のある庭の木立ちのかすんだ中に花の木が多く、若葉の梢こすえはまだ少ない。遊び気分の多いものであつて、鞠の上げようのよし悪しを競つて、われ劣らじとする人ばかりであつたが、本気でもなく出て混じつた衛門督えもんのかみの足もとに及ぶ者はなかつた。顔がきれいで風采の艶えんなこの人は十分身の取りなしに注意して鞠を蹴り出すのであつたが、自然にその姿の乱れるのも美しくあつた。正面の階段しほはしの前にあつた桜の木蔭で、だれも花のことなどは忘れて競技に熱中しているのを、院も兵部卿の宮すみも隅すみの所の欄干によりかかつて見ておいでになつた。それぞれ特長のある巧みさを見せて勝負はなお進んでいったから、高官たちまでも今日はたしなみを正しくはおられぬように、冠の額を少し上へ押し上げたりなどしていた。大将も官位の上でいえば軽率なふるまいをすることになるが、目で見た感じはだれよりも若く美しく、桜の色の直衣のうしの少し柔らかかに着一馴ならされたのをつけて、指貫さしぬきの裾すそのふくらんだのを少し引き上げた姿は軽々しい形態でなかつた。雪のような落花が散りかかるのを見上げて、萎しおれた枝を少し手に折つた大将は、階段きざはしの中ほどへすわつて休息をした。衛門督が続いて休みに来ながら、

「桜があまり散り過ぎますよ。桜だけは避けたらいいでしょうね」

などと言つて歩いてゐるこの人は姫宮のお座敷を見ぬように見て
 いると、そこには落ち着きのない若い女房たちが、あちらこちらの
 御簾みすのきわによつて、透き影に見えるのも、端のほうから見えるの
 も皆その人たちの派手はでな色の褸袖つまとぐち口ばかりであつた。暮れゆく春へ
 の手向けの幣ぬさの袋かと思える。几帳きちょうなどは横へ引きやられて、締ま
 りなく人のいる気配けはいがあまりにもよく外へ知れるのである。

支那産しなの猫ねこの小さくかわいいのを、少し大きな猫があとから追つ
 て来て、にわかみすに御簾の下から出ようとする時、猫の勢おそいに怖れて
 横へ寄り、後ろへ退のこうとする女房の衣きぬずれの音がやかましいほど
 外へ聞こえた。この猫はまだあまり人になつかないのであつたのか、
 長い綱なわにつながれていて、その綱が几帳の裾すそなどにもつれるのを、
 一所懸命じけんめいに引いて逃げようとするために、御簾の横があらわに斜はすに
 上がったのを、すぐに直そうとする人がない。その柱の所にいた
 女房などもただあわてるだけでおじけ上あがっている。几帳より少し
 奥おくの所に袿姿つむぎすがたで立つてゐる人があつた。階段のある正面から一つ西
 になつた間まの東の端であつたから、あらわにその人の姿は外から見
 られた。紅梅がさね一襲がさねなのか、濃い色と淡うすい色をたくさん重ねて着たの
 がはなやかで、着物の裾は草紙の重なつた端のように見えた。桜の
 色の厚織物の細長らしいものを表着うわぎにしていた。裾まであざやかに
 黒い髪の毛は糸をよつて掛けたようになびいて、その裾のきれいに
 切りそろえられてあるのが美しい。身丈みぢに七、八寸余つた長さであ
 る。着物の裾の重なりばかりが量かさ高くて、その人は小柄こがらなほっそり
 とした人らしい。この姿も髪のかかつた横顔も非常に上品な美人で
 あつた。夕明りで見るのであるからこまごまとした所はわからなく
 て、後ろにはもう闇やみが続いてゐるようなのが飽き足らず思われた。

鞠に夢中でいる若公達が桜の散るのにも頓着していぬふうな庭を見
 ることに身が入って、女房たちはまだ端の上がった御簾に気がつか
 ないらしい。猫のあまりに鳴く声を聞いて、その人の見返った顔に
 余裕のある気持ちの見える佳人であるのを、衛門督は庭にいて発見
 したのである。大將は簾が上がって中の見えるのを片腹痛く思った
 が、自身が直しに寄って行くのも軽率らしく思われることであつた
 から、注意を与えるために咳払いをすると、立っていた人は静かに
 奥へはいった。そうはさせながら大將自身も美しい人の隠れてしま
 ったのは物足らなかつたのであるが、そのうち猫の綱は直されて御
 簾も下りたのを見て、大將は思わず歎息の声を洩らした。ましてそ
 の人に見入っていた衛門督の胸は何かでふさがれた気がして、あれ
 はだれであろう、女房姿でない桂であつたのによつて思うのでなく
 て、人と混同すべくもない容姿から見当のほぼつく人を、なおだれ
 であろうか確かに知りたく思った。素知らぬ顔を大將は作っていた
 が、自分の見た人を衛門督の目にも見ぬはずはないと思つて、その
 貴女をお気の毒に思った。何ともしがたい恋しく苦しい心の慰めに、
 大將は猫を招き寄せて、抱き上げるとこの猫にはよい薫香の香が染
 んでいて、かわいい声で鳴くのものなんとなく見た人に似た感じが
 するといふのも多情多感といふものであろう。

院がこの若い二人の高官のいるほうを御覧になつて、

「高官たちの席があまりに軽々しい。こちらへおいでなさい」

とお言いになつて、対のほうの南の座敷へおはいりになつたので
 人々も皆従つて行つた。兵部卿の宮はまた室の中へ院とごいっしょ
 に席を移してお落ち着きになつた。高官らもごいっしょである。殿
 上役人たちは敷き物を得て縁側の座に着いた。饗応といふふうでな

く棗餅つばきもち、梨なし、蜜柑みかんなどが箱の蓋ふたに載せて出されてあつたのを、若い人たちは戯れながら食べていた。乾物類さかなの肴さかなでお座敷の人々へは酒杯が勧められた。衛門督はじつと思ひ入ったふうをしていて、ともしれば庭の桜へ目をやった。大將はあの場を共に見た人であつたから、衛門督が作っている幻の何であるかがわかる気もするのであつた。軽々しくあまりな端近へ出ておられたものであると大將は姫宮をお思ひした。あれだけの方がなされることでもないのであるがと思われてくるにしたがつて、今まで不可解であつたことに合点のゆく気もした。そんな欠点がおありになるために、世間でたいした方のようにいう割合に院の御愛情が薄いという理由が発見されたのである。貴女らしいお慎みおつとが足らず、無邪気であることは可憐かれんなものだが、その人の良人おつとになつては安心できないことであろうと軽侮する念も起こつた。衛門督は道義も何も思わぬ盲目的な情熱に燃えていた。思いも寄らぬ物の間からほのかながらも確かにその方を見ることができたのも、自分の長い間の恋の祈りが神仏に受け入れられた結果であろうと、こんな解釈をしながらも、ただそれが瞬間のことであつたのを残念がった。

院は座中の人に昔の話をいろいろあそばして、

「太政大臣は私の相手で勝負をよく争われたものだが、蹴鞠けまりの技術だけはとうてい自分が敵することのできぬ巧さがおありになつた。

親のすべてが子に現われてくるものではなからうが、やはり芸の道だけは不思議によく伝わるものだね。あなたの今日のできばえはたいしたものだつた」

と衛門督へお言いになると、微笑を見せて

「他の点では父祖を恥ずかしめるような私でございますが、遺伝の

蹴鞠の芸だけで後世へ名を残すことになりましたらそれで無事かもしれません」

と言った。

「何も悪くはない。どんなことでも人に出抜けたことは書いておいて後世へ伝うべきだから」

などと冗談じょうだんをお言いになる院の御様子ごようすの若々しくて、またお美しいのを衛門督ゑもんとくは見て、自分は何によつてこの方をおいて宮のお心を自分へ向けることができようと院と自身を比較してもみたが、何からも優越したものを見いだされないのでつい知り、衛門督は寂しい心になつて六条院を退出した。大将も帰りを共にして衛門督と車中で話し合った。

「春の日の退屈たいくつを紛らわすには六条院へ伺うのがいちばんよいことですね。また今日のようなひまの出来た時分、桜の散らぬ間にもう一度来るようにおっしゃっていましたから、春を惜しみがてらにこの月のうちにもう一度、その時は小弓をお供にお持たせになつていらつしやい」

と大将は言うのであつた。道の別れ目までこうして同車して行くのであつたが、衛門督は女三にょさんの宮みやのお噂うわさばかりがしたくて、

「院は今でも平生のお住居すまいは対のほうに決めていらつしやるようですね。宮様はどんな気持ちでいられるだろう。朱雀院すざく様が御秘蔵になすつた方が、第一の寵ちやうを他の夫人に譲つて、しかも同じ家におられるかと思うとお気の毒ですね」

こんな無遠慮なことを言い出すと、

「そんな失礼なことを院はなさいませんよ。対の夫人は普通にお婚めとりになつたのでなく、御自身でお育てになつた方だという事実から、

少し違った親しみがおありになるだけでしよう。宮様を何事の上にも第一夫人として立てておられますよ」

と大將は否定した。

「そんなことはまあ言わないでお置きなさい。私は皆聞いて知っていますよ。とてもお気の毒な御様子でおられる時があるのだと言いますよ。光輝ある院の姫君がそれですよ。もったいない気のするものが当然じゃありませんか。」

「#ここから2字下げ」

いかなれば花に木伝ふ鶯うぐいすの桜を分きてねぐらとはせぬ

「#ここで字下げ終わり」

春の鳥でいながらねえ。私には合点のいかないことですよ」

とも言う。穩当でないたとえをこの人はする、こんな乱暴なことを言うようになったのは、自分が想像したとおりに姫君を見た友が恋を覚えたものに違いないと大將は思った。

「#ここから1字下げ」

「深山木みやまきに峙ねぐら定むるはこ鳥もいかでか花の色に飽くべき

「#ここで字下げ終わり」

あなたは誤解の上に立脚してお言いになるのだ」

と反対して言ったが、興奮している右衛門督とこの問題を語ることは避くべきであると思ひ、あとはほかの話に紛らして別れた。

衛門督はまだ太政大臣家の東の対に独身で暮らしているのである。

結婚にある理想を持っていて長くこうして来たのであるが、時には非常に寂しく心細く思うこともあるものの、自分ほどの者に思うことのかなわなないことはないという自信を多分に持って、そうした寂寥感ようつは心から追っているものであった。それがこの日の夕べからは頭が痛み出し、堪えがたい煩悶はんもんをいだくようになった。どんな時にまたあれだけの機会がつかめるであろう、どんなことも目だたずに済む階級の恋人であれば、その人の謹慎日とか、自分の方角一除けとか、巧みな策略を作って、居所へうかがい寄ることもできるのであるが、これは言葉にも言われぬほどの深窓に隠れた貴女きじょなのであるから、どんな手段でも自分はこれほど愛する心をその人に告げるだけのこともできようとは思われないと衛門督は思うと胸が痛く苦しくなるあまりに、いつも書く小侍従への手紙を書いて送った。

「#ここから1字下げ」

この間は春風に浮かされまして御園みそののうちへ参りましたが、どんなにその時の私がまた御心証を悪くしたとかと悲しまれます。その夕方から私は病気になりました、続いて今も病床にぼんやりと物思いをしております。

「#ここで字下げ終わり」

などと書かれてあって、

「#ここから2字下げ」

よそに見て折らぬ歎なげきはしげれどもなごり恋しき花の夕かけ

「#ここで字下げ終わり」

という歌も添っていた。宮のお姿を衛門督が見たことなどは知ら

ない小侍従であつたから、ただいつもの物思いという言葉と同じ意味に解した。宮のお居間に女房たちもあまり出ていないのを見て、小侍従は衛門督の手紙を持って参つた。

「この人がこの手紙にもございますように、今日までもまだあなた様をお思ひすることばかりを書いてまいりますので困ります。あまりに気の毒な様子を見せられますと、私まで頭がどうかしてしまいそうで、どんな間違つた手引きなどをいたすかしれません」

小侍従は笑いながらこう言うのであつた。

「いやなことを言う人ね、おまえは」

無心なふうにそうお言いになつて、宮は小侍従のひろ拵げた手紙をお読みになつた。「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくてひねもす今日はながめ暮らしつ」という古歌を引いて書いてある所を御覧になつた時に、蹴鞠けまりの日の御簾みすの端の上がつていたことを思ひ出すことがおできになり、お顔が赤くなつた。院が何度も、

「大将に見られないようになさい。あまりにあなたは幼稚にできていらつしやるから、うっかりとしていてのぞかれることもあるでしょうから」

こうおいまし誡めになつたのをお思ひ出しになり、大将からあの時のことが言われた時、院から自分はどんなにお叱しかりを受けることであるかと、手紙の主が見たことなどは問題にもあそばさずに、それを心配あそばしたのは幼いお心の宮様である。平生よりもものをお言ひにならず黙っておしまいになつたのを見て、小侍従はつきほのない気がしたし、この上しいて申し上げてよいことでもなかつたから、そつと手紙を持って行つた。そして忍んで返事を書いた。

「#ここから1字下げ」

この間はあまりに澄ましておいでになったものですから、^{けいへつ}軽蔑をしていらっしやると思っていたのですが「見ずもあらず」とはどういうことなのでしょう。もったいないことですね。

「#ここから2字下げ」

今さらに色にな出でそ山桜及ばぬ枝に思ひかけきと

「#ここから1字下げ」

むだなことはおよしなさいませ。

「#ここで字下げ終わり」

こんな手紙である。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

「この間はあまりに澄ましておいでになったものですから、^{けいへつ}軽蔑をしていらっしやると思っていたのですが「見ずもあらず」とはどういうことなのでしょう。もったいないことですね。」の部分は、手紙の一部であると判断し、他の箇所に合わせて一字下げとしました。

入力：上田英代

校正：門田裕志、小林繁雄

2004年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

若菜（下）

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）先^まづ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）幾^{ひき}一^き疋^{びき}かの

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと

行数）

（例）皇 「# 鹿ノ章」、第^こ3^う水準^じ1-94-7第^ご3

「#地から3字上げ」二^こころたれ先^まづもちてさびしくも悲

「#地から3字上げ」しき世をば作り初^そめけん （晶子）

小侍従が書いて来たことは道理に違いないがまた露骨なひどい言葉だとも衛門督^{えもんのかみ}には思われた。しかももう浅薄な女房などの口先だ

けの言葉で心が慰められるものとは思われないのである。こんな人
を中へ置かずに一言でも直接恋しい方と問答のできることは望めな
いのであろうかと苦しんでいた。限りない尊敬の念を持っている六
条院に穢辱おじやくを加えるに等しい欲望をこうして衛門督が抱くいだようにな
った。

三月やよいの終わる日には高官も若い殿上役人たちも皆六条院へ参った。
気不精になっっている衛門督はこのことを皆といっしよにするのもお
つくうなのであつたが、恋しい方のおいでになる所の花でも見れば
気の慰みになるかもしれぬと思つて出て行つた。賭弓かけゆみの競技が御所
で二月にありそうでなかつた上に、三月は帝みかどの母后きよきつきの御忌月みきつきでだめ
であるのを残念がつている人たちは、六条院で弓の遊びが催される
ことを聞き伝えて例のように集まつて来た。左右の大將は院の御養
女の婿であり、御子息であつたから列席するのがむろんで、そのた
めに左右の近衛府このえふの中將に競技の参加者が多くなり、小弓という定
めであつたが、大弓の巧者な人も来ていたために、呼び出されてそ
れらの手合わせもあつた。殿上役人でも弓の芸のできる者は皆左右
に分かれて勝ちを争いながら夕べに至つた。春が終わる日の霞かすみの下
にあわただしく吹く夕風に桜の散りかう庭がだれの心をも引き立て
て、大將たちをはじめ、すでに酔つている高官たちが、
「奥のかたがたからお出しになつた懸賞品が皆平凡な品でないのを、
技術の専門家にだけ取らせてしまふのはよろしくない。少し純真な
下手者へたものも競争にはいりましょう」

などと言って庭へ下りた。この時にも衛門督えもんのかみがめいつたふうでじ
つとしているのがその原因を正確ではないにしても想像のできる大
將の目について、困つたことである。不祥事が起こってくるのでは

ないかと不安を感じだし、自分までも一つの物思いのできた気がした。この二人は非常に仲がよいのである。大将のために衛門督が妻の兄であるというばかりでなく、古くからの友情が互いにあつて睦まじい青年たちであるから、一方がなんらかの煩悶にとらえられているのを、今一人が見てはかわいそうで堪えられがなくなるのである。衛門督自身も院のお顔を見ては恐怖に似たものを感じて、恥ずかしくなり、誤った考えにとらわれていることはわが心ながら許すべきことでない、少しのことにも人を不快にさせ、人から批難を受けることはすまいと決心している自分ではないか、ましてこれほどおそれおおいことではないかと心を鞭うっている人が、また慰められなくなつて、せめてあの時に見た猫でも自分は得たい、人間の心の悩みが告げられる相手ではないが、寂しい自分はせめてその猫を馴つけてそばに置きたいとこんな気持ちになつた衛門督は、氣遣いじみた熱を持って、どうかしてその猫を盗み出したいと思うのであるが、それすらも困難なことではあつた。

衛門督は妹の女御の所へ行つて話すことで悩ましい心を紛らせようと試みた。貴女らしい慎しみ深さを多く備えた女御は、話し合つている時にも、兄の衛門督に顔を見せるようなことはなかつた。同胞ですらわれわれはこうして慣らされているのであるが、思いがけないお顔を外にいる者へ宮のお見せになつたことは不思議なことであると、衛門督もさすがに第三者になつて考えれば肯定できないこととは思われるのであるが、熱愛を持つ人に対してはそれを欠点とは見なされないのである。衛門督は東宮へ伺候して、むろん御兄弟でいらせられるのであるから似ておいでになるに違いないと思つて、お顔を熱心にお見上げするのであつたが、東宮ははなやかな愛嬌な

どはお持ちにならぬが、高貴の方だけにある上品に艶なお顔をしておいでになった。帝のお飼になる猫の幾一疋かの同胞があちらこちらに分かれて行っている一つが東宮の御猫にもなっていて、かわいい姿で歩いているのを見ても、衛門督には恋しい方の猫が思い出されて、

「六条院の姫宮の御殿におりますのはよい猫でございます。珍しい顔でして感じがよろしいのでございます。私はちよつと拝見するところができました」

こんなことを申し上げた。東宮は猫が非常にお好きであらせられるために、くわしくお尋ねになった。

「支那の猫でございまして、こちらの産のものとは変わっております。皆同じように思えば同じようなものでございますが、性質の優しい人一馴れた猫と申すものはよろしいものでございます」

こんなふうには宮がお心をお動かしになるようにばかり衛門督は申すのであった。

あとで東宮は淑景舎の方の手から所望をおさせになったために、女三の宮から唐猫が献上された。噂されたとおりに美しい猫であると言つて、東宮の御殿の人々はかわいがっているのであったが、衛門督は東宮は確かに興味をお持ちになつてお取り寄せになりそうであるとお察していたことであつたから、猫のことを知りたく思つて幾日かのちにまた参つた。まだ子供であつた時から朱雀院が特別にお愛しになつてお手もとお使いになつた衛門督であつて、院が山の寺へおはいりになつてからは東宮へもよく伺つて敬意を表していた。琴など御教授をしながら、衛門督は、

「お猫がまたたくさんまいりましたね。どれでしょう、私の知人は」

と言いながらその猫を見つけた。非常に愛らしく思われて衛門督は手でなでていた。宮は、

「實際一容貌きりようのよい猫だね。けれど私には馴なつかないよ。人見知りをする猫なのだね。しかし、これまで私の飼っている猫だつてたいしてこれには劣せうつていないよ」

とこの猫のことを仰せられた。

「猫は人を好ききらいなどあまりせぬものでございますが、しかし賢い猫にはそんな知恵があるかもしれませぬ」

などと衛門督は申して、また、

「これ以上のおそばに幾つもいるのでございまして、これはしばらく私にお預まかせください」

こんなお願いをした。心の中では愚かしい行為をするものであるという気もしているのである。

結局一衛門督えもんのかみは望みどおりに女三の宮の猫を得ることができて、夜などもそばへ寝させた。夜が明けると猫を愛撫あいぶするのに時を費やす衛門督であった。人一馴なつきの悪い猫も衛門督にはよく馴れて、どうかすると着物の裾すそへまつわりに来たり、身体からだをこの人に寄せて眠りに来たりするようになって、衛門督はこの猫を心からかわいがるようになった。物思いをしながら顔をながめ入っている横で、にようによう「#」にようによう「」に傍点」とかわいい声で鳴くのを撫なでながら、愛におこる小さき者よと衛門督はほほえまれた。

「#ここから1字下げ」

「恋ひわぶる人の形見と手ならせば汝なれよ何とて鳴く音ねなるらん

「#ここで字下げ終わり」

これも前生の約束なんだろうか」

顔を見ながらこう言うと、いよいよ猫は愛らしく鳴くのを懐中に入れて衛門督は物思いをしていた。女房などは、

「おかしいことですね。にわかには猫を御一寵愛ちよんあいされるではありませんか。ああしたのものには無関心だった方がね」

と不審がつてささやくのであった。東宮からお取りもどしの仰せがあつて、衛門督はお返しをしないのである。お預かりのものを取り込んで自身の友にしていた。

左大将夫人の玉鬘たまかすらの尚侍ないしのかみは真実の兄弟に対するよりも右大将に多く兄弟の愛を持っていた。才気のあるはなやかな性質の人で、源大將の訪問を受ける時にも睦まじいふうに取り扱つて、昔のとおりに親しく語つてくれるため、大将も淑景舎しげいしやの方が羞恥はづかしを少なくして打ち解けようとする気持ちのないようなのに比べて、風変わりな兄弟愛の満足がこの人から得られるのであった。左大将は月日に添えて玉鬘を重んじていった。もう前夫人は断然離別してしまつて尚侍が唯一の夫人であつた。この夫人から生まれたのは男の子ばかりであるため、左大将はそれだけを物足らず思い、真木柱まきはしらの姫君を引き取つて手もとへ置きたがつているのであるが、祖父の式部卿しきぶきやうの宮が御同意をあそばさない。

「せめてこの姫君にだけは人から譏そしられない結婚を自分がさせてやりたい」

と言つておいでになる。帝みかどは御一伯父おじのこの宮に深い御愛情をお持ちになつて、宮から奏上されることにお背そむきになることはおでき

にならないふうであつた。もともからはなやかな御生活をしておいでになつて、六条院、太政大臣家に続いての権勢の見える所で、世間の信望も得ておいでになつた。左大将も第一人者たる将来が約束されていゝ人であつたから、式部卿の宮の御孫一女、むすめ左大将の長女である姫君を人は重く見ているのである。求婚者がいろいろな人の手を通じて来てすでに多数に及んでいるが、宮はまだだれを婿にと選定されるふうもなかつた。かれにその気があればと宮が心でお思ひになる衛門督は猫ほどにも心を惹かぬのかまつたくの知らず顔であつた。左大将の前夫人は今も病的な、陰気な暮らしを続けて、若い貴女のために朗らかなふんいき雰囲気を作ろうとする努力もしてくれないために、姫君は寂しがつて、人づてに聞くままはは継母の生活ぶりにあこがれを持つていた。こうした明るい娘なのである。

ひょうぶぎょう兵部卿の宮は今も御独身で、熱心にお望みになつた相手は皆ほかへ取られておしまいになる結果になつて、世間体も恥ずかしくお思ひになるのであつたが、この姫君に興味をお感じになり、縁談をお申し入れになると、式部卿の宮は、

「私はそう信じているのだ。大事に思う娘は宮仕えに出すことを第一として、続いては宮たちと結婚させることがいいとね。普通の官吏と結婚させるのを頼もしいことのように思つて親たちが娘の幸福のためにそれを願うのは卑しい態度だ」

とお言ひになつて、あまり求婚期間の悩みもおさせにならずに御同意になつた。兵部卿の宮はこの無造作な決まり方を物足らぬようにもお思ひになつたが、けいべつ軽蔑しがたい相手であつたから、ずるずる延ばして話の解消をお待ちになることもおできにならないで、通つて行くようになつた。式部卿の宮はこの婿の宮を大事にあ

そばすのであった。宮は幾人もの女王にょおうをお持ちになつて、その宮仕え、結婚の結果によつて苦勞をされることの多かつたのに懲りておいでになるはずであるが、最愛の御孫女のためにまたこうした婿かしずきをお始めになつたのである。

「母親は時がたつにしたがつて病的な女になるし、父親はそちらの意志には従わない子だと言つてそまつに見ている姫君だからかわいそうでならぬ」

などとお言いになつて、新夫婦の居間の裝飾まで御自身で手を下してなされたり、またお指函さしずをされたりもするのであつた。兵部卿の宮はお亡なくしになつた先夫人をばかり恋しがつておいでになつて、その人に似た新婦を得たいと願つておいでになつたために、この姫君を、悪くはないが似た所がないと御覽になつたせいか、通つておいでになるのにおつくうなふうをお見せになつた。式部卿の宮は失望あそばした。病人である母君も気分 of 常態になつてゐる時にはこの娘の思うようでない結婚を歎なげいて、いよいよ人生をいやなものにきめてしまった。父親の左大将もこの話を聞いて、自分のあやぶんだとおりの結果になつたではないか、多情者の宮様であるからと思つて、初めから自分が賛成しなかつた婿であつたから困つたことであると歎いていた。玉鬘夫人たまかすらは宮のお情けの薄さを継娘まむすめの不幸として聞いていながら、自分がもし結婚をしてそうした目にあつていたら、六条院の人々へも、実父の家族へも不名誉なことになるのであつたと思つた。そして左大将の妻になつた運命を悲しむ気もなくなり、継娘に限りなく同情した。その自分の処女時代にも兵部卿の宮を良人おとこにしようとは少しも思わなかつた。ただあれだけの情熱を運んでくださった方が、左大将と平凡な夫婦になつてしまつたこと

を輕蔑^{けいべつ}しておいでにならないかとそれ以来恥ずかしく思っていたのであると玉鬘夫人は思い、その宮が継娘の婿におなりになって、自分のことをどう聞いておいでになるであろうと思つと晴れがましいような気もするのであつた。この夫人からも新婚した姫君の衣裳^{いしやう}その他の世話をした。前夫人がどう恨んでいるかというようなことは知らぬふうにして、長男、次男を中にして好意を寄せる尚侍^{なしいのかみ}に前夫人は友情をすら覚えているのであるが、式部卿の宮家には大夫人と云う性質の曲がつた人が一人いて、この人は常にだれのこと憎んで、罵言^{ののち}をやめないのである。

「親王がたというものは一人だけの奥さんを大事になさるといふことで、派手^{はで}な生活のできない補いにもなるうというものだけに」

と陰口^{かげぐち}をするのが兵部卿の宮のお耳にはいつた時、不愉快なことを聞く、自分に最愛の妻があつた時代にも他との恋愛の遊戯はやめなかつた自分も、こうまではひどい恨み言葉は聞かないでいたとお思ひになつて、いつそう亡^なき夫人を恋しく思召^{おぼしめ}すことばかりがつつて、自邸で寂しく物思ひをしておいでになる日が多かつた。そうはいふものの二年もその状態で続いて来た今では、ただそれだけの淡い関係の夫婦として済んで行つた。

歲月^{としつき}が重なり、帝^{みかど}が即位をあそばされてから十八年になつた。

「将来の天子になる子のないことで自分には人生が寂しい。せめて気楽な身の上になつて自分の愛する人たちと始終出逢うこともできるようにして、私人として楽しい生活がしてみたい」

以前からよくこう帝は仰せられたのであつたが、重く御病氣をあそばされた時にわかには譲位を行なわせられた。世人は盛りの御代^{みよ}をお捨てあそばされることを残念がつて歎^{なげ}いたが、東宮ももう大人^{おとな}

になつておいでになつたから、お変わりになつても特別変わったこともなかつた。ゆるぎない大御代おおみよと見えた。太政大臣は関白職の辞表を出して自邸を出なかつた。

「人生の頼みがたさから賢明な帝王さえ御位みくらいをお去りになるのであるから、老境に達した自分が挂冠けいかんするのに惜しい気持ちなどは少しもない」

と言つていたに違いない。左大將が右大臣になつて関白の仕事もした。御母君にょごの女御は新帝の御代を待たずに亡なくなつていたから、后きさきの位にお上のぼされになつても、それはもう物の背面のことになつて寂しく見えた。六条の女御のお生みした今上第一の皇子が東宮におなりになつた。そうなるはずのことはだれも知つていたが、目前にそれが現われてみればまた一家の幸福さに驚きもされるのであつた。右大將が大納言を兼ねて順序のままに左大將に移り、この人も幸福に見えた。六条院は御讓位になつた冷泉院れいぜいに御一後嗣ごうしのないのを御心の中では遺憾おぼしめに思召された。実は新東宮だつて六条院の御血統なのだが、冷泉院の御在位中には御一煩悶はんもんもなく過あやごされたほど、例の密通の秘密は隠しおおされたが、そのかわりにこの御系統が未まで続かぬように運命づけられておしまいになつたのを六条院は寂しくお思いになつたが、御口外あそばすことでもないのでただお心で味けなくお感じになるだけであつた。東宮の御母女御は皇子たちが多くお生まれになつて帝みかどの御一寵ちゆうはますます深くなるばかりであつた。またも王氏の人が后にお立ちになることになつていふことで、今度で三代にもなつていたから何かと飽き足らぬらしい世論があるのをお知りになつた時、冷泉院の中宮ちゅうぐうは以前もこうした場合に六条院の強い御支持があつて、自分の後の位は定きまつたのであると過去を

回想あそばしてますます院の恩をお感じになった。

冷泉院の帝は御期待あそばされたとおりに、御窮屈なお思いもなしに御幸みゆきなどもおできになることになって、あちらこちらと御遊幸あそばされて、今日の御境遇ほどお楽しいものはないようにお見受けされるのであった。帝は六条院においてになる御妹の姫宮に深い関心をお持ちになったし、世間がその方に払う尊敬も大きいのであるが、なお紫夫人以上の夫人として六条院の御寵を受けておいでになるのではなかった。年月のたつにしたがつて女王と宮の御中にこまやかな友情が生じて、六条院の中は理想的な穏やかな空気に満たされているが、紫夫人は、

「もう私はこうした出入りの多い住居すまいから退きまして、静かな信仰生活がしたいと思います。人生とはこんなものということも経験してしまったような年齢としにもなっているのですもの、もう尼になることを許してくださいませんか」

と、時々まじめに院へお話しするのであるが、
 「もつてのほかですよ。そんな恨めしいことをあなたは思うのですか。それは私自身が実行したいことなのだが、あなたがあとに残って寂しく思ったり、私といっしょにいる時と違った世間の態度を悲しく感じたりすることになってはという気がかりがあるために現状のままにいるだけなのですよ。それでもいつか私の実行の日が来るでしょう、あなたはそのあとのことになさい」

などとばかり院はお言いになって、夫人の志を妨げておいでになった。女御は今も女王を真実の母として敬愛していて、明石夫人は隠れた女御の後見をするだけの人になって謙遜けんそんさを失わないでいることは、かえって将来のために頼もしく思われた。尼君もうれし泣

きの涙を流す日が多くて、目もふきただれて幸福な老婆の見本になつていた。

住吉の神への願果たしを思い立つて参詣する女御は、以前に入道から送つて来てあつた箱をあけて、神へ約した条件を調べてみたが、それにはかなり大がかりなことを多く書き立ててあつた。年々の春秋の神樂とともに必ず長久隆運の祈りをするなど、今日の女御の境遇になつていなければ実行のできぬことであつた。ただ走り書きにした文章にも入道の学問と素養が見え、仏も神も聞き入れるであろうことが明らかに知られた。どうしてそんな世捨て人の心にこんな望みの楼閣が建てられたのであらうと、子孫への愛の深さが思われもし、神や仏に済まぬ氣もされた。並みの人ではなくてしばらく自分の祖父になつてこの世へ姿を現わしただけの、功德を積んだ昔の聖僧ではなかつたかなと思われ、女御に明石の入道を畏敬する心が起こつた。今度はまだ女御の行なうことにはせず、六条院の参詣におつれになる形式で京を立つたのであつた。

須磨明石時代に神へお約しになつたことは次々に果たされたのであるが、その以後もまた長く幸運が続き、一門子孫の繁栄を御覧になることによつても神の冥助は忘れられずに六条院は紫の女王も伴つて御参詣あそばされるのであつて、はなやかな一行である。簡素を旨として国の煩いになることはお避けになつたのであるが、この御身分であつてはある所までは必ず備えられねばならぬ旅の形式があつて、自然に大きなことにもなつた。公卿も二人の大臣以外は全部一供奉した。神前の舞い人は各一衛府の次將たちの中の容貌のよいのを、さらに背文をそろえてとられたのであつた。落選して歎く風流公子もあつた。奏樂者も石清水や賀茂の臨時祭に使われる専門家

がより整えられたのであるが、ほかから二人加えられたのは近衛府の中で音楽の上手うまいとして有名になつてゐる人であつた。また神楽のほうを受け持つ人も多数に行つた。宮中、院、東宮の殿上役人が皆御命令によつて供奉くふそんの中なかにいるのも無数にあつた。華奢かしやを尽くした高官たちの馬、鞍くら、馬添まぞへい侍、隨身、小侍の服装までもきらびやかな行列であつた。院の御車みくるまには紫夫人と女御をいっしょに乗せておいでになつて、次の車には明石夫人とその母の尼とが目だたぬふうに乗つていた。それには古い知り合ひの女御の乳母めのとが陪乗したのである。女房たちの車は夫人付きの者のが五台、女御のが五台、明石夫人に属したのが三台で、それぞれに違つた派手はでな味のある飾りと服装が人目に立つた。明石の尼君がいっしょに来たのは、

「今度の参詣に尼君を優遇して同伴しよう。老人の心に満足ができるほどにして」

と院がお言い出しになつたのであつて、はじめ明石夫人は、

「今度は院と女王様が主になつての御参詣なんですから、あなたがどが混じつておいでになつては私の立場も苦しくなりますからね、女御さんがもう一段御出世をなすつたあとで、その時に私たちだけでお参りをいたしましょう」

と言つて、尼君をとどめていたのであるが、老人はそれまで長命で生きておられる自信もなく心細がつてそつと一行に加わつて来たのである。運命ちよんめいの寵児ちやうじであることがしかるべきことと思われる女王や女御よりも、明石の母と娘の前生の善果がこの日ほどあざやかに見えたこともなかつた。

十月の二十日はつかのことであつたから、中の忌垣いがかきに這はう葛くずの葉も色づく時で、松原の下の雑木もみじの紅葉もみじが美しく波の音だけ秋であるとも

いわれない涙のながめであった。本格的な支那楽一高麗楽よりも東遊びの音楽のほうがかんな時にはびったりと、人の心にも波の音にも合っているようであった。高い梢で鳴る松風の下で吹く笛の音もほかの場所で聞く音とは変わって身にしみ、松風が琴に合わせる拍子は鼓を打つてするよりも柔らかくそして寂しくおもしろかった。伶人の着けた小忌衣竹の模様と松の緑が混じり、挿頭の造花は秋の草花といっしょになったように見えるが、「求の子」の曲が終わりに近づいた時に、若い高官たちが正装の袍の肩を脱いで舞の場へ加わった。黒の上着の下から臙脂、紅紫の下襲の袖をにわかに出し、それからまた下の袖の赤い袂の見えるそれらの人の姿を通り雨が少しぬらした時には、松原であることも忘れて紅葉のいろいろが散りかかるように思われた。その派手な姿に白くほおけた萩の穂を挿してほんの舞の一節だけを見せてはいったのがきわめておもしろかった。

院は昔を追憶しておいでになった。途中で不幸な日のあったことも目の前のことのように思われて、それについては語る人もお持ちにならぬ院は、関白を退いた太政大臣を恋しく思召された。車へお帰りになった院は第二の車へ、

「#ここから2字下げ」

たれかまた心を知りて住吉の神代を経たる松にこと問ふ

「#ここで字下げ終わり」

という歌を懐中紙に書いたのを持たせておやりになった。尼君は心を打たれたように萎れてしまった。今日のはなやかな光景を見る

につけても、明石を源氏のお立ちになったころの歎かわしかったこと、女御が幼児であったころにした悲しい思いが追想されて、運命に恵まれていることを知った。そしてまた山へはいつた良人も恋しく思われて涙のこぼれる気持ちをおさえて、

「#ここから2字下げ」

住の江を生けるかひある渚とは年ふるあまも今日や知るらん

「#ここで字下げ終わり」

と書いた。お返事がおそくなつては見苦しいと思い、感じたままの歌をもつてしたのである。

「#ここから2字下げ」

昔こそ先づ忘れね住吉の神のしるしを見るにつけても

「#ここで字下げ終わり」

とまた独言もしていた。一行は終夜を歌舞に明かしたのである。

二十日の月の明りではるかに白く海が見え渡り、霜が厚く置いて松原の昨日とは変わった色にも寒さが感じられて、快く身にしむ社前の朝ぼらけであった。自邸での遊びには馴れていても、あまり外の見物に出ることを好まなかった紫の女王は京の外の旅もはじめての経験であつたし、すべてのことが興味深く思われた。

「#ここから2字下げ」

住の江の松に夜深く置く霜は神の懸けたる木綿かづらかも

「#ここで字下げ終わり」

紫夫人の作である。小野篁の「比良の山さへ」と歌った雪の朝を
思つて見ると、奉った祭りを神が嘉納された証の霜とも思われて頼
もしいのであった。

女御、

「#ここから2字下げ」

神人の手に取り持たる榊葉に木綿かけ添ふる深き夜の霜

「#ここで字下げ終わり」

中務の君、

「#ここから2字下げ」

祝子が木綿うち紛ひ置く霜は実にいちじるき神のしるしか

「#ここで字下げ終わり」

そのほかの人々からも多くの歌は詠まれたが、書いておく必要が
ないと思つて筆者は省いた。こんな場合の歌は文学者らしくしてい
る男の人たちの作も、平生よりできの悪いのが普通で、松の千歳か
ら解放されて心の琴線に触れるようなものはないからである。

朝の光がさし上るころにいよいよ霜は深くなって、夜通し飲んだ
酒のために神楽の面ようになった自身の顔も知らずに、もう篝火
も消えかかっている社前で、まだ万歳万歳と榊を振つて祝い合つて
いる。この祝福は必ず院の御一族の上に形となって現われるである

うとますますはなばなく未来が想像されるのであった。非常におもしろくて千夜の時のあれと望まれた一夜がむぞうさに明けていったのを見て、若い人たちは渚なぎさの帰る波のようにここを去らねばならぬことを残念がった。はるばると長い列になって置かれた車の、垂たれ絹の風に開く中から見える女衣装は花の錦にしきを松原に張ったようであつたが、男の人たちの位階によつて変わった色の正装をして、美しい膳部を院の御車みくるまへ運び続けるのが布衣ほいたちには非常にうらやましく見られた。明石の尼君の分も浅香の折敷おしきに鈍色にびの紙を敷いて精進物で、院の御家族並みに運ばれるのを見ては、

「すばらしい運を持った女というものだね」

などと彼らは仲間で言い合つた。おいでになつた時は神前へささげられる、持ち運びの面倒な物を守る人数も多くて、途中の見物も十分におできにならなかつたのであつたが、帰途は自由なおもしろい旅をされた。この楽しい旅行に山へはいりきりになつた入道あすかを与らせることのできなかつたことを院は物足らず思召されたが、それまでは無理なことであろう。実際老入道がこの一行に加わつていゝとしたら見苦しいことではなかつたであろうか。その人の思い上がった空想がことごとく実現されたのであるから、だれも心は高く持つべきであると教訓をされたようである。いろいろな話題になつて明石の人たちがうらやまれ、幸福な人のことを明石の尼君という言葉もはやつた。太政大臣家の近江おうみの君は双六すじろくの勝負の賽さいを振る前には、

「明石あかしの尼様、明石の尼様」

と呪文じゅもんを唱えた。

法皇は仏勤めに精進あそばされて、政治のことなどには何の干渉

もあそばさない。春秋の行幸みゆきをお迎えになる時にだけ昔の御生活が
 お心の上に姿を現わすこともあるのであった。女三にょさんの宮みやをなお気が
 かりに思召おぼしめされて、六条院は形式上の保護者と見て、内部からの保
 護を帝みかどにお託しになった。それで女三の宮は二品にほんの位にお上げられ
 になって、得させられる封戸ふしの数も多くなり、いよいよはなやかな
 お身の上になったわけである。紫夫人は一方の夫人の宮がこんなふ
 うに年月に添えて勢力の増大していくのに対して、自分はただ院の
 御愛情だけを力にして今の所は負け目がないとしても、そのお志と
 いうものも遂には衰えるであろう、そうした寂しい時にあわない前
 に今のうちに善処したいとは常に思っていることであつたが、あま
 りに賢がるふうに思われてはという遠慮をして口へたびたびは出さ
 ないのである。院は法皇だけでなく帝までが関心をお持ちになると
 いうことがおそれおおく思召されて、冷淡にする噂うわさを立てさすまい
 というお心から、今ではあちらへおいでになることと、こちらにお
 られることがちよつと半々ほどになつていた。道理なこととは思
 いながらもかねて思つたとおりの寂しい日の来始めたことに女王にょおうは
 悲しまれたが、表面は冷静に以前のとおりにしていた。東宮に次い
 でお生まれになつた女一の宮を紫夫人は手もとへお置きしてお育て
 申し上げていた。そのお世話の楽しさに院のお留守るすの夜の寂しさも
 慰められているのであつた。御孫の宮はどの方をも皆非常にかわい
 く夫人は思っているのである。花散里夫人はなちりは紫夫人も明石夫人も御
 孫宮がたのお世話に没頭しているのがうらやましくて、左大将の典ないし
 侍のすけに生ませた若君を懇望して手もとへ迎えたのを愛して育てていた。
 美しい子でりこうなこの孫君を院もおかわいがりになつた。院は御
 子の数が少ないように見られた方であるが、こうして広く繁栄する

御孫たちによって満足をしておいでになるようである。右大臣が院を尊敬して親しくお仕えすることは昔以上で、玉鬘たまかすらももう中年の夫人になり、何かの時には六条院へ訪ねて来て紫夫人にも逢つて話し合うほかにも親しみ深い往来ゆききが始終あつた。姫宮だけは今日もなお少女おとめのようなたよりなさで、また若々しさでおいでになった。もう宮廷の人になりきってしまった女御に気づかなくなつた。おなりになった院は、この姫宮を幼い娘のように思召して、この方の教育に力を傾けておいでになるのであつた。

朱雀院すざくの法皇はもう御命数も少なくなつたように心細くばかり思召されるのであるが、この世のことなどはもう顧みないことにしたいとお考えになりながらも、女三の宮にだけはもう一度お逢いあそばされたかつた。このまま亡くなつて心の残るのはよろしくないことであるから、たいそうにはせず宮が訪ねておいでになることをお言いやりになつた。院も、

「ごもつともなことですよ。こんな仰せがなくともこちらから進んでお伺いをなさらなければならぬのに、ましてこうまでお待ちになつておられるのだから、実行しないではお気の毒ですよ」

とお言ひになり、機会をどんなふうにして作るうかと考えておいでになつた。何でもなくそつと伺候をするようなことはみすばらしくてよろしくない。法皇をお喜ばせかたがた外見の整つたことがさせたいとお思ひになるのである。来年法皇は五十におなりになるのであつたから、若菜の賀を姫宮から奉らせようかと院はお思ひつきになつて、それに付帯した法会ほっえの布施ふせにお出しになる法服の仕度したくをおさせになり、すべて精進でされる御宴会の用意であるから普通のことと變わつて、苦心の払われることを今からお指図さしずになつていた。

昔から音楽がことにお好きな方であったから、舞の人、楽の人にすぐれたのを選定しようとしておいでになった。右大臣家の下の二人の子、大将の子を典侍腹のも加えて三人、そのほかの御孫も七歳以上の皆殿上勤めをさせておいでになった。それらと、兵部卿ひょうぶけいの宮のまだ元服前の王子、そのほかの親王がたの子息、御一親戚しんせきの子供たちを多く院はお選びになった。殿上人たちの舞い手も容貌ようぼうがよくて芸のすぐれたのを選びととのえて多くの曲の用意ができた。非常な晴れな場合と思つてその人たちは稽古けいこを励むために師匠になる専門家たちは、舞のほうのも楽のほうのも繁忙をきわめていた。女三の宮は琴の稽古を御父の院のお手もとでしておいでになったのであるが、まだ少女時代に六条院へお移りになったために、どんなふうにもその芸はなつたかと法皇は不安に思召して、

「こちらへ来られた時に宮の琴の音が聞きたい。あの芸だけは仕上げたことと思うが」

と云つておいでになることが宮中へも聞こえて、

「そう言われるのは決して平凡なお手並みでない芸に違いない。一所懸命に法皇の所へ来てお弾ひきになるのを自分も聞きたいものだ」

などと仰せられたということがまた六条院へ伝わつて来た。院は、
 「今までも何かの場合に自分からも教えているが、質はすぐれてい
 るがまだたいした芸になつていないのを、何心なくお伺いされた時
 に、ぜひ弾けと仰せになつた場合に、恥ずかしい結果を生むことになつてはならない」

とお言いになつて、それから女三の宮に熱心な琴の教授をお始めになつた。変わったものを二、三曲、また大曲の長いのが四季の気

候によつて変わる音、寒い時と空気の暖かい時によつての弾き方を
 変えねばならぬことなどの特別な奥義をお教えになるのであつたが、
 初めはたよりないふうであつたものの、お心によくはいつてきて上
 手におなりになつた。昼は人の出入りの物音の多さに妨げられて、
 絃を揺すつたり、おさえて変わる音の繊細な味を研究おさせになる
 のに不便なために、夜になつてから静かに教うべきであるとお言い
 になつて、女王の了解をお求めになつて院はずつと宮の御殿のほう
 へお泊まりきりになり、朝夕のお稽古の世話をあそばされた。女御
 にも女王にも琴はお教えにならなかつたのであつたから、このお稽
 古の時に珍しい秘曲もお弾きになるのであろうことを予期して、女
 御も得ることの困難なお暇をようやくしばらく得て帰邸したのであ
 つた。もう皇子を二人お持ちしているのであるが、また妊娠して五
 月ほどになつていたから、神事の多い季節は御遠慮したいと言つて
 お暇を願つて来たのである。

十一月が過ぎるともどるようにと宮中からの御催促が急であるの
 もさしおいて、このごろの樂の音のおもしろさに女御は六条院を去
 りがたいのであつた。なぜ自分には教えていただけなかつたのかと
 院を恨めしくお思いもしていた。普通と変わつて冬の月を最もお好
 みになる院は、雪のある月夜にふさわしい琴の曲をお弾きになつて、
 女房の中の樂才のあるのに他に樂器で合奏をさせたりして楽しんで
 おいでになつた。

年末などはことに対する女王が忙しくていっさいの心配りのほかに、
 女御、宮たちのための春の仕度に追われて、

「春ののどかな気分になつた夕方などにこの琴の音をよくお聞きし
 たい」

などと言っていたが年も変わった。

年の初めにまず帝みかどからはなやかな御賀を法皇はお受けになることになっていて、差し合つてはよろしくないと院は思召し、少したった二月の十幾日のころと姫宮の奉られる賀の日をお定めきになり、楽の人、舞い手は始終六条院へ来てその下稽古を熱心にする日が多かつた。

「対の女王がいつもお聞きしたがっているあなたの琴と、その人たちの十三一絃げんや琵琶びわを一度合奏する女ばかりの催しをしたい。現代の大家といつても私の家族たちの音楽に対する態度より純真なものを持っていませんよ。私はたいした音楽者ではないが、すべての芸に通じておきたいと思つて、少年の時から世間の専門家を師にしてつきもしたし、また貴族の中の音楽の大家たちにも教えを乞こうたものですが、特に尊敬すべき芸を持った人と思われるのはなかつた。

その時代よりもまた現在では音楽をやる人の素質が悪くなって、芸が浅薄になっていると思う。琴などはまして稽古をする者がなくなつたということですからあなただけ弾ける人はあまりないでしょう」

と院がお言いになると、宮は無邪氣ほほえに微笑んで、自分の芸がこんなにも認められるようになったかと喜んでおいでになった。もう二十一、二でおありになるのであるが、幼稚な所が抜けないで、そして見たお姿だけは美しかった。

「長くお目にかからないでおいでになるのだから、大人になつてりつぱになつたと認めていただけるようにしてお目にかからなければいけませんよ」

と事に触れて院は教えておいでになるのであつた。実際こうした

良人おとがおいでにならなければ外間のいろいろな噂うわさにさえされる方であつたかもしれぬと女房たちは思っていた。

一月の二十日過ぎにはもうよほど春めいてぬるい微風そよかぜが吹き、六条院の庭の梅も盛りになっていった。そのほかの花も木も明日の約されたような力が見えて、杜もりは霞かすみ渡っていた。

「二月になつてからでは賀宴しらくの仕度で混雑するであろうし、こちらだけですることもその時の下調べのように思われるのも不快だから、今のうちがよい、あちらで会をなさい」

と院はお言いになつて女王を寝殿のほうへお誘いになつた。供をしたいという希望者は多かつたが、寝殿の人と知り合いになつてゐる以外の人は残された。少し年はいつてゐる人たちであるがりつばな女房たちだけが夫人に添つて行つた。童女は顔のいい子が四人ついで行つた。朱色の上に桜の色の汗衫かざみを着せ、下には薄色の厚織の袖あこめ、浮き模様のある表袴おもてはかま、肌には槌つちの打ち目のきれいなのをつけさせ、身の姿態とじなも優美なのが選ばれたわけであつた。女御の座敷のほうも春の新しい装飾がしわたされてあつて、華奢かしやを尽くした女房たちの姿はめざましいものであつた。童女は臙脂えんじの色の汗衫かざみに、支那しな綾やの表袴あこめで、袖あこめは山吹色やまぶきの支那しな一錦にしきのそろいの姿であつた。明石夫人の童女は目だたせないような服装をさせて、紅梅色を着た者が二人、桜の色が二人で、下は皆青色を濃淡にした袖で、これも打ち目のでき上がりのよいものを下につけさせてあつた。姫宮のほうでも女御や夫人たちの集まる日であつたから、童女の服装はことによくさせてお置きになつた。青丹あおにの色の服に、柳の色の汗衫かざみで、赤紫の袖あこめなどは普通の好みであつたが、なんとなく気高けだかく感ぜられることは疑いもなかつた。縁側に近い座敷からかみの襖かざみ子ははずして、貴女たちの

席は几帳きちょうを隔てにしてあつた。中央の室には院の御座おんざが作られてある。今日の拍子合わせの笛の役には子供を呼ぼうとお言いになって、右大臣家の三男で玉鬘たまかすら夫人の生んだ上のほうの子が笙しょうの役をして、左大将の長男に横笛の役を命じ縁側へ置かれてあつた。演奏者の茵いんが皆敷かれて、その席へ院の御秘蔵の楽器が紺錦こんにしんの袋などから出されて配られた。明石夫人は琵琶びわ、紫の女王には和琴わこん、女御は箏そうの十三絃げんである。宮はまだ名楽器などはお扱いにくいであろうと、平生弾いておいでになるので調子を院がお弾き試みになったのをお配らせになった。院は、

「箏そうの琴ことは絃ことがゆるむわけではないが、他の楽器と合わせる時に琴柱じの場所が動きやすいものだから、初めからその心得でいなければならぬが、女の力では十分締めることがむずかしいであろうから、やはりこれは大将に頼まなければなるまい。それに拍子を受け持っている少年たちもあまり小さくて信用のできない点もあるから」

とお笑いになりながら、

「大将にこちらへ」

とお呼び出しになるのを聞いて、夫人たちは恥ずかしく思っていた。明石夫人以外は皆院の御弟子なのであるから、院も大将が聞いて難のないようにとできればえを祈っておいになった。女御は平生から陛下の前で他の人と合奏も仕一馴なれているからだいじょうぶ落ち着いた演奏はできるであろうが、和琴というものはむずかしい物でなく、きまつたことがないだけ創作的の才が必要なのを、女の弾き手はもてあましはせぬか、春の絃楽は皆しっくり他に合ってゆかねばならぬものであるが、和琴がうまくいっしょになってゆかねよ

うなことはないかとも損な弾き手に同情もしておいでになった。

左大将は晴れがましくて、音楽会のいかなる場合に立ち合うよりも気のつかわれるふうで、きれいな直衣のうしを薫香たきものの香のよく染しんだ衣服に重ねて、なおも袖そでをたきしめることを忘れずに整った身姿みなりのこの人が現われて来たところはもう日が暮れていた。感じのよい早春の黄昏たそがれの空の下に梅の花は旧年に見た雪ほどたわわに咲いていた。ゆるやかな風の通り通うごとに御簾みすの中の薫香たきものの香も梅花ばなの匂においを助けるように吹き迷って驚おどろを誘いそうかと見えた。御簾みすの下のほうから箏そうの琴ことのさきのほうを少しお出しになって、院が、

「失礼だがこの絃いとの締まりぐあいをよく見て調音をしてほしい。他人に来てもらうことのできない場合だから」

とお言いになると、大将はうやうやしく琴を受け取って、一越調いっこくじょうの音ねに発はつの絃いとの標準の柱じを置き全体を弾き試みることはせずそのまま返そうとするのを院は御覧になって、

「調子をつけるだけの一弾きは気どらずにすべきだよ」

と院がお言いになった。

「今日の会に私がいささかでも音を混ぜますようなだいそれた自信は持っておりません」

大将は遠慮してこう言う。

「もつともだけれども、女だけの音楽に引きさがった、逃げたと言われるのは不名誉だろう」

院はお笑いになった。で大将は調子をかき合わせて、それだけで御簾みすの中へ入れた。院の御孫にあたる小さい人たちが美しい直衣のうし姿をして吹き合わせる笛の音はまだ幼稚ではあるが、有望な未来の思われる響きであった。かき合わせが済んでいよいよ合奏になったが、

どれもおもしろく思われた中に、琵琶はすぐれた名手であることが
思われ、神さびた撥使いで澄み切った音をたてていた。大将は和琴
に特別な関心を持つていたが、それはなつかしい、柔らかな、愛嬌
のある爪音で、逆にかく時の音が珍しくはなやかで、大家のもつた
いらしくして弾くのにも少しも劣らない派手な音は、和琴にもこうし
た弾き方があるかと大将の心は驚かされた。深く精進を積んだ跡が
よく現われたことによつて院は安心をあそばされて夫人をうれしく
お思いになつた。十三絃の琴は他の楽器の音の合い間合い間に繊細
な響きをもたらずのが特色であつて、女御の爪音はその中にもきわ
めて美しく艶に聞こえた。琴は他に比べては洗練の足らぬ芸と思わ
れたが、お若い稽古盛りの年ごろの方であつたから、確かな弾き方
はされて、ほかの楽器と交響する音もよくて、上達されたものであ
ると大将も思つた。この人が拍子を取つて歌を歌つた。院も時々扇
を鳴らしてお加えになるお声が昔よりもまたおもしろく思われた。
少し無技巧的におなりになつたようである。大将も美音の人で、夜
のふけてゆくにしたがつて音楽一三昧の境地が作られていった。月
がややおそく出るころであつたから、燈籠が庭のそここにもさ
れた。院が宮の席をおのぞきになると、人よりも小柄なお姿は衣服
だけが美しく重なつて見えるように見えた。はなやかなお顔ではな
く、ただ貴族らしいお美しさが備わり、二月二十日ごろの柳の枝が
わずかな芽の緑を見せているようで、鶯の羽風にも乱れていくかと
思われた。桜の色の細長を着ておいでになるのであるが、髪は右か
らも左からもこぼれかかつてそれも柳の系のようである。これこそ
最上の女の姿というものであると院はおながめになるのであつた
が、女御には同じような艶な姿に今一段光る美の添つて見える所が

あつて、身のとりなしに気品のあるのは、咲きこぼれた藤の花が春から夏に続いて咲いているころの、他に並ぶもののない優越した朝ぼらけの趣である。院は御覧になった。この人は身ごもっていて、それがもうかなり月に月が重なって悩ましいころであつたから、済んだあとでは琴を前へ押しやうて苦しうに脇息へよりかかつているのであるが、背の高くない身体を少し伸ばすようにして、普通の大さの脇息へ寄っているのが気の毒で、低いのを作り与えたい気もされて憐まれた。紅梅の上着の上にはらはらと髪のかかつた灯かけの姿の美しい横に、紫夫人が見えた。これは紅紫かと思われる濃い色の小袿に薄一膳脂の細長を重ねた裾に余つてゆるやかにたまつた髪がみごとで、大きさもいい加減な姿で、あたりがこの人の美から放射される光で満ちているような女王は、花にたとえて桜といつてもまだあたらぬほどの容色なのである。こんな人たちの中に混じつて明石夫人は当然見劣りするはずであるが、そうとも思われぬだけの美容のある人で、聰明らしい品のよさが見えた。柳の色の厚織物の細長に下へ萌葱かと思われる小袿を着て、薄物の簡単な装をつけて卑下した姿も感じがよくて侮ずらしくは少しも見えなかつた。青地の高麗錦の縁を取つた敷き物の中央にもすわらずに琵琶を抱いて、きれいに持った撥の尖を絃の上に置いているのは、音を聞く以上美しい感じの受けられることであつて、五月の橘の花も実もついた折り枝が思われた。いずれもつつましくしているらしい内ものへの気配に大将の心は惹かれるばかりであつた。紫の女王の美は昔の野分の夕べよりもさらに加わっているに違いないと思うと、ただその一事だけで胸がとどろきやまない。女王の宮に対しては運命が今少し自分に親切であつたなら、自身のものとしてこの方を見るこ

とができたのであつたと思うと、自身の臆病おくびょうさも口惜くちおしかつた。朱雀院すざくからはたびたびそのお気持ちを示され、それとなく仰せになつたこともあつたのであるがと思ひながらも、よく隙すきの見えることを知つていては女王に惹かれたほど心は動きもしないのであつた。女王とはだれも想像ができぬほど遠い間隔のある所に置かれていた大將は、その忘れがたい感情などは別として、せめて自分の持つ好意だけでも紫の女王に認めてもらうだけを望んでできないのを考えては煩悶はんもんしているのである。あるまじい心などはいだいていない、その思いを抑制することはできる人である。

夜がふけてゆくらしい冷ややかさが風に感ぜられて臥待月ふしまちつきが上り始めた。

「たよりない春の臙月夜おぼろだ。秋のよさというのもまたこうした夜の音楽と虫の音がいつしよに立ち上つてゆく時にあるものだね」

と院は大將に向かつてお言ひになつた。

「秋の明るい月夜には、音楽でも何の響きでも澄み通つて聞こえませんが、あまりきれいに作り合わせたような空とか、草花の露の色とかは、専念に深く音楽を味わわせなくなる気もいたします。やはり春のたよりない雲の間から臙な月が出ますほどの夜に、静かな笛の音などの上つてゆくのを聞きますほうが、音楽そのものを楽しむのにはよいかと思われます。女は春を憐むあわれという言葉がございませうもつともなごと思われます。すべてのものの調子がしっくり合うのは春の夕方に限るようによ考えられませうが」

と大將が言うと、

「それは断定的には言えないことだ。古人でさえ決めかねたことなのだから、末世のわれわれの力で正しい批判のできるわけもない。

ただ音楽のほうでは秋の律の曲を、春の呂りよの曲の下に置かれていることだけは今君が言ったような理由があるからだろう」

院はこう仰せられた。また、

「どう思うかね。現在の優秀な音楽家とされている人たちの、宮中などのお催しなどの場合に演奏を命ぜられる人の聴きいても名人だと思われるのは少なくなつたようだが、先輩についてよく研究をしようとするような熱心が足りないのかね。今日のような女ばかりの音楽の会に交じつても、格別きわだつと思われる人があるようにも思われない。しかしそれは近年の私がどこへも行かずに一所に引きこもつていて、鑑識が悪く偏してしまつたのかもしれないが、とにかく感激を覚えさせられる音楽者のいないのは残念だ。どんな芸事も演ぜられる場所によつては平生と違つたできばえを見せるものであるが、最も晴れの場所の宮中でのこのごろの音楽の遊びに選えび出される人たちに、この女性たちのを比べて劣つていると思う点があるかね」

「それを申し上げたいと思つたのでございますが、しかし頭の悪い私はでたらめを申すことになるかもしれません。今の世間の者は昔の音楽の盛んな時を知らないからでもありませんか衛門督えもんのかみの和琴、兵部卿うぶぎょうの宮様の琵琶びわなどを激賞いたします。私どもも妙技とはしておりますが、今晚の皆様きょうの御演奏には驚愕きょうがくいたしました。はじめはたしいたお遊びでもあるまいと軽く考えていたためにいつそう感激が大きいのでございましょうか。歌の役はまことに気がさして勤めにくうございました。和琴は太政大臣によつてだけすべての楽音を率いるような巧妙な音のたつものと思つておりました、その境地へは一步も他の者がはいれないものと思われるむずかしい芸でございま

すが、今晚のはまた特別なものでございました。結構でした」

大将はほめた。

「そんな最大級の言葉でほめられるほどのものではないのだが」
得意な御微笑が院のお顔に現われた。

「私にはまずできそこねの弟子はないようだね。琵琶だけは私に骨を折らせた弟子でしの芸ではないがすぐれたものであったはずだ。意外なところで私の発見した天性の弾き手なのだよ。ずいぶん感心したものだ、そのころよりはまた進歩したようだ」

こうして皆御自身の功にしてお言いになるのを聞いていて、女房たちなどは肱ひじを互いに突き合わせたりして笑っていた。

「すべての芸というものは習い始めると奥の深さがわかって、自分で満足のできるだけを習得することはとうていできないものなのだ、しかしそれだけの熱を芸に持つ人が今は少ないから、少しでも稽古けいこを積んだことに自身で満足して、それで済ませていくのだが、琴というものだけはちよつと手がつけられないものなのだよ。この芸をきわめれば天地も動かすことができ、鬼神の心も柔らげ、悲境にいた者も楽しみを受け、貧しい人も出世ができて、富貴な身の上になり、世の中の尊敬を受けるようなことも例のあることなのだ。この芸の伝わった初めの間は、これを学ぶ人は皆長く外国へ行っていて、あらゆる困難に打ち勝って、上達しようとしたものだが、そうまでして成功したものの数はわずかだったのだ。実際すぐれた琴の音は月や星の座を変えさせることもあったし、その時季でなしに霜や雪を降らせたり、黒雲が湧わき出したり、雷鳴がそのためにしたりしたことも昔はあったのだよ。だれも音楽のうちの最高のものを知っていても、完全にその芸を習いおおせるものが少なかったし、

末世にはなるし、今残っているのは昔のほんとうのものの断片だけの価値のものかとも思われる。それでもまだ鬼神が耳をとどめるものになっっている琴の稽古けいこをなまじいにして、上達はできずにかえっ
ていろいろ不幸な終わりを見たりする人があるものだから、琴の稽古をする者は不吉を招くというような迷信もできて、近ごろではこの面倒な芸を習う人が少なくなったということだね。遺憾なことだ。琴がなくては世の中の音楽が根本の音を持たないものになるのだからね。すべての物は衰えかけると早い速力で退化する一方なんだから、そんな中で一人の人間だけが熱心にその芸に志して、高麗こりや、支那しなと渡り歩いて家族も何も顧みない者になってしまつのも狂的だから、それほどはしなくても、この芸がどんなものであるかを知りうるだけのことを私はしたいと思つて、一曲でも十分に習いうることは困難なものとしても、これにはむずかしい無数の曲目のあるものなのだから、若くて音楽熱の盛んな年ごろの私は世の中にあるだけの琴の譜を調べたり、あちらから来ているものは皆手もとへ取り寄せて、それによつて研究をしたが、しまいには私以上の力のある先生というものもなくなって不便だったものの、独学で勉強をしたが、それでも古人の芸に及ぶものでは少しもなかったのだからね。ましてこれからは心細いものになるだろうとこの芸について私は悲しんでいる」

などと院のお語りになるのを聞いていて大将は自身をふがいなく恥ずかしく思った。

「今上の親王おんぎんじょうが御成人ごじんじんになれば、それまで生きていかどうかおぼつかないことだが、その時に私の習いえただけの琴の芸をお授けしようと思つている。二の宮は今からそうした天分を持たれるようだ

から」

このお言葉を明石夫人は自身の名誉であるように涙ぐんで側聞きかたえぎをしていたのであった。

女御は箏そうを紫夫人に譲って、悩ましい身を横たえてしまったので、和琴わこんを院がお弾ひきになることになって、第二の合奏は柔らかい気分の派手はでなものになって、催馬楽さいばらの葛城かつらぎが歌われた。院が繰り返しの所々で声をお添えになるのが非常に全体を美しいものにした。月の高く上る時間になり、梅花の美もあざやかになってきた。十三一絃げんの箏そうの音は、女御のは可憐かれんで女らしく、母の明石夫人に似た揺ゆの音が深く澄んだ響きをたてたが、女王のはそれとは変わってゆるやかな気分が出て、聴きき手の心に酔いを覚えるほどの愛嬌あいぎょうがあり、才のひらめきの添ったものであった。合奏の末段になって呂りよの調子が律になる所の掻き合わせがいつせいにはなやかになり、琴は五つの調べの中の五六の絃いとのはじき方をおもしろく宮はお弾きになって、少しも未熟と思われる点がなく、よく澄んで聞こえた。春と秋その他あらゆる場合に变化させねばならぬ弾法の使いこなしようを院がお教えになったのを誤たずによく会得して弾いておいでになるのに、院は誇りをお覚えになった。小さい御孫たちが熱心に笛の役を勤めたのをかわいく院は思召おほしめして、

「眠くなつただらうのに、今晚の合奏はそう長くしないはずでわずかな予定だったのがつい感興にまかせて長く続けていて、それも楽音で時間を知るほどの敏感がなく、思わずおそくなって、思いやりのないことをした」

とお言いになり、笙しょうの笛を吹いた子に酒杯をお差しになり、御服を脱いでお与えになるのであった。横笛の子には紫夫人のほうから

厚織物の細長に袴はかまなどを添そえて、あまり目だたせぬ纏頭てんとうが出された。大将には姫宮の御簾みすの中から酒器かわらけが出されて、宮の御装束一そろいが纏頭にされた。

「変ですね。まず先生に御一褒美ほうびをお出しにならないで。私は失望した」

院がこう冗談じょうだんをお言いになると、宮の几帳きちょうの下からお贈り物の笛が出た。院は笑いながらお受け取りになるのであったが、それは非常によい高麗笛であった。少しお吹きになると、もう退出し始めていた人たちの中で大将が立ちどまって、子息の持っていた横笛を取ってよい音に吹き合わせるのが、至芸と思われるこの音を院はうれしくお聞きになり、これもまた自分の弟子でしであったと満足されたのであった。

大将は子供をいっしょに車へ乗せて月夜の道を帰って行つたが、いつまでも第二回のおりの箏の音が耳についていて、遣やる瀬なく恋しかつた。この人の妻は祖母の宮のお教えを受けていたといつても、まだよくも心にはいらぬうちに父の家へ引き取られ、十三絃もはんばな稽古けいこになつてしまつたのであるから、良人おとこの前では恥じて少しも弾かないのである。すべておおまかに外見をかまわず暮らして、あとへあとへ生まれる子供の世話に追われているのであるから、大将は若い妻の感じのよさなどは少しも受け取りえない良人なのである。しかも嫉妬しつとはして、腹をたてなどする時に天真一爛漫らんまんな所に見える無邪気な夫人なのであった。

院は対のほうへお帰りになり、紫夫人はあとに残つて女三の宮とお話などをして、明け方に去つたが、昼近くなるまで寢室を出なかつた。

「宮は上手じょうずになられたようではありませんか。あの琴をどう聞きま
したか」

と院は夫人へお話しかけになった。

「初めごろ、あちらでなさいますのを、聞いておりました時は、ま
だそうおできになるとは伺いませんでしたが、非常に御上達なさい
ましたね。ごもつともですわね、先生がそればかりに没頭してい
らっしゃったのですものね」

「そうですね、手を取りながら教えるのだからこんな確かな教授法
はなかったわけですね。あなたにも教えるつもりでしたが、あれは
面倒で時間のかかる稽古ですからね、つい実行ができなかったのだ
が、院の陛下も琴だけの稽古はさせているだろうと言っておられる
ということを知ると、お気の毒で、せめてそれくらいのごことは保護
者に選ばれたものの義務としてしなければならぬかという気にな
って、やり始めた先生なのですよ」

などと仰せられるついでに、

「小さかったころのあなたを手もとへ置いて、理想的に育て上げた
いとは思ったものの、そのころの私にはひまな時間がなくて、特
別なものの先生になってあげることでもできなかったし、近年はまた
いろいろなことが次から次へと私を駆使して、よく世話もしてあげ
なかつた琴のできのよかつたことで私は光栄を感じましたよ。大将
が非常に感心しているのを見たこともうれしくてなりませんでした
よ」

ともおほめになった。そうした芸術的な能力も豊かである上に、
今は一方で祖母の義務を御孫の宮たちのために忠実に尽くしていて、
家庭の実務をとることに力不足は少しも見せない夫人であるこ

とを院はお思いになり、こうまで完全な人というものは短命に終わるようなこともあるのであると、そんな不安をお覚えになった。多くの女性を御覧になった院が、これほどにも物の整った人は断じてほかにないときめておいでになる紫の女王であった。夫人は今年が三十七であった。同棲あそばされてからの長い時間を院は追懐あそばしながら、

「祈祷のようなことを半生の年よりもたくさんさせて今年は無理をしないようにあなたは慎むのですね。私がそうしたことは常に気をつけてさせなければならぬのだが、ほかのことに紛れてうっかりとしている場合もあるだろうから、あなた自身で考えて、ああしたいというようにくぶん大きな仏事の催してもあれば、言ってくればいくらでも用意をさせますよ。北山の僧都がなくなっておしまいになったことは惜しいことだ。親戚とせずと言ってもりつばな宗教家でしたがね」

ともお言いになった。また、

「私は生まれた初めからすでにたいそうに扱われる運命を持っていたし、今日になって得ている名誉も物質的のしあわせも珍しいほどの人間ともいつてよいが、また一方ではだれよりも多くの悲しみを見て来たとも言えるのです。母や祖母と早く別れたことに始まって、いろいろな悲しいことが私のまわりにはありましたよ。それが罪業を軽くしたことになるので、こうして思いのほか長生きもできるのだと思いますよ。あなたは私とあの別居時代のにがい経験をしてからはもう物思いも煩悶もなかったらうと思われる。お后と言われ人、ましてそれ以下の宮廷の人には人との競争意識でみずから苦しまない人はいないので。親の家にいるままのようにして今日ま

で来たあなたのような気楽はだれにもないものなのですよ。この点だけではあなたがだれよりも幸福だったということがわかりますか。思いがけなく姫宮をこちらへお迎えしなければならぬことになつてからは、少しの不愉快はあるでしょうがね、それによつて私の愛はいつそう深まつていっているのだが、あなたは自身のことだからわかつていないかもしれない。しかし物わかりのいい人だから理解してくるかもしれないと頼みにしていますよ」

と院がお言いになると、

「お言葉のように、ほかから見ますれば私としては過分な身の上になつていのですが、心には悲しみばかりがふえてまいります。それを少なくしていただきたいと神仏にはただそれを私は祈つていのですよ」

言いたいことをおさえてこれだけを言った女王に貴女らしい美しさが見えた。

「ほんとうは私はもう長く生きていられない気がしているのでございますよ。この厄年やくどしまでもまだ知らない顔でこのままでいますことは悪いことと知っています。以前からお願ひしていることですから、許していただけましたら尼になります」

とも夫人は言った。

「それはもつてのほかのことですよ。あなたが尼になつてしまったあとの私の人生はどんなにつまらないものになるだろう。平凡に暮らしてはいるようなものの、あなたと睦まじくむっして生きていとうことよりよいことはない私は信じているのです。あなただけをどんなに私が愛しているかということ、これからの長い時間に見ようと思つてください」

院がこうお言いになるのを、またもいつもの慰め言葉で自分の信仰にはいる道をおはばみになると聞いて、夫人の涙ぐんでいるのを院は憐れにお思いになって、いろいろな話をし出して紛らせようとおつとめになるのであった。

「そうおおぜいではありませんが、私の接触した比較的優秀な女性について言ってみると、女は何よりも性質が善良で落ち着いた考えのある人が一等だと思われるが、それがなかなか望んで見いだせないものなのですよ。大将の母とは少年時代に結婚をして、尊重すべき妻だとは思っていましたが、仲をよくすることができずに、隔てのあるままで終わったのを、今思うと気の毒で堪えられないし、残念なことをしたと後悔もしていながら、また自分だけが悪いのでもなかつたと一方では考えられもするのですよ。りっぱな貴婦人であったことは間違いないことで、なんらの欠点はなかつたが、ただあまりに整然ととのつたのが堅い感じを受けさせてね。少し賢過ぎるといっていいような人で、話で聞けば頼もしいが、妻にしては面倒な気のするといふような女性でしたよ。中宮の母君の御息所は、高い見識の備わった才女の例には思い出される人だが、恋人としてはきわめて扱いにくい性格でしたよ。怨むのが当然だと一通りは思われることでも、その人はそのままそのことを忘れずに思いつめて深く恨むのですから、相手は苦しくてならなかつた。自己を高く評価させないではおかないという自尊心が年じゅう付きまわつていふような気がして、そんな場合に自分は気に入らない男になるかもしれないと、あまりに見栄を張り過ぎるような私になって、そして自然に遠のいて縁が絶えたのですよ。私が無二無三に進み寄つてあるまじい名の立つ結果を引き起こしたその人の真価を知っているだ

けなお捨ててしまったのが済まないことに思われて、せめて中宮にはよくお尽くししたいと、それも前生の約束だったのでしようが、こうして子にしてお世話を申していることで、あの世からも私を見直しているでしょうよ。今も昔も浮わついた心から人のために気の毒な結果を生むことの多い私ですよ」

なお幾人かの女の上を院はお語りになった。

「女御にょごのあの後見役はたいしたものではあるまいと軽く見てかかった相手ですが、それが心の底の底までは見られないほどの深い所のある女でしたからね。うわべは素直らしく柔順には見えながら、自己を守る堅さが何かの場合に見える伶俐れいりなたちなのですよ」

と院がお言いになると、

「ほかの方は見ないのでですからわかりませんが、あの方にはおりおりお目にかかっています、聡明そうめいで聡明で御自身の感情を少しもお見せにならないのに比べて、だれにも友情を押しつける私をあなたの方はどう御覧になっていらつしやるかときまりが悪くてね。しかしとにもかくにも女御は私をいいようにだけ解釈してくださるだろうと思っています」

夫人にとつてはねたましく思われた人であつた明石あかし夫人をさえこんなに寛大な心で見るとなつたのも、女御を愛する心の深いからであろうと院はうれしく思召おほしめした。

「あなたは恨む心もある人だが思いやりもあるから私をそう困らせませんね。たくさんな女の中であなたの真似まねのできる人はない。あまりにりつぱ過ぎるわけですね」

微笑して院はこうお言いになる。

夕方になつてから、

「宮がよくお弾ひきになったお祝いを言つてあげよう」

と言つて、院は寢殿へお出かけになった。自分があるために苦しんでいる人がほかにあることなどは念頭になくて、お若々しく宮は琴の稽古けいこを夢中になつてしておいでになった。

「もう琴は休ませておやりなさい。それに先生をよく歓待なさらなければならぬでしょう。苦しい骨折りのかいがあつて安心してよ
いできでしたよ」

と院はお言いになつて、楽器は押しやつて寝ておしまいになった。

対のほうでは寢殿泊まりのこうした晩の習慣ならわしで女王にょおうは長く起きていて女房たちに小説を読ませて聞いたりしていた。人生を写した小説の中にも多情な男、幾人も恋人を作る人を相手に持つて、絶えず煩悶はんもんする女が書かれてあつても、しまいには二人だけの落ち着いた生活が営まれることに皆なつていようであるが、自分はどうかだろ
う、晩年になつてまで一人の妻にはなれずにいるではないか、院のお言葉のように自分は運命に恵まれているのかもしれないが、だれも最も堪えがたいこととする苦痛に一生付きまとわれないなければならぬのであろうか、情けないことであるなどと思ひ續けて、夫人は夜がふけてから寢室へはいつたのであるが、夜明け方から病になつて、はなはだしく胸が痛んだ。女房が心配して院へ申し上げようと
言つているのを、

「そんなことをしては済みませんよ」

と夫人はとめて、非常な苦痛を忍んで朝を待った。発熱までもして夫人の容体は悪いのであるが、院が早くお帰りにならないのをお促しすることもなしにいるうち、女御のほうから夫人へ手紙を持た

せて来た使いに、病氣のことを女房が伝えたために、驚いた女御から院へお知らせをしたために、胸を騒がせながら院が帰っておいになる、夫人は苦しそうなふうで寝ていた。

「どんな気持ちですか」

とお言いになり、手を夜着の下に入れてごらんになると非常に夫人の身体は熱い。昨日話し合われた厄年のことも思われて、院は恐ろしく思召されるのであった。粥などを作って持って来たが夫人は見ることもすらいやがった。院は終日病床にお付き添いになって看護をしておいになった。ちよつとした菓子なども口にせず起き上がらないまま幾日かたった。どうなることかと院は御心配になって祈禱を数知らずお始めさせになった。僧を呼び寄せて加持などもさせておいでになった。どこが特に悪いともなく夫人は非常に苦しるのである。胸の痛みの時々起こるおりなども堪えがたそうな苦しみが見えた。いろいろな養生もまじないもするがききめは見えない。重い病氣をしても時さえたてばなおる見込みのあるのは頼もしいが、この病人は心細くばかり見えるのを院は悲しがつておいでになった。もうほかのことをお考えになる余裕がないために、法皇の賀のことも中止の状態になった。法皇の御寺からも夫人の病をねんごろにお見舞いになる御使いがたびたび来た。

夫人の病氣は同じ状態のまま二月も終わった。院は言い尽くせぬほどの心痛をしておいでになって、試みに場所を変えさせたらとお考えになって、二条の院へ病女王をお移しになった。六条院の人々は皆大厄難が来たように、悲しんでいる。冷泉院も御心痛あそばされた。この夫人にもしものことがあれば六条院は必ず出家を遂げられるであろうことは予想されることであつたから、大将なども誠

心誠意夫人の病氣回復をはかるために奔走しているのであった。院が仰せられる祈禱きとうのほかには、大将は自身の志での祈禱もさせていた。少し知覚の働く時などに夫人は、

「お願いしていただきますことをあなたはお拒こほみになるのですもの」

と、院をお恨みした。力の及ばぬ死別にあうことよりも、生きながら自分から遠く離れて行かせるようなことを見ては、片時も生きるに堪えない気があそばされる院は、

「昔から私のほうが出家のあこがれを多く持っていながら、あなたが取り残されて寂しく暮らすことを思うのは、堪えられないことなので、こうしてまだ俗世界に残っているのに、逆にあなたが私を捨てようと思うのですか」

こんなにはかりお言いになって御同意をあそばされないのが悪いのか、夫人の病体は頼み少なく衰弱していった。もう臨終かと思われることも多いためにまた尼にさせようかと院はお惑いになるのであった。こんなことで女三にょさんの宮みやのほうへは仮の訪問すらあそばされなかつた。どこでも楽器はしまい込まれて、六条院の人々は皆二条のほうへ集まって行った。このお邸やしきは火の消えたようであつた。

ただ夫人たちだけが残っているのであるが、これを見れば六条院のはなやかさは紫の女王一人のために現出されていたことのように思われた。女御も二条の院のほうへ来て御父子で看護をされた。

「あなたは普通のお身体からだでないのですから、物怪もののけの徘徊はいかいする私の病室などにはおいでにならないで、早く御所へお帰りなさいね」

と、病苦の中でも夫人は心配して言うのであつた。若宮のおかわいらしいのを見ても夫人は非常に泣くのであつた。

「大きくおなりになるのを拜見できないのが悲しい。お忘れになる

でしょう」

などと言うのを聞く女御も悲しかった。

「そんな縁起でもないことを思つてはいけませんよ。悪いようでもそんなことにはならないだろうと思う自身の性格で運命も支配していくことになりますからね。狭い心を持つ者は出世をしても寛大な気持ちでいられないものだから失敗する。善良な、おおよな人は自然に長命を得ることになる例もたくさんあるのだから、あなたなどにそんな悲しいことは起こってきませんよ」

などと院はお慰めになるのであつた。神仏にも夫人の善良さ、罪の軽さを告げて目に見えぬ加護を祈らせておいでになるのである。修法をする阿闍梨たち、夜居の僧などは院の御心痛のはなはだしさを拝見することの心苦しさに一心をこめて皆祈つた。少し快い日之間に五、六日あつて、また悪いというような容体で、幾月も夫人は病床を離れることができなかったから、やはり助かりがたい命なのかと院はお歎きになつた。物怪で人に移されて現われるものもない。どこが悪いということもなく、日に添えて夫人は衰弱していくのであつたから、院は悲しくばかり思召されて、いっさいほかのことはお思ひになれなかつた。

あの衛門督は中納言になつていた。衛門督の官も兼ねたままである。当代の天子の御信任を受けてはなやかな勢力のついてくるにつけても、失恋の苦を忘れかねて、女三の宮の姉君の二の宮と結婚をした。これは低い更衣腹の内親王であつたから、心安い気がして格別の尊敬を妻に払ふ必要もないと思つて、院からお引き受けをしたのである。普通の人に比べてはすぐれた女性ではおありになつたが初めから心に沁んだ人に変えるだけの愛情は衛門督に起こらなかつ

た。ただ人目に不都合でないだけの良人の義務を尽くしているに過ぎないのであった。今も以前の恋の続きにその方のことを聞き出す道具に使っている女三の宮の小侍従という女は、宮の侍従の乳母の娘なのである。その乳母の姉が衛門督の乳母であったから、この人は少年のころから宮のお噂を聞いていた。お美しいこと、父帝が溺愛しておいでのなることなどを始終聞かされていたのがこの恋の萌芽になったのである。

六条院が病夫人と二条の院へお移りになっていて、ひまであるうことを思つて小侍従を衛門督は自邸へ迎えて、熱心に話すのはまたそのことについてであつた。

「昔から命にもかかわるほどの恋をしていて、しかも都合のよいあなたという手蔓を持っていて、宮様の御様子も聞くことができ、私の煩悶していることも相当にお伝えしてもらっているはずなのだが、少しも見るに足る効果がないから残念でならない。あなたが恨めしくなるよ。法皇様さえも、宮様が幾人もの妻の中の一人におなりになつて、第一の愛妻はほかの方であるというわけで、一人お寝みになる夜が多く、つれづれに暮らしておいでのなるのをお聞きになつて、御後悔をあそばしたふうで、結婚をさせるのであつたら普通人の忠実な良人を宮のために選ぶべきだつたとお言いになり、女二の宮はかえつて幸福で将来が頼もしく見えるではないかと仰せられたということを私は聞いて、お気の毒にも、残念にも思つて煩悶しないではいられないではないか。私の宮さんも御一姉妹ではあるが、それはそれだけの方としておくのだよ」

と衛門督が歎息をしてみせると、小侍従は、

「まあもつたいたい。それはそれとしてお置きになつて、また何を

どうしようというのでしょうか」

ととがめた。衛門督は微笑を見せて、

「まあ世の中のことは皆そうしたもので、表も裏もあるものなのだよ。私が三の宮さんの熱心な求婚者であったことは、法皇様も陛下もよく御承知で、陛下はその時代に十分見込みはありそうだよ、とも仰せられたものなのだが、もう少しの御好意が不足していたわけだと私は思っている」

などと言う。

「それはだめですよ。むずかしいことですよ。運命もありますし、六条院様が求婚者になって現われておいでになつては、どの競争者だつて勝ち味はないと思いますけれど、あなただけはたいへんな御自信があつたのですね。近ごろになりましたこそ御官服の色が濃くおなりになったようでございますがね」

こんなふうにかくし立てる小侍従の攻撃にはかなわないうことを衛門督は思った。

「もう昔のことは言わないよ。ただね、このごろのようなまたとない好機会にせめてお居間の近くへまで行って、私の苦しんでいる心を少しだけお話しさせてくれることを計らつてくれないか。もつたいない欲念よくねんなどは見ていてごらん、もういっさい起こさないことにあきらめているのだから、いいだろう」

「それ以上のもつたいたない欲心がありますかしら。恐ろしい望みをお起こしになつたものですね、私は出てまいらなければよかつた」

強硬に小侍従は拒む。

「ひどいことを言うものではないよ。たいそうらしく何を言うのだ。后といつても恋愛問題をお起こしになつた人もないわけでは

ないよ。まして宮中のことではなしさ、ほかからは結構なお身の上に見られておいでになっても、口惜くちおしいこともあれでは多かろうじやないか。法皇様からはどのお子様よりも大事がられて御成人なすつて、今は同じだけの御身分でない方と同等の一人の夫人で、しかも最愛の方としてはお扱われにならないというくわしいことを私は知っているのだよ。人は無常の世界にいるのだから、君が宮の御幸福をこうして守ろうとしていることが皆むだなことになるかもしれないからね。私に冷酷なことを言っておかないほうがいいよ」

「人ほど大事がられない奥様だとお言いになって、それをあなたの力でよくしていただけるといいますか。六条院様と宮様は普通の夫婦というのでもありませんよ。保護者もなく一人でおいでになりますよりはという思召おぼしめしで親代わりにお頼みになったのですもの。院がお引き受けになりましたのもその気持ちでなすつたことですもの、つまらないことを言つて、結局は宮様を悪くあなたはおっしゃるのですね」

ついには腹をたててしまった小侍従の機嫌きげんを衛門督えもんのかみはとつていた。

「ほんとうのことを言えば、あのまれな美貌びぼうの六条院様を良人おとこにお持ちになる宮様に、お目にかかって自身が好意を持たれようとは考えても何もいないのだよ。ただ一言を物越しに私がお話するだけのことで、宮様の尊厳をそこねることはないじゃないか。神や仏にでも思っていることを言つて咎とがや罰を受けはしないじゃないか」

こう言つて衛門督は絶対に不浄なことは行なわないという誓いまでも立てて、ひそかに御訪問をするだけの手引きを頼むのを、初めのうちは強硬にあるまじいことであると小侍従は突きはねていたが、

もともとあさはかな若い女房であるから、こうまでも思い込むものと、熱心な頼みに動かされて、

「もしそんなことによいような隙すきが見つかりましたら御案内いたしましょう。院がおいでにならぬ晩はお几帳きちょうのまわりに女房がたくさんいます。お帳台には必ずだれかが一人お付きしているのですから、どんな時にそうしたよいおりがあるものでしょうかね」

と困ったように言いながら小侍従は帰って行った。

どうだろう、どうだろうと毎日のように衛門督から責めて来られる小侍従は困りながらしまいにある隙すきのある日を見つけて衛門督へ知らせてやった。督は喜びながら目だたぬふうを作つて小侍従を訪ねて行った。衛門督自身もこの行動の正しくないことは知っているのであるが、物越しの御様子に触れては物思いがいつそうつのるはずの明日までは考えずに、ただほのかに宮のお召し物の襖先つまひさきの重なりを見るにすぎなかつたかつての春の夕べばかりを幻に見る心を慰めるためには、接近して行って自身の胸中をお伝えして、それから一行の文ふみのお返事を得ることもなればというほどの考えで、宮が憐あわれんでくださるかもしれぬというはかない希望をいただいている衛門督でしかなかつた。これは四月十幾日のことである。明日は賀茂かもの齋院の御襖みそぎのある日で、御一姉妹きょうだいの齋院のために儀装車に乗せてお出しになる十二人の女房があつて、その選にあたった若い女房とか、童女とかが、縫い物をしたり、化粧をしたりしている一方では、自身らどうして明日の見物に出ようとする者もあつて、仕度したくに大騒ぎをしていて、宮のお居間のほうにいる女房の少ない時で、おそばにいるはずの按察使あせちの君も時々通つて来る源中将が無理に部屋のほうへ呼び寄せたので、この小侍従だけがお付きしているのであつた。

よいおりであると思つて、静かに小侍従はお帳台の中の東の端へ衛門督の席を作つてやつた。これは乱暴な計らいである。宮は何心もなく寝ておいでになつたのであるが、男が近づいて来た^{けはい}気配をお感じになつて、院がおいでになつたのかとお思いになると、その男はかしこまつた様子を見せて、帳台の床の上から宮を下へ抱きおろすうとしたから、夢の中でもものに襲われているのかとお思いになつて、しいてその者を見ようとあそばすと、それは男であるが院とは違つた男であつた。これまで聞いたこともおありにならぬような話を、その男はくどくどと語つた。宮は気味悪くお思いになつて、女房をお呼びになつたが、お居間にはだれもいなかったからお声を聞きつけて寄つて来る者もない。宮はお慄^{ふる}い出しになつて、水のような冷たい汗もお身体^{からだ}に流しておいでになる。失心したようなこの姿が非常に御一可憐^{かれん}であつた。

「私はつまらぬ者ですが、それほどお憎まれするのが至当だとは思われません。昔からもつたいたない恋を私はいだいておりましたが、結局そのままにしておけば闇^{やみ}の中で始末もできたのですが、あなた様をお望み申すことを発言いたしましたために、院のお耳にはいり、その際はもつてのほかのこととも院は仰せられませんでした。それも私の地位の低さにあなた様を他へお渡しする結果になりました時、私の心に受けました打撃はどんなに大きかつたでしょう。もうただ今になつてはかいのないことを知っておりまして、こうした行動に出ますことは慎んでいたのですが、どれほどこの失恋の悲しみは私の心に深く食い入っていたのか、年月がたてばたつほど口惜^{くちお}しく恨めしい思いがつのつていくばかりで、恐ろしいことも考えるようになりまして。またあなた様を思う心もそれとともに深くなるばかり

でございました。私はもう感情を抑制することができなくなりまして、こんな恥ずかしい姿であるまじい所へもまいりましたが、一方では非常に思いやりのないことを自責しているのですから、これ以上の無礼はいたしません」

こんな言葉をお聞きになることによって、宮は衛門督えもんのかみであることをお悟りになった。非常に不愉快にお感じにもなったし、怖ろしくおそもまた思召おほしめされもして少しのお返辞もあそばさない。

「あなた様がこうした冷ややかなお扱いをなさいますのはごもつともですが、しかしこんなことは世間に例のないことではないのでございますよ。あまりに御同情の欠けたふうをお見せになれば、私は情けなさに取り乱してどんなことをするかもしれませぬ。かわいそうだとだけ言ってください。そのお言葉を聞いて私は立ち去ります」

とも、手を変え品を変え宮のお心を動かそうとして説く衛門督であつた。想像しただけでは非常な尊厳さが御身を包んでいて、目前で恋の言葉などは申し上げられないもののように思われ、熱情の一端だけをお知らせし、その他の無礼を犯すことなどは思いも寄らぬことにしていた督であつたにかかわらず、それほど高貴な女性とも思われぬ、たぐいもない柔らかさと可憐かれんな美しさがすべてであるような方を目に見てからは、衛門督の欲望はおさえられぬものになり、どこへでも宮を盗み出して行って夫婦になり、自分もそれとも世間を捨てよう、世間から捨てられてもよいと思うようになった。

少し眠つたかと思うと衛門督は夢に自分の愛している猫ねこの鳴いている声を聞いた。それは宮へお返ししようと思つてつれて来ていた

のであったことを思い出して、よけいなことをしたものだと思つた時に目がさめた。この時にはじめて衛門督は自身の行為を悟つたのである。が宮はあさましい過失をして罪に墮ちたことで悲しみにおぼれておいでになるのを見て、

「こうなりましたことによりまして、前生の縁がどんなに深かつたかを悟ってくださいませ。私の犯した罪ですが、私自身も知らぬ力がさせたのです」

不意に猫が端を引き上げた御簾みすの中に宮のおいでになつた春の夕べのことえもんのかみも衛門督は言い出した。そんなことがこの悲しい罪に墮ちおる因をなしたのかと思召おほしめすと、宮は御自身の運命を悲しくばかり思召されるのであつた。もう六条院にはお目にかかれぬことをしてしまつた自分であるとお思いになることは、非常に悲しく心細くて、子供らしくお泣きになるのを、もつたいなくも憐れあわにも思つて、自分の悲しみと同時に恋人の悲しむのを見るのは堪えがたい氣のする督であつた。夜が明けていきそうなのであるが、帰つて行けそうにも男は思われない。

「どうすればよいのでしょうか。私を非常にお憎みになつていますから、もうこれきり逢あつてくださらないことも想像されますが、ただ一言を聞かせてくださいませんか」

宮はいろいろとこの男からお言われになるのもうるさく、苦しくて、ものなどは言おうとしてもお口へ出ない。

「何だか氣味が悪くさえなりましたよ。こんな間柄というものがあるでしょうか」

男は恨めしいふうである。

「私のお願ひすることはだめなのでしよう。私は自殺してもいい氣

にもとからなっているのですが、やはりあなたに心が残って生きていましたものの、もうこれで今夜限りで死ぬ命になったかと思いませんと、多少の悲しみはございますよ。少しでも私を愛してください。お心ができましたら、これに命を代えるのだと満足して死ねます」と言つて、衛門督は宮をお抱きして帳台を出た。隅の室の屏風を引き揚げ蔭を作つておいて、妻戸をあけると、渡殿の南の戸がまだ昨夜はいつた時のままにあいてあるのを見つけ、渡殿の一室へ宮をおおろした。まだ外は夜明け前のうす闇であつたが、ほのかにお顔を見ようとすると、静かに格子をあげた。

「あまりにあなたが冷淡でいらつしやるために、私の常識というものはすっかりなくされてしまいました。少し落ち着かせてやろうと思召すのでしたら、かわいそうだとだけのお言葉をかけてください」

衛門督が威嚇するように言うのを、宮は無礼だと思ひになつて、何かとがめる言葉を口から出したく思召したが、ただ慄えられるばかりで、どこまでも少女らしいお姿と見えた。ずんずん明るくなつていく。あわただしい気になつていながら、男は、

「理由のありそうな夢の話も申し上げたかったですけれど、あくまで私をお憎みになりますのもお恨めしくてよしますが、どんなに深い因縁のある二人であるかをお悟りになることもあなたにあるでしょう」

と言つて出て行くこうとする男の気持ちに、この初夏の朝も秋のものの悲しさに過ぎたものが覚えられた。

「#ここから2字下げ」

おきて行く空も知られぬ明けぐれにいづくの露のかかる袖そでなり

「#ここで字下げ終わり」

宮のお袖を引いて督かみのこう言った時、宮のお心はいよいよ帰って行きそうな様子に楽になって、

「#ここから2字下げ」

あけぐれの空にうき身は消えななん夢なりけりと見てもやむべく

「#ここで字下げ終わり」

とはかなそうにお言いになる声も、若々しく美しいのを聞きさしたままのようにして、出て行く男は魂だけ離れてあとに残るもののような気がした。

夫人の宮の所へは行かずに、父の太政大臣家へそつと衛門督えもんのかみは来たのであった。夢と言ってよいほどのはかない逢う瀬が、なおありうることは思えないとともに、夢の中に見た猫の姿も恋しく思い出された。大きな過失を自分はしてしまったものである。生きていることがまぶしく思われる自分になったと恐ろしく、恥ずかしく思つて、督はずつとそのまま家に引きこもっていた。

恋人の宮のためにも済まないことであるし、自身としてもやましい罪人になってしまったことは取り返しのつかぬことであると思うと、自由に外へ出て行ってよい自分とは思われなかったのである。

陛下の寵姫ちゆうきを盗みたてまつるようなことをしても、これほどの熱情で愛している相手であったなら、処罰を快く受けるだけで、このやましきさはないはずである。そうした咎とがは受けないであろうが、六条

院が憎悪の目で自分を御覧になることを想像することは非常な恐ろしい、恥ずかしいことであると衛門督は思っていた。

貴女と言つても少し蓮葉な心が内にあつて、表面が才女らしくもあり、無邪気でもあるような見かけとは違った人は誘惑にもかかりやすく、無理な恋の会合を相手としめし合わせてすることにもなりやすいのであるが、女三の宮は深さもないお心ではあるが、臆病一方な性質から、もう秘密を人に発見されてしまったようにも恐ろしがりもし、恥じもしておいでになつて、明るいほうへいざつて出ることすらおできにならぬまでになつておいでになつて、悲しい運命を負つた自分であるともお悟りになつたであらうと思われる。宮が御病気のようなものであるという知らせをお受けになつて、六条院は、はなはだしく悲しんでおいでになる夫人の病気のほかに、またそうした心痛すべきことが起こつたかと驚いて見舞いにおいでになつたが、宮は別にどこがお悪いというふうにも見えなかつた。ただ非常に恥ずかしそうにして、そしてめいつておいでになつた。院のお目を避けるようにばかりして、下を向いておいでになるのを、久しく訪ねなかつた自分を恨めしく思っているのであると、院のお目にそれが憐れにも、いたいたしいようにも映つて、紫夫人の容体などをお話しになり、

「もうだめになるのでしよう。最後になつて冷淡に思わせてやりたくないと考えるものですから付いていつているのですよ。少女時代から始終そばに置いて世話をした妻ですから、捨てておけない気もして、こんなに幾月もほかのことは放擲したふうで付ききりで看護もしてありますが、またその時期が来ればあなたによく思つてもらえる私になるでしょう」

などお言いになるのを、宮は聞いておいでになって、あの罪は
 気ぶりにもご存じないことを、お気の毒なことのようにも、済まな
 いことのようにもお思いになって、人知れず泣きたい気持ちでおい
 でになった。

衛門督の恋はあのことがあったが、あつて以来、ますますつるばかりで、
 はげしい煩悶はんもんを日夜していた。賀茂祭りの日などは見物に出る公達きんたち
 がおおぜいで来て誘い出そうとするのであつたが、病気であるよう
 に見せて寢室を出ずに物思いを続けていた。夫人の女二にょにの宮みやには敬
 意を払うふうに見せながらも、打ち解けた良人おとこらしい愛は見せない
 のである。督は夫人の宮のそばでつれづれな時間をつぶしながらも
 心細く世の中を思っているのであつた。童女が持っている葵あおいを見て、

「#ここから2字下げ」

悔くやしくもつみをかしける葵草神あひひの許せる挿頭かざしならぬに

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌が口ずさまれた。後悔とともに恋の炎はますます立ちほ
 るようなわけである。町々から聞こえてくる見物車の音も遠い世界
 のことのように聞きながら、退屈に苦しんでもいるのであつた。女
 二の宮も衛門督えもんのかみの態度の誠意のなさをお感じになって、それは何が
 どうとはおわかりにならないのであるが、御自尊心が傷つけられて
 いるようで、物思わしくばかり思召された。女房などは皆祭りの見
 物に出て人少々な昼に、寂しそうな表情をあそばして十三じふ一いち絃げんの琴
 を、なつかしい音に弾ひいておいでになる宮は、さすがに高貴な方ら

しいお美しさと艶えんな趣は備わってお見えになるのであるが、ただも
う少しの運が足りなかったのだと衛門督は自身のことを思っていた。

「#ここから2字下げ」

もろかづら落ち葉を何に拾ひけん名は睦むつまじき挿頭かざしなれども

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌をむだ書きにしていた。もつたいたいなことである。

院はまれにお訪たずねになった宮の所からすぐに帰ることを気の毒に
お思いになり、泊まっておいでになったが、病夫人を気づかわしく
ばかり思っておいでになる所へ使いが来て、急に息が絶えたと知ら
せた。院はいつさいの世界が暗くなったようなお気持ちで二条の院
へ帰ってお行きになるのであったが、車の速度さえもどかしく思っ
ておいでになると、二条の院に近い大路はもう立ち騒ぐ人で満たさ
れていた。邸内からは泣き声が多く聞こえて、大きな不祥事のある
ことは覆おほいがたく見えた。夢中で家へおはいりになったが、
「この二、三日は少しお快いようでしたのに、にわか絶
息をあそばしたのでございます」
こんな報告をした女房らが、自分たちも、いつしよに死なせてほ
しいと泣きむせぶ様子も悲しかった。もう祈きとう禱の壇は壊こぼたれて、僧
たちもきわめて親しい人たちだけが残ってもそのほかのは仕事しま
いをして出て行くのに忙しいふうを見せている。こうしてもう最愛
の妻の命は人力も法力も施しがたい終わりになったのかと、院はた
とえようもない悲しみをお覚えになった。

「しかしこれは物怪もののけの所業だろうと思われる。あまりに取り乱して泣くものでない」

と院は泣く女房たちを制して、またまた幾つかの大願をお立てになつた。そしてすぐれた修験の僧をお集めになり、

「これが定きまつた命数でも、しばらくその期をゆるめていただきたい、不動尊は人の終わりにしばらく命を返す約束を衆生にしてください。それに自分たちはおすがりする。それだけの命なりとも夫人にお授けください」

こう僧たちは言つて、頭から黒煙を立てると言われるとおりの熱誠をこめて祈つていた。院も互いにただ一目だけ見合わす瞬間が与えられたい、最後の時に見合わせることでできなかった残念さ悲しさから長く救われたいと言つてお歎なげきになる御様子を見ては、どうしてこの夫人のあとにお生き残りになることはむずかしかりうと思われて、そのことをまた人々の歎なげくことも想像するにかたくない。

この院の夫人への大きな愛が御仏みほとけを動かしたのか、これまで少しも現われてこなかった物怪が、小さい子供のりうに憑つつて来て、大声を出し始めたのと同時に夫人の呼吸いきは通つてきた。院はうれしくも思召され、また不安でならぬようにも思召された。物怪は僧たちにおさえられながら言う、

「皆ここから遠慮をするがよい。院お一人のお耳へ申し上げたいことがある。私の霊を長く法力で苦しめておいでになつたのが無情な恨めしいことですから、懲らしめを見せようと思いましたが、さすがに御自身の命も危険なことになるまで悲しまれるのを見ては、今こそ私は物怪であつても、昔の恋が残っているために出て来る私なのですから、あなたの悲しみは見過みごせないで姿を現まわしました。」

私は姿など見せたくなかつたのだけれど」

と物怪は叫んだ。髪を顔に振りかけて泣く様子は、昔一度御覽になつた覚えのある物怪であつた。その当時と同じ無気味さがお心に湧いてくるのも恐ろしい前兆のように思われになつて、その子供の手を院はお捉えになつて、前へおすわらせになり、あさましい姿はできるだけ人に見させまいとお努めになつた。

「ほんとうにその人なのか。悪い狐などが故人を傷つけるためにでたらめを言ってくることがあるから、確かなことを言うがいい。他人の知らぬことで私にだけ合点のゆくことを何か言ってみるがいい。そうすれば少しは信じてもいい」

院がこうお言いになると、物怪はほろほろと涙を流しながら、悲しそうに泣いた。

「#ここから1字下げ」

「わが身こそあらぬさまなれそれながら空おぼれする君は君なり

「#ここで字下げ終わり」

恨めしい、恨めしい」

と泣き叫びながらもさすがに羞恥を見せるふうが昔の物怪に違ふ所もなかつた。嘘でないことからかえつてうとましい気がよけいにして情けなくお思われになるので、ものを多く言わすまいと院はされた。

「中宮に尽くしてくださいますことはうれしい、ありがたいこととはあの世からも見ておりますが、あの世界の人になつては子の愛というものを以前ほど深くは感じないのですか、恨めしいとお思いし

たあなたへの執着だけがこんなふうにもなつて残っています。その恨みの中でも、生きていますところにほかの人よりも軽くお扱いになつたことよりも、夫婦のお話の中で私を悪くお言いになつたことが私をくやしくさせました。もう私は死んでいるのですから、私が悪くつてもあなたはよくとりなして言うてくださつていいではありませんか。そうお恨みしただけで、こんな身になつていますと大形な表示にもなつたのです。奥様を深く恨んでいませんが、法の護りが強くて近づけないので反抗してみただけです。あなたのお声もほのかに承ることができましたからもういいのです。私の罪の軽くなるような方法を講じてください。修法、読経の声は私にとって苦しい焰になつてまつわつてくるだけです。尊い仏の慈悲の聲に接したいのですが、それを聞くことのできないのは悲しゅうございます。中宮にもこのことをお話しくださいませ。後宮の生活をするうちに人を嫉妬するような心を起こしてはならない、齋宮をお勤めになつた間の罪を御仏に許していただけるだけの善根を必ずなさい、あの世で苦しむことをよく考えなければならぬとね」

などと言うが、物怪に向かつてお話しになることもきまり悪くお思ひになつて、物怪がまた出ぬように法の力で封じこめておいて、病夫人を他の室へお移しになつた。

紫夫人が死んだという噂がもう世間に伝わつて弔詞を述べに来る人たちのあるのを不吉なことに院はお思ひになつた。今日の祭りの帰りの行列を見物に出ていた高官たちが、帰宅する途中でその噂を聞いて、

「たいへんなことだ。生きがいのあつた幸福な女性が光を隠される日だから小雨も降り出したのだ」

などと解釈を下す人もあった。また、

「あまりに何もかもそろった人というものは短命なものなのだ。『何をさくらに』(待てといふに散らでしとまるものならば何を桜に思ひまさまし)」という歌のように、そうした人が長生きしておれば、一方で不幸に甘んじていなければならぬ人も多くできるわけだ。二品の宮が院の御一寵愛を一身にお集めになる日もこれで来るだろう。あまりにお気の毒なふうだったからね」

などとも言う人があった。衛門督は引きこもっていた昨日の退屈さに懲りて今日は弟の左大弁、参議などの車の奥に乗って見物に出ていた町で、人の言い合っている噂が耳にはいった時に、この人は一種変わった胸騒ぎがした。「散ればこそいとど桜はめでたけれ」(何か浮き世に久しかるべき)なども口ずさみながら同車の人々とともに二条の院へ参った。まだ確かでないことであるから、形式を病気見舞いにして行つたのであるが、女房の泣き騒いでいる時であつたから、真実であつたかとさらに驚かれた。ちようど式部卿の宮がお駈けつかけになつた時で、萎れたふうで宮は内へおはいりになつた。押し寄せて来た多数の見舞い客の挨拶はまだことごとくは取り次ぎきれずに、家従たちの忙しがっている所へ左大將が涙をふきながら出て来た。

「どんなふうでいらっしゃるのですか。不吉なことを言う人があるのを私たちは信じる事ができないで伺つたのです。ただ長い御疾患を御心配申し上げて参つたのです」

などと衛門督は言つた。

「重態のまままで長く病んでおられたのですが、今朝の夜明けに絶息されたのは、それは物怪のせいだったので。ようやく呼吸が通う

ようになったと言つて皆一安心しましたが、まだ頼もしくは思われ
ないのですからね。気の毒でね」

と言う大将には実際今まで泣き続けていたという様子が残ってい
た。目も少しは腫はれていた。衛門督は自身のだいそれた心から、大
将が親しむこともなかつた継母のことでこうまで悲しむのは不思議
なことであると目をつけた。こんなふう高官らも見舞いに集まっ
て来たことをお聞きになつて、院からの御挨拶が伝えられた。

「重い病人に急変が来たように見えましたがために女房らが泣き騒ぎ
をいたしましたので、私自身もつい心の平静をなくしているおりか
らですから、またほかの日に改めて御好意に対するお礼を申しまし
よう」

院のお言葉というだけで、もう衛門督えもんのかみの胸は騒ぎ立っていたので
ある。こうした混雑紛れでなくては自分の来られない場所であるこ
とを知っているのであるから腹ぎたないふるまいである。

蘇生そせいしたのちをまだ恐ろしいことに院はお思いになつて、夫人の
ためにもろもろの法力の加護をお求めになつた。生霊いきまじりで現われた時
さえも恐ろしかつた物怪が、今度は死霊になつていたのであるから、
宗教画に描かれてある恐ろしい形相も想像されて、気味悪く、情け
なく思召された院は、中宮のお世話をされることもこの時だけは気
の進まぬことに思召されたが、しかしその人には限らず女というも
のは皆同じように、人間の深い罪の原因もとを作るものであるから、人
生のすべてがいやなものに思われるとお考えになり、あれは他人が
だれも聞かぬ夫婦の間の話の中にただ少し言つたことに過ぎなかつ
たのにと、そんなことをお思い出しになると、いよいよ愛欲世界が
うるさくお考えられになるのであつた。ぜひ尼になりたいと夫人が

望むので、頭の頂の髪を少し取って、五戒だけをお受けさせになった。戒師が完全に仏の戒めを守る誓いを、仏前で尊い言葉で述べる時に、院は体面もお忘れになり、夫人に寄り添って涙を拭いつつ夫人とともに仏を念じておいでになったのを見ると、聡明な貴人も御愛妻の病に仏へおすがりになる心は凡人に変わらないことがわかった。どんな方法を講じて夫人の病を救い、長く生命を保たせようかと夜昼お歎きになるために、院のお顔にも少し痩せが見えるようになった。五月などはまして気候が悪くて病夫人の容体がさわやいでいくとも見えなかったが、以前よりは少しいようであった。しかもまだ苦しい日々が時々夫人にあった。院は物怪の罪を救うために、日ごとに法華經一卷ずつを供養させておいでになった。そのほか何かと宗教的な営みを多くあそばされた。病床のかたわらで不断の読経もさせておいでになるのであって、声のいい僧を選んでそれにはあてておありになった。一度現われて以来おりおり出て物怪は悲しそうなことを言うのであって、全然一退いては行かないのである。暑い夏の日になっていよいよ病夫人の衰弱ははげしくなるばかりであるのを院は歎き続けておいでになった。病に弱っていないながらも院のこの御様子を夫人は心苦しく思い、自分の死ぬことは何でもないがこんなにお悲しみになるのを知りながら死んでしまうのは思いやりのないことであろうから、その点で自分はまだ生きるように努めねばならぬと、こんな気が起こったころから、米湯なども少しずつは取ることになったせいから、六月になってからは時々頭を上げて見ることもできるようになった。珍しくうれしくお思いになりながら、なお院は御不安で六条院へかりそめに行って御覧になることもなかった。

姫宮はあの事件があつてから煩悶はんもんを続けておいでになるうちに、お身体からだが常態でなくなつて行つた。御病氣のようにお見えになるが、それほどたいしたことではないのである。六月になつてからはお食しょく慾よくが減退してお顔色も悪くおやつれが見えるようになった。衛門督は思いあまる時々ときに夢のように忍んで来た。宮のお心には今も愛情が生じているのではおありにならないのである。罪をお恐れになるばかりでなく、風采ふうさいも地位もそれはこれに匹敵する価値のない人であることはむろんであつたし、氣どつて風流男がる表面を見て、一般人からは好ましい美男という評判は受けていても、少女時代から光源氏を良人おとこに与えられておいでになつた宮が、比較して御覽になつては、それほど価値に思われる顔でもないのであるから、無礼者であるという御意識以外の何ものもない相手のために、妊娠をあそばされたというのはお氣の毒な宿命である。氣のついた乳母めのとたちは、「たまにしかおいでにならないで、そしてまたこんなふうふうに重荷を宮様へお負わせになる」と院をお恨みしていた。寝やすんでおいでになることをお知りになつて、院は訪ねようとあそばされた。

夫人は暑い時分を清くしていたと思ひ、髪を洗つてやや爽快そうかいなふうになつていた。そしてそのまままた横になつていたのであるから、早くかわかず、まだぬれている髪は少しのもつれもなく清らかにゆらゆらと、病む麗人に添つていた。青みを帯びた白い顔は美しくてすきとおるような皮膚つきである。虫のもぬけのようにたよらない。しかも長く捨てて置かれた二条の院は女王にようの美の輝きで狭げにさえ見えた。昨日今日になつて人ごこちが夫人に帰つてきたこと

によつて院内が活気づいてにわか流れも木草も繕われだした。そうした庭をながめても、それが夏の終わりの景色けしきであるのに病臥びようがしていた間の月日の長さが思われた。池は涼しそつで蓮はすの花が多く咲き、蓮葉は青々として露がきらきら玉のように光っているのを、院が、

「あれを御覧なさい。自分だけが爽快がっている露のようじゃありませんか」

とお言いになるので、夫人は起き上がつて、さらに庭を見た。こんな姿を見ることが珍しくて、

「こつしてあなたを見ることのできるのは夢のようだ。悲しくて私自身さえも今死ぬかと思われた時が何度となくあつたのだから」

と、院が目涙を浮かべてお言いになるのを聞くと、夫人も身にしむように思われて、

「#ここから2字下げ」

消え留まるほどやは経ふべきたまさかに蓮はすの露のかかるばかりを

「#ここで字下げ終わり」

と言つた。

「#ここから2字下げ」

契りおかんこの世ならでも蓮の葉に玉ある露の心隔つな

「#ここで字下げ終わり」

これは院のお歌である。六条院へはお氣が進まないのであるが、

宮中の聞こえと法皇への御同情から、宮の床についておられる知らせを受けていながら、いっしょに住むほうの妻の大病の気づかわしさから訪ねて行くこともあまりしなかつたのであるから、女王の病のこんなふうにしよいい間にしばらくあちらの家へ行つていようという心におなりになつて院はお出かけになつた。

宮は心の鬼に院の前へ出ておいでになることが恥ずかしく晴れがましくて、ものをお言いになる返辞もよくされないのを長い絶え間にこの子供らしい人もさすがに恨んでいるのであろうと院は心苦しくお思いになり、慰めることにかかつておいでになつた。お世話役の女房をお呼び出しになり、宮の御不快の経過などを院がお聞きになると、それは妊娠の徴候があつてのことであるという答えをした。

「今になつて全く珍しいことが起こつてきたね」

とだけ院はお言いになつたが、お心の中では長くそばにいる人たちの中にもそうしたことはないのであるから、不祥なことがこちらで起こっているのではないかというような疑いをお覚えになりながら、それをくわしく聞こうとはされないで、ただ悪阻つわじに悩む人の若い可憐かれんな姿に愛を覚えておいでになつた。やつと思ひ立つておいでになつたのであるから、すぐにお帰りになることもできず、二、三日おいでになる間にも、二条の院の女王の容体ばかりがお気づかれになつて、そのほうへ手紙ばかりを書き送つておいでになつた。

「あんなにもしばらくの間にお言いになる感情がたまるのですかね。宮様をとうとうお気の毒な方様とお見上げする時が来ましたよ」

などと宮の御過失などは知らぬ人たちが言う。秘密に携わつていゝる小侍は院の御滞留の間を無事に過ごしうるかと胸をとどろかせ

ていた。

衛門督えもんのかみは院が六条のほうへ来ておいでになることを聞くと、だいそれた嫉妬しつとを起こして、自己の恋のはげしさをさらに書き送る気になって手紙をよこした。院が暫時ざんじ対のほうへ行つておいでになる時で、だれも宮のお居間にいない様子を見て、小侍従はそれを宮にお見せした。

「いやなものを読めというのね。私はまた気分が悪くなってきているのに」

こう言つて、宮はそのまま横におなりになった。

「この端書きはしががあまりに身にしむ文章なんでございますもの」

小侍従は衛門督の手紙を拵ひろげた。ほかの女房たちが近づいて来た気配けはいを聞いて、手でお几帳きちようを宮のおそばへ引き寄せて小侍従は去つた。宮のお胸がいつそうとどろいている所へ院までも帰つておいでになったために、手紙をよくお隠しになる間がなくて、敷き物の下へはさんでお置きになった。二条の院へ今夜になれば行こうと院はお思いになり、そのことを宮へお言いになるのであつた。

「あなたはたいしたことがないようですから、あちらはまだあまりにたよりないようなの見捨てておくように思われても、今さらかわいそうですから、また見に行つてやろうと思ひます。中傷する者があつても、あなたは私を信じておいでなさいよ。また忠実おつとな良人になる日が必ずありますよ」

これまではこんな時にも、子供めいた冗談じょうだんなどをお言いになつて、朗らかにしている方なのであつたが、非常にめいつておしまいになり、院のほうへ顔を向けようともしれないのを、内にいづく嫉妬しつとの影がさしているとはかり院はお思いになった。昼の座敷でしばらく

お寝入りになつたかと思うと、蝸つづみの啼なく声でお目がさめてしまった。

「ではあまり暗くならぬうちに出かけよう」

と言いながら院がお召しかえをしておいでになると、

「『月待ちて』(夕暮れは道たどたどし月待ちて云々うんげん)とも言いますのに」

若々しいふうで宮がこうお言いになるのが憎く思われるはずもない。せめて月が出るころまででもいてほしいとお思いになるのかと心苦しくて、院はそのまま仕度したくをおやめになった。

「#ここから2字下げ」

夕露に袖濡そでぬらせとやひぐらしの鳴くを聞きつつ起きて行くらん

「#ここで字下げ終わり」

幼稚なお心の実感をそのままな歌もおかわいくて、院は膝ひざをおかがめになつて、

「苦しい私だ」

と歎息たんそくをあそばされた。

「#ここから2字下げ」

待つ里もいかが聞くらんかたがたに心騒がすひぐらしの声

「#ここで字下げ終わり」

などと躊躇ちゅうちゆをあそばしながら、無情だと思われることが心苦しくてなお一泊してお行きになることにあそばされた。さすがにお心は

落ち着かずに、物思いの起こる御様子で晩饗ばんせんはお取りにならずに菓子だけを召し上がった。

まだ朝涼あさすずの間に帰ろうとして院は早くお起きになった。

「昨日の扇をどこかへ失ってしまったて、代わりのこれは風がぬるくていけない」

とお言いになりながら、昨日のうたた寝に扇をお置きになった場所へ行ってごらんになったが、立ち止まって目をお配りになると、敷き物のある一所の端が少し縫よれたようになっていた。薄緑つすようの薄様の紙に書いた手紙の巻いたのがのぞいていた。何心なく引き出して御覧になると、それは男の手で書かれたものであった。紙の匂においなどの艶えんな感じのするもので、骨を折った巧妙な字で書かれてあった。二重ねにこまごまと書いたのをよく御覧になると、それは紛れもない衛門督えもんのかみの手跡であった。院のお座の所で鏡をあけてお見せしている女房は御自分の御用の手紙を見ておいでになるものと思っていたが、小侍従「#「小侍従」は底本では「小侍従」」がそれを見た時、手紙が昨日の色であることに気がついた。胸がぶつぶつと鳴り出した。粥かゆなどを召し上がる院のほうを小侍従はもう見ることでもできなかつた。まさかそうではあるまい、そんな運命いたずらの悪戯いたずらが不意に行なわれてよいものか、宮はお隠しになったはずであると小侍従は努めて思おうとしている。宮は何もお知りにならずになお眠っておいでになるのである。こんな物を取り散らしておいて、それを自分でない他人が発見すればどうなることであろうとお思いになると、その人が軽蔑けいべつされて、これであるから始終自分はおぶながつていたのである。あさはかな性格はついに墮落を招くに至ったのであると院は解釈された。

お帰りになったので、女房たちがあらかた宮のお居間から去った時に、小侍従が来て、

「昨日の物はどうなさいました。今朝院けさが読んでいらつしやいましたお手紙の色がよく似ておりましたが」

と宮へ申し上げた。はっとお思いになって宮はただ涙だけが流れに流れる御様子である。おかわいそうではあるがふがない方であると小侍従は見ていた。

「どこへお置きになったのでございますか。あの時だれかが参ったものですから、秘密がありそうに思われますまいと、それほどのことは何でもなかったのですが、よいことをしておりますと心がかめまして、私は退のいて行つたのでございますが、院がお座敷へお帰りになりましたまではちよつと時間があつたのでございますもの、お隠しあそばしたろうと安心をしております」

「それはね、私が読んでいた時にはいつていらつしやつたものだから、どこへしまうこともできずに下へはさんでおいたのをそのまま忘れたの」

こう伺つた小侍従は、この場合の気持ちやどう表現すればよいかも知らなかった。そこへ行つて見たが手紙のあるはずもない。

「たいへんでございますね。あちらも非常に恐れておいでになりまして、毛筋ほども院のお耳にはいることがあつたら申し訳がないと言つておいでになりましたのに、すぐもうこんなことができたではございませんか。全体御幼稚で、男性に対して何の警戒もあそばさなかつたものですから、長い年月をかけた恋とは申しながら、こつまで進んだ関係になるうとはあちらも考えておいでにならなかつたことでございますよ。だれのためにもお気の毒なことをなさいま

したね」

と無遠慮に小侍従は言う。お若い御主人を気安く思つて礼儀なしになつているのであるう。宮はお返辞もあそばさないで泣き入つておいでになつた。御気分がお悪いばかりのようではなく、少しも物を召し上がらないのを見て、

「こんなにもお苦しそうでいらつしやるのに、それを捨ててお置きになつて、もうすっかり快くなつておいでになる奥様の御介抱を一所懸命になさるなければならぬとはね」

と乳母^{めのと}たちは恨めしがつた。

院はお帰りになつてから、まだ不審のお晴れにもならぬ今朝の手紙をよく調べて御覧になつた。女房のうちであの中納言に似た字を書く女があるのではないかという疑いさえお持ちになつたのであるが、言葉づかいは明らかに男性であつて、他の者の書くはずのないことが内容になつてもいた。昔からの恋がようやく遂げられたのではあるが、なお苦しい思いに悩み続けていることが、文学的に見ておもしろく書かれてあつて、同情は惹^ひくが、こんな関係で書きかわす手紙には人目に触れた時の用意がかねてなければならぬはずで、露骨に一目瞭然^{しつぱん}に秘密を人が悟るようなことはすべきでないものと、院はお思いになり、りっぱな男ではあるが、こうした関係の女への手紙の書き方を知らない、落ち散ることも思つて、昔の日の自分はこの類する場合も文章は簡単にして書き紛らしたものであるが、そこまでの細心な注意はできないものらしいと、衛門督^{えもんのかみ}を軽蔑^{けいべつ}あそばされるのであつた。それにしても宮を今後どうお扱いすればよいであろうか、妊娠もそうした不純な恋の結果だつたのである。情けないことである。人から言われたことでもなく、直接に証拠も

見ながら、以前どおりにあの人を愛することは、自分のことながら不可能らしい。一時的の情人として初めから重くなどは思っていない相手さえ、ほかの愛人を持っていることを知っては不愉快でならぬものであるが、これはそうした相手でもない自分の妻である。無礼な男である。お上かみの後宮と恋の過失に陥る者は昔からあったが、それとこれとは問題が違う。宮仕えは男女とも一人の君主にお仕えするのであって、同輩と見る心から友情が恋となつて不始末を起さず結果も作られるのである。女御にょごや更衣こういといつてもよい人格の人ばかりがいるわけではないから、浮き名を流す者はあつても、破綻はたんを見せない間は宮仕えを辞しもせずして、批難すべきことも起こつたであろうが、自分の宮に対する態度は第一の妻としてのみ待遇してきたではないか、心ではより多く愛する人をもさしおいて、最大級の愛撫あいぶを加えていた自分を裏切つておしまいになるようなことと、そんなことは同日に論ずべきでない、これは罪深いことではないかと反感のお起こりになる院でおありになつた。侍している君主のほうでもただ一通りの後宮の女性と御覧になるだけで、御愛情に接することもないような不幸な人に、異性の持つ友情が恋愛にも進んでゆけば、あるまじいこととは知りながらも、苦しむ男に一言の慰めくらいは書き送ることになり、相互の間に恋愛が成長してしまふ結果を見るような間柄で犯す罪には十分同情してよい点もあるが、自分のことながらも、あの男くらいに比べて思い劣りされるほどの無価値な者でないと思うがと、院は宮を飽き足らずお思いになるのであったが、またこの問題はほかへ知らせてはならぬと思うことで御一煩悶はんもんもされた。父帝もこんなふうに分の犯した罪を知つておいでになつて知らず顔をお作りになつたのではなからうか、考えて

みれば恐ろしい自分の過失であつたと、御自身の過去が念頭に浮かんで来た時、恋愛問題で人を批難することは自分にできないのであると思召おぼしめされた。

素知らぬふりはしておいでになるが、物思わしいふうは他からもうかがわれて、夫人は危い命を取りとめた自分をお憐あわれみになる心から、こちらへはお帰りになつたものの、六条院の宮をお思いになると心苦しくてならぬ煩悶が起こりになるのであると解釈していた。

「私はもう恢復かいふくしてしまつたのでございますのに、宮様のお加減のお悪い時にお帰りになつてお気の毒でございます」

「そう。少し悪い御様子だけれど、たいしたことでないのだから安心して帰つて来たのですよ。宮中からはたびたび御使みつかいがあつたそつだ。今日もお手紙をいただいたとかいうことです。法皇の特別なお頼みを受けておられるので、お上かみもそんなにまで御関心をお持ちになるのですね。私が冷淡であればあちらへもこちらへも御心配をかけて済まない」

院が歎息たんそくをされると、

「宮中への御遠慮よりも、宮様御自身が恨めしくお思いになるほうがあなたの御苦痛でしょう。宮様はそれほどなくてもおそばの者が必ずいろいろなことを言うでしょうから、私の立場が苦しゅうございます」

などと女王にょおうは言う。

「私の愛しているあなたにとって、あちらのことは迷惑千万に違いないが、それをあなたは許して、つまらない者の感情をまで思いやってくれる寛大な愛に比べて、私のはただお上が悪くお思いになら

ないかという点だけで苦勞をしているのは、あさはかな愛の持ち主というべきですね」

微笑をしてお言い紛らわしになる。

「六条院へはあなたが快くなつた時にいつしよに帰ればいいのですよ。宮の御訪問をするのもそれからあとのことです」

そうきめておいでになるように仰せられた。

「私は静かな独棲ひとりすみというものもしてみとうございますから、あちらへおいでになつて、宮様のお心のお慰みになりますまでずっといらつしやい」

夫人からこんな勧めを聞いておいでになるうちに日数がたつた。

院のおいでにならぬ間の長いことで今までは院をお恨みにもなつた宮でありになるが、今はその一部を自身の罪がしからしめているのであるということをお知りになつて、しまいに法皇のお耳へもはいつたならどう思召おしほすことであるうと、生きておいでになることすらも恐ろしくばかりお思われになるのであつた。お逢あいしたいとしきりに衛門督えもんのかみは言ってくるが、小侍従は面倒な事件になりそうなのを恐れて、こんなことがあつたと緑の手紙のことを書いてやつた。衛門督は驚いて、いつの間にそうしたことができたのであるう、月日の重なるうちにはいろいろな秘密が外へ洩もれるかもしれぬと思うだけでも恐ろしくて、罪を見る目が空にできた気がしていたのに、ましてそれほど確かな証拠が院のお手にはいつたということは何たる不幸であろうと恥ずかしくもつたいなくすまない気がして、朝涼も夕涼もまだ少ないこのごろながらも身に冷たさのしみ渡るものがある気がして、たとえようもない悲しみを感じた。長い歳月としつきの間、まじめな御用の時も、遊びの催しにもお身近の者として離れず侍し

てきて、だれよりも多く愛顧を賜わった院の、なつかしいお優しさを思うと、無礼な者としてお憎しみを受けることになっては、自分は御前で顔の向けようもない。そうかといって、すっかりお出入りをせぬことになれば人が怪しむことであろうし、院をばさらに御不快にすることになると煩悶する衛門督は、健康もそこねてしまい、御所へ出仕もしなかった。大罪の犯人とされるわけではないが、もう自分の一生はこれでためであるという気のすることによって、このことを予想しないわけでもなかったではないかと、あやまった大道に踏み入った最初の自分が恨めしくてならなかった。だいたい御身分相当な奥深い感じなどの見いだせなかった最初の御簾の隙間も、しかるべきことではない。大将も軽々しいと思ったことはあの時の表情にも見えたなどと、こんなことも今さら思い合わせたりした。しいてその人から離れたいと願う心から欠点を捜すのかもしれない。どんなに貴人といっても、おおようで、気持ちの柔らかい一方な人は世間のこともわからず、侍女というものに警戒をしなければならぬこともお知りにならないで、取り返しのつかぬあやまちを御自身のためにも作り、人にも罪を犯させる結果になったと思ひ、衛門督の心は、宮のお気の毒なことを思ひやつて堪えがたい苦悶をするのであった。

宮が可憐な姿で悪阻に悩んでおいでになるのが院のお目に浮かんで、心苦しく哀れにお思われになった。良人としての愛は消えたように思っておいでになっても、恨めしいのと並行して恋しさもおさえがたくおなりになり、六条院へおいでになった。お顔を御覧になると胸苦しくばかりおなりになる院でおありになった。祈禱を寺々へ命じてさせてもおいでになるのである。表面のお扱いでは以前と

何も変わっていない。かえって御優遇をあそばされるようにも見えるのであるが、夫婦としてお親しみになることはそれ以来断えてしまった。人目を紛らすために御同室にお寝やすみになりながら、院がお一人で煩悶はんもんをしておいでになるのを御覧になる宮のお心は苦しかった。秘密を知ったともお言いにならぬ院でありになったが、女宮は御自身で罪人らしく萎縮いしゆくしておいでになるのも幼稚な御態度である。こんなふうの人であるから不祥事も起こったのであろう。貴女らしいとはいってもあまりに柔らかな性質は頼もしくないものであるとお考えになると、いろいろの人の上がお気がかりになった。女御にょがあまりに柔軟な様子であることは、この宮における衛門督のよくな恋をする男があるとすれば、その目に触れた以上精神を取り乱して大過失を引き起こすに至るかもしれぬ、女性のこうした柔らかい一方である人は、軽侮してよいという心を異性に呼ぶのか、刹那せつな的に不良な行為をさせてしまうものであると、院はこんなこともお思いになった。右大臣夫人がそれという世話を受ける人もなくて、幼年時代から苦勞をしながら才も見識もあつて、自分なども義父らしくはしながらも、恋人に擬しておさえがたい情念を内に包んでいたのを、かどだたず気がつかぬふうに退け続けて、右大臣けいちろうが軽佻けいちょうな女房の手引きでしいて結婚を遂げた時にも、自身は単なる受難者であることを、それ以後の態度で明らかにして、親や身内の意志で成り立した夫婦の形を作らせたことなどは、今思つてみてもきわめてりっぱなことであつたと、玉璽たまがすらのこともこのふがない人に比べてお思われになった。深い宿縁があつて夫婦になった人であるから、離婚をしようとは考えないが、品行問題で世評の立つことになれば、それにしたがって知らず知らず多少の侮蔑ぶくつを自分は加えることにな

るであろう。あまりにも実質に伴わない尊敬をしてきたと、以前からのことを思ってもごらんになった。

院は二条の臙月夜おぼろしげの尚侍になお心を惹かれておいでになるのであるが、女三にょさんの宮みやの事件によつて、後ろ暗い行動はすべきでないという教訓を得たようにお思いになつて、その人の弱さにさえ反感に似たようなものをお覚えになつた。尚侍が以前から希望していたとおりおりにに尼になつたことをお聞きになつた時には、さすがに残念な気がされてすぐに手紙をお書きになつた。その場合に臨んで、されてよい予報のなかつたことをお恨みになる言葉がつづられてあつた。

「#ここから2字下げ」

あまの世をよそに聞かめや須磨すまの浦うらに藻塩もしほ垂れしもたれならなくに

「#ここから1字下げ」

人世の無常さを味わい尽くしながらも、今日まで出家を實行しえな
い私を、あなたはどんなに冷淡になつておいでになつてもさすがに
回向えこうの人数の中にはお入れくださるであらうと、頼みにされるとこ
ろもあります。

「#ここで字下げ終わり」

などという長いお文ぶみであつた。早くからの志であつたが、六条院
がお引きとめになるために、それでない表面の理由は別として、尚
侍は尼になるのを躊躇ちゆうちゆうするところがあつたのでさえあるから、この
お手紙を見て青春時代から今日までの二人のつながりの深さも今さ
らに思われて身にしむ尚侍であつた。返事はもう今後書きかわすこ
とのない終わりのものとして心をこめて書いた尚侍の手跡が美しく

った。

「#ここから1字下げ」

無常は私だけが体験から知ったものと思っておりましたが、しおくれたと仰せになりますことで、こんなにも思われます。

「#ここから2字下げ」

あま船にいかかは思ひおくれけん明石の浦にいさりせし君

「#ここから1字下げ」

回向には、この世のすぐれた方として決してあなた様を洩らしはいたしません。

「#ここで字下げ終わり」

これが内容である。濃い鈍色の紙に書かれて、櫛の枝につけてあるのは、そうした人のだれもすることであっても、達筆で書かれた字に今も十分のおもしろみがあった。この日は二条の院においてになつたので、夫人にも、もう実際の恋愛などは遠く終わった相手のことであつたから、院はお見せになつた。

「こんなふうに侮辱されたのが残念だ。どんな目にあつても平気なように思われて恥ずかしい。恋愛的な交際ではなしに、友人として同程度の趣味を解する人で、仲よくできる異性はこの人と齋院だけが私に残されていたのだが、今はもう尼になつてしまわれた。ことに齋院などは尼僧の勤めをする一方の人になつておしまいになつた。多くの女性を見てきているが、高い見識をお持ちになつて、しかもなつかしい匂いの備わっているような点であの方に及ぶ人はなかつた。女を教育するのはむずかしいものですよ。夫婦になる宿命とい

うものは、目に見えないもので、親の力でどうしようもないものだから、結婚するまでの女の子の教育に親は十分力を尽くすべきだと思う。私は娘を一人しか持たなくてその責任の少ないのがうれしい。まだ若くて人生のよくわからなかったころは、子の少ないことが寂しく思われもしたのですがね。まあ孫の内親王をよくお育てしておあげなさい。女御はまだ大人になりきららないで宮廷へはいつてしまったのだから、すべてがいまだに不完全なものだろうと思われる。姫宮の教育は最高の女性を作り上げる覚悟で、微瑕もない方にして、一生を御独身でお暮らしになってもあぶなげのない素養をつけたいものです。結婚をすることになっている普通の家の娘はまた良人さえりっぱであれば、それに助けられてゆくこともできますがね」

などと院がお言いになると、

「りっぱなお世話はできませんでも、生きています間は姫宮のおためにになりたい心でございますが、健康がこんなのではね」

と答えて夫人は心細いふうにわが身を思い、自由に信仰生活へはいることのできた人々をうらやましく思った。

「尚侍の所は尼装束などもまだよくととのっていないことだろうから、早く私から贈りたいと思うが、袈裟などというものはどんなふうにしてこしらえるものだろう。あなたがだれかに命じて縫わせてください。一そろいは六条の東の人にしてもらいましょう。あまりに法服らしくなつては見た感じもいやだろうから、その点を考慮して作るのですね」

と院はお言いになった。青鈍色の一そろいを夫人は新尼君のために手もとで作らせた。院は御所付きの工匠をお呼び寄せになつて、尼用の手道具の製作を命じたりしておいでになつた。座蒲団、上敷、

屏風、几帳などのこともすぐれた品々の用意をさせておいでになつた。

紫夫人の大病のために法皇の賀宴も延びて秋ということになつていたが、八月は左大将の忌月で音楽のほうをこの人が受け持つのに不便だと思われたし、九月はまた院の太后のお崩れになつた月で、それもだめ、十月にはと六条院は思つておいでになつたが、女三の宮の御健康がすぐれないためにまた延びた。衛門督の夫人になつておいでになる宮はその月に参入された。舅の太政大臣が力を入れて豪華な賀宴がささげられたのである。病気で引きこもっていた衛門督もその時はじめて外出をしたのであつた。しかもそのあとはまた以前にかえつて、病床に親しむ督であつた。女三の宮も御一煩悶ばかりをあそばされるせいか、月が重なるにつれてますますお身体がお苦しいふうに見えた。院は恨めしいお気持ちはあつても、可憐な姿をして病んでおいでになる宮を御覧になつては、どうなるのであろうと不安を覚えてお歎きになることが多かつた。祈祷をおさせになることで御多忙でもあつた。法皇も宮の御妊娠のことをお聞きになつて、かわいく想像をあそばされ、逢いたく思召された。長く六条院は二条の院のほうに別れておいでになつて、お訪ねになることもまれまれであると申し上げた人も以前あつたことによつて、御妊娠がただ事の結果でなくはないのであるまいかとふとこんなことを思召すとお胸が鳴るのもあつた。人生のことが今さら皆お恨めしくて、紫夫人の病気のころは院があちらにばかり行つておいでになつたのを、もっともなことはいえ、思いやりのないこととして聞いておいでになつたが、夫人の病後も院の御訪問はまれになつたというのは、その間に不祥なことが起こつたのではあるまいか。宮が

自発的に墮落の傾向をおとりになつたのではなく、輕薄な女房の仕業などで不快な事件があつたのではなからうか、宮廷における男女の間は清潔な交際で終始しなければならぬものであるのに、その中にさえ醜聞を作る者があるのであるからと、こんなことまでも御想像あそばされるのは、いっさいをお捨てになつた御心境にもなお御子をお思いになる愛情だけは影を残しているからである。法皇が愛のこもつたお手紙を宮へお書きになつたのを、六条院も来ておいでになる時で拝見されたのであつた。

「#ここから1字下げ」

用事もないものですから無沙汰ぶさたをしているうちに月日がたつということもこの世の悲しみです。あなたが普通でない身体からだになつて健康もそこねているということをくわしく聞きましたが、今はどうですか。世の中が寂しくなるような運命に出あつても、忍んでお暮らしなさい。恨めしがる様子をお見せになつたり、妬みねたを告げたりすることは上品なものではありません。

「#ここで字下げ終わり」

などと訓さとしておありになるのである。院はお氣の毒で、心苦しくて、宮に秘密のあることなどはお知りあそばされずに、自分の不誠意とばかり解釈しておいでになるのであろうとお思いになつて、

「お返事はどうお書きになりますか。心苦しいお手紙で私はつらい気がしますよ。あなたにどんなことがあつても、人に変わった様子は見せまいと私は努めているのですよ。だれがいろいろなことを申し上げたのだろう」

とお言いになると、恥じて顔をおそむけになる宮のお姿が可憐かれんであつた。顔がすっかり瘦やせて物思いに疲れておいでになるのが上品

に美しい。

「あなたの幼稚な性質を知っておいでになって、こんなにもお言いになるのだと、私は他のことと思ひ合わせてごもつともだと思われ点がありますよ。それで今後も危あぶなかく思われてならない。こんなふうに言ってしまうおうとは思わなかつたことですが、院が私を頼みがいなく思召すだろうと思うことが苦痛ですからね。あなただけにでも私が軽薄な者でないことを認めてほしいと思うのですよ。深く物をお考えにならないで、人のいいかげんな言葉にお動きになるあなたには、私のほんとうの愛が浅いものに見えもするでしょうし、またあなたとは年齢としの差のはなはだしい良人おっとを軽蔑けいべつしたくもなるでしょうけれど、私としてそれを残念に思わないわけはありませんが、院の御在世中だけは、これを幸福な道としてお選びになつたことですから、老いた良人をもあまり無視するようなことはお慎みになるがいいのですよ。昔から願つてゐる出家の志望も、自分よりは幼稚な宗教心しか持つまいと思つてゐた女の人たちが先に実行するのを傍観してゐるのも、私自身がこの世の欲を捨てえないのではなくて、出家をあそばす際にはあなたをお託しになつた院のお志に感激した心が、すぐまた続いてあなたを捨てて行くような行動を取らせなかつたのですよ。以前は気がかりに思われた人も今ではもう出家の絆ほどしにならないだけになつてゐるのです。女御だつてどうなるか知りませんが、皇子たちがお殖ふえにもなつてゆくのですから、後宮の地位などは問題にさえせねば苦勞のない立場を得られることだけはできると私も見ておけます。そのほかの人たちは成り行きのみまで、私といつしよに出家をしてしまつてももういいほどの年齢としになつてゐるとこのごろでは思われます。院ももう長くはおいでにな

らないでしょう。以前よりいつそうお身体からだが弱くおなりになって、心細い御様子でいらっしやるとのことですから、今になって悪い名などをお耳に入れて御心配をかけてはいけませんよ。この世は何でもありませんが、来世のお妨げになることをしてはあなたの罪も大きくなりますよ」

そのことと露骨にお言ひにならないのであるが、しみじみとお説きになるために、宮は涙ばかりがこぼれて、知らず知らずめいり込んでおしまいになったのを御覧になる院も、お泣きになって、

「他の人がこうしたことを言うのを、聞く必要もない老人としよりの理窟りくつだと思つた私だが、いつのまにかそれを言うほうの人に私がついてゐる。よけいなことを言う老人だと思ひになつていつそういやになるでしょう」

ともお言ひになつて、硯すずりを引き寄せて御自身で墨をおすりになり、紙をお選りよになりなどして、お返事を書かせようとされるのであるが、宮は手も慄ふるえてお書きになれない。あの濃厚な言葉の盛られてあつた衛門督えもんのかみの手紙の返事はこんなに洩らずに書かれたであろうとお思ひになると、また反感が起こるでもおありになつたが、それでも院は言葉などを口授くじゆしてお書かせになつた。

「お伺ひになることはこんなことで今月もだめでしたね。それに新婚者の女二にょにの宮みやが派手はでな御賀をおささげになつた時に、老人の妻であるあなたが競争的に出て行くのは遠慮すべきだと思ひましたよ。十一月はあなたのお母様の忌月でしょう。十二月はあまりに押しつまつてよろしくないし、あなたの身体からだも見苦しくなるだろうから、久しぶりにお姿を御覧に入れるのはいかがかと思ひますが、しかしそうそう延ばしてよいことありませんからね、あまり物思ひをし

ないようにして、朗らかな心になって、瘦やせたお顔のなおるようにならずなさい」

などとお言いになって、さすがにかわいくは思召すのであった。

衛門督をどんな催し事にも必要な人物としてお招きになって御相談相手に今まではあそばす院でおありになったが、今度の法皇の賀に限って何の仰せもない。人が不審がるであろうとはお思いになるのであるが、その人が来てはずかしめられた老人である自分の見られることも不快であるし、自分が彼を見ては平静で心がありえなくなるかもしれないと院はお思いになって、もう幾月も参殿しない人を、なぜかとお尋ねになることもないのである。ただの人たちは衛門督が病氣続きであつたし、六条院にもまた音楽その他のお催しの全くない年であるからと解釈していたが、左大将だけは何か理由のあることに違いない、多感多情な男であるから、自分が推測していたあの恋で自制の力を失うようなことがあつたのではないかとはい見えても、まだこれほど不祥なことが暴露してしまつたとは想像しなかつた。

十二月になつた。十幾日と法皇の御賀の日が定められて六条院の中は用意に忙しくなつた。二条の院の夫人はまだそのまま帰らずにいたが、御賀の試楽があるのに興味を覚えてもどつてきた。女御も実家にいた。今度のお産でお生まれになつたのもまた男宮であつた。次々に皆かわいい宮様を夫人はお世話することに生きがいを感じていた。試楽の日は右大臣夫人も六条院へ来た。左大将は東北の御殿でそれ以前にすでに毎日監督する舞曲の練習をさせていたから、花はな散里夫人は試楽の見物には出て来なかつた。衛門督をこの試楽の日ちるさに除外するのは惜しく物足らぬことであると院はお思いになつたし、

それ以上にまた人の不審を引くことをお恐れにもなつて、来るようにと使いをお向けになつたが、病の重いことを申して督は出て来ようとしなかつた。病氣といつても何という名のある病をしているのでもないわけであるが、やましく思う点があるのであると、心苦しうしく思召して、特使をさえもおやりになつて招こうとあそばされた。父の大臣も、

「なぜ御辞退をしたかね。何か含むことでもあるように院がお思ひになるだろうに。大病というのではないのだから、無理をしても参つたほうがよい」

と勧めていたところへ再度のお使いが来たのであつたから、つらい気持ちをいだきながら参つた。それはまだ他の高官などの集まつて来ない時分であつた。これまでのようにお座敷の御簾の中へ衛門督をお入れになつて、院御自身はまた一つの御簾を隔てた奥のお居間においでになつた。噂のとおりに非常に痩せて顔色が悪かつた。

平生もはなやかな派手な美しさは弟たちのほうに多くて、この人は深く落ち着いた静かな風采によさのあつた人であるが、今日はことにおとなしい身のとりなしで侍している姿を、内親王の配偶者として見ても相応らしい男であるが、その関係の正しくないのが不快だ、憎悪を覚えすにはおられないのであると院は思召したが、さりげなくしておいでになつた。

「機会がなくてあなたにも長く逢いませんでしたね。長く病人の介抱をしていて何の余裕もなくてね、前からここへ来ておいでになる宮が、院の賀に法事をして差し上げたいと言つておられたのが、いろいろな故障で滞つていてね、今年も暮れになつたので、これ以上延ばすこともできず、以前に計画したとおりのことはととのわない

が、形だけでも精進のお祝い膳を差し上げる運びになって、賀宴などというたいそうだが、親戚の子供たちの数がたくさんにもなっているのだから、それだけでも御覧に入れようと思つて舞の稽古などをさせ始めたものだから、せめてそれだけでもうまくゆくようにと思つて、拍子が合うか試してみるのが、指導をしていただくのに、だれがよいかともよく考える間がなくてあなたに御面倒を見てもらうのがよいときめて、長くおいでもなかつたお恨みも捨てたわけですよ」

とお言いになる院の御様子に、昔と変わった所もないのであるが、衛門督は羞恥を感じて自身ながらも顔色が変わっている気がして、急にお返辞ができないのであつた。

「長らく奥様がたが御病氣をしておいでになりますことを承つておりまして、御心配を申し上げながら、前からございました脚気がしきりに出てまいりまして、歩行が困難でございましたために御所へ上がる事ができませんで、すっかり世の中から隔離されましたよ。うな寂しい生活をいたしておりました。院がおめでたい年に達せられますので、年来の御一交誼に対してまずお祝いを申し上げなければと父が申ししておりましたが、関白を拝辞しました自分が表だつて出る事よりも、地位は低くとも中納言の私が主催するのが妥当である。と父は考えるようになりまして、私の誠意をお目にかくべきだと勧められましたものですから、病体をおしてあちらへはお伺いしたたのでございます。いよいよお寂しい静かな御生活のように拝見いたしましたあちらの御様子では、はなやかな賀宴をお持ち込みあそばすようなことは恐縮なされるだけではないかと拝察されまして、こちら様の御質素な御計画はかえつて御満足になることかと存

ぜられます」

と衛門督えもんのかみが申すと、華奢かしやを尽くしてお目にかけたという前日の賀宴を女二の宮の関係でしたとは言わずに、父のためにしたと話すのに心の鍛錬のできていることがうかがわれると院は思召された。

「私の所でやらせていただくことはこのとおりに簡単なことであるのを見て、一概に悪く言う人もあるであろうと思っていたが、理解のあるお言葉を聞いて、さすがにとあなたにはいよいよ敬意が払われる。大將は役人としては少しは経験ができたようでも、そうした繊細な観察をすることなどは、得意でもないだろうがいつこうだめですよ。法皇はあらゆる芸術に通じておいでになるが、その中でも最も音楽の御一造詣ぞうげいが深いから、それらに遠ざかっておいでになる御出家後といえども院が御覧になるのだと思うと晴れがましいのですよ。あの大將といっしょに、舞い手になる子供へ、心得べきことをよく注意しておいてくれたまえ。専門家の師匠というものは自身の芸には偉くても融通のきかないものだから」

などとお命じになるなつかしい味のある院の御様子をうれしく拝しながらもまた衛門督は恥ずかしく、きまり悪く思われて、言葉少なにしている少しも早く御前を立つて行きたいと願われる心から、以前のように細かい話しぶりは見せずにいるうち、ようやく願いどおりここに去るによい時を見つけた。東北の御殿で大將が掛かりになつて十分に用意してあつた舞い手と楽人の衣装などが、また衛門督の意見によって加えられるものもできた、その道には深く通じている衛門督であつたから。今日は試楽の日なのであるが、これだけを見物するのにとどまる夫人たちも多いため、目美しくして見せるのに、賀の当日の舞い人の衣装は、明るい白櫛しろくしほみに紅紫したかさねの下襲したかさねを着る

はずであつたが、今日は青い色を上えんじに臘脂えんじを重ねさせた。今日の楽人三十人は白襲しろがさねであつた。南東の釣殿ついでんへ続いた廊の室へを奏楽室にして、山の南のほうから舞い人が前庭へ現われて来る間は「仙遊せんゆう霞か」という楽が奏されていた。ちらちらと雪が降つて、もう隣へ近づいた春を見せて梅の微笑ほほえむ枝が見える林泉の趣は感じのよいものであつた。

縁側に近い御簾みすの中に院のお席があつて、そこにはただ式部卿しきぶきやうの宮が御同席され、右大臣の陪覽する座があつただけである。以下の高官たちは皆縁側に席をして、そこには形式を省いた饗応きやうおうの物が出されてあつた。右大臣の四男と、左大将の三男、それに兵部卿ひやうぶきやうの宮の御幼年の王子お二人の四人立ちで万歳楽が舞われるのであるが、皆小さい姿でかわいかつた。四人とも皆高い貴族の子供たちで風貌ふうぼうが凡庸でない。皆にいたわれながら小公子たちは登場した。また大将の典侍腹てんじはらの二男と、式部卿の宮の御長男でもとは兵衛督であつて今は源中納言となつている人の子のこの二人が「皇」「#」「鹿/章」
、第3水準ことうじやう「94-7第3」、右大臣の三男が「陵王りやうおう」、大将の長男の「落躑らくしん」のほかにも「太平楽」「喜春楽」などの舞曲も若い公達きんだちが演じた。日が暮れてしまつと御前の御簾は巻き上げられて、音楽にも舞にもおもしろみが加わつてゆく。かわいい姿の御孫の公達は秘伝を惜しまずそれぞれの師匠が教えた芸に、よい遣伝からの才氣の加味された舞をだれもだれもおもしろく見せるのを、皆かわいく院は思召おぼしめした。老いた高官たちは皆落涙をしていた。式部卿の宮も御孫の芸にお鼻の色も変わるほど感動されたのであつた。六条院が、「年のゆくにしたがつて酔い泣きをすることがますます烈はげしくなつてゆく。衛門督えもんのかみのおかしそうに笑つておられるのが恥ずかしい。歳

月はさかさまに進むものではないからね。あなたがたでも老いはのがれられないのですよ」

と言つてその人の顔を御覧になる。だれよりもまじめに堅くなつていて、偽りでなく身体からだの具合も悪く思われ、おもしろいことも目にとまらぬ気持ちになつてゐる衛門督を、お名ざしになり、酔態に託してこう仰せられるのは戯れらしくはあつたが、その人ははつと胸がとどろいて、めぐつて来た杯は手に取つてもただ少ししか飲まないのを、院は見とがめになつて、御座からたびたび侍者に酒を持たせておつかわしになり、おしいになるのを、困りながら辞退する取りなしなども、平凡な人とは見えぬ感じよく院はお思いになつた。身心の苦痛に堪えられなくなつて衛門督はまだ宴の終わらぬうちに辞して歸つたが、悪酔いからさめることのできないのは、院を目まのあたり見て罪の自責に苦しんだために逆上したのであるうが、それほど臆病おくびょうな自分ではなかつたはずであるがと悲しんだ。一時的な酒精の毒ではなくてそのまま衛門督は寝ついて重い容体になつた。衛門督の父母がよそに置いてあるのが不安になり、自邸へつれもどすことにしたのを、夫人の宮の悲しがつておいでになるのがまた衛門督には苦しく思われた。何事もなかつた間は、衛門督自身も、宮をお愛する情熱のありなしすら忘れてゐるほどの良人であつたが、もうこの世での別れかもしれぬと予感される今日の心には、宮をお残して行くことが悲しくて、未亡人の寂しい人におさせするのが堪えられない苦痛に思われ、またもつたいなくも思われ歎なげかれるのであつた。宮の御母の御息所みやすどころも非常に悲しんだ。

「世間の慣ないでは親は親として、御夫婦というものはどんな時にもごいっしょにおいでになることになつています。あちらへ移つてお

しまいになって、御回復なさるまで別々においでになるのは、宮様のためにおかわいそうなことですから、せめてもうしばらくの間こちらで養生をなさいませ」

この人が病床との隔てに几帳きちようだけを置いて看護をしているのである。

「ごもつともです。私ごとき者と結婚をしてくださいました宮様のためには、せめて私が長生きをして相当な地位を得るように努力せねばならぬと心がけてはいたのですが、こんな病人になってしまいましたしては、私の愛がどれほどのものであつたかを宮様にわかつていただけないで終わるかと思ひますことで、もう命の助からぬような気のしますうちでも、死なれぬ気がするのです」

などと泣き合つていて、迎えようとするのに、すぐに移つても来ないのを母の夫人は気づかわしがって、

「そんな場合に、どうして親の所へ来ようとあなたは思つてくれないのだろう。私が病氣をする時には、おおぜいの子供の中でも特にあなたがそばにいてほしく、またいてくれれば頼もしくてうれしいのだのに、いつまでもなぜそちらにあなたはいる」

こんなことを使いに言わせて来るのにももつともなところがあつて、衛門督えもんのかみは母へ同情をせずにはおられないのであつた。

「私がいちばん初めに生まれたためなのでしょうが、大事にされていまして、こんなになつてもまだ母はかわいがりまして、しばらくの間でも違あわずにいることを苦しがるのですから、もう頼み少ない病状になつてゐる際に、母の逢いたがる心を満足させないのは未来の世までの罪になるだろうと思われまますから、とにかく病床をあちらへ移します。もういよいよ危篤になつたというしらせがありました

たら、そつと大臣邸へおいでなさい。必ずもう一度お目にかかりましょう。ぼんやりとした性質なものですから、気もつかずにあなたを不愉快におさせしたような場合もあつたであらうと思われますが残念でなりません。こんなに短命で終わらうとは思いませんで、長い将来に誠意をくんでいただける日が必ずあるもののように思つて安心してました」

と、衛門督は宮に申して、泣く泣く父の家へ移つて行つた。宮はあとに思いこがれておいでになつた。大臣家では病人の扱いに大騒ぎをして、祈祷きとつやその他に全力を尽くすのであつた。病は最悪という容態でもない。ただ食慾しょくよくがひどく減退して、もうこちらへ来てからは果物くだものをさえ取らうとしなかつた。教養の足りた優秀な高官と見られている人が、こんなふうに頼み少ない容体になつていて、世間は惜しんで、見舞いを申し入れに来ぬ人もない。宮中からも法皇の御所からもしばしばお見舞いの御使みつかいが来て、衛門督の病状を御心痛あそばされているのを見ても、両親は悲しくばかり思われた。六条院も非常に残念おぼしめに思召して、たびたび懇切なお見舞いの手紙を大臣へ下された。左大將はまして仲のよい友人であつたから、病床へもよく訪ねたずて来て、衛門督をいたましがつていた。

法皇の御賀は二十五日になつた。現在での花形の高官が重い病氣をしてその一家一族の人たちが愁うれいに沈んでいる時に決行されるのは寂しいことのように院はお思ひになつたが、月々に支障があつて延びてきたことであつたし、ぜひ今年じゆうにせねばならぬことでもあつたから、やむをえぬことだったのである。院は姫宮の心情を哀れにお思ひになつていた。かねての計画のように五十か寺での御一誦すきよう経が最初にあつて、法皇のおいであそばされる寺でも大日如来だいにちによらい

の御祈りが行なわれた。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：門田裕志、小林繁雄

2004年2月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

柏木

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）右衛門督うえもんのかみ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）今一冗談じょうたんで

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」死ぬる日を罪むくいなど言ふきはの涙

「#地から3字上げ」に似ざる火のしづくおつ （晶子）

右衛門督うえもんのかみの病気は快方に向くことなしに春が来た。父の大臣と母

夫人の悲しむのを見ては、死を願うことは重罪にあたることである
と一方では思いながらも、自分は決して惜しい身でもない、子供の
時から持っていた人に違った自尊心も、ある一つ二つの場合に得た

失望感からゆがめられて以来は厭世的な思想になって、出家を志していたにもかかわらず、親たちの歎きを顧みると、この絆が遁世の実を上げさすまいと考えられて、自己を紛らしながら俗世界にいるうちに、ついに生きがたいほどの物思いを同時に二つまで重ねてする身になったことは、だれを恨むべくもない自己のあやまちである、神も仏も冥助を垂れたまわぬ境界に堕ちたのは、皆前生での悲しい約束事であろう、だれも永久の命を持たない人間なのであるから、少しは惜しまれるうちに死んで、簡単な同情にもせよ、恋しい方に憐れだと思われることを自分の恋の最後に報いられたことと見よう、しいて生きていて自己の悪名も立ち、なお自分をもあの方をも苦しめるような道を進んで行くよりは、無礼であるとお憎しみになる院も、死ねばすべてをお許しになるであろうから、やはり死が願わしい、そのほかの点で過去に院の御感情を害したことはなく、長く恩顧を得ていた以前の御愛情が死によって蘇ってくることもあるであろうとこんなふうに関われることが多い哀れな衛門督であった。なぜこう短時日の間に自分をめちやめちやにってしまったのであろうと煩悶して、苦しい涙を流しているのであるが、病苦が少し楽になったようであると、家族たちが病室を出て行った間に衛門督は女三の宮へ送る手紙を書いた。

「#ここから1字下げ」

もう私の命の旦夕に迫っておりますことはどこからとなくお耳にはいつているでしょうが、どんなふうかともお尋ねくださいませ。ことはもっともなことです。私としては悲しゅうございます。

「#ここで字下げ終わり」

こんなことを書くのにも衛門督は手が慄えてならぬために、書き

たいことも書きさして先を急いだ。

「#ここから2字下げ」

今はとて燃えん煙も結ばほれ絶えぬ思ひのなほや残らん

「#ここから1字下げ」

哀れであるだけでも言うてください。それに満足します心を、暗い闇の世界へはいります道の光明にもいたしましょう。

「#ここで字下げ終わり」

と結んだのであった。

小侍従にもなお懲りずに督は恋の苦痛を訴えて来た。

「#ここから1字下げ」

直接もう一度あなたに逢って言いたいことがある。

「#ここで字下げ終わり」

とも書いてあった。小侍従も童女時代から伯母の縁故で親しい交情があったから、だいそれた恋をする点では、迷惑な主人筋の変わり者であると面倒には思っていたものの、生きる望みのなくなっている様子を知っては悲しくて、泣きながら、

「このお返事だけはどうかenasutteくださいます。これが最後のことでございましょうから」

と宮へ申し上げた。

「私だってもういつ死ぬかわからないほど命に自信がなくなっているのだから、そうした気の毒な容体でいる人としてだけに同情もされるけれど、私はもう苦しめられることに懲りているのだから、返事などをしてかかりあいになるのは非常にいやに思われる」

こうお言いになつて、宮は書こうとあそばさない。自重心がおありになるのではなくて、これは院のお心に御自身のあそばされた過失の影がおりおりさして、悩ましい御様子をお見せになることもあるのを、恐ろしく苦しいことと深く思つておいでになるからである。小侍従はそれでも硯すずりなどを持って来て賣めたてるので、しぶしぶお書きになつた宮のお手紙を持って、宵闇よいやみに紛れてそつと小侍従は衛門督えんのかみの所へ行つた。

大臣は大和の葛城山かつらぎから呼んだ上手な評判のある修験者にこの晩は督かみの加持かじをさせようとしていた。祈祷きとうや読経どきょうの声も騒がしく病室へはいつて来た。人が勧めるままに、世の中へ出ることをしない高僧などで、世間からもまたあまり知られていないような人も、遠い土地へ息子むすこたちを派遣などして呼び迎えて衛門督の病気に効験の現われることを期している大臣であるから、見て感じの悪いような野卑な僧などがあとへあとこのごろはたくさん来るのである。病人は何という名の病患でもなくて、ただ心細いふうに時々泣き入つていたりするのを、陰陽師おんようじなども多くは女の霊が憑ついていると占つているので、そうかもしれないと大臣は思い、他へ憑きものを移そうとしてもなんら物怪もののけの手がかりが得られないのに困り、こうして遠国の修験者などを呼び集めることもするのであった。今度山から来た僧も大男で、恐ろしい目つきをして荒々しく陀羅尼だらにを読んでいるのを、衛門督は、

「ああいやになる。私は罪が深いせいなのか、陀羅尼を大声で読まれると恐ろしくて、ますますそれで死ぬ気がする」

と言いながら病床を出て、小侍従のいる所へ来た。大臣はそんなことを知らず、病人は寝入っていると女房たちに言わせてあつたの

でそう信じて、ひそかにこの山の僧と語っていた。大臣は年がいつてもなおはなやかな派手な人で、よく笑う性質なのであるが、こうした侮蔑するに価する山の修験僧と向き合つて、衛門督の病気の当初から、その後なんとということなしに重くばかりなつてゆくことなどをこまごまと語っていた。

「どうかあなたの力で物怪が正体を現わして来るようにやつてほしいものです」

とも信頼したふうで言っているのも哀れであつた。

「小侍従、聞いてごらん。何の罪で私がこうなつてゐるかをご存じないものだから、女の霊が憑いてゐるなどとごまかされておいでになるが、あの方以外に女として惹くもののない私の心へ、あの方の霊が真実憑いていてくれるのなら、いやでならない自分の身もありがたくなるだろうよ。それにしてもだいそれた恋をして、あるまじい過失を引き起こして、人のお名を穢し、自身を顧みないようになる人は自分だけではない、昔の人にもあつた罪なのだともみずから慰めようとするがね、そんなことで私の心は救われないのだよ。相手があの方なのだから、自責の念に堪えられまいではないか。生きてゐることももうまぶしくてならなくなつたというのは、昔から世の中の人が言うように、一種特別な光の添つた方らしい。大罪人でもないのに、お顔を見合わせた瞬間から私の心は混乱してしまつて、脱け出した魂魄が六条院をさまよつてゐるようなことに気がついた時には君、まじないをしてくれたまえ」

などと、衰弱して殻のよになつた姿で、泣きも笑いもして衛門督は語るのであつた。宮が非常にお恥じになつてゐる御様子、物思**い**ばかりをしておいでになるといふことも小侍従は告げた。自身が

今一冗談じょうだんで言い出したことではあるが、その宮をおいたわしく、恋しく思う魂魄はそちらへ行くかもしれぬというような気も衛門督はしていつそう思い乱れた。

「もう宮様のお話はいつさいすまい。不幸で短命しょうめいな生涯しょうがいに続いて、その執着が残るために未来をまた台なしにすると思うのがつらい。心苦しいあのことを無事にお済ましになったとだけはせめて聞いて死にたい気もするがね、私たちを繋つなぎ合わせた目に見えぬものを私が夢で見た話なども申し上げることができないままになるのが苦痛だよ」

と言って深く督かみの悲しむ様子を見ていては、小侍従も堪えきれずなつて泣きだすと、その人もまた泣く。蠟燭ろうそくをともさせてお返事を読むのであったが、それは今も弱々しいはかない筆の跡で、美しく書かれてあった。

「#ここから1字下げ」

御病気を心苦しく聞いていながらも、私からお尋ねなどのできないことは推察ができるでしょう。「残るだろう」とお言いになります
が、

「#ここから2字下げ」

立ち添ひて消えやしなましうきことを思ひ乱るる煙くらべに

「#ここから1字下げ」

私はもう長く生きてはいないでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

内容はこんなのであった。衛門督は宮のお手紙を非常にありがた

く思った。

「このお言葉だけがこの世にいるうちのもっともうれしいことになるだろう。はかない私だね」

いつそう強く誓は泣き入って、またこちらからのお返事を、横になりながら休み休み書いた。鳥の足跡のような字ができる。

「#ここから1字下げ」

「行くへなき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ

とりわけ夕方には空をおながめください。人目をおはばかりになりますことも、対象が実在のものでなくなるのですからいいわけでしょう。そうしてせめて永久に私をお忘れにならぬようにしてください
い」

「#ここで字下げ終わり」

などと乱れ書きにした。病苦に堪えられなくなって、

「ではもういいから、あまりふけないうちに帰って行って、宮様に、こんなふうに死が迫っているということを申し上げてください。どうした前生の因縁からこんなに道にはずれた思いが心に染みついた私だろう」

泣く泣く病床へ衛門督は膝^{いざ}入り入るのであった。平生はいつまでもいつまでも小侍従を前に置いて、宮のお噂^{うわさ}を一つでも多く話させたいようにする人であるのに、今日は言葉も少ないではないかと思うのも物哀れで、小侍従は出て行けない気がした。容体を伯母^{おば}の乳^{めの}母も話して大泣きに泣いていた。大臣などの心痛は非常なもので、
「昨日今日少しよかったようだったのに、どうしてこんなにまた弱

ったのだらう」

と騒いでいた。

「そんなに御心配をなさることはありません。どうせもう私は死ぬのですから」

と衛門督えもんのかみは父に言つて、自身もまた泣いていた。

女三の宮はこの日の夕方ごろから御異常の兆きざしが見え出して悩んでおいでになるので、経験のある人たちがそれと気づき、騒ぎ出して院へ御報告をしたので、院は驚いてこちらの御殿へおいでになった。お心のうちではなんら不純なことがなくて、こうしたことにあうのであつたら、珍しくてうれしいであろうと思召おぼしめされるのであつたが、人にはそれを気どらすまいと思召すので、修験の僧などを急に迎えることを命じたりしておいでになった。修法のほうはずっと前から続いて行なわれているので、祈祷きとうの効験をよく現わすものばかりを今度はお集めになつて加持をさせておいでになった。一晩じゅうお苦しみになつて日の昇るころにお産があつた。男君であるということとお聞きになつて、また院は隠れた秘密を容貌うぶたうの似た点などでだれの目にも映りやすい男であることが、苦しい、女はよく紛らすこともできるし、多くの人が顔を見るのでないからいいのであるがとお思いになつた。しかし素姓の紛らわしいことは男の身にあつてもよいが、どんな高貴な方の母になるかもしれぬ女性は生まれが確かでなければならぬ点から言えば、これがかえつてよいかもしれぬとまたお思い返しになつた。忘れることもない自分の罪のこれが報いであろう、この世でこうした思いがけぬ罰にあつておけば、後世ごせで受ける咎とがは少し軽くなるかもしれぬなどとお考えになつた。

宮の秘密はだれ一人知らぬことであつたから、尊貴な内親王を母

にして最後にお設けになった若君を、院はどんなにお愛しになるだろうという想像をして、家司たちは大がかりな仕度を御出産祝いにした。六条院の各夫人から産室への見舞い品、祝品はさまざまに意匠の凝らされたものであった。折敷、衝重、高杯などの作らせようにも皆それぞれの個性が見えた。五日の夜には中宮のお産養があつた。母宮のお召し料をはじめとして、それぞれの階級の女房たちへ分配される物までも、お后のおそばすことらしく派手にそろえておつかわしになったのである。産婦の宮への御一粥、五十組の弁当、参会した諸官吏への饗応の酒肴、六条院に奉仕する人々、院の庁の役人、その他にまでも差等のあるお料理を交付された。院の殿上人とともに中宮職の諸員は大夫をはじめ皆参っていた。七日の夜には宮中からのお産養があつた。これも朝廷のお催しで重々しく行なわれたのである。太政大臣などはこの祝賀に喜んで奔走するはずの人であつたが、子息の大病のためにほかのことを思う間もないふうで、ただ普通に祝品を贈つて来ただけであつた。宮がたや高官の参賀も多かつた。

院内にもこの若君を珍重する空気が濃厚に作られていながら、院のお心にだけは羞恥をお感じになるようなところがあつて、宴席をはなやかにすることなどはお望みになれないで、音楽の遊びなどは何もなかつた。女三の宮は弱いお身体で恐ろしい大役の出産をあそばしたあとであつたから、まだ米湯などさえお取りになることができなかつた。御自身の薄命であることをこの際にもまた深くお思われになつて、この衰弱の中で死んでしまいたいとお思いになるのであつた。院は人から不審を起こさせないことを期して、上手に表面は繕つておいでになるが、生まれたばかりの若君を特に見ようと

もなされないのを、老いた女房などは、

「御愛情が薄いではありませんか。久しぶりにお持ちになった若様が、こんなにまできれいでいらつしやるのに」

などと言っているのを、宮は片耳におはさみになって、この薄いと言われておいでになる愛情は、成長するにつれてますます薄くなるであろうと、院がお恨めしく、過去の御自身も恨めしくて、尼になろうというお心が起こった。夜などもこちらの御殿で院はお寝みやすにならずに、昼の間に時々お顔をお見せになるだけであつた。

「人生の無常をいろんな形で見ていて、もう自分は未来が短くなっているのだからと思うと心細くて、仏勤めばかりをする癖がついて、産屋うぶやの騒がしい空気と自分とはじっくり合わない気がされてたびたびは来ないのですが、気分はどうですか。少しさっぱりしたように思いますか。気の毒ですね」

と、お言いになりながら院は几帳きちょうの上から宮をおのぞきになった。宮は頭を少しお上げになって、

「まだ私には快くなる自信ができません。でね、こんな際に死んで罪が深いと聞いておりますから、尼になりました、その功德であるいは生きることができるとかどうかためたくもありませんし、また死にましても罪が軽くなるでしょうからと思われまして、そういったしたくなりました」

平生にも似ずおとなびてお言いになった。

「とんでもないことですよ。なぜそうまで悲観するのですか、産をするのだれも皆そんなふう恐ろしく不安になるものですが、子を産んだ人が皆死ぬものではありませんからね。気を静めるようになさい。そんなことは言わずに」

と院はお言いになった。お心の中ではその希望が自発的に起こったのなら、そうさせてしまったほうが自分の心が楽になって、深く今後もこの人を愛することが可能かもしれぬ、今までと同じように取り扱っていて、同じにならぬものが自分の心にあつてはおかawaiiそうである、自分ながらも以前の愛情がこのまままた帰つて来ようとは思われない、自分はどんなに努めても暗い霧が心を横切ることは免れまい、自然宮への愛が薄くなつたように他人が思うことも予想され、その時の宮のお立場も苦しかりうと思われ。法皇がお聞きになつても自分が悪いことにばかりなるであらう、病気に託してそうおさせしようかとお思われになるのであつたが、またそれを実現させるのが惜しくも哀れにもお思われになり、若盛りの姿を尼に変えさせるのも残酷に思召されて、

「ぜひと強く生きようとお努めなさい。この上そうまで悪くなるわけはありませんよ。もうだめかと思われていた人さえ癒つてきた例が近い所にあるのですから、それを思うとまだこの世は頼みになりますよ」

などとお言いになつて、白湯さゆを勧めたりして院はおいでになるのであつた。宮のお顔色は非常に青くて力もないふうに寝ておいでになるが、たよりない美しさをなしているのを御覧になつては、どんな過失があつても自分のうちの愛の力が勝つて許しうるに違いないのはこの人であると院は思召した。

御寺みでらの院は、珍しい出産にょさんを女三みやの宮が無事にお済ませになつたという報をお聞きになつて、非常にお逢あひになりたく思召したところへ、続いて御容体のよろしくないたよりばかりがあるために、専心に仏勤めもおできにならなくなった。衰弱しきつた方がまた幾日も

物を召し上がらないでおいでになったのであるから、いつそう頼み
 少なくお見えになる宮が、

「長いことお目にかかれずに暮らしておりましたところよりも、もつ
 ともつと私はお父様が恋しくてなりませんのに、もうお目にかかれ
 ないまま死んでしまうのでしょうか」

と言つて、非常にお泣きになったので、六条院はそのことを人か
 ら法皇にお伝えさせになると、法皇は堪えがたく悲しく思召して、
 よろしくない行動であるとは思召しながら、人目をはばかって夜に
 なつてから六条院へにわかにお幸あそばされた。御主人の院はお驚
 きになつて、恐懼きょうくの意を表しておいでになった。

「もうこの世のことは顧みますまいと決心していたのですが、こう
 なつてもまだ迷うのは子を思う道の闇やみだけで宮が重態だと聞くと仏
 のお勤めも怠るばかりで恥ずかしくてなりません、だれが先とも
 後あととも定まらない人の命であれば、逢いたがる子に逢つてやらずに
 死なせましたら、親の心残りが道の妨げになる気がするので、人間
 世界の譏そしりも無視して出て来たのです」

法皇はこう仰せられた。御僧形ではあるが艶えんなところがなお残つ
 てなつかしいお姿にたいそうな御法服などは召さずに墨染め衣の簡
 単なのを御身にお着けあそばされたのがことに感じよく美しいの
 を、院はうらやましく拝見されて、例のようにまず落涙をあそばさ
 れた。

「御容体は何という名のある病気ではないのでございますが、今ま
 で衰弱がはなはだしゅうございましたところへ、お食慾のないこと
 が重態に導いたのでございます」

などと六条院はお話しになつて、

「失礼な場所でございますが」

と、宮のお寝やすみになった帳台の前へお敷き物の座を作って法皇を御案内された。宮を女房たちがいろいろとお引き繕つくろいして御介抱をしながら、宮をもお床の下へお降ろしした。法皇は間の几帳きちょうを少し横へお押しになって、

「夜居かじの加持かじの僧そうのような気はしても、まだ効験を現わすだけの修行ができていないから恥はづかずかしいが、逢あいたがっておいでになった顔をそこでよく見るがいい」

と法皇は仰せられて目をおふきになった。宮も弱々しくお泣きになって、

「私の命はもう助かるとは思えないのでございますから、おいでくださいましたこの機会に私を尼にあそばしてくださいませ」

こうお言いになるのであった。

「その志は結構だが、命は予測することを許されないものだから、あなたのような若い人は今後長く生きているうちに、迷いが起こって、世間の人に讒そしられるようなことにならぬとは限らない。慎重に考えてからのことにしては」

などと法皇はお言いになって、六条院に、

「こう進んで言いますが、すでに危篤な場合とすれば、しばらくもその志を実現させることによって仏みの冥助めいじゆを得させたいと私は思う」

と仰せられた。

「この間からそのことをよくお話しになるのですが、物怪もののけが人の心をたぶらかして、そんなふうのことを勧めるのでしようと申して私は御同意をしないのでございます」

「物怪の勧めでそれを行なうと言っても、悪いことはとめなければなりません。衰弱してしまつた人が最後の希望として言っていることを無視しては、後悔することがあるかもしれぬと私は思う」

法皇の仰せはこうであつた。お心のうちでは限りもない信頼をもつて託しておいた内親王を妻にしてからのこの院の愛情に飽き足らぬところのあるのを何かの場合によく自分は聞いていたが、恨みを自分から言い出すこともできぬ問題であつて、しかも世間に取り沙汰されるのも忍ばねばならぬことを始終残念に思っているのであるから、この機会に決断して尼にさせてしまつとしても、良人おとこに捨てられたのだと、世間から嘲罵ちやうばされるわけではない。少しも遠慮はいらぬ。現在において宮の望みは遂げさせなくてはならない、夫婦関係の解消したのちに、単に兄の子として保護してくれる好意はあるはずであるから、せめてそれだけを自分から寄託された最後の義務に負つてもらふことにして反抗的にここを出て行くふうでなくして、自分からかつて宮に分配した財産のうちに広くてりつぱな邸宅もあるのであるから、そこを修繕して住ませよう、自分がまだ生きておられるうちにそれらの処置を皆しておくことにしたい。この院も妻としては冷ややかに見ても、今からの宮を不人情に放つてはおくまい。自分はその態度を見きわめておく必要があると思召して、

「では私がこちらへ来たついでにあなたの授戒を執行させることにして、それを私は御仏みほとけから義務の一つを果たしたことと見ていただくことにする」

と仰せられた。六条院は遺憾にお思ひになつた宮の御過失のこともお忘れになつて、なんとなることかと心をお騒がせになつて、悲

しみにお堪えにならずに、几帳の中へおはいりになって、

「なぜそういうことをなさろうというのですか。もう長くも生きていない老いた良人をお捨てになって、尼などなる気になぜおなりになったのですか。もうしばらく気を静めて、湯をお飲みになったり、物を召し上がったたりすることに努力なさい。出家をすることは尊いことでも、身体が弱ければ仏勤めもよくできないではありませんか。ともかくも病気の回復をお計りになった上でのことになさい」

とお話しになるのであるが、宮は頭をお振りになって、おとめになるのを恨めしくお思いになるふうであった。何もお言いにはならなかったが、自分を恨めしくお思いになったこともあるのではないかとお気がつくのと、かわいそうでならない気があそばされたのであった。いろいろと宮の御意志を翻えさせようと院が言葉を尽くしておいでになるうちに夜明け方になった。御寺へお帰りになるのが明るくなってからでは見苦しいと法皇はお急ぎになって、祈祷のために侍している僧の中から尊敬してよい人格者ばかりをお選びになり、産室へお呼びになって、宮のお髪を切ることをお命じになった。若い盛りの美しいお髪を切つて仏の戒をお受けになる光景は悲しいものであった。残念に思召して六条院は非常にお泣きになった。また法皇におかせられては、御子の中でもとりわけお大事に思召された内親王で、だれよりも幸福な生涯を得させたいとお思いあそばされた方を、未来の世は別としてこの世でははかない姿にお変えさせになったことで萎れておいでになって、

「たとえこうおなりになつても、健康が回復すればそれを幸福にお思いになつて、できれば念誦だけでもよくお唱えしているようにな

さい」

とお言いになった院は、まだ暗いうちに六条院をお去りになることにあそばされた。

宮は今もなおお命がおぼつかない御様子で、はかばかしく御父法皇を目送あそばすこともおできにならず、ものもお言われにならなかった。

「夢を見ておりますようなことが起こりまして、心が混乱しております。まず、昔の御厚情をまたお見せくださいました御幸みゆきに感謝の意もまだ表してお目にかけることができせんような不都合さも、また私が伺わつてお詫わびすることにいたしましょう」

と六条院は御一あいさつ挨拶をあそばされた。そしてこの院の役人たちを御寺へお見送りにお出しになるのであった。

「もう今日か明日かに終わるよう自分の命の危険さが思われた際に、あとに残して保護者もなく寂しくこの世を渡らせることが憐あわれまれてならぬ時に、御本意ではなかったでしょうが、あなたへお託しさせていたでいて、今までは安心していたのですが、万一かれの命の助かることがありますれば、もう普通の人ではなくなりまして者が、人出入りの多い宮殿にいますことは似合わしく思われませんし、郊外の寂しい所へ住ませるのもさすがにまた心細く思うことでしょうから、その点をあなたがお考えくださって住居すまいを移させることにしていただきたい。どうか今後もかれを念頭にお置きください」

と法皇がお言いになると、

「そんな仰せまでも受けましてはかえって私が恥じ入ります。自分の精神がよく統一されていくのを待ちましてすべてのことに善処い

たしましょう」

院は實際悲しみに堪えぬ御様子であった。後夜の加持の時に物怪が人に憑つつて来て、

「どう、こんなことになってしまったではないか。上手うまいに一人を取り返したと思っておいでになる様子がくやしかったから、それから
は気のつかぬようにしてこちらへ私は来ていたのだ。もう帰りますよ」

と笑った。これによれば紫夫人を悩ました物怪が、それ以来こちらへ憑ついていたのであったか、あらゆる不祥事はかれがなさしめたのかもしれないとお気づきになった時、女三の宮がおかわいそうでならぬ気のされる院でおありになった。宮の御容体は少し持ち直したようであったが、まだ危険状態を脱したとはお見えにならないのである。女房たちも御出家をあそばしたことで失望した様子であったが、たとえこうおなりになっても御健康さえ取りもどすことができればと、今はそれを院もお念じになって、修法もまた延ばさせて、油断なく祈らせることもあそばしたし、そのほかのあらゆる方法もおとりになって、宮のお命の助かるようにとばかり苦心あそばされるのであった。

右衛門督うえもんのかみは六条院の宮の御出産から出家と続ついての出来事を病床に聞いて、いつそう頼み少ない容体になってしまった。夫人の女にょにの宮をおかわいそうにばかり思われる衛門督は、助からぬ命にきまつた今になって、ここへ宮がおいでになることは軽々しく世間が見ることであろうし、父母が始終近くへ来ている病室では、自然お姿をそれらの近親者に見られておしまいになる隙すきができることになつてはもつたいないと思つて、

「どんな無理をしても一条の宮へもう一度行ってみたいのです」

と言いつけるのであるが、両親は許さなかつた。衛門督はだれにも自分の死後はこの宮を御保護申すようにということをお願いしていた。もともと宮の母君の御息所みやすしろはこの結婚に不賛成であつたのが、衛門督の父の大臣の熱心な懇望が法皇を動かしたてまつつて、お許しになることになつたものであつて、六条院の二品にほんの宮の御幸福の**かん**ばしくない噂うわさなどがお耳にはいつたころには、

「かえつて二の宮のほうが将来の頼もしい良人おつとを得たというものだ」

と法皇が仰せられると聞いたこともあつたのに、なんと**い**う成り行きになることかと今は悲しむばかりであつた。

「こんなふうで宮様を未亡人にしてしまふのかと思ひますと堪えられませんか。あちらにもこちらにもお氣の毒なことばかりですが、自分の心に任せないのが命ですからしかたもありません。宮様の今後の寂しい生活を思ひますと心苦しくてなりませんから、お母様は親切にしてあげてください。始終お世話を**し**てあげてくださいお母様」

と督かみは母夫人にも言つていた。

「縁起の悪い話をしますね。あなたに死なれたあとで、お母様はどれだけ生きておられると思つてそんな未来のことまでも言うのですか」

と言つて、母はまず泣き入つてしまふので、衛門督はよく話すこともできないのである。すぐ下の弟である左大弁に兄はくわしく宮の御事は遺言しておいた。善良な性質の人であつたから、弟たちにも皆親しまれていて、末のほうの弟などは親のように頼みにしてい

るこの人が、遺言をしたりするようになったのを、だれも心細がらぬ者はなくて、家の使用人なども皆悲しんでいるのである。朝廷でも非常にお惜しみになって、いよいよ危篤ということが天聴に達すると、にわかには権大納言に昇任おさせになった。この感激によって元氣が出てもう一度だけは参内をするかと帝は期しておいでになったのであるが、それをするのがもう衛門督にはできなかつた。ただ病苦の中で拝任の表だけを草して奉った。大臣はこの朝恩の厚さを見てもさらに惜しく悲しくわが子が思われるのであつた。左大將は常に親友の病をいたんで見舞いを書き送っているのであるが、昇任の祝いを述べに真先に大臣家を訪問したのもこの人であつた。衛門督の住んでいるほうの対の門内には馬や車がたくさん来ていて、忙しそうに人々が入り出りしていた。今年にはいつてからは起き上がることもあまりできない衛門督であつたから、大官の親友を病室に招くことが遠慮されて恋しく思いながら逢えないことを思うと残念で、督は、

「失礼ですがやはりここへ来ていただくことにします。この場合のことではやむをえないとお許しくださいさるでしょう」

と挨拶をさせて、病室の床の近くに侍している僧などをしばらく外のほうへ出して大將を迎えた。少年時代から隔てなく交際して来た間柄であつたから、近く迫つた死別の悲しみは大將にとって親兄弟の思いに劣らないのである。今日だけは昇任の悦びで気分もよくなっているであろうとこの人は想像していたのであるが、期待はずれてしまった。

「どうしてこんなにまた悪くおなりになったのでしょうか。今日だけはめでたいのですから少し気分でもよくなつておられるかと思つて

来ましたよ」

と言つて、病床に添えた几帳まじょうの端を上げて中を見ると、

「全然私のようにでなくなつてしまいましたよ」

と言いながら、衛門督は烏帽子えぼしだけを身体からだの下へかつて、少し起き上がるうとしたが、苦しそうであつた。柔らかい白の着物を幾枚も重ねて、夜着を上うへに掛けていのである。病床の置かれた室は清潔に整理がされてあつて感じがよい。こんな場合にも規律の正しい病人の性格がうかがえるようであつた。病人というものは髪ひげも乱れるにまかせて気味の悪い所もできてくるものであるが、この人の瘦やせ細つた姿はいよいよ品のよい気がされて、枕まくらから少し顔を上げてものを言う時には息も今絶えそうに見えるのが非常に哀れであつた。

「御病気の長かつたことから言えば、特別ひどく病人らしいお顔になつたとも言えませんよ。平生よりも美男に見えますよ」

こんなことを口では言いながらも大将は涙をぬぐつていた。

「同じ時に死のうなどと約束もしたではありませんか。悲しいことですよ。あなたの症状は何がどうして悪くなつたのだということも言つてくれる者がありませんから、親しい私でさえ何の御病気だか知らないのがたよりないことですよ」

「自分ではいつ悪くなつて行くかわからずに来ましたよ。どこか苦しいときまつた患部もないものですから、病がこうまで早く進行するとも思わないうちに重態になつてしまつたのですから、私はもう今では何が何やら知覚もなくなつていゝる気がしています。惜しくもない私の命が祈りとか、願とかの力でさすがに引きとめられていることは苦痛なものですから、自身から早くなるのを望むようにもな

って変なものですよ。私とすればこの世から去ってしまふことで、
 いろいろな堪えがたい気持ちのすることもそれは少なくありません。
 親への孝行も中途までしかしてありませんし、私自身のためにも遺
 憾なことはありますが、そうしたいっさいのことよりも大事な煩悶^{はんもん}
 を私はいだいでいるのです。この命の末になってほかへ洩^もらす必要
 はないとも思いますが、やはり自分一人だけで思っているには堪え
 られないのもあるのです。身内の者はあつても、その人たちに言
 い出す勇気を私は持っていません。それであなたにだけ言わせてい
 ただきますが、私が六条院様の感情をそこねているらしいことがあ
 りましてね、それを苦しんで心の中でお詫^わびをして暮らすうちに病
 気のようになってしまうたのですが、お招きがありまして、あの法
 皇様の賀宴の試楽の日に伺いました時に、お目にかかったのですが、
 なお許していただけない御感情のあるのをお顔で私は知って、それ
 からの私はもう生きていることがはばかりのあることのように思わ
 れ出して、憂鬱^{ゆううつ}な気持ちで暮らして来たのですが、その際に受けた
 衝動が強かったために、起^たちがたい衰弱に自分で自分を導いてしま
 ったのですよ。自身の無能なことは承知しながらも少年時代から深
 く御信賴して、誠心誠意この方のためにお尽くししようと思ひして
 いた私ですが、中傷した者でもあつたらうかと、死んで残るこの問
 題への関心はむろん後世^{ごせ}の往生の妨げになるだろうと思つていま
 が、何かの機会にこの話をあなたは覚えていてくださつて六条院へ
 弁明の労を取ってください。死にましてからでもこのお取りなしが
 いただければ私はあなたに感謝します」

新大納言はこう語るうちにも病苦の堪えがたいもののある様子も
 見えて、大將は悲しんだのであるが、その話について思いあたるこ

とが、この人にあつても、不確かな断定はそれでできない気がした。

「あなた自身の誤解ではないのですか、少しもそんな御様子を私は見受けませんよ。あなたの御病気の重くなったことで御心配をしておられて、いつも遺憾がっておいになりすよ。そんな煩悶はんもんをおなたがしておいでになるのなら、なぜ今までに私へ言つてくださらなかつたのでしよう。私が及ばずながら双方の誤解を解いてあげるのです。もう間に合いませんね」

取り返したいように大將は残念がった。

「そうですよ。少し快よい時もあったのですから、そんな時に御相談をすればよかつたのです。自分自身でわからないのが命にもせよ、まさかこんなに早く終わろうとは思わなかつたというのものはかないわけですね。このことは絶対にだれへもお話しにならないでください。よい機会に私のために御好意のある弁解をしていただきたくて思つてお話ししただけです。一条にいらつしやる宮様には何かの時に御好意を寄せてあげてください。お聞きになつて法皇様が御心配をあそばさないように、御生活の上のこととも気をつけてあげてください」

などとも大納言は言った。もつと言いたいことは多かつたであるうが、我慢のならぬほど苦しくなつた衛門督えもんのかみは、もう帰れと手を振つて見せた。加持かじをする僧などが近くへ来て、母の夫人や大臣も出てくるふうで、騒がしくなつたので大將は泣く泣く辞し去つた。同胞である院の女御にょしはもとより、妹の一人である大將夫人も衛門督のことを非常に歎なげいていた。だれのためにもよき兄であろうとする善良な性格であつたから、右大臣夫人などもこの人とだけは今まで非

常に親しんでいて、今度も玉鬘たまかすらは心配のあまり自身の手でも祈祷きとうをさせていたが、そうしたことも不死の薬ではなかったから効果は見えなかった。夫人の宮にもしまいにお逢いできないままで、泡あわが消えたように衛門督は死んでしまった。今まで愛情の点では批議すべき点もあつたが、形式的にはよく御待遇をして、あくまで御降嫁を得た夫人として敬意を失わない優しい良人おっとであつたのであるから、恨めしい思いを格別宮は抱いておいでにならなかつた。こんな短命で終わる人であつたから何にも興味が持てない寂しいふうを見せたのであつたかと追想あそばされるのが悲しかつた。御息所みやすどころも早く不幸な未亡人に宮のおなりになつたことを悲しんでいた。衛門督の死で大臣と夫人はまして言いようもない、悲歎ひたんに沈んでいた。自分が先に死ぬのが当然なことであるのに、あまりにも道理にはずれた死であると泣きこがれているが、それが何のかいのあることとも見えなかつた。女三にょさんの宮みやは衛門督えもんのかみの恋を苦しくばかりお思いになつて、長く生きていようと望みにならなかつたのであるが、死の報をお得になつてはさすがに物哀れなお気持ちになつた。若君を自身の子のように衛門督は思っていたが、衛門督の死におあいになつてみると、神秘的なかわりもある気があそばされて、衛門督が信じていたことがほんとうであつたかもしれぬとお思われになり、いよいよ御自身の運命の悲しさにお泣きになるのであつた。

三月になると空もうらかな日が続ぎ、六条院の若君いの五十日の祝い日も来た。色が白くて、美しいかわいい子でもう声を出して笑つたりするのであつた。院がおいでになつて、

「もうさっぱりした気分になりましたか。でも御一かいふく恢復になつたか
いもありませんね。今までのあなたでこうして快よくおなりになつた

のを見る事ができたらどんなにうれしいだろう。あなたは冷酷に私を捨てておしまいになりましたね」

と涙ぐんで恨みをお言いになった。毎日こちらの御殿へおいでにならぬ日はなくなつて、こうした今になつて最上のお扱いをあそばされるのであつた。五十日の儀式に母君が尼姿でおいでになるのは、若君の将来を祝うことに不都合ではないかという意見をもつ女房たちもあつて、どうしようかと言われているところへ院がおいでになつて、

「少しもさしつかえない。若君が女であれば母君の運命にあやかつてはならないとも考慮すべきだが」

とお言いになり、南向きの座敷に若君の小さい席を設けて祝い膳ぜんが供えられた。新しい乳母めのとたちは皆はなやかな服装をしていて、お膳部から女房たちのためのお料理の盛られた器まで皆きれいな感じのする式場であつた。真相を知らぬ人々の寄贈したおびただし祝品のあるのを御覧になつても、この誤りを正しくしがたい心苦しから恥ずかしくばかりおなりになる院であつた。尼宮も起きておいでになつた。切りそろえられた髪の毛の尖さきが厚くいっばいにひろ拡がるのを苦しくお思いになり、額の毛などを後ろへなでつけておいでになる時に、院は几帳きちょうを横へ寄せてそこへおすわりになると、宮は羞はじて横のほうへお向きになつたが、以前よりもいっそう小柄にお見えになつて、髪は授戒の日にお扱ひした僧が惜しんで長く残すようにして切つたのであるから、ちよつと見ては普通の方のように思われた。次々に濃ひちくした鈍にびの幾枚かをお重ねになつた下には黄味ひつを含んだ淡色の単衣ひとえをお着になつて、まだ尼姿になりきつてはお見えにならず、美しい子供のような気がしてこれが最もよくお似合いになる姿であ

るとも艶えんに見えた。

「墨染めという色は少し困りますね。どうしても悲しい色でね、目がくらむ気がします。こうおなりになってもいつしよに暮らすことができるのだからと思つて、みずから慰めようとしていますが、まだ今でも涙だけはあきらめてくれずに流れ出すので困りますよ。こんなふうにあなたに捨てられたのも、私自身の罪であると考えられることも苦痛のきわみですよ。取り返せないものだろうか」

と院は御一歎息たんそくをあそばして、

「ほんとうの尼の気持ちになつておしまいになれば、それは病氣のためでなく、私がいやにおなりになつたためにそうおなりになつた気もして、私は情けないでしょうよ。やはり私を愛してください」

こうお言いになると、

「この境地にいては人を愛したりすることができないものだと思ひていますもの、まして私などは初めから愛するということがわからなかつたのですから、どうお返事を申し上げればいいか存じません」

と宮はお返辞をあそばされる。

「しかたのない方ですね、おわかりになることもあるでしょうが」と言ひさしたまま院は言葉をお切りになつて、若君を見ようとあそばされた。乳母めのとには貴族の出の人ばかりが何人も選ばれて付いていた。その人たちを呼び出して、若君の取り扱いについての注意をお与えに院はなるのであつた。

「かわいそうに未来の少ない老いた父を持つて、おくればせに大きくなつてゆこうとするのだね」

と言つて、お抱き取りになると、若君は快い笑みえをお見せした。

よく肥ふとつて色が白い。大将の幼児時代に思い比べてごらんになっても似ていない。女御にょごの宮方は皆父帝のほうによく似ておいでになって、王者らしい相貌そうぼうの気高けだかいところはあるが、ことさらお美しいということもないのに、この若君は貴族らしい上品なところに愛嬌あいきょうも添そっていて、目つきが美しくよく笑うのを御覧になりながら院は愛情をお感じになった。思いなしか知らぬが故一衛門督えもんのかみによく似ていた。これほどの幼児でいてすでに貴公子らしいりっぱな眼眸めつきをして艶えんな感じを持っていることも普通の子供に違ちがっているのである。母の宮はそうであるとも確たかにはわかっておいでにならなかつたし、その他の人はもとより気のつかぬことであつたから、ただ院お一人の心の中だけで、哀あれな因縁である故人のことを考えておいでになると、人生の無常さも次々に思われて涙のほろほろとこぼれるのを、今日は祝いの式ではないかと恥じてお隠かくしになり『五十八一翁をう方有後静思堪喜へしづかにおもふによるこびにたへたり』またなげくにたへたり亦堪嗟』またなげくにたへたりとお歌いになった。五十八から十を引いたお年なのであるが、もう晩年になつた気があそばされて白楽天のその詩の続きの『慎勿頑愚似汝爺へつつしみてぐわんぐなんぢのちちにるなかれ』を歌いたく思召したかもしれない。あの秘密にあずかつた者がここの女房の中にいるはずである。その人たちは自分を愚人ぶべつとして侮蔑ぶべつしているのであるうとお思われになることは不快であつたが、自分のことは忍んでもよいが、宮をその人たちはどう思っているかという点までを思うと、宮のためにおかわいそうであるなどと院はお思いになつて、あくまでも知らぬ顔を続けておいでになるのであつた。無邪むじゃ気けにうれしそうな声をたてる若君の目つき、口つきは知らぬ人ひとにわからぬことであろうが、自分が見れば全くよく似ているとお思いに

なる院は、親たちが子供でもあればよかったと言って悲しんでいるのに、これを見せてやることもできず、秘密な所にこの子だけを形見に残して、あの思い上がった男が、自身の心から命を縮めて死んだかと衛門督が哀れにお思われになって、失敬なことであると罪を憎んでおいでになった感情も消え、泣かれておしまいになるのであった。女房たちがいつの間にかお居間を出てしまったのを御覧になってから、院は宮の近くへお寄りになって、

「この人を何と思うのですか、こんなにかわいい人を置いて、この世をよくも捨てられましたね。冷酷ですよ」

と不意にお言いかけになった。宮は顔を赤めておいでになった。

「#ここから1字下げ」

「だが世にか種は蒔きしと人間はばいかが岩根の松は答へん

「#ここで字下げ終わり」

かわいいそうですよ」

ともそつとお言いになったが、宮はお返辞もあそばさずにひれ伏しておしまいになった。もつともであるとお思いになって、しいてものをお言わせしようともあそばされない。どんなお気持ちでおられるのであろう、奥深い感情などは持つておられぬが、虚心平気でおいではなれないはずであると想像ができるのも心苦しいことであつた。

大將は衛門督えもんのかみが思い余つて自分に洩もらしたことはどんな訳のあることであらう。故人があればほどまで弱っていない時であつたなら、自身から言い出したことなのであるから、もう少し核心に触れたこ

とも聞き出せたであろうが、もうあの際であつたのがおりを得ないことで残念であつたなどと考えていて、兄弟たち以上にこの人は故人を恋しがっていた。女三の宮がにわかに出家を遂げられたことも何か訳のあることらしい、そう大病でもおありにならなかつた方を、院が何の抗議もあそばされずに尼にさせておしまいになつてよいはずはないのである。二条の院の夫人があゝの重態になつていられた場合に、泣く泣く許しを乞_こわれたのさえもお拒みになつたのであるからというようなことも大將は考えられ、衛門督の問題と女三の宮の御出家とは関連したことに違いないということに思いは帰着した。

昔から宮をお思いして、忍び余るような物思いの影を自分などに見せたこともある人である、自制して表面_{つわ}だけはあくまでも冷静で、この人の心には何を思つているのかとうかがうのに苦しむほどであつたが、感情に負けるところがあつて、あまりに彼は弱い男であつた、どんなにすぐれた恋人であつても、許されない恋に狂熱を傾け、最後に身をあやまるようなことをしてはならないのである、一方の人のためにも気の毒なことであるし、彼が自身の命をそれに捨てたのも賢明なことではない、皆前生の因縁とはいいいながら、やはり軽率なことであつたと、大將は自身一人で思つていて夫人にも話さなかつた。またよい機会もなくして院に故人の心をお伝えすることもまだ果たさなかつた。大將としてはまたそれを話し出した時に秘密の全貌_{ぜんぼう}の見られることも願つていたのであるから好機は容易に見いだせないのであるらしい。

故大納言の父母は涙の晴れ間もないほど悲しみにおぼれて暮らしているのであつて、日のたつ数もわからなかつた。法事などの用意も子息たちや婿君たちの手でするばかりであつた。供養する経巻や

仏像も二男の左大弁が主になって作らせていた。七日七日の誦經すきょうの
 日が次々来るたびに、その注意を子息たちがすると、

「もういつさい何も聞かせないようにしてくれ。あれに關した話を
 聴きけばまた悲しみが湧わくばかりだから、かえつてあれの行く道を妨
 げることになる」

と言うだけで、大臣も死んだ人のようになっていた。

一条の宮はまして終わりの病床に見ることもおできにならないま
 まで良人おっとを死なせておしまいになったというお悲しみもあつて、そ
 の後の日の重なるにつけて広いお邸やしきはますます寂しいものになつて、
 お召使いの人たちも減つていくばかりであつた。大納言の恩顧を受
 けていた人たちだけは、故人の未亡人の宮に今も敬意を表しに来る
 ことを忘れなかつた。愛していた鷹狩りの鷹とか、馬とかを預かつ
 ていた侍たちはたよる所を失つたように力を落としながらも寂しい
 姿で出仕しているのがお目にはいつたりすることなども宮のお心を
 悲しくさせた。手一馴ならしていた居間の道具類、始終一弾ひいていた
 琵琶びわ、和琴わこんなどの、今は絃いとの張られていないものなども御覽になる
 のが苦しかった。庭の木立ちがけむり、時を忘れずに花の咲こうと
 するのをおながめになつていて寂しかった。女房たちも皆喪服姿に
 なつていて、あらゆるものから受ける印象が物哀れであつたある日
 の昼ごろに、高い前駆の聲がしてお邸やしきの門にとまつた車があつた。
 「ぼんやりしていますとお亡なくなりになつた殿様がおいでになつた
 のかと思ひますよ」

と言つて泣く女房もあつた。それは左大將が訪問して来たのであ
 つた。まず訪問の意を通じて来た。いつものように大納言の弟の左
 大弁とか、参議とかの来訪したのかと邸の人と思つていた所へ、品

がよくてきれいな風采ふうさいで身の取りなしのすぐれてりつばな大将がはいつて来たのであった。中央まの間に続いた南向きの座敷に席を作つて客は迎えられた。普通の人たちのように女房だけが出て応接をするのは失礼であるといつて、宮の母君の御息所みやすどころが逢つた。

「あの不幸な友人を悲しみみます心は身内の人たち以上ですが、形式的にはそれだけの志も見せられないのでございました。臨終のころ私へ託しましたこともありまから、宮様に対して十分の好意を私はお持ちしております。だれにも死はめぐつてくるはずですが、しばらくでもあとへ残りまして以上は友人の縁故でできますだけのお世話を申し上げたいと思ひまして、もう少し早く伺うつもりだったのですが神事などで御所の中の忙しいころに触穢しょくごえのはばかりに引きこもらなければならなくなりますのモいかがと遠慮がいたされまし、またお庭へ立たせていただくような伺い方は私の心も満足できることでないと思ひまして、つい日をたたせてしまったのでございます。大臣などのお歎なげきの深いのを聞いておりますが、親子の愛情とは別な御夫婦の間でいらつしやつた宮様を、故人があんなに気がかりに考えておりましたことを思ひますと、宮様のほうでもお悲しみになつていらつしやる程度もどれほどのことかと恐察されまして御同情に堪えません」

こう語つていゝうちに大将はたびたび流れる涙をふいていた。清明な気高けだかさがあつて、しかも美しく艶えんな姿を大将は持っていた。

御息所も鼻声になつて、

「悲しいのが無常の世の常と存じまして、悲しいことはまだほかにもいろいろあるのを思ひまして、私たち年のいった者はしいて気を強く持とうと努めることもいたしますが、宮様はまだお若いのでご

ざいますから、悲しみに沈みきつておしまいになりました、同じ世界へ行っておしまいになるのではないかと危険でなりませんほどのお歎きをしておいでになります。不幸な生まれの私が今まで生きておりまして、大納言をお死なせしたり、宮様を未亡人におさせしたりしていく運命をじつとそばでながめていねばならぬかと苦しゅうございます。近い御一親戚しんせき関係でいらつしやいますから、もうお聞き及びでもございましょうが、私はこの御結婚談の最初から御賛成は申し上げていなかったのでございますが、大臣が熱心に御運動をなさいましたし、また法皇様もお許しになる様子でございましたから、それではそのほうがよろしいことで、私の考え方は間違っていたのかと考え直しまして、とうとう御結婚をおさせ申したのでございますが、こんな夢のような不幸が起こってくるのでございましたら、もっと自分の信じましたところを強く主張しておれば、宮様をこうした目におあわせせず済んだはずであると残念でなりません。私は初めから宮様がたはよくよくの御因縁のあることでなければ結婚などはあそばしてはならないものである、神聖なものとしてお置き申し上げたいと昔風な心に願っていたのでございますから、こんなどちらつかずの御不幸なお身の上におなりあそばした以上は、いっそ悲しみでお亡なくなりになるのもよろしかろう、不幸な宮様としてお残りになるよりはなども思いますが、さてそうもあきらめきれぬものではございませんから、やはり悲しんでばかりおりましたうちにも、御親切な御慰問のお手紙を始終おいただきになるようでございますから、ありがたいことと存じておりまして、こうしていただけるのも故人が特に宮様のことでお頼みされたことがあったのかと、必ずしも御愛情の見える御良人ごりょうじんではなかったのですが、最後

にどなたへも宮様についての遺言をなさいましたことで、悲しみにもまた慰めというもののあるのを発見いたしましたのでございます」

と言つて、御息所みやすどころはひどく泣き入る様子であつた。大将もそぞろに誘われて泣いた。

「昔は不思議な冷静な人でしたが、短命で亡くなるせいか、この二、三年は非常にめいつて見える時が多くて、心細いふうを見せられましたから、あまりに人生を考えた末に悟ってしまった清澄な心境というものかもしれぬが、それでは今までに持っていたすぐれたよさが消えてしまうことにならないかとも不安に思われると、小賢しく私が時々忠告らしいことをしますと、あの人は私を憐むあわれような表情で見えていました。何よりも宮様のお悲しみになつていらつしやいます御様子を伺いまして、もつたいたないことですが、おいたわしく存じ上げます」

などとなつかしいふうに話して、しばらくして大将は去つて行くとした。衛門督えもんのかみはこの人より五つ六つの年長であつたが、彼はきわめて若々しく見えて、女性的な柔らかさの見える人であつたが、これは重々しく端正で、しかも顔だけはあくまでも美しいのを、若女房などは悲しさも少し紛れたように興奮して、帰つて行くところ、大将の姿にながめ入つた。前の庭の桜の美しいのをながめて、「深草の野への桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け」と口へ出てくる大将であつたが、尼姿を言うようなことはここで言うべきでないといと遠慮がされて、「春ごとに花の盛りはありなめど逢あひ見んことは命なりける」と歌つて、

「#ここから2字下げ」

時しあれば変はらぬ色に匂ひけり片枝折れたる宿の桜も

「#ここで字下げ終わり」

と自然なふうに口ずさんで、花の下に立ちどまっていると、御息所はすぐに、

「#ここから2字下げ」

この春は柳の芽にぞ玉は貫く咲き散る花の行くへ知らねば

「#ここで字下げ終わり」

という返しを書いてきた。高い才識の見えるほどの人ではないが、前には才女と言われた更衣であったのを思って、評判どおりに気のきいた人であると大将は思った。

大将はそれから太政大臣家を訪問したが、子息たちの幾人かが出て、こちらへと案内をしたので、大臣の離れ座敷のほうへ行つては無遠慮でないかと躊躇をしながらはいつて行つて舅に逢つた。いつまでも端麗な大臣の顔も非常に痩せ細つてしまつて、髭なども剃らせないで伸びて、親を失つた時に比べて子を死なせたあとの大臣は衰え方がひどいと世間で言われるとおりに見えた。顔を見た瞬間から悲しくなつて流れ出した涙がいつまでも続いて流れてくるのを恥ずかしく思つて大将は押し隠しながら、一条の宮をお訪ねして来た話などをした。初めからしめつばいふうであつた大臣はさらに多くの涙を見せて、故人の話を婿とし合つた。懐紙へ一条の御息所が書いて渡した歌を大将が見せようとすると、

「目もよく見えないが」

と涙の目をしばたたきながらそれを読もうとした。見栄も思わず目のためにしかめている顔は、平生の誇りに輝いた時の面影を失って見苦しかった。歌は平凡なものであったが、「玉は貫く」ということは大臣自身にも痛切に感じていることであつたから、相一憐む涙が流れ出るふうで、すぐにまた言うのであつた。

「あなたのお母さんが亡くなられた時に、私はこれほど悲しいことはないと思つたが、女の人は世間と交渉を持つことが少ないために、不意にいろんな言葉が自分の痛い傷にさわるというようなこともなくて、今度のような苦しみをそのあとで感じることはなかつたものです。賢くもありませんでしたが、朝廷の御恩を受けて地位を得てゆくにしたがつて彼の庇護を受けようとするものが次第に多くなつていたのですから、彼の死に失望をした者もずいぶんあるでしょう。しかし親である私は、そんなふうに勢力を得ていたのに惜しいとか、官位がどうなつていたかというようなことではなくて、平凡な息子である裸の彼が堪えがたく恋しいのです。どんなことが私のこの悲しみを慰めるようになるのでしょうか。それはありうることは思われません」

大臣は空間に向いて歎息をした。夕方の雲が鈍色にかすんで、桜の散つたあとの梢にもこの時はじめて大臣は気づいたくらいである。

御息所の歌の紙へ、

「#ここから2字下げ」

このもとの雪に濡れつつ逆さに霞の衣着たる春かな

「#ここで字下げ終わり」

と書いた。大将も、

「#ここから2字下げ」

亡^なき人も思はざりけん打ち捨てて夕べの霞君着たれとは

「#ここで字下げ終わり」

と書く。左大弁も、

「#ここから2字下げ」

恨めしや霞の衣たれ着よと春よりさきに花の散りけん

「#ここで字下げ終わり」

と書いた。

大納言の法事は非常に盛んなものであった。左大将夫人が兄のためにはささげ物をしたのはいうまでもないが、大将自身も真心のこもったささげ物をしたし、誦^{よみ}経の寄付などにも並み並みならぬ友情を示した。

左大将は一条の宮へ始終見舞いを言い送っていた。四月の初夏の空はどことなくさわやかで、あらゆる木立ちが一色の緑をつくっているのも、寂しい家ではすべて心細いことに見られて、宮の御^{おん}母子が悲しい退屈を覚えておいでになるころにまた左大将が来訪した。

植え込みの草などもすでに青く伸びて、敷き砂の間々には強い蓬^{よもぎ}が広がりかえっていた。林泉に対する趣味を大納言は持っていて、美しくさせていたものであるが、そうした植え込みの灌^{かん}木類や花草の

類もがさつに枝を伸ばすばかりになって、一むら薄はその蔭に鳴く秋の虫の音が今から想像されるほどはびこって見えるのも、大将の目には物哀れでしめつぱい気分がまず味わわれた。喪の家として御簾に代えて伊予簾が掛け渡され夏のに代えられたのも鈍色の几帳がそれに透いて見えるのが目には涼しかった。姿のよいきれいな童女などの濃い鈍色の汗衫の端とか、後ろ向きの頭とかが少しずつ見えるのは感じよく思われたが、何にもせよ鈍色というものは人をはつとさせる色であると思われた。今日は宮のお座敷の縁側にすわろうとしたので敷き物が内から出された。例の話し相手をする御息所に出てくれと女房たちは勧めているのであったが、このころは身体が悪くて今日も寝ていた。御息所の出て来るまで、何かと女房が挨拶をしている時に、人間の思いとは関係のないふうに快く青々とした庭の木立ちに大将はながめ入っていたが、気持ちは悲しかった。柏の木と楓が若々しい色をして枝を差しかわして立っているのを指さして、大将は女房に、

「どんな因縁のある木どうしでしょう。枝が交じり合って信頼をきっているようなのがいい」

などと言い、さらに簾のほうへ寄って、

「#ここから1字下げ」

「ことならばならしの枝にならさなん葉守の神の許しありきと

「#ここで字下げ終わり」

まだ御簾の隔てをお除きくださらないので遺憾です」

と言った。一段高くなった室の長押へ外から寄りかかっているの

である。

「柔らかな形をしていらっしやる時に、また別な美しさがおありになりますよ」

と女房らはささやき合うのであった。今まで話していた少将という女房を取り次ぎにして宮はお返辞をおさせになった。

「#ここから1字下げ」

「柏木に葉守の神は坐いますとも人一な馴ならすべき宿の梢こぎか

「#ここで字下げ終わり」

突然にそうしたお恨みをお言いかけになりますことで御好意が疑われます」

と伝えられたお言葉に道理があると思つて大將は微笑した。その時に御息所がいざつて来る氣配けはいがしたので大將は少しいずまいを直した。

「世の中のことをあまりに悲しく思い過ぐしますせいですか、身体からだのぐあいが悪うございまして、ぼけたようにもなつて暮らしておりますが、こうしてたびたびの御親切な御訪問に力づけられました出てまいりました」

と御息所は言ったが、言葉どおりに病氣らしく感じられた。

「故人をお悲しみになりますことはごもつとも至極なことですが、しかしそんなにまで深くお歎なげきになつてはよろしくないでしょう。

この世のことはみな前生からのきまつている因縁の現われですから、そう思えばさすがに際限もなく悲しみばかりの続くものでないことがわかると思いますが」

などと大將は慰めていた。この宮は以前一噂つわさに聞いていたよりも優美な女性らしいが、お気の毒にも良人おととにお別れになった悲しみのほかに、世間から不幸な人におなりになったことを憐あわれまれるのを苦しく思っておいでになるのであると思う同情の念がいつかその方を恋しく思う心が変わってゆくのをみずから認めるようになった大將は熱心に宮の御近状などを御息所に尋ねていた。御一容貌きりようはそうよくはおありでならないであろうが、醜みにくくて気の毒な気持ちのする程度でさえなければ、外見だけのことでその人がいやになるようなことがあつたり、ほかの人に心を移すようなことは自分にできるはずがない、そんな恥知らずなことは自分の趣味でない、性格のよしあしで尊重すべき女と、そうでない女は別わけらるべきであるなどと思っていた。

「もうお心安くなったのですから、衛門督えもんのかみをお取り扱いになりました。たごとく、私を他人らしくなく御待遇くださいますように」

などと、恋を現わして言うのではないが、持つてほしい好意をねんごろに要求する大將であつた。その直衣姿のうしは清楚せいそで、背が高くりっぱに見えた。

「六条院様はなつかしく艶えんな美貌びぼうで、そしてお品のよい愛嬌あいきょうが無類なのですよ。この方は男らしくはなやかで、ああきれいだと思う第一印象がだれよりもすぐれておいでになりますよ」

などと女房たちは言つて、
「かなうことなら宮様の殿様におなりになつて始終おいでくださることになればいい」

こんなことまでも思つたに違いない。「右將軍が墓に草はじめ青し」と大將は口ずさみながらも、この詩も近ごろ逝いつた人を悼いたん

だ詩であることから、詩の中の右將軍の惜しまれたと同じように、世人が上下こそぞって惜しんだ幾月か前の友人の死を思うのであった。帝も音楽の遊びを催される時などには、いつの場合にも衛門督を御追憶あそばすのであった。「ああ衛門督が」という言葉を何につけても言わない人はないのである。六条院はまして故人をお憐れみになることが月日に添えてまさっていった。宮の若君を院のお心だけでは衛門督の形見と見ておいでになるのであるが、だれも、この形見のあるのは知らぬことであつたから、何ものからも面影をとらえることは不可能だと思つて衛門督を悲しんでいるのであつた。秋になつたところからこの若君は這いなどなさる様子が言いようもないくらいかわいいので、院は人前ばかりでなく、しんからいとしくて、いつも抱いて大事になさるのであつた。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2004年2月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

横笛

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）亡^なき

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）女^{すまい}一住居

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」亡^なき人の手なれの笛に寄りもこし夢の

「#地から3字上げ」ゆくへの寒^よき夜半^はかな （晶子）

^{ごんだいなごん}

権大納言の死を惜しむ者が多く、月日がたっても依然として恋し

く思う人ばかりであった。六条院のお心もまたそうであった。御関

係の薄い人物でも、なんらかのすぐれたところを持っている者の死

は常に悲しく思^{おほしめ}召す方であったから、柏^{かしわぎ}木の衛^{えもん}門^{のかみ}督はまして朝夕に

お出入りしていた人であつたし、またそうした人たちの中でも特に愛すべき男として見ておいでになつたのでもあるから、一つの問題は別としてお心に上ることが多かつた。四十九日の法事の際にも御厚志の見える誦経すきょうの寄付があつた。何も知らぬ幼い人の顔を御覽になつてはまた深い悲哀をお感じになつて、そのほかにも法事の際に黄金百両をお贈りになつた。理由を知らぬ大臣はたびたび感激してお礼を申し上げた。大将もいろいろな形式で従兄いとこであり、夫人の兄であり、親友であつた大納言の法会を盛んにする志を見せ、一方ではこの際の御慰問として未亡人の一条の宮へも物を多くお贈りすることを忘れなかつた。兄弟以上の親切を故人のために尽くす大将を大臣も夫人も、これほどまでの志があるとは思わなかつたと喜んでゐた。故人の持つていた勢力が法事の際にはなやかに現われたことなどからも両親はまた亡き子を惜しんだ。

御寺みでらの院は女二にょにの宮みやもまた不幸な御境遇におなりになつたし、入道の宮も今日では人間としての幸福をよそにあそばすお身の上であるのを、御父として残念なお気持ちがあそばすのであるが、この世のことは問題にすまいとしいて忍んでおいでになつた。仏勤めをあそばされる時にも、女三にょさんの宮みやもこの修業をしているであろうと御想像あそばすのであつて、宮が出家をされてからは、以前にも変わつてちよつとしたことにも消息を書いておつかわしになつた。御寺に近い林から抜いた竹の子と、その辺の山で掘られた自然薯じねんじよが、新鮮な山里らしい感じを出しているのを快く思召おほしめ「#ルビの「おほしめ」は底本では「おほしめ」されて、宮へお贈りになるのであつたが、いろいろなお書きになつたあとへ、

「#ここから1字下げ」

春の野山は霞かすみに妨げられてあいまいな色をしています、その中であなたへと思つてこれを掘り出させました。少しばかりです。

「#ここから2字下げ」

世を別れ入りなん道は後おくるとも同じところを君も尋ねよ

「#ここから1字下げ」

それを成就させるためには、より多く仏の御弟子みでしとして努めなければならぬでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

法皇のお手紙を涙ぐみながら宮が読んでおいでになる所へ院がおいでになった。宮が平生に違つて寂しそうに手紙を読んでおいでになり、漆器の広蓋ひろぶたなどが置かれてあるのを、院はお心に不思議に思召されたが、それは御寺から送つておつかわしになったものだった。御黙読になつて院も身に沁しんで思われになるお手紙であつた。もう今日か明日かのように老衰をしていながら、逢うことが困難なのを飽き足らず思うというような章もある。この同じ所へ来るようにとのお言葉は何でもない僧もよく言うことであるが、この作者は御実感そのままであろうとお思いになると、法皇はそのとおりに思召すであろう、寄託を受けた自分が不誠実者になつたことでもお気づかわしさが倍加されておいでになるであろうのがおいたわしいと院はお思いになった。宮はつつましかにお返事をお書きになつて、お使いへは青鈍色の綾あやの一襲ひとかたねをお贈りになつた。宮がお書きつぶしになつた紙の几帳きちょうのそばから見えるのを、手に取つて御覧になると、力のない字で、

「#ここから2字下げ」

つき世にはあらぬところのゆかしくて背く山路に思ひこそ入れ

「#ここで字下げ終わり」

とある。

「あなたを御心配していらっしやる所へ、あらぬ山路へはいりたい
ようなことを言っておあげになっては悪いではありませんか」

こう院はお言いになるのであった。出家後は前にいても顔をなるべく見られぬようにと宮はしておいでになった。美しい額の髪、きれいな顔つきも、全く子供のように見えて非常に可憐なのを御覧になると、なぜこんなふうにさせてしまったかと後悔の念のつくられることで、罪に一步ずつ近づく気があそばされるので、几帳だけを中の隔てには立てて、しかもうといふうには見せぬように院はしておいでになるのである。若君は乳母の所で寝ていたのであるが、目をさまして這い寄って来て、院のお袖にまつわりつくのが非常にかわいく見られた。白い羅に支那の小模様のある紅梅色の上着を長く引きずって、子供の身体自身は着物と離れ離れにして背中から後ろのほうへ寄っているようなことは小さい子の常であるが、可憐で色が白くて、身丈がすんなりとして柳の木を削って作ったような若君である。頭は露草の汁で染めたように青いのである。口もとが美しく、上品な眉がほのかに長いところなどは衛門督によく似ているが、彼はこれほどまでにすぐれた美貌ではなかったのに、どうしてこんなのであろう、宮にも似ていない、すでに気高い風采の備わっている点を言えば、鏡に写る自分の子らしくも見られるのであると

お思いになつて、院は若君をながめておいでになるのであつた。立つても二足三足踏み出すほどになつているのである。この竹の子の置かれた広蓋ひろぶたのそばへ、何であるともわからぬままで若君は近づいて行き、忙しく手で掻き散らして、その一つには口をあてて見て投げ出したりするのを、院は見えておいでになつて、

「行儀が悪いね。いけない。あれをどちらへか隠させるといい。食い物に目をつけると言つて、口の悪い女房は黙つていませんよ」

とお笑いになる。若君を御自身の膝ひざへお抱き取りになつて、

「この子の眉まゆがすばらしい。小さい子を私はたくさん見ないせいか、これくらいの時はただ赤ん坊らしい顔しかしてないものだと思つていたのだが、この子はすでに美しい貴公子の相があるのは危険なこととも思われる。内親王もいらつしやる家の中でこんな人が大きくなつていつては、どちらにも心の苦勞をさせなければならぬ日が必ず来るだろう。しかし皆のその遠い将来は私の見ることのできないものなのだ。『花の盛りはありなめど』（逢ひ見んことは命なりけり）だね」

こうお言いになつて若君の顔を見守つておいでになつた。

「縁起のよろしくございませんことを、まあ」

と女房たちは言つていた。若君は齒茎から出始めてむずがゆい気のする齒で物が噛かみたいところで、竹の子をかかえ込んで罌くすりをたらしながらどこもかも噛かみ試みている。

「変わった風流男だね」

と院は冗談じょつたんをお言いになつて、竹の子を離させておしまいになり、

「#ここから2字下げ」

憂きふしも忘れずながらくれ竹の子は捨てがたき物にぞありける
「#ここで字下げ終わり」

こんなことをお言いかけになるが、若君は笑っているだけで何の
ことであるとも知らない。そそくさと院のお膝ねむをおりてほかへ這は
て行く。月日に添って顔のかわいくなつていくこの人に院は愛をお
感じになつて、過去の不祥事など忘れておしまいになりそうである。
この愛すべき子を自分が得る因縁の過程として意外なことも起こつ
たのであろう。すべて前生の約束事なのであろうと思召おほしめされること
に少しの慰めが見いだされた。自分の宿命というものも必ずしも完
全なものではなかつた。幾人かの妻妾さいしやうの中でも最も尊貴で、好配偶
者たるべき人はすでに尼になつておいでになるではないかとお思い
になると、今もなお誘惑にたやすく負けておしまいになつた宮がお
恨めしかつた。

大將は柏木かしわぎが命の終わりにとどめた一言を心一つに思い出して何
事であつたかいぶかしいと院に申し上げて見たく思い、その時の御
表情などでお心も読みたいと願つてゐるが、淡うすくほのかに想像のつ
くこともあるために、かえつて思いやりのないお尋ねを持ち出して
不快なお気持ちにおさせしてはならない、きわめてよい機会を見つ
けて自分は真相も知つておきたいし、故人が煩悶はんもんしていた話もお耳
に入れることにしたいと常に思つていた。

物哀れな気のする夕方に大將は一条の宮をお訪たずねした。柔らかい
しめやかな感じがまずして宮は今まで琴などを弾ひいておいでになつ
たものらしかつた。来訪者を長く立たせておくこともできなくて、

人々はいつもの南の中の座敷へ案内した。今までこの辺の座敷に出
 ていた人が奥へいざつてはいつた気配けはいが何となく覚えられて、衣擦きぬす
 れの音と衣の香が散り、艶えんな気分を味わった。いつもの御息所みやすどころが出
 て来て柏木の話などを双方でした。自身の所は人出入りも多く幾人
 もの子供が始終家の中を騒がしくしているのに馴なれている大将には
 御殿の中の静かさがことさら身にしむように思われた。以前よりも
 また荒れてきたような気はするが、さすがに貴人の住居すまいらしい品は
 備わっていた。植え込みの花草が虫の音に満ちた野のように乱れた
 夕明りのもとの夜を大将はながめていた。そこに出たままになって
 いた和琴わこんを引き寄せてみると、それは律の調子に合わされてあつて、
 よく弾き馴ならされて人間の香に染しんだなつかしいものであつた。こ
 んな趣味の美しい女一住居すまいに放縦な癖のついた男が来たなら、自制
 もできずに醜態を見せることがあるのであろう、とこんなことも心
 に思いながら大将は和琴を弾いていた。これは柏木が生前よく弾い
 ていた楽器である。ある曲のおもしろい一節だけを弾いたあとで、
 大将は、

「ことに和琴は名手というべき人でしたがね。忘れがたいあの人の
 芸術の妙味は宮様へお伝わりしているでしょうから、私はそれを承
 りたいのですが」

と言うと、

「あの不幸のございましたから、全くこうしたことに無関心にお
 なりあそばしまして、お小さいころのお稽古けいこ弾きと申し上げるほど
 のこともあそばしません。院の御前で内親王様がたにいろいろの芸
 事のお稽古をおさせになりましたころには、音楽の才はおありにな
 るというような御批評をお受けあそばした宮様ですが、あれ以来は

ほんやりとしておしまいになりました、毎日なさいますことはお物
 思いだけでございますから、音楽も結局寂しさを慰めるものではな
 いという気が私にいたされます」

と御息所は言う。

「ごもつともなことですよ。『恋しさの限りだにある世なりせば』
 (つらきをしひて歎かざらまし)」

大將は歎息たんそくをして楽器を前へ押しやった。

「楽器に故人の音がついているかどうか、私どもにわかりますほ
 どお弾きになって見てくださいませ。みじめにめいつておりますわ
 れわれの耳だけでも助けてくださいませ」

「私よりも御縁の深い方のあそばすものにこそ故人の芸術のうかが
 われるものがあるでしょうから、ぜひ宮様のを承りたい」

御簾みすのそばに近く和琴を押し寄せて大將はこう言うのであるが、
 すぐに気軽に御承引あそばすものでないことを知っている大將は、
 しいても望みはしなかった。月が上ってきた。秋の澄んだ空を幾つ
 かの雁かりの通って行くことも宮のお心には孤独でないものとしておう
 らやましいことであろうと思われた。冷やかな風の身にしむよう
 に吹き込んでくるのにお誘われになって、宮は十三絃をほのかにお
 掻かき鳴らしになるのであった。この情趣に大將の心はいっそう惹ひか
 れて、より多くを望む思いから、琵琶びわを借りて想夫恋そつぶんを弾き出した。

「自信のあるものらしく見えますのが恥ずかしゅうございますが、
 この曲だけはごいっしょにあそばしてくださいってよい理由のあるも
 のですから」

と大將は御簾みすの奥へ合奏をお勧めするのであるが、他のものより

も多く羞恥しゆうぢの感ぜられる曲に宮はお手を出そうとあそばさない。ただ琵琶の音に深く身にしむ思いを覚えてだけおいでになる宮へ、

「#ここから2字下げ」

ことに出いで言はぬを言ふにまさるとは人に恥ぢたる気色けしきとぞ見る

「#ここで字下げ終わり」

と大将が言った時、宮はただ想夫恋の末のほうだけを合わせてお弾きになった。

「#ここから2字下げ」

深き夜の哀ればかりは聞きわけどことよりほかにえやは言ひける

「#ここで字下げ終わり」

ともお言いになるのであつた。非常におもしろいお爪音つまおとであつて、おおまかな音ねの楽器ではあるが、芸の洗練された名手が熱心にお弾ひきになるのであるから、すごい気分のような透徹した音を、美しく少しだけお聞かせになつておやめになつたのを、大将は恨めしいまでに飽き足らず思うのであるが、

「風流狂じみしましたことをいろいろお目にかけてしまいました。秋の夜を無限におじゃましたしておりますは故人からとがめられる気もいたしますから、もうお暇いとまをいたしましょう。また別の日に新しい気持ちで御訪問をいたします。この楽器をこのままにしてお待ちくださるでしょうか。意外なことが起こらないともかぎらない人生のことですから不安なのです」

などと言つて、正面から恋を告げようとはしないのであるが、におわせるほどには言葉に盛つて大将は帰ろうとした。

「今夜の御風流は非難いたす者もございませんでしょう。昔の日の話をお補いくださいます程度にしかお聞かせくださいませんでしたのが残り多く思われてなりません」

と言ひ、御息所は大将への贈り物へ笛を添えて出した。

「この笛のほうは古い伝統のあるものと伺つておりました。こんな女一住居すまいに置きますことも、有名な楽器のために気の毒でございますから、お持ちくださいましてお吹きくださいませ、前駆の聲に混じります音を楽しんで聞かせていただけるでしょう」

と御息所は言つた。

「つたない私がいただいてまいることは似合わしくないことでしょう」

こう言いながら大将は手に取つて見た。これも始終柏木が使つていて、自分もこの笛を生かせるほどには吹けない。自分の愛する人に与えたいとこんなことを柏木の言うのも聞いたことのある大将であつたから、故人の琴に對した時よりもさらに多くの感情が動いた。試みに大将は吹いてみるのであつたが、盤ばん渉調しやくを半分ほど吹奏して、

「故人を忍んで琴を弾きましたことはとにかく、これは晴れがましいまばゆい気がいたされます」

こう挨拶あいさつして立つて行こうとする時に、

「#ここから2字下げ」

露しげき葎むぐらの宿にいにしへの秋に変はらぬ虫の声かな

「#ここで字下げ終わり」

と御息所が言いかけた。

「#ここから2字下げ」

横笛の調べはことに変はらぬをむなしくなりし音こそ尽きせね

「#ここで字下げ終わり」

返歌をしてもまだ去りがたくて大将がためらっているうち深更になつた。

自宅に帰ってみると、もう格子などは皆おろされてだれも寝てしまつていた。一条の宮に恋をして親切がった訪問を常にするというようなことを、夫人へ言う者があつたために、今夜のようにほかで夜ふかしをされるのが不愉快でならない夫人は、良人が室内へはいつて来たことも知りながら寝入つたふうをしているものらしい。「妹とわれといささかの山の山あらざぎ」(手をとりふれぞや、かほまさるかにや)と美しい声で歌いながらはいつて来た大将は、「どうしてこんなに早く戸を皆しめてしまつたのだらう。引つ込み思案な人ばかりなのだね。こんな月夜の景色をだれも見ようとしな

いなど」と歎息して格子を上げさせ、御簾を巻き上げなどして縁に近く出て横たわつていた。

「こんなよい晩に眠つてしまう人があるものですか。少し出ていらつしゃい。つまらないじゃありませんか」

などと夫人へ言うのであるが、おもしろく思っていない夫人は何

とも言わないのである。子供が寝おびれて何か言っている声があちこちに於いて、女房もその辺の部屋にたくさん寝ている、このにぎわしい自宅の夜と、一条邸の夜とのあまりにも相違しているのを大將は思い比べていた。贈られた笛を吹きながら自分の去ったあとの御母子がどんなに寂しく月明の景色をながめておられるだろう、自分の弾いた楽器も宮の合わせてくださったものもそのまま二人の女性にもてあそばれているであろう、御息所も和琴が上手なはずであるなどと思いやりながら寝ているのである。どうしてあんなにりっぱな宮様を衛門督は形式的に大事がただけで、ほんとうに愛してはいなかったのであろうと大將は不思議に思われてならない。お顔を見て美しく想像したのと違ったところがあつては不幸な結果をもたらすことにもなるう、ほかのことでも空想をし過ぎたことには必然的に幻滅が起こるものであるなど思いながらも、大將は自身たち夫婦の仲を考えて、なんらの見栄も気どりも知らぬ少年少女の時に知った恋の今日まで続いて来た年月を数えてみては、夫人が強い驕慢な妻になっているのに無理でないところがあるとも思われた。

少し寝入ったかと思うと故人の衛門督がいつか病室で見た時の桂姿でそばにいて、あの横笛を手を取っていた。夢の中でも故人が笛に心を惹かれて出て来たに違いないと思っていると、

「#ここから1字下げ」

「笛竹に吹きよる風のごとならば末の世長き音に伝へなん

「#ここで字下げ終わり」

私はもっとほかに望んだことがあつたのです」

と柏木は言うのである。望みということをよく聞いておこうとするうちに、若君が寝おびれて泣く声に目がさめた。この子が長く泣いて乳を吐いたりなどするので、乳母めのとが起きて世話をするし、夫人も灯ひを近くへ持って来させて、顔にかかる髪を耳の後ろにはさみながら子を抱いてあやしなどしていた。色白な夫人が胸むろを拡げて泣く子に乳などをくくめていた。子供も色の白い美しい子であるが、出そうでない乳房ちぶさを与えて母君は慰めようとつとめているのである。大将もそのそばへ来て、

「どう」

などと言っていた。夜の魔を追い散らすために米なども撒まかれる騒がしさに夢の悲しさも紛らされてゆく大将であった。

「この子は病気になったらしい。はなやかな方に夢中になっていらつしつて、おそくなつてから月をながめたりなさるつて格子をあけさせたりなさるものだから、また物怪もののけがはいつて来たのでしよう」

と若々しい顔をした夫人が恨むと、良人おっとは笑つて、

「変にこじつけて私の罪にするのですね。私が格子を上げさせなかつたらなるほど物怪ははいる道がなかつたらうね。おおぜいの人のお母様になったあなただから、たいした考え方ができるようになつたものだ」

こう言つても妻をながめる大将の美しい目つきはさすがに恥かたじけなくずかしがつて、続けて恨みも言わずに、

「あちらへいらつしやい。人が見ます。見苦しい」

とだけ言った。明るい灯ひに顔を見られるのをいやがるのも可憐かれんな妻であると大将は思った。若君は夜通しむずかつて寝なかつた。

大将は夢を思うと贈られた横笛ももてあまされる気がした。故人

の強い愛着の遺^{のこ}った品がやりたく思う人の手に行つていぬものらしい。しかも宮の御もとへ置きたく思う理由もない。それは笛が女の吹奏を待つものでないからである。生きておれば何とも思わぬことが臨終の際にふと気がかりになったり、ふと恋しく心が残つたりすること幽魂が浄土へは向かわず宙宇に迷うと言われている。そうであるから人間は何事にも執着になるほどの関心を持つてはならないのであると、こんなことを思つて大納言のために愛宕^{おたぎ}の寺で誦経^{ずきょう}をさせ、またそのほか故人と縁故のある寺でも同じく経を読ませた。この笛を歴史的価値のある物として、好意で自分へ贈つた人に対しては、それがどんな尊いことであつても寺へ納めたりしてしまふことも不本意なことであると思つて、大將は六条院へ参つた。

その時院は姫君の女御^{にょご}の御殿へ行つておいでになつた。三歳ぐらゐになつておいでになる三の宮を女一の宮と同じように紫の女王^{にょおう}がお養いしていて、対へお置き申してあるのであるが、大將が行くと走つておいでになつて、

「大將さん、私を抱いてあちらの御殿へつれて行ってちょうだい」
うやうやしい態度で、そしてお小さい方らしくお言いになると、大將は笑つて、

「いらつしやいませ。けれど女王様のお御簾^{みす}の前をどうしてお通りいたしましたしょう。私よりもあなた様がお困りになりましたしょう」
こう言いながらすわつた膝^{ひざ}へ宮を抱いておのせすると、

「だれも見ないよ。いいよ。私顔を隠して行くから」
宮が袖^{そで}を顔へお当てになるのもおかわいらしくて大將はそのまま寢殿のほうへお抱きして行つた。

こちらの御殿のほうでも院が宮の若君と二の宮がいっしょに遊ん

でおいでになるのをかわいく思っでながめておいでになるのであつた。かどのお座敷の前で三の宮をお下ろししたのを、二の宮がお見つけになつて、

「私も大将に抱いていただくのだ」

とお言いになると、三の宮が、

「いけない、私の大将だもの」

と言つて伯父君の上着を引っぱつておいでになる。院が御覽になつて、

「お行儀のないことですよ。お上のお付きの大将を御自分のものにしてしようと争いになつたりしてはなりませんよ。三の宮さんはよくわからずやお言いになりますね。いつでもお兄様に反抗をなさいますね」

とお訓しになる。大将も笑つて、

「二の宮様はずいぶんお兄様らしくて、お小さい方によくお譲りになつたり、思いやりのあることをなさいます。大人でも恥ずかしくなるほどでございます」

こんなことを言つていた。院は微笑を顔にお浮かべになつて、お小言はお言いになつたものの、どちらもかわいくてならぬというよくな表情をしておいでになつた。

「公卿をこんな失礼な所へ置いてはおけない。対のほうへ行くことにしよう」

とお言いになつて、立とうとあそばされるのであるが、宮たちがまつわつてお離れにならない。宮の若君は宮たちと同じに扱うべきでないとお心の中では思召されるのであるが、女三の尼宮が心の鬼からその差別待遇をゆがめて解釈されることがあつてはと、優しい

御性質の院はお思いになつて、若君をもおかわいがりになり、大事にもあそばすのであつた。大將はこの若君をまだよく今までに顔を見なかつたと思つて、御簾の間から顔を出した時に、花の萎れた枝の落ちているのを手に取つて、その児に見せながら招くと、若君は走つて来た。薄藍色の直衣だけを上に着ているこの小さい人の色が白くて光るような美しさは、皇子がたにもまさつていて、きわめて清らかな感じのする子であつた。ある疑問に似たものを持つ思いなしか、眸ざしなどにはその人のよりも聡慧らしさが強く現われては見えるが、切れ長な目の目じりのあたりの艶な所などはよく柏木に似ていると思われた。美しい口もとの笑う時にことさらはなやかに見えることなどは自分の心に潜在するものがそう思わせるのかもしらぬが、院のお目には必ずお思い合わせになることがあるうと考えられるほど似ていると、大將は異母弟を見ながらも、いよいよ院が柏木に対してどう思つておいでになるかを早く知りたくなつた。宮がたは自然に気高くお見えになるところはあるが、普通のきれいな子供とさまで変わつてはおいでにならないのに、若君は貴族の子らしい品格のほかにも、何ものにも優越した美の備わつてゐるのを、大將は比べて思いながら、哀れなことである、自分の推測が眞実であれば柏木の父の大臣は故人を切に思う心から、柏木の子供であると名のつて来る者の出て来ないことに失望して、それだけの形見をすら不幸な親に残してくれなかつたと言つて泣きこがれているのであるから、知らせないでゐるのは罪作りなことにならうと考へられて来るうちにまた、そんなことはありうることでないと否定もされる。ますます不可解な問題であると大將は思つた。性質もなつかしく優しい子で、大將に馴染んでそばを離れず遊んでいるのもかわい

く思われた。

院が対のほうへおいでになったのでお供をして行って大将がお話をかわしているうちに日も暮れかかってきた。昨夜一条の宮をお訪ねした時のあちらの様子などを大将が語るのを院は微笑して聞いておいでになった。故人に関することが出てくる時には言葉もおはさみになって同情して聞いておいでになるのであったが、

「想夫恋を少しお合わせになったということなどは非常におもしろくて文学的ではあるが、しかし自分の意見として言えば女は異性を知らず知らず興奮させるような結果までを考慮してどこまでも避けねばならぬことだと思うがね、故人への情誼で御親切にし始めたのであれば、君はどこまでもきれいな心でお交際をしなければならぬよ。あやまちないようにね。苦しい結果を引き起こすようなことのないようにするのがどちらのためにもいいことだろうと思う」

と院はお言いになった。大将は心に、このお言葉は承服されない、人をお教えるには賢いことを仰せられても、御自身がこの場合に処して御冷静でありうるであろうかと思っていた。

「あやまちなどの起こりようはありません。人生の無常に直面されたかたがたを宗教的な気持ちで慰めて差し上げる義務があるように思いましたお交際を始めたのですから、すぐまたその友情から離れますようなことをしましては、かえって普通の失敗した野心家らしく世間から思われるだろうと考えますから、いつまでも友情は捨てないつもりであります。想夫恋をお弾きになりましたことで御非難のお言葉がございましたが、あちらが進んでなすったことであればそれは決しておもしろい話ではございませんが、私の参ります前から弾いておいでになりました琴を、ただ少しばかり私の想夫恋に合

わせてくださいましたのですから、非常にその場の情景にかなってよかったのでございます。どんなこともその女性次第だと思えます。御年齢などもきらきらとする若さを少し越えていらつしやいます方が、好色漢のような態度をお見せするはずもない私に、親しい友情が生じまして、私の願ったことが聞いていただけたというようなことは恥ずかしいこととは思われません。御觀察申し上げるところでは非常に女らしい優しい御性質のようです」

こんな話をしていた大將は、かねて願っている機会が到来したように思い、少し院のお座へ近づいて昨夜の夢の話をした。ものも言わずに聞いておいでになった院のお心の中にはお思い合わせになることがあつた。

「その笛は私の所へ置いておく因縁があるものなのだよ。昔は陽成院の御物だったもののだがね。私の叔父のお亡くなりになった式部卿の宮が秘蔵しておいでになったのを、あの衛門督は子供の時から笛がことによくできたものだから、宮のお邸で萩の宴のあつた時に贈り物としてお与えになったのだ。御婦人がたは深いお考えもなしに君へ贈られたのだろう」

院はこうお言いになるのであつた。御心中ではまず手もとへ置こう、死後にもとの持ち主の譲らせた人とは分明であると思召された。聡明な大將にはもう想像ができていて、今持ち合わせてもいるのであろうとお思いになるのであつた。すべてを察しになった院のお顔色を見てはいっそう大將は打ち出しにくくなるのであるが、ぜひ伺つてみたい気持ちがあつて、ただこの瞬間に心へ浮かんで来たというようにして、思い出し思い出し申すように言う、

「もう衛門督が終焉に近いところでございました。見舞いにまいりま

した私に、いろいろ遺言をいたしました中に、六条院様に対して深い罪を感じているということを繰り返し繰り返し言ったのでございましたが、ただ御感情を害していると聞きましたただけでは、私によくわからないのでしたが、どんなことだったのをごさいます。ただ今もまだよくわからないのをごさいます」

自分が感じたように大将はあの秘密の全貌を知しっているのと院はお悟りになったのであるが、くわしくお語りになるべきことでもないので、しばらくは突然いぶかしい話を聞くというような御表情を見せておいでになったあとで、

「そんなに死んで行く時にまで人の気にかけるようなことはいつ自分が言ったりしたりしたのだろう。私にもわからない、思い出せないよ。いずれ静かな時を見て君の夢に関する細かな説明はしてあげよう。夢の話は夜はしてならないものだから、迷信だろうが女の人などは言うものだよ」

と院は言っておいでになって、あの不思議な問題にはあまり触れようとあそばさないのを見て、大将は自分の言い出したということがお気に入らないのではないかと、きまり悪く思ったのである。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年10月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

鈴虫

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例） 釈迦牟尼しゃかむにぶつ仏

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例） 皆一白檀びやくだん

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例） 「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」すずむしは釈迦牟尼しゃかむにぶつ仏のおん弟子でしの君

「#地から3字上げ」のためにと秋を浄きよむる （晶子）

夏の蓮はすの花の盛りに、でき上がった入道の姫宮の御持仏の供養が催されることになった。御念誦堂ごねんじゆどうのいっさいの装飾と備え付けの道具は六条院のお志で寄進されてあった。柱にかける幡ぼんなども特別にお選びになった支那錦しなにしきで作られてあった。紫夫人の手もとで調製さ

れた花机かきの被おおいは鹿かの子染こめを用いたものであるが、色も図柄も雅
 味あじに富とんでいた。帳台ちやうだいの四方しやうほうの帷ほしを皆みな上げて、後のちろのほうに法華經ほけきやう
 の曼陀羅まんだらを掛かけ、銀ぎんの華瓶かへいに高たかく立華りっかをあざやかに挿さして供たまえてあ
 った。仏前ぶつぜんの名香なみかには支那しなの百步香ひゃくぶかうがたかれてある。阿弥陀仏あみだと脇わき
 士しの菩薩ぼさつが皆みな一いつ白檀びやくだんで精巧せいきうな彫り物ぼりものに現あらわされておいでになった。
 闕伽あかの具ぐはことごとに小こさく作つくられてあつて、白玉はくぎよくと青玉せいぎよくで蓮れんの花はなの形かたち
 にした幾いくつかの小こ一いつ香炉かうろには蜂蜜はちみつの甘あまい香かを退のけた荷葉香かようかうが燻くべら
 れてある。経卷きやうまきは六道むじやくを行なく亡者むじやのためために六部りくぶお書かかせになったの
 である。宮みやの持経ぢきやうは六条院りくじやういんがお手てずからお書かきになつたものである。
 これを御仏みほとけへの結縁けつえんとしてせめて愛あいする者もの二人ふたりが永久えいきうに導みかれない
 希望きやうぼうが御一願文がんもんに述のべられてあつた。朝夕あすけに誦誦じゆじゆされる阿弥陀経あみだきやうは
 支那しなの紙かみではもろくていかがかと思召おほしめされ、紙屋川かみやがはの人ひとをお呼び寄よ
 せになり特とくにお渡すかせになつた紙かみへ、この春はるごろから熱心ねつしんに書かいて
 おいいでになつたこの経卷きやうまきは、片端かたはを遠とほく見みてさえ目めがくらむ氣きのさ
 れるものであつた。罫けいに引ひいた黄金くわんごんの筋すぢよりも墨すみの跡あとがはるかに輝きら
 いていた。軸しやく、表紙へいし、箱はこに用もちいられた好みこのみの優雅えいあさはことさらにい
 うまでもない。この巻まきき物ものは特とくに沈しんの木きの華足けそくの机つくえに置いて、仏像ぶつざう
 を安置あんじした帳台ちやうだいの中なかに飾かざつてあつた。堂だうの準備じゆんびができて講師かうしが座ざに
 着きき行香ぎやうかうをする若わかい殿上人てんじやうじんなどが皆みなそろつた時に、院いんもその仏間ぶつまの
 ほうへおいでになろうとして、尼宮にみやうの西にしの庇ひさしのお座敷ざしきへまずはいつ
 て御覽ごらんになると、狭せまい氣きのするこの仮かりのお居間いまの中に、暑あついほどに
 も着飾ちやくしつた女房にようぼうが五ご、六十人むそくにん集あまつていた。童女どうにようなどは北側きたがへの室むろの
 外ぐわいの縁えんにまで出でているのである。火ひ入れがたくさん出でされてあつて、
 薰香たきものをけむいほど女房にようぼうたちが煽あおぎ散ちらしているそばへ院いんはお寄よりに
 なつて、

「空だきというものは、どこで焚たいているかわからないほうが感じのいいものだよ。富士の山頂よりもっとひどく煙の立っているなどはよろしくない。説教の間は物音をさせずに静かに細かく話を聞かなければならないものだから、無遠慮むゑんりょに衣擦きぬすれや起たち居の音はなるべくたてぬようにするがいい」

などと、例の軽率な若い女房などをお教えになった。宮は人ひと気に押されておしまいになり、小さいお美しい姿をうつ伏せにしておいでになる。

「若君をここへ置かずに、どちらか遠い部へ屋へ抱いて行くがよい」

とまた院は女房へ注意をあそばされた。北側の座敷との間も今日は襖からかみ子こがはずされて御簾みす仕切りにしてあったが、そちらの室へへ女房たちを皆お入れになって、院は尼宮に今日の儀式についての心得をお教えになるのであったが、その方を可憐かれんにばかりお思われになった。昔の鴛鴦えんおうの夢の跡の仏の御座のみになっっている帳台が御簾越しにながめられるのも院を物悲しくおさせすることであった。

「こんな儀式をあなたのためにさせる日があるうなどとは予想もしなかったことですよ。これはこれとして来世の蓮はすの花の上では睦むつまじく暮らそうと期ましていてください」

と言って院はお泣きになった。

「#ここから2字下げ」

蓮葉はぢすはを同じうてなと契りおきて露の分かる今日けふぞ悲しき

「#ここで字下げ終わり」

硯すずりに筆をぬらして、香染めの宮の扇へお書きになった。宮が横へ、

「#ここから2字下げ」

隔てなく蓮はちすの宿をちぎりても君が心やすまじとすらん

「#ここで字下げ終わり」

こうお書きになると、

「そんなに私が信用していただけないのだろうか」

笑いながら院は言っておいでになるのであるが身にしむものがある御様子であった。

例のことであるが親王がたも多く参会された。六条院の夫人たちから仏前へささげられた物の数も多かった。七僧の法服とか、この法事についての重だった布施は皆紫夫人が調製させたものである。綾地あやじの法服で、袈裟けさの縫い目までが並み並みの物でないことを言つて当時の僧がほめたそうである。こんなこともむずかしいものらしい。

講師が宮の御一とんせい遁世さんびを讚美して、この世におけるすぐれた栄華をなほ盛りの日にお捨てになり、永久の縁を仏にお結びになつたということを、豊かな学才のある僧が美辞麗句をもつて言い続けるのに感動して萎しおたれる人が多かった。今日のはただ御念誦堂ごねんじやう開きとしてお催しになった法会ほっえであったが、宮中からも御寺みでらの法皇からもお使いがあつて、御誦經の布施などが下されてにわかはてに派手なものになった。初めの設けは簡単にしたように院は思召おしめしても、それは決して並み並みの物でなかつた上、宮廷の御寄進が添つたので、出席した僧たちは、置き所もない布施を得て寺へ帰つた。

御出家をあそばされた今になって宮を院がごたいせつにあそばすことは非常で、無限の御愛情が運ばれていると見えた。御寺の帝はみかど宮へ御分配になった邸宅へ今はもうお移りになるほうが世間体もよいとお勧めになるのであったが、六条院は、

「遠くなつては始終お目にかかることもできないので困ります。毎日お逢いしてお話ができたり、あなたの用を聞いたりすることができなくなつては、私の期していたことが皆一画餅がへいになつてしまふ。そういつても私に残された命はもう何ほどでもないのでしょうが、生きている間はせめてその志だけでも尽くさせてください」

とお言いになつて賛成をあそばさないのである。院はまたそのほうの邸宅もきれいに修繕させてお置きになつて、宮が官から給されておいでになる収入や、御私有の莊園や牧から上がつて来る物の中でも、貯蔵しておく価値のある物は皆その三条の宮の倉庫くらへ納めさせてお置きになつた。新しい倉庫の建て増しまでおさせになつて、それへは法皇がこの宮へ無数に御分配になつた貴重品の今まで六条院にあつたのを移してお蔵しまわせになつた。これは永久に宮の御家を経済的に保証する価値ある財産というべきものである。そして六条院における宮の御生活とおおぜいの女房、男女の召使に要する費用は院の御負担とお決めになつたのである。

秋になつて院は尼宮のお住居すまいの西の渡殿わたどのの前の中の塀へいから東の庭を草原にお作らせになつた。關伽柵あかだななどをそのほうへお作らせになつたのが優美に見える。宮の御出家のお供をして乳母めのとそのほかの老いた女たちは必然的に尼になつたが、若盛りの人でも、他日動揺する恐れのない、信念の堅そうな人たちだけを御弟子にされることになり、われもわれもと希望する者の多いのを、院がお聞きになつて、

「群衆心理で今はその気になっているでしょうが、それをお許しになつてはいけませんよ。不純な者が少しでも混じつていては他の者の迷惑になりますよ」

と御忠告になり、全部の中から十幾人だけが尼姿で待することに なつた。今度の草原に院は虫をお放ちになつて、夕風が少し涼しくなるころに宮の所へおいでになり、虫の音を愛しておいでになるふうでしきりに宮を誘惑しようとしておいでになつた。今さらそうした行ないはあるまじいことであると、宮はただ恐ろしがつておいでになつた。人目には以前と変わらぬようにあそばしながら、あの秘密をお知りになつてからは、汚れたものとして嫌悪をお続けになつた自分の肉体を悲しむ心が出家のおもな動機になり、尼になつた時からはいつさいの愛欲を忘れることができ、静かな平和な心を樂しんでいる自分に、またこうしたことを求められるのは苦しいことであると宮はお思いになり、六条院でない所へ住み移りたくおなりになるのであつたが、これをはきはきと云つておしまいになることもできぬ弱い御性質であつた。

十五夜の月がまだ上がらない夕方に、宮が仏間の縁に近い所で念誦をしておいでになると、外では若い尼たち二、三人が花をお供えする用意をしていて、闕伽の器具を扱う音と水の音をたてていた。青春の夢とこれとはあまりに離れ過ぎたことと見えて哀れな時に、院がおいでになつた。

「むやみに虫が鳴きますね」

こう言いながら座敷へおはいりになつた院は御自身でも微音に阿弥陀の大誦をお唱えになるのがほのぼのと尊く外へ洩れた。院のお

言葉のように、多くの虫が鳴きたてているのであったが、その時に新しく鳴き出した鈴虫の声がことにはなやかに聞かれた。

「秋鳴く虫には皆それぞれ別なよさがあったても、その中で松虫が最もすぐれているとお言いになって、中宮ちゅうぐうが遠くの野原へまで捜しにおやりになってお放ちになりましたが、それだけの効果はないようですよ。なぜと言え、持って来ても長くは野にいた調子には鳴いていないのですからね。名は松虫だが命の短い虫なのでしょう。人が聞かない奥山とか、遠い野の松原とかいう所では思うぞんぶんに鳴いていて、人の庭ではよく鳴かない意地悪なところのある虫だとも言えますね。鈴虫はそんなことがなくて愛嬌あいせうのある虫だからかわいく思われますよ」

などと院はお言いになるのを聞いておいでになった宮が、

「#ここから2字下げ」

大かたの秋をば憂うれしと知りにしを振り捨てがたき鈴虫の声

「#ここで字下げ終わり」

と低い声でお言いになった。非常に艶えんで若々しくお品がよい。
 「何ですって、あなたに恨ませるようなことはなかったはずだ」と院はお言いになり、

「#ここから2字下げ」

心もて草の宿りを厭いとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ

「#ここで字下げ終わり」

ともおささやきになった。琴をお出させになつて珍しく院はお弾きになつた。宮は数珠すしゆを繰るのも忘れて院の琴の音を熱心に聞き入つておいでになる。月が上がつてきてはなやかな光に満ちた空も人の心にはしみじみと秋を覚えさせた。院は移り変わることのすみやかな人生を寂しく思い続けておいでになつて平生よりも深く身にしむ音をかき立てておいでになつた。毎年毎年の例のように今夜は音楽の遊びがあるであろうとお思いになつて、兵部卿ひょうぶきやうの宮が来訪された。左大将も若い音楽に興味を持つ人々を伴つて参院したのであるが、こちらの御殿で琴の音のするのを聞いて出て来た。

「退屈でね、わざとする会合というほどのことになしに、しばらく聞かれなかつた音楽を人が来て聞かせてくれないだらうかと思つて、誘い出すことが可能かどうかと、まず一人で始めていたのを、よく聞きつけて来てもらえたね」

と院はお言いになつた。宮のお席もこちらへ作らせてお招じになつた。今夜は御所で月見の宴のあるはずであつたのが、中止になつて寂しがつていた人たちが、六条院へだれかれが集まつていると聞いて、あとからも来るのであつた。虫の声の批評をしたあとで、音楽の合奏があつておもしろい夜になつた。

「月をながめる夜というものにいつでも寂しくないことはないものだが、この中秋の月に向かつていると、この世以外の世界のことまでもいろいろと思われる。亡なくなつた衛門督えもんのかみはどんな場合にも思ひ出される人だが、ことに何の芸術にも造詣ぞうけいが深かつたから、こうした会合にあの人を欠くのはものものにおいがこの世になくなつた気がしますね」

とお言いになつた院は、御自身の音楽からも愁うれいが催されるふう

で涙をこぼしておいでになるのである。御簾みすの中で女三にょさんの宮みやが今の言葉に耳をおとめになつたであろうかと片心かたこころにはお思いになりながらもそうであつた。こんな音楽の遊びをする夜などに最も多くだれからも忍ばれる衛門督であつた。帝も御遊ぎょゆうのたびに故人を恋しく思召されるのであつた。

「今夜は鈴虫の宴で明かそう」

こう六条院は言つておいでになつた。杯が二回ほどめぐつた時に、冷泉院れいぜいから御使みつかいが来た。宮中の御遊がないことになつたのを残念がつて、左大弁、式部大輔しきぶのたゆうその他の人々が院へ伺候したのであつて、左大将などは六条院に侍しているとお聞きになつた院からの御消息には、

「#ここから2字下げ」

雲の上をかけはなれたる住家すみかにも物忘れせぬ秋の夜の月

「#ここで字下げ終わり」

「#ここから1字下げ」

「おなじくは」(あたら夜の月と花とを同じくは心知られん人に見せばや)

「#ここで字下げ終わり」

とあつた。

「自分はたいそうにせずともよい身分でいて、閑散な御境遇でいらつしやる院の御一機嫌きげんを伺い上がることをあまりしない私の怠情を、お忍びのあまりになつてくださつたお手紙だからおそれおおい」

と六条院はお言いになって、にわかなことではあるが冷泉院へ参られることになった。

「#ここから2字下げ」

月影は同じ雲井に見えながらわが宿からの秋ぞ変はれる

「#ここで字下げ終わり」

このお歌は文学的の価値はともかくも、冷泉院の御在位当時と今日とお思い比べになって、寂しくお思いになる六条院の御実感と見えた。御使いは杯を賜わり、御一纏頭てんとうをいただいた。

参っていた人々の車を出て行く順序どおりに直したり、そちらこちらの前駆を勤める人たちが門内を右往左往するので、静かであった音楽の夜も乱れてしまった。六条院のお車に兵部卿の宮も御同乗になった。左大将、左衛門督さえもんのかみ、藤参議とうさんぎなどという人たちも皆お供をして出た。皆軽い直衣姿のうしであったのが下襲したかさねを加えて院参をするのであった。月がやや高くなって美しくふけた夜に、若い殿上人などに、わざとらしくなく笛をお吹かせになって、微行の御外出をされるのである。威儀の必要な時には正しく備うべきを備えて御往復になるのであるが、今夜は昔の源氏の大官のお気持ちで突然にお訪ねになったのであるから、冷泉院は非常にお喜びになった。御一美貌うの整いきった冷泉院と、六条院はいよいよ別のものとはお見えにならなかった。まだ盛りの御年齢で御自発的に御位みくらいをお退のきになった君に六条院は悲しみを覚えておいでになった。この夜でできた詩歌は皆非常におもしろかったが、片端だけを例の至らぬ筆者が写しておくのもやましい気がしてすべてを省くことにした。明け方にそれ

らの作が講ぜられて、人々は早朝に院から退出した。

六条院は中宮のお住居すまいのほうへおいでになってしばらくお話しに
なつた。

「ただ今はこうして御閑散なのですから、始終お伺いして、何とい
うこともありませんが年のいくのとさかさまにますます濃くなる昔
の思い出についてお話し、承りもしたいのを果たすことがなかな
か困難です。出家をしたのでもなし、俗人でもないような身の上で、
行動の窮屈な点があります。どちらにも私よりあとに志を起こして
先へ進まれる求道者が多いのですから心細くて、思いきつて田舎いなかの
寺へはいることにしようかともいよいよ近ごろは思われるのですが、
あとの家族たちに関心をお持ちくださるようには以前からもお頼み
していることですが、その時になりましたら憐あわれみをお垂たれになつて
ください」

などと六条院はまじめな御様子でお語りになった。今も若々しく
おおよくな調子で、中宮は、

「宮中住まいをしておりましたころよりも、お目にかかります機会
がだんだん少なくなつてまいりますことも、予期せぬことござい
ましたから寂しゅうございましてね。皆様が御出家をあそばすこの
世というものから私も離れてしまいたい望みを持っておりますこと
につきましても、御相談が申し上げたくてそしてそれができないの
でございますわ。昔からどんなことにもお力になつていただきつけ
て、独立心がなくなつていたのでございましょうね。御意見を伺わ
ないでは何もできません私は」

と云つておいでになつた。

「そうですね。宮中にいらっしやるころは年に幾度かの御実家帰り

を楽しんでお待ち受けすることができたのですがね。ただ今では形式どおりのお暇をお取りになって御実家住まいをなさることのおできにならなくなりましたのもごもつともです。もうお上とお后と申すより一家の御夫婦のようなものですからね。ただ今のお話ですが、さして厭世的になる理由のない人が断然この世の中を捨てることは至難なことでしょう。われわれでさえやはりいよいよといえれば絆になることが多いのですからね。人一真似の御道心はかえって誤解を招くことになりますから、断じてそれはいけません」

と院がおとめになるのを、宮は深く自分の心が汲んでももらえないからであろうと恨めしく思召した。母君の御息所の霊が宙宇にさまよって、どんな苦しみを経験しておいになることかとは中宮の夢寐にもお忘れになれないことで、今も人に故人を憎悪させるばかりである名のりを物怪が出てするということも六条院はあくまでも秘密にしておいになつたが、自然に人が噂をしてお耳にはいつてからは、非常に母君を悲しく思召して、人生そのものまでがいとわしくおなりになって、仮にもせよ御息所の物怪が言ったという言葉を六条院からお聞きになりたいのであるが、正面から言うことはおできにならないで、

「お母様の靈魂が罪の深いふうに苦しんでおいでになりますことを私はほかから話に聞きました、それは確かでなくとも想像いたされることなのでございましたが、ただお死に別れましたことだけを悲しんでおりまして、後世のことまでも幼稚な心の私は考えませんでしたのが悪いことございました。気がついてみますと、宗教のほうの人にくわしい説明もしていただきたくなりましたし、私の力で及ぶだけの罪の炎をお消ししてお救いもしたいという望みも起こ

ってまいったのでございます」

などとかすめたふうにしてお語りになるのであった。そういう御決心のできるのもごもつともであると哀れに院はお思いになって、「災ののがれたいのを知りながら、愛欲の念をだれも捨てることのできないものなのです。目蓮もくれんが仏に近いほどの高僧になっていたために、すぐに母を地獄から救い出すこともできたのでしようが、その真似まねはおできにならないで、しかも御自身のはなやかな人間としての生活をしいて断ち切っておしまになることも、知らず知らず煩惱ぼんのうを作る結果になるではありませんか。急がずにその道を御研究になることになさいまして、そのほかの方法で故人の妄執もうしゅうを晴らさせておあげになることをなさるべきです。私自身もそれを十分にしてお上げたい心を持っておりながら、ほかのことが多いものですから、そのうち私が本意を達する日が来れば、静かに私自身の手で冥福めいふくをお祈りしようと予定しているのですが、これも中途はんぱ一半端な心でしようね」

などとお言いになって、人生のはかなさ、いとわしさをお語り合いいになっているのであるが、まだどちらもお出家するには御縁が遠いような盛りのお姿と見えた。

昨夜は微行の御参院であったが、今朝けさはもう表だつて準太上天皇の儀式をお用いになるほかはなくて、院に参っていた高官たちは皆一供奉くぶがをして六条院をお送り申すのであった。

院は東宮の御母君の女御にょごが御教育のかいに見える幸福な女性になっていることも、だれよりもすぐれた左大将の存在もうれしく思つておいでになるのであるが、その二人にお持ちになる愛は冷泉院をお思いになる愛の片端にも価あたいしないのである。冷泉院も常に恋しく

思召しながらたやすく御会合のおできにならないことを物足らぬことに思召してただ今の御境遇を早くお選びにもなったのである。中宮は御実家へお帰りになることが以前よりもむずかしくおなりになって、普通の家の夫婦のようにいつもごいっしょにお暮らしになり、お催し事などは昔よりはなやかなふうにあそばされて、どの点から申しても御幸福なのであるが、母君の御息所みやすどころのこのために専心信仰の道へ進みたいと願いもあそばされるのであったが、だれも御同意にならぬことであつたから、せめて功德を作ることなで亡き靈を弔ほけきょういたいというお考えになつて、以前にもまして善根をつもうと精進あそばされた。六条院も中宮のお志をお助けになつて、法華經の八講を近日行なわせられるそうである。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www>

.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

夕霧一

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）出づるころ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）一条一第を

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」つま戸より清き男の出づるころ後夜の

「#地から3字上げ」律師のまう上るころ （晶子）

一人の夫人の忠実な良人という評判があつて、品行方正を標榜していた源左大将であつたが、今は女二の宮に心を惹かれる人になつて、世間体は故人への友情を忘れないふうに作りながら、引き続き一条一第をお訪ねすることをしていた。しかもこの状態から一歩

を進めないではおかない覚悟が月日とともに堅くなつていった。一条の御息所みやすどころも珍しい至誠の人であると、近ごろになつてますます来訪者が少なく、寂さびれてゆく邸やしきへしばしば足を運ぶ大将によつて慰められていたことが多いのであつた。初めから求婚者として現われなかつた自分が、急に変わった態度に出るのはきまりが悪い、ただ真心で尽くしているところをお認めになつたなら、自然に宮のお心は自分へ向いてくるに違いないから時を待とうと、こう大将は思つて一日も早く宮と御接近する機会を得たいとうかがい歩いているのである。宮が御自身でお話をあそばすようなことはまだ絶対がない。いつか好機会をとらえて自分の持つ熱情を直接にお告げすることも、御様子もよく見たいと大将は心に願つていた。

御息所は物怪もののけで重く煩わづらつて小野という叡山えいざんの麓ふもとへ近い村にある別荘へ病床を移すようになった。以前から祈きとう禱を頼みつけていて、物怪を追い払うのに得意な律師が叡山の寺にこもつていて、京へは当分出ない誓いを御仏みほとけにしたというのを招くのに都合がよかつたからである。その日の幾つかの車とか前駆の人たちとかは皆大将からよこされた。かえつて柏木かしわぎの弟たちなどは自身のせわしさに紛れてか、そうした気はつかないふうであつた。左大将は兄の未亡人の宮を得たい心でそれとなく申し込んだ時に、もつてのほかであるというよくな強い拒絶的な態度をとられて以来、羞恥心しゆうしちから出入りもしなくなつていたのである。それに比べて大将は非常に上手な方法をとつたものといわねばならない。

修法をさせていると聞いて大将は僧たちへ出す布施や浄衣の類までも細かに気をつけて山荘へ贈つたのであつた。その際病人の御息所は返事を書くべくもない容体であつたし、女房から挨拶あいさつ書きなど

を出しておいては、先方の好意が徹底しなかつたものようにお思
いになるであろうし、宮様がお高ぶりになりすぎるようにもお思わ
れになるであろうからと女房らがお願いしたために、宮が引き受け
て礼状をお書きになった。美しい字のおおような短いお手紙ではあ
るが、なつかしい味のあるものであつたから、いよいよ大将の心は
傾いて、それ以後たびたびお手紙を差し上げるようになった。結局
自分の疑いは疑いでなくなつてゆきそうであると、雲井くもいの雁夫人かりが
早くも観察していることにはばかられて、大将は小野の山荘を訪ね
たく思いながらも実行をしかねていた。

八月の二十日ごろで、野のながめも面白いころなのであるから、
山荘住まいをしておいでになる恋人を大将はお訪ねしたい心がしき
りに動いて、

「珍しく山から下つていられる某律師にぜひ逢あつて相談をしなけれ
ばならぬことがあつたし、御病気の御息所の別荘へお見舞いもしが
てらに小野へ行こうと思う」

と何げなく言つて大将は邸やしきを出た。前駆もたいそうにはせず親し
い者五、六人を狩衣姿かりぎぬにさせて大将は伴つたのである。たいして山
深くはいる所ではないが、松が崎さきの峰の色なども奥山ではないが、
紅葉もみじをしていて、技巧を尽くした都の貴族の庭園などよりも美しい
秋を見せていた。そこは簡単な小柴垣こしばがきなども雅致のあるふうにめぐ
らせて、仮居ではあるが品よく住みなされた山荘であつた。寝殿と
もいうべき中央の建物の東の座敷のほうに祈祷の壇はできていて、
北側の座敷が御息所の病室となつているために、西向きの座敷に宮
はおいでになつた。物怪を恐れて御息所は宮を京の邸へおとどめし
ておこうとしたのであるが、どうしてもいっしょにいたいといつて

おいでになった宮を、物怪のほかへ散るのを恐れて少しの隔てではあるが病室へはお近づけ申し上げないのである。客を通す座敷がないために、宮のおいでになる室とは御簾みすで隔てになった西の縁側に ついた座敷へ大将を入れて、上級の女房らしい人たちが御息所との話の取り次ぎに出て来た。

「まことにもつたいなく存じます。御親切にたびたびお尋ねくださいました上に、御自身でまたお見舞いくださいますあなた様に対して、もう亡なくなってしまいましたれば自分でお礼を申し上げることができないと考えますことで、もう少し生きようといたします努力をしますことになりました」

これが御息所からの挨拶あいさつである。

「こちらへお移りになります日に、私もお送りをさせていたただきたかったのですが、あやにく六条院の御用の残ったものがありましたものですから失礼をいたしました。その以後も何かと忙しいことがあつたものですから、お案じいたしております心だけのことのできておらないのを、不本意に心苦しく存じております」

などと大将は取り次がせている。奥のほうに静かにして宮はおいでになるのであるが、簡単な山荘のことであるから、奥といつても深いことはないのであつて、若い内親王様がそこにおいでになる気配けいはよく大将にわかるのである。柔らかに身じろぎなどをあそばす衣擦きぬずれの音によつて、宮のおすわりになつたあたりが想像された。

魂はそこへ行つてしまつたよううつろな気になりながら、御息所の病室とここを通う取り次ぎの女房の往復の暇どる間を、これまでから話し相手にする少将とかそのほかの宮の女房とかを相手にして大将は語っているのであつた。

「宮様のほうへ何うようになりましてから、もう何年と年で数えなければならぬほどになります。まだきわめてよそよそしいお取り扱いを受けておりますこと、恨めしい気がしますよ。こうした御簾みすの前で、人づてのお言葉をほのかに承りうるだけではありませんか。私はまだこんな冷たい御待遇というものを知りませんよ。どんなに古風な気のきかない男に皆さんは私を思っておられるだろうと恥ずかしく思います。青年で気楽な位置にありましたところから、続いて恋愛を生活の一部にして来ていますれば、こんなに不器用な恋の悩みをしないで済んだらうと思います。私のように長く心の病気をなさえている人はないでしょう」

大將はこの言葉のとおりにもう軽々しい多情多感な青年ではない重々しい風采ふうさいを備えているのであるから、その人の切り出して言ったことがこれであるのを、女房たちはこんなことになるかともかねてあやぶんでいたと、途方に暮れた気がするのであった。

「私が拙ますい御一挨拶あいさつなどをしてはかえっていけませんから、あなたが」

こんなことを皆ひそかに言い合っていて、

「あんなにもお言いになります方に、あまり無関心らしくあそばさないほうがよろしゅうございましょう。何とかおっしゃってくださいませ」

と宮へ申し上げると、

「病人が自身でお話を申し上げることできませんような失礼な際に、私でも代わりをいたしましてお逢い申し上げたいのでございますが、病人が一時非常に悪うございましたために、私までも健康を害しまして、それでよんどころなく」

こうお取り次がせになった。

「それは宮様のお言葉ですか」

と大將は居ずまいを正した。

「御息所の御容体を、私自身の病などと比較にもなりませんほどお案じいたしておりますのも何の理由からでございますでしょう。もったいない話ではございますが、御一憂鬱ゆううつな御気分が朗らかになられますまで、あの方様が御健康でおいでくださいますことは願わしいことだと存じ上げるからでございます。あの方様へお尽くしいたすだけのものとして、私のあなた様へ持ちます真心をお認めくださいますせんことはお恨めしいことでございます」

と大將は言う。

「ごもつともでございます」

と女房らが言う。

日は落ちて行く刻で、空も身にしむ色に霧が包んでいて、山の蔭かげはもう小暗おくらい気のする庭にはしきりに蝸こひびが鳴き、垣根かきねの撫子なでしこが風に動く色も趣多く見えた。植え込みの灌木かんぼくや草の花が乱れほうだいになつた中を行く水の音がかすかに涼しい。一方では凄すしいほどに山おろしが松の梢こずえを鳴らしていたりなどして、不断経の僧の交替の時間が来て鐘を打つと、終わって立つ僧の唱える声と、新しい手代わりの僧の声とがいつしよになって、一時に高く経声の起こるのも尊い感じのすることであった。所が所だけにすべてのことが人に心細さを思わせるのであったから、恋する大將の物思わしさはつのるばかりであった。帰る気などには少しもなれない。律師が加持をする音がして、陀羅尼経だらにを鑄さびた声で読み出した。御息所の病苦が加わつたふうであると言って、女房たちはおおかたそのほうへ行っていて、

もとから療養の場所で全部をつれて来ておいでになるのでない女房が、宮のおそばに侍しているのは少なく、宮は寂しく物思いをあそばされるふうであった。非常に静かなこんな時に自分の心もお告げすべきであると大將が思っていると、外では霧が軒にまで迫ってきた。

「私の帰る道も見えなくなってゆきますようなこんな時に、どうすればいいのでしょうか」

と大將は言つて、

「#ここから2字下げ」

山里の哀れを添ふる夕霧に立ち出でんそらもなきこちして

「#ここで字下げ終わり」

と申し上げると、

「#ここから2字下げ」

山がつの籬まがきをこめて立つ霧も心空なる人はとどめず

「#ここで字下げ終わり」

こうほのかにお答えになる優美な宮の御様子がうれしく思われて、大將はいよいよ帰ることを忘れてしまった。

「どうすることもできません。道はわからなくなってしまいましたし、こちらはお追い立てになる。だれも経験することを少しも経験せずに始めようとする者は、すぐこうした目にあいます」

などと言つて、もうここに落ち着くふうを見せ、忍び余る心もほ

のめかしてお話しする大将を、宮は今までからもその気持ちを全然お知りにならないのでもなかったが、気づかぬふうをしておいでになったのを、あらわに言葉にして言うのをお聞きになつては、ただ困つたこととお思われになつて、いつそのものを多くお言いにならぬことになつたのを、大将は歎息たんそくしていて、心の中ではこんな機会はまたとあるわけもない、思い切つたことは今でなければ実行が不可能になろうとみずからを励ましていた。同情のない軽率な人間であるとお思われしてもしかたがない、せめて長く秘めてきた苦しい思いだけでもおささやきしたいと思つた大将は、従者を呼ぶと、もとは右近衛府うこんえふの将監しょうげんであつて、五位になつた男が出て来た。大将は近く招いて、

「こちらへ来ておられる律師にぜひ逢あつて話すことがあるのだが、御病人の護身の法などをしておられて疲れておられる律師は休息もしなければならぬことと思うから、私はこちらで泊まつて、初夜のお勤めを終わられたところに律師のいるほうへ行こうと思う。二、三人だけはこの山荘しやんじやうのほうへ人を残しておいて、そのほか隨身などの者は栗栖野くるすのの荘しやうが近いはずだから、そのほうへ皆やつて、馬まに糶まをやりたりさせることにして、ここで騒がしく人声などは立てさせぬようにしてくれ。こんな外泊は人の中傷の種になるのだから気をつけてくれるように」

と命じた。訳のあることに相違ないと思つてその男は去つた。それから大将は女房に、

「道もわからなくなりましたからここでごやつかいになりましたよ、かないますならこの御簾みすの前を拝借させてください。阿闍梨あじやりの御用が済むまでです」

と落ち着いたふうで言うのであった。これまではこんなに長居をしたこともなく、浮薄な言葉も出した人ではなかったのに、困ったことであると宮はお思いになったが、わざとがましく隣室へ行ってしまうことも体裁のよいものでないような気があそばされるので、ただ音をたてぬようにしてそのままおいでになると、思ったことを吐露し始めた大將は、お心の動くまでというように、いろいろと言葉を尽くすのであったが、宮へお取り次ぎにいざり入る人の後ろからそつと御簾をくぐつて来た。夕霧が盛んに家の中へ流れ込むころで、座敷の中が暗くなっているのである。その女房は驚いて後ろを見返ったが、宮は恐ろしくおなりになって、北側の襖子の外へいざつて出ようとあそばされたのを、大將は巧みに追いついて手でお引きとめした。もうお身体は隣の間へはいつていたのであるが、お召し物の裾がまだこちらに引かれていたのである。襖子は隣の室の外から鍵のかかるようにはなっていないために、それをおしめになつたまま、水のように宮は慄えておいでになった。女房たちも呆然としていていかにすべきであるかを知らない。こちらの室には鍵があつても、この場合をどうすればよいかに皆当惑したのである。無理やりに荒々しく手を宮のお召し物から引き放させるようなこともできる相手ではなかった。

「御尊敬申し上げておりますあなた様がこんなことをなさいますとは思ひもよらぬことでございます」

と言つて、泣かんばかりに退去を頼むのであるが、「これほどの近さでお話を申し上げますようとするのを、なぜあなたがたは不思議になさるのでしょう。つまり私ですが、真心をお見せすることになつて長い年月も重なっているはずです」

と女房らに答えてから、大將は優美な落ち着きを失わずに、美しいこの恋を成り立たせなければならぬことを宮へお説きするのであった。宮は御同意をあそばすべくもない。こんな侮辱までも忍ばねばならぬかというお気持ちばかりが湧き上がるのであるから何を言うこともおできにならない。

「あまりに少女らしいではありませんか。思い余る心から、しいてここまで参ってしまったことは失礼に違いございませんが、これ以上のことをお許しがなくなってしまうとは存じておりません。この恋に私はどれだけ煩悶に煩悶を重ねてきたでしょう。私が隠しておりましたも自然お目にとまっていますはずなのですが、しいて冷たくお扱いになるものですから、私としてはこのほかにいたしようがないではございませんか。思いやりのない行動として御反感をお招きしても、片思いの苦しさだけは聞いていただきたいと思います。それだけです。御冷淡な御様子はお恨めしく思いますが、もったいないあなた様なのですから、決して、決して」

と言つて、大將はしいて同情深いふうを見せていた。あるところまでよりしまらぬ襖子を宮がおさえておいでになるのは、これほど薄弱な防禦もないわけなのであるが、それをしいてあげようとも大將はしないのである。

「これだけで私の熱情が拒めると思召すのが気の毒ですよ」

と笑っていたが、やがておそばへ近づいた。しかも御意志を尊重して無理はあえてできない大將であった。宮はなつかしい、柔らかなみのある、貴女らしい艶なところを十分に備えておいでになった。

続いてあそばされたお物思いのせいかほっそりと痩せておいでになるのが、お召し物越しに接触している大將によく感ぜられるのであ

る。しめやかな薫香くんこうの匂においに深く包まれておいでになることも、柔らかに大将の官能を刺激しげきする、きわめて上品な可憐かれんさのある方であった。

吹く風が人を心細くさせる山の夜ふけになり、虫の声も鹿しかの啼なくのも滝の音も入り混じって艶えんな気分をつくるのであるから、ただあさはかな人間でも秋の哀れ、山の哀れに目をさまして身にしむ思いを知るであろうと思われる山荘に、格子もおろさぬままで落ち方になつた月のさし入る光も大将の心に悲しみを覚えさせた。

「まだ私の心持ちを御理解くださらないのを拝見しますと、私はかえつてあなた様に失望いたしますよ。こんなに愚かしいまでに自己を抑制することのできる男はほかにないだろうと思うのですが、御信用くださらないのですか。何をいたしても責任感を持たぬ種類の男には、私のようなのをばかな態度だとして、直ちに同情もなく力で解決をはかってしまうのです。あまりに私の恋の価値を軽く御覧になりますから、知らず知らず私も危険性がはぐくまれてゆく気がいたします。男性とはどんなものを過去にまだご存じでなかったあなた様でもないでしょう」

こう責められておいでになる宮は、どう返辞をしてよいかと苦しく思つておいでになる。もう処女でないからということ言葉をほのめかされるのを残念に宮はお思いになつた。薄命とは自分のような女性をいうのであろうともお悲しまれになつて、大将のいどんで来るのを死ぬほど苦しく思召された。

「私のこれまでの運命はどんなにまずいものでございまして、それだからといって、これを肯定しなければならぬとは思われない」

と、ほのかに可憐な泣き声をお立てになって、

「#ここから2字下げ」

われのみや浮き世を知れるためしにて濡れ添ぬふ袖そでの名を朽くたすべき

「#ここで字下げ終わり」

ほかへお言いになるともなくお言いになったのを、大將がさらに自身の口にのせて歌うのさえ宮は苦痛にお思いになった。

「誤解をお受けしやすいようなことを私が申したものですから」
などと言つて、微笑するふうで、

「#ここから1字下げ」

「おほかたはわが濡れ衣をきせずとも朽ちにし袖の名やは隠るる

「#ここで字下げ終わり」

もうしかたがないと思召してくだすつたらどうですか」

こう言つて、月の光のあるほうへいつしよに出ようと大將はお勧めするのであるが、宮はじつと冷淡にしておいでになるのを、大將はぞうさなくお引き寄せして、

「安価な恋愛でなく、最も高い清い恋をする私であることをお認めになつて、御安心なすつてください。お許しなしに決して、無謀なことはいたしません」

こうきっぱりとしたことを大將が言っているうちに明け方に近くもなつた。澄み切つた月の、霧にも紛れぬ光がさし込んできた。短い底ひもとの山莊やまぢやうの軒は空をたくさんに座敷へ入れて、月の顔と向かい合

っているようなのが恥ずかしくて、その光から隠れるように紛らしておいでになる宮の御様子が非常に艶えんであった。故人の話も少ししだして、閑雅な態度で大将は語っているのであった。しかもその中で故人に対してよりも劣ったお取り扱いを恨めしがった。宮のお心の中でも、故人はこの人に比べて低い地位にいた人であるが、院も御息所みやすじころも御同意のもとでお嫁とつがせになつて自分はその人の妻になつたのである、その良人おとこすら自分に対していただいていた愛はいささかなものであつた、ましてこうしてあるまじい恋に墮おちては、しかも知らぬ中でなく、故人の妹を妻に持つこの人との名が立つては、太政大臣家ではどう自分を不快に思うことであろう、世間で譏そしられることも想像されるが、それよりも院がお聞きになつてどう思召すであろう、必ずお悲しみあそばすであろうなどと、切り離すことのできぬ関係の所々のことをお考えになると、このことが非常に情けなくお思われになつて、自分はやましいところもなく、大将の情人では断じてなくとも噂つひはどんなふうに立てられることが、御息所が少しも関与しておいでのならぬことが子として罪であるように思召され、こんなことをあとでお聞きになり、幼稚な心からときがたい誤解の原因を作つたとお言いになろうこともわびしく御想像あそばされる宮は、

「せめて朝までおいでにならずにお帰りなさい」

と大将をお促しになるよりほかのことはおできにならないのである。

「悲しいことですね。恋の成り立った人のように分けて出なければならぬ草葉の露に対してすら私は恥ずかしいではありませんか。ではお言葉どおりにいたしますから、私の誠意だけはおくみとりく

ださい。馬鹿正直に仰せどおりにして帰ります私に、若し、上手に
追いやってしまったのだというふうを今後お見せになることがあり
ましたなら、その時にはもう自制の力をなくして情熱のなすがまま
に自分をまかせなければならぬことと思えますよ」

大将は心残りを多く覚えるのであるが、放縦な男のような行為は、
言っているごとく過去にも経験したことがなく、またできない人で
あつて、恋人の宮のためにもおかわいそうなことであり、自分自身
の思い出にも不快さの残ることであらうなどと思つて、自他のため
に人目を避ける必要を感じ、深い霧に隠れて去つて行こうとしたが、
魂がもはや空虚になつたような気持ちであつた。

「#ここから1字下げ」

「萩原や軒端の露にそぼちつつ八重立つ霧を分けぞ行くべき

「#ここで字下げ終わり」

あなたも濡衣をお乾しになれないでしょう。それも無情に私をお
追いになつた報いとお思いになるほかはないでしょう」

と大将が言った。そのとおりである。名はどうしても立つてある
うが、自分自身をせめてやましくないものにしておきたいと思召す
心から、宮は冷ややかな態度をお示しになつて、

「#ここから1字下げ」

「わけ行かん草葉の露をかごとにてなほ濡衣をかけんとや思ふ

「#ここで字下げ終わり」

ひどい目に私をおあわせになるのですね」

と批難をあそばすのが、非常に美しいことにも、貴女らしいふうにもお見えになった。今まで古い情誼じよつぎを忘れない親切な男になりすまして、好意を見せ続けて来た態度を一変して好色漢になってしまふことが宮にお気の毒でもあり、自身にも恥ずかしいと、大將は心に燃え上がるものをおさえていたが、またあまり過ぎた謙抑けんよくは取り返しのつかぬ後悔を招くことではないかともいろいろに煩悶はんもんをしながら帰って行くのであつた。深い山里の朝露は冷たかつた。夫人がこの濡れ姿を見とがめることを恐れて大將は家へは帰らずに六条院の東の花散里夫人の住居すまいへ行つた。まだ朝霧は晴れなかつた。町でもこんなのであるから、小野の山莊の人はどんなに寂しい霧を眺めておいでになるであろうと大將は思いやつた。

「珍しくお忍び歩きをなさいましたのですよ」

と女房たちはささやいていた。

夕霧の大將はしばらく休息をしてから衣服を脱ぎかえた。平生からこの人の夏物、冬物を幾一襲かさねとなく作つて用意してある養母であつたから、香の唐櫃からびつからすぐに品々が選り出されたのである。朝の粥かゆを食べたりしたあとで夫人の居間へ夕霧ははいつて行つた。夕霧はそこから小野へ手紙をお送りした。

山莊の宮は予想もあそばさなかつた、にわかな変わった態度を男のとり出した昨夜ゆうべのことで、無礼なとも、恥を見せたともお思いになることで夕霧への御反感が強かつた。御息所の耳へはいることがあつたならと羞恥しよぢをお覚えになるのであるが、またそんなことがあつたとは少しも御息所が知らずにいて、不意に何かのことから氣のついた時に、隔て心があるように思われるのも苦しい、女房があり

のままを話すことによつて母を悲しませることがあつてもやむをえないと宮はおあきらめになるよりほかはなかつた。親子と申してもこれほど親しみ合う仲は少ない母と御子なのである。世間に噂の立つていることも親にはなお秘密にしておくことがよく昔の小説などにはあるが、宮にそれはおできになれないことであつた。女房たちは昨夜のことを御息所が片端だけ聞いてもほんとうにあやまちが起こつたことのように歎かれるのであろうから、今はまだそうした思いをさせる必要はないと相談をしていながらも、まだどの程度の關係にまで進んだのか進まなかつたのかに疑問を持っていて、今来た大将の手紙が真相を説明してくれるであらうと思う好奇心から、宮がお読みになる時に盗み見をしたいと願つていたのであるが、宮はお開きになろうともあそばされないのでに気を揉んで、

「全然御返事をあそばさないことも、たよりない御性質のように想像をなさることもございましょうし、お若々し過ぎることもございます」

などと言つて、大将の手紙を^{ひろ}拡げると、

「思いがけないことで、たとえあれだけのことにせよ男の人を接近させたことは、皆私自身の軽率から起こした過失だとは思つがね、思いやりのないことをした人を、私の憎む心がまだ直らないのだから、読まなかつたと言つてやるがいい」

と不機嫌^{ふきげん}に仰せられて宮は横になつておしまいになつた。夕霧の手紙は宮の御迷惑になるようなことを避けて書かれたものであつた。

「#ここから2字下げ」

たましひをつれなき袖にとどめおきてわが心から惑はるるかな

「#ここから1字下げ」

「ほかなるものは」（身を捨てていにやしにけん思ふよりほかなるものは心なりけり）と歌われておりますから、昔もすでに私ほど苦しんだ人があつたと思ひまして、みずからを慰めようとはいたすにもかかわらずなお魂は身に添いません。

「#ここで字下げ終わり」

こんなことが長く書かれてあるようであつたが、女房も細かに読むことは遠慮されてできないのである。事の成り立つたのちに書かれた文ではないようであるとは見ながらも、なお疑いを消してはいなかつた。女房たちは宮の御気分のすぐれぬことを歎きながら、

「昨晚のことがまだ不可解なことに思われます。非常に御親切だといふことは長い間に私どももお認めしている方ですけれど、良人という御関係におなりになつた時と、熱のある友情期間とが同じでありうるでしょうか心配ですよ」

などと言ひ、親しく宮にお仕えしている女房たちもこのことに重い関心をもつて宮のためにお案じ申し上げているのであつた。御息所はまだこのことを少しも知らずにいた。

物怪に煩つている病人は重態に見えるかと思つと、またたちまちに軽快らしくなることもあつて、平常に近い気分になつていたこの日の昼ごろに、日中の加持が終わり、律師一人だけが病床に近くいて陀羅尼經を讀んでいた。病人の苦痛のやや去つたことを律師は喜んで、祈りの終わりに、

「大日如来が嘘を仰せられたのでなければ、私が熱誠をこめて行な

う修法に効果の見えぬわけはありません。悪霊は執拗しつようであつても、それは業いごにまとわれたつまらぬ亡者やうじやではありませんか」

と太い枯れ声で言っていた。俗離れのした強い性格の律師で、突然、

「あ、左大将はいつごろから宮様の所へ通つて来ておいでになりま
すか」

と問うた。

「そんなことはありません、亡なくなられた大納言の親友でしたから、
あの方が遺言して宮様のことも頼んでお置きになったものですから、
その約束をお守りになつて、それ以来親切によく訪たずねて来てくださ
ることが、もう何年も続いています。そんなお交際つきあいの仲なのですが、
この遠い所まで私の病気を見舞いに来てくださいましたそうですね
ら、恐縮して私は聞いておりましたよ」

御息所みよすけの答えはこうであつた。

「とんでもない。私に隠しだてをなさる必要はない。今朝後夜けさごやの勤
めにこちらへ参つた時に、あちらの西の妻戸からりっぱな若い方が
出ておいでになつたのを、霧が深くて私にはよく顔が見えませんが
やつたが、弟子でしどもは左大将が帰つて行かれるのじゃ、昨夜ゆうべも車を
お返しになつてお泊まりになつたのを見たとき口に言つておしまし
た。そうだろうと私もうなずかれました。よい匂においのする方じゃか
らな。しかしこの御関係は結構なことじゃありませんなあ。あちら
がりっぱな方であることに異議はないが、しかしどうも賛成ができ
ん。子供でいられたところからあの方の御一祈きとつ禱は御祖母の宮様から
私が命ぜられていたものじゃから、今も何かといつては私に頼まれ
るのですがな、そのことはよくありませんな。奥さんの勢力が強

てしかたがない。盛んな一族が背景になっていきますからな。お子さんはもう七、八人もできているでしょう。こちらの宮様がそれにお勝ちになることはできないでしょう。また一方から言えば女という罪障の深いものに生まれて、救いのない長夜の闇に迷うのもこうした関係から生じる煩惱が原因になり、恐ろしい報いを受けることになりますからな、長い絆が付きまとわることですからな、絶対によろしくないことじゃ」

　　律師は頭を振り立てながら、興奮して乱暴なことも言うのである。

「私には腑に落ちないことですよ。そんな様子などは少しもお見せにならなかつた方ですもの、昨日は私あまり苦しんでいたものですから、しばらく休息をしてからまた話そうとお言いになって、あちらにいらつしやると女房たちは言っていました。そんなふうで夜明けまでおいでになつたのでしよう。至極まじめな堅い方をそんなふうにする人があるのはよくありません」

　　と御息所はなお不審をいまくふうを僧に見せながらも、心のうちではそんなことがあつたのかもしれない、宮を恋しくお思ひする様子はおりおり見えたが、りっぱな人格のある人は人の批難の種になるようなことは避けて、まじめな友情だけを見せていたために、危険はないものとして自分は油断をしていたが、おそばに人も少ないのを見てお居間へはいるようなこともしたのではないかと思われもした。律師が立つて行つたあとで、小少将を呼んで、こうこうしたこと聞いたとまず御息所は言った。

「ほんとうのことはどれほどのことだったのかね。なぜ私にくわしく報告してくれなかつたの。人の言うようなことは決してあるまい

とは思っていても私の心は不安でならない」

聞く御息所に気の毒な思いをしながらも、小少将は昨日のことを初めからくわしく話した。今朝の手紙の内容、宮がその時にお洩らしになった言葉なども言つて、

「ながくおさえ続けておいでになりました心を、お知らせなさろうというだけのことだったかと存じます。宮様への敬意をお失いになるようなことはございませんで、御迷惑とお考えになつて朝まではおいでになられませんか早く出てお行きになりましたのを、ほかの人はどんなふうに申し上げたのでしよう」

と、律師とは知らずに、ほかに密告した女房があつたのだと小少将は思つて言つた。御息所は何も言わずに、残念そうな表情をしていたが涙がほろほろとこぼれ出した。見ていて小少将は気の毒で、なぜありのままのことを言つたのだろう、病気の上に御息所は煩悶はんもんをして、どんなに堪えがたいことであろうと悔いた。

「襖子からかみはしめたままでございました」

などと、今になつて、少しでもよいように取りなそうと努めるのであつたが、そんなことはどうでも、なぜそんなに近くへ男の寄つて来るようなことを宮がおさせになつたかと思うと悲しい。やましいところはおありにならなくても、さつき聞いたようなことを言つて騒いでいる律師の弟子たちは、宮様のためにこれは不利であると思つて隠すようなことをするはずもない、どう人に言いわけをすればいいことかわからない、絶対にないことと打ち消すことはしなければなるまい、何にしても心の幼稚な女房ばかりがお付きしていても思ふ心を御息所は口へ出しては言えなかつた。病気が重い上に大きい衝動を受けたのであつたからこの人はいたましいほどにも苦

しんだ。神聖な方としてお守り立もてしていきたかつた宮様も、世間の女並みに浮き名を立てられておしまいになることがもつてのほかに思われてならなかつた。

「今日のような私の気分の少しよい間に、宮様がこちらへおいでくださるように申し上げなさい。あちらへ伺うはずだけれど動けそうではないのだからね。ずいぶんながくお目にかからない気がする」
御息所は目に涙を浮かべてこう言っているのであつた。

小少将は宮のお居間へ帰つて、御息所の最後の言葉だけをお伝えした。宮は母君の所へ行こうとあそばされて、額髪の涙でかたまつたのお直しになり、お召し物の綻ほころんでいた単衣ひとえをお着かえになつても、お氣が進まないでじつとすわつておいでになるのであつた。

この女房たちもどう自分を見ているのであるう、御息所も今は何もお知りにならないで、あとで少しでも昨夜のことをお聞きになることがあつたなら、素知らぬ顔をしていたと今日の自分が思われることであろうとお考えになると、非常に恥はずかしくおなりになり、宮はまた横になつておしまいになつて、

「私はどうも氣分がよくない。このまま病氣になつて死んでしまうのはいいことだけれどね、脚あしからのほせ上がつてきたようだから」とお言いになり、宮は脚をお揉もませになつた。あまり物思いをあそばすためにおのぼせになつたのである。

「御息所に昨晚のことをほめかしてお話しした人があつたのでございませよ。ほんとうのことが聞きたいとお言いになるものでございますから、正直にお話ししたいしましたが、お襖からかみ子のことだけは少し誇張をいたしまして、しまいまで皆はあいたのでないように申し上げておきましたから、もしくわしいお話を聞こうとなさいました

ら、私のと同じようにおっしゃってくださいまし」

こう小少将が言った。御息所が悲しんでいることは申さない。宮はそれでお呼びになったのであると、いつそう侘しい気におなりになり、何も仰せられなかったが、お枕まくらから雲しずくが落ちていた。この問題だけではなく、自分の意志でなくした結婚からこの方、母に物思いばかりをさせる自分であると、宮は子としてのかいのないことを悲しんでおいでになって、あの大将もこのままで心をひるがえすことはせずに、いろいろと自分を苦しめるであろうことが煩わしい、それについて立つ噂うわさもあると御一煩悶はんもんをあそばした。弁明することのできない弱い女の自分は、無根のことでどんなに悪名をきせられることになるのであろうと、穢けがれのない自信は持つておいでになるのであるが、皇女に生まれた者があれほど異性と近くいて夜の何時間かを過ごしたというようなことはありうることでなく、あつてよいわけのものでもないとお思になることで、御自身の運命が悲しまれになり、憂鬱ゆううつにされておいでになったが、夕方にまた、

「ぜひおいでなさいますように」

と、御息所のほうから言つて来たので、間にある座敷倉の戸を、向こうとこちらと両方であけて宮は御息所の東の病室へおいでになった。

病苦がありながらも御息所はうやうやしく宮をお取り扱いました。

平生の作法どおりに起き上がつてもいた。

「だらしなくいたしているのでございますから、お迎えいたしますことも心が引けてなりません。ただ二、三日だけお目にかからなかつたのでございますのを、何年もお逢あいすることのできなかつたほど寂しく思われますのも味気ないことでございます。親子の縁では

未来で必然的にお逢いできますともきまらないのでございますからね。もう一度生まれてまいりましてもだめなのでございますのに、考えますれば瞬間で永遠の別れになりますわねわねがあまりに愛し過ぎて暮らしましたのが、後悔いたされませう」

などと、御息所は泣くのであった。宮もいろいろなお心にあってお悲しい時で、何もお言いになることができずに、ただ母君の顔をながめておいでになった。非常にお内気で思うことをはきはきとお告げになることもおできにならずに、恥ずかしいお様子ばかりのお見えになるのがおかわいそうで、御息所は昨日のことをお尋ねすることもできない。灯を早くつけさせてお夕食などもこちらで差し上げさせることに御息所はした。今朝から何も召し上がらないことを御息所は聞いて、ある物は自身で料理をし変えさせることを命じまでしてお勧めするのであるが、宮は御一箸をお触れになる気にもおなりになれなかつた。ただ母君の容体がよさそうである点だけで少しの慰めを得ておいでになった。

夕霧の大将からまた手紙が来た。事情を知らない女房が使いから受け取って、

「大将さんから少将さんというお手紙がまいりました」

と、この座敷で披露したことは、宮のお心をさらに苦しくさせたことであつた。少将はすぐにそれを手もとへ取ってしまった。

「どんなお手紙」

と、今までそのことに一言も触れなかつた御息所も問うた。反抗的になつていた御息所の心も、何時間かのうちに弱くなり、人知れず大将の今夜の来訪を待っていたのであるから、手紙が来るのは自身で来ぬことであろうと胸が騒いだのである。

「およこしになった手紙のお返事はなさいまし、しかたがございません。一度立てた名を取り消すような評判はだれがしてくれまじょう。きれいな御自信はおありになつても、だれがそれを認めてくれまじょう。素直にお返事もあそばして、冷淡になさらないほうよろしゅうございます。わがままな性格だと思われてはなりません」と宮に申し上げて、御息所みやすどしろうは手紙を少将から受け取るうとした。少将は心に当惑をしながらも渡すよりほかはなかった。

「#ここから1字下げ」

冷やかなお心を知りましたことによつてかえつておさえがたいものに私の恋はなつていきそうです。

「#ここから2字下げ」

せくからに浅くぞ見えん山河やまかはの流れての名をつつみはてずば

「#ここで字下げ終わり」

まだいろいろに書かれてある手紙であつたが、御息所は終わりでを読まなかつた。この手紙も宮との関係めいじりょうけいを明瞭めいりょうに説明したものでなくて恋人の冷ややかであつたことにこうして酬むくいるというように、今夜も来ない大将の態度を御息所は悲しんだ。柏木かしわぎが宮にお持ちする愛情のこまやかでないのを知つた時に、御息所は悲観したものであるが、ただ一人の妻として形式的には鄭重ていじゆうをきわめたお取り扱いを故人がしたことで、強みのある気がして慰められはした。それでも心から御息所は宮が御幸福におなりになつたとは思わなかつた。それさえもそうであつたのに、今度のことは何たる悲しいことであらう。太政大臣家での取り沙汰ざたは想像するだにいやであると御息所

は思うのである。なおどう大将が言ってくるかと見たい心から、非常に苦しい身体からだの調子であるのを忍んで、目を無理にあけるようにもして書いた力のない、鳥の足跡のような字で返事をするのであった。

「#ここから1字下げ」

もう私はなおる見込みもなくなりました。宮様はただ今こちらへ見舞いに来ておいでになるのでございまして、お勧めをしてみました。が、めいつたふうになっておいでになりました。お返事もお書けにならないようでございますから、私が見かねまして、

「#ここから2字下げ」

女郎花をみなへししを萎るる野辺をいづくとて一夜ばかりの宿を借りけん

「#ここで字下げ終わり」

こう書きさしたただけで紙を巻いて出した。そのまままた病床に横たわった御息所ははなはだしく苦しみだした。物怪もののけが油断をさせようと一時的に軽快ならしめていたのかと女房たちは騒ぎだした。効験のいちじるしい僧が皆呼び集められて、病室は混雑していた。あちらへお帰りになるように女房たちはお勧めするのであるが、宮は御自身をお悲しみになる心から、いっしょに死のうと思召して母君からお離れにならないのであった。

夕霧はこの日の昼ごろから三条の家に行った。今夜また小野の山荘へ行くことは、まだない事実をあることらしく人に思わせるだけで、自分のためにはよい結果をもたらすことでないと思いたい心をしておさえることに努力していたが、これまで恋しくお思いしていた

ことは物の数でもないほどに昨日からにわかには千倍した恋に苦しむ大将であつた。夫人は山荘の昨日の訪問の様子をほかから聞き出して不快がつていたのであるが、知らぬ顔をして子供の相手をしながら自身の昼の居間のほうで横になつていた。

八時過ぎに小野の山荘で書いた御息所の返事は大将の所へ持つて来られたのであるが、大病人の書いた鳥の跡は一度見たのではわかりにくい。夕霧が灯を近くへ持つて来させてさらに丁寧に読もうとしている時に、あちらにいたのであるが夫人はそれを見つけて、そつと寄つて来て後ろから奪つてしまった。夕霧はあきれて、

「どうするのですか。けしからんじゃありませんか。六条の東のお母様のお手紙ですよ。今朝から風邪でお悪かつたから、院の御殿へ伺つたままでこちらへ歸つて来て、もう一度お訪ねすることをしなかつたのがお気の毒だつたから、御様子を聞く手紙を持たせてやつたのじゃありませんか。御覧なさい、恋の手紙というような書き方ですか、これは。はしたない下品なことをするじゃありませんか。年月に添つて私を侮ることがひどくなるのは困つたものだ。女房たちがどう思ふかを少しも考慮に入れないのですね」

と言つて歎息はしたが、惜しそうにしてして夫人の手から取り上げることはしなかつたから、雲井の雁夫人もさすがにこの場で読むこともできずにじつと持つていた。

「年月に添つて侮るなどとは、あなた御自身がそうでいらつしやるから、私のことまでも臆測なされるのよ」

夫人は良人があまりにまじめな顔をしているのに気おくれがして、若々しく甘えてみせた。夕霧は笑つて、

「それはどちらのことでもいい。世間のどこにもあることだからね。

けれどもこれだけはほかにないことですよ。相当な身分の男がただ一人の妻を愛して、何かに怖おそれている鷹たかのように、じつと一所を見守っているようなのに似た私を、どんなに人が笑っていることだろう。そんな偏屈な男に愛されていることはあなたにとっても名譽じやありませんよ。おおぜいの妻妾さいしやくの中ですぐれて愛される人は、見ない人までもが尊敬を寄せるものだし、自分でも始終緊張していることができて、若々しい血はなくならないであろうし、真の生きがいを感じる人が多いだろうと思われる。私のように、昔の何かの小説にある老いぼれの良人のようにあなた一人をただ夢中に愛しているようなことはあなたのために結構なことではありませんよ。そんなことはあなたが世間からはなやかに見られることでは少しもないからね」

夕霧は小野の手紙をいざこざなしに取ってしまいたい心から妻を欺くと、夫人は派手はでに笑って、

「はなやかなことをあなたがしようとしていらつしやるから、古いじみな女の私が一方で苦しんでいるのですよ。にわかにつきりまじめでなくおなりになったのですもの、私にはそうした習慣がついていないのですから苦しくてなりません。初めからそうしておいでになればよかつたのよ」

と恨めしがる妻も憎くはなかつた。

「にわかにとあなたが思うようなことが私のどこにあるのですか、あなたは疑い深いのですね。私を中傷する人があるのでしよう。そうした人たちは初めから私に敵意を見せていたものだ。浅葱あさぎの色いろの位階服が軽蔑けいべつすべきであつた私を、今だつてあなたの良人にさせておくのが残念で、何かほかの考えを持っている者などがあつて、い

ろんなない噂うわさをあなたに聞かせるのだろう。一方で私のためにそうした濡衣ぬれぎぬを着せられておいでになる方もお気の毒なものだ」

などと言いながらも夕霧は、女二にょにの宮みやの御良人となることも堅く期しているのであるから、深く弁明はしようとしないのであった。

乳母めのとの大輔たゆうは気術きじゆつながって何も言おうとしなかった。なお夫人は奪った手紙を返そうとはせずどこかへ隠してしまった。夕霧は無理に取り返そうとはせず、冷静に見せて寝についたのであるが、動悸どうきばかり高く打ってならなかった。どうかして取り返したい、御息所の手紙らしい、どんな内容なのであろうと思うと眠ることもできないのである。夫人が寝入ってしまったので、宵よいにいた所の敷き物の下などをさりげなく大将は捜すのであるが見つからなかった。深く隠すだけの時間のなかったのを思うと、近い所に置かれてあるに違いないと思うのに見つけられないのが齒がゆくて、悩ましい気持ちになり、夜が明けてもなお起きようとしなかった。夫人は子供に起こされて寢所からいざって出る時に、夕霧も今日をさましたふうに半身を起こして、昨夜の手紙をまたも捜そうとするのであったが、見つけることは不可能であった。夫人は良人おとこがそんなふうにはしがらぬ手紙はやはり恋の消息ではなかったのであろうと思って、もう気にもかからなかった。子供がそばで騒ぎまわったり、やや大きい子が人形を作って遊んだり、本を読んだり、手習いをしたりするのをいちいち見てやらねばならぬ忙しい時にも、また一人の小さい子が後ろから這はいかかって来てつかまり立ちをしようとするような、母であるための繁忙に追われて、夫人はもう奪った手紙のことなどは忘れ切っていた。男は他のことはいっさい思われなほど手紙がほしかった。小野へ今朝早く消息をしたいと思うのであるが、昨夜

の手紙に書かれてあったことをよく見なかったのであるから、それに触れずに手紙を書いては、先方のものをそまつに取り扱って散らせてしまったことが知れてまずいことになるかと煩悶をしていた。夫婦も子供たちも食事を済ませてのどかになった昼ごろに、大將は思ひあまつて夫人に言うのであった。

「昨夜のお手紙には何と書いてあったのですか。ばかなことを言つてあなたが見せてくれないものだから、今日もこれからお見舞いを見なければならぬのに困つてしまふ。私は気分が悪くて今日は六条へも行きたくないから、手紙で言つてあげなければならぬのだが、昨日のことがわからないでは不都合だから」

夕霧の様子はきわめてさりげないものであったから、手紙を隠した自身の所作が、むだなことをしたものであると思つたと、急に恥づかしくなつたが、それは言わずに、

「先夜の山風に身体からだを悪くいたしましたからお言いわけをなさればいいじゃありませんか」

と言つた。

「つまらんことばかり言うのですね。何もおもしろくないじゃありませんか。私が世間並みの男のように言われるのを聞くとかえつてきまりが悪くなりますよ。女房たちなども不思議な堅い男を疑うあなたを笑うだろうに」

冗談じよつだんにして、また、

「昨夜ゆうべの手紙はどこ」

と言つたが、なおすぐに取り出そうとは夫人のしないままで、ほかの話などをしてしばらく寝ていたが、そのうちに日が暮れた。蝸ひくまの聲に驚いて目をさました大將は、この時刻に山莊の庭を霧がどん

なに深くふさいでいることであろう、情けないことである、今日のうちに昨日の手紙の返事をすら自分は送ることができなかつたのであると思つて、何でもないふうすずりに硯の墨をすりながら、どんなふうたんそくに書いて送つたものであるかと歎息をして一所を見つめていた目に敷き畳の奥のほうの少し上がっている所を発見した。試みにそこを上げてみると、昨日の手紙は下にはさまれてあつた。うれしくも思われまたばかばかしくも夕霧は思つた。微笑をしながら読んでみると、それは苦しい複雑な心を重態の病人が伝えているものであつたから、大将の鼓動は急に高くなつて、自分がしいて結合を遂げたものとして書かれてあると思つたと気の毒で心苦しくて、第二の夜の昨夜に自分の行かなかつたこととどんなに御息所みやすじころは煩悶はんもんしたことであろう、今日さえまだ手紙が送つてないといふことは、新婚の良人おっととしていえばきわめて無情な態度である。露骨に言わずに自分の行くのを促してある消息を受けていながら、自分を待ちつけることがしまいまでできずに今朝になつたのであつたかと思つと、大将は妻が恨めしくも憎くも思われた。無法なことをして大事な手紙を隠させるようになしぐさも皆自分がつけさせたわがままな癖であると思つと、自分自身にすら反感を覚えて泣きたい気がした。これからすぐに行こうと夕霧は思つたのであつたが、たやすく宮は逢あおうとなされないのであつたといふことは予想されることであつたし、妻はこうして昨日から嫉妬しつとをし続けているのであるし、それに今日が坎日かんにちにあたることはもし宮のお心が解けた場合を考えると、永久に幸福を得なければならぬ結婚の最初に避けなければならぬことでもあるからと、まじめな性格からは、恋しい方との将来に不安がないように慎重に事をすべきであると考えられて、行くことはおいて、まず御息所へ

の返事を書いた。

「#ここから1字下げ」

珍しいお手紙を拝見いたしましたことは、御病気をお案じ申し上げるほうから申しても非常にうれしいことでしたが、おとがめを受けましたことにつきましては何かお聞き違いになったのではないかと思われるのでございます。

「#ここから2字下げ」

秋の野の草の繁みは分けしかど仮寝の枕結びやはせし

「#ここから1字下げ」

弁明をいたしますのもおかしゅうございますが、宮様に対して御想像なさいますような無礼を申し上げた私では決してございません。

「#ここで字下げ終わり」

という文である。宮へは長い手紙を書いた。そして夕霧は厩の中の駿足の馬に鞍を置かせて、一昨夜の五位の男を小野へ使いに出すことにした。

「昨夜から六条院に御用があつて行つていて、今帰つたばかりだと申してくれ」

大將は山莊へ行つてからのことでなおいろいろに注意を与えた。

小野の御息所は、昨夜は夕霧の来ないらしいことに気がもまれて、あとの評判になつては不名誉であることもはばかられずに、促すような手紙も書いたのに、その返事すら送られなかったことに失望をしていてそのまま次の今日さえも暮れてきたことに煩悶を多く覚えて、やや軽くなつたふうであつた容体がまた非常に険悪なものに

なつてきた。かえつて宮御自身は御息所の思い悩む点を何ともお思
いになるわけはなくて、ただ異性の他人をあれほどまでも近づかせ
たことが残念に思われる自分であつて、彼の愛の厚薄は念頭にも置
いていないにもかかわらず、それを一大事として母君が煩悶してい
ると、恥ずかしくも苦しくも思召されて、母君ながらそのことはお
話しになることもできずに、ただ平生よりも羞恥ちじを多くお感じにな
るふうの見える宮を、御息所は心苦しく思い、この上にまた多くの
苦勞をお積みにならねばなるまいと、悲しさに胸のふさがる思いを
した。

「今さらお小言おこごらしいことは申したくないのでございますが、それ
も運命とは申しながら、異性に対する御認識が不足してしまいましたた
めに、人がどう批難をいたすかしれませんことが起こつてしまいま
したのでですよ。それは取り返されることではございませんが、これ
からはそうしたことによく御注意をなさいませ。つまらぬ私でござ
います、今までは御保護の役を勤めました、もうあなた様はい
ろいろな御経験をお積みになりました、お一人立ちにおなりになり
ましても充分なように思つて、私は安心していたのでございますよ。
けれどまだ実際はそうした御幼稚らしいところがあつて、隙すきをお見
せになつたのかと思ひますと、御後見のために私はもう少し生きて
いたい気がいたします。普通の女でも貴族階級の人は再婚して二人
めの良人おとこを持つことをあさはかなことに人は見ているのでございま
すからね、まして尊貴な内親王様であなはいらつしやるのでござ
いますから、あそばすならすぐれた結婚をなさらなければならな
かったのでございますが、以前の御縁組みの場合にも、私はあなた様
の最上の御良人ごりょうじんとあの方を見ることができませんで、御賛成申さな

かつたのですが、前生のお約束事だったのでしようか、院の陛下がお乗り気になりましたして許容をあそばす御意志をあちらの大臣へまずもつてお示しになったものですか、私一人が御反対をいたし続けるのもいかがかと思ひまして、負けてしまいましたのですが、予想してすでに御幸福なように思われませんでしたことは皆そのとおりでお気の毒なあなた様にしてしまいましたことを、私自身の過失ではないのですが、天を仰いで歎息たんそくしておりました。その上また今度のことでもございます。あの方のためにも、あなた様のためにも、これは世間が騒ぐはずのことですから、どんなに堪えがたい誹謗ひぼうの声を忍ばなければならぬかしれませんが、しかしそれはしいて忘れることにいたしましたしても、あの人の愛情さえ深ければながい月日のうちには見よいことにもなるうかと、私はしいて思おうとするのですが、まったく冷淡な人でございますね」

と言ひ続けて御息所は泣くのであつた。あつた事実と独断してこつたを、御弁明あそばすこともおできにならない宮が、ただ泣いておいでになる御様子は、おおようで可憐かれんなものであつた。御息所はじつと宮をながめながら、

「あなたはどこが人より悪いのでしよう。そんなことは絶対にない。何という運命でこうした御不幸な目にばかりおあいになるのだらう」

などと言つていけるうちに御息所の容体は最悪なものになつていった。物怪もののけなどというものもこうした弱り目に暴虐をするものであるから、御息所の呼吸はにわかにとまって、身体からだは冷え入るばかりになつた。律師もあわてて願がんなどを立て、祈禱きとうに大声を放つてゐるのである。御仏みほとけに約して、自身の生存する最後の時まで下山せず寺に

こもると立てた堅い決心をひるがえして、この人を助けようとする自分の祈祷が効を奏せず失敗して山へ帰るほど不名誉なこととはなくて、その場合には御仏さえも恨むであろうことを言葉にして祈っているのである。宮が泣き惑うておいでになるのもごもつともなことに思われた。

この騒ぎの中で、大将の消息が来たという者の声を、御息所はほのかに聞いてそれでは今夜も来ないのであるうと思つた。情けないことである、こうした恥ずかしい名を宮はまたお受けになるのであろう、自分までがなぜ受け入れるふうな手紙などを書いてやったのであろうと悶もだえるうちに御息所の命は終わった。悲しいことである。昔から物怪のためにたびたび大病をしてもうだめなように見えたこともおりおりあつたのであるから、また物怪が一時的に絶息をさせたのかもしれないと僧たちは加持かじに力を入れたのであるが、今度はもう何の望みもなく終焉しゅうえんの体はいちじるしかった。宮はともに死にたいと思召す御様子でじつと母君の遺骸いがいに身を寄せておいでになつた。女房たちがおそばに来て、

「もういたしかたがございません。そんなにお悲しみになりましたも、お死になつた方がお帰りになるものでございません。お慕いになりましたもあなた様のお思いが通るものでもございません」
とわかりきつた生死の別れをお説きして、

「こうしておいであそばすことは非常によろしくないことでございます。お亡かくれになりました方をお迷わせすることになりますから、あちらへおいであそばせ」

お引き立て申して行こうとするのであるが、宮のお身体からだはすくんでしまつて御自身の思召すようにもならないのであつた。祈祷の壇

をこわして僧たちは立ち去る用意をしていた。少数の者だけはあとへ残るであろうが、そうしたことも心細く思われた。ほうぼうから弔問の使いが来た。いつの間にかと思われるほどである。夕霧の大將は非常に驚いてさっそく使いを立てた。六条院からも太政大臣家からも来た。ひっきりなしにそうした使いが来るのである。御寺みでらの院もお聞きになって、御愛情のこもったお手紙を宮へお書きになった。この御消息が参ったことによつて、悲しみにおぼれておいでになった宮もはじめて頭くむしをお上げになったのであつた。

「#ここから1字下げ」

いつかから病気がだいぶ重いということは聞いていましたが、平生から弱い人だったために、つい怠つて尋ねてあげることもしませんでした。故人の死をいたむことはむろんですが、あなたがどんなに悲しんでおられるだろうと、それを最も私は心苦しく思います。死はだれも免れないものであるからという道理を思つて心を平静になさい。

「#ここで字下げ終わり」

とあつた。宮は涙でお目もよく見えないのであるが、このお返事だけはお書きになった。平生からすぐに遺骸いがいは火葬にするようにと御息所みやすせいのは遺言してあつたので、葬儀は今日のうちにすることになつて、故人の甥おいの大和守やまのかみである人が万端の世話をしていた。亡骸なきがらだけでもせめて見ていたいと言はれお惜しみになるのであつたが、そうしたところではかたのなないことであると皆が申し上げて、入棺などのことをしている騒ぎの最中に左大將は来た。

「今日弔問に行つておかないでは、あとは皆、そうしたことに私の携われない曆になつていから」

などと、表面は言つて、心の中では宮のお悲しみが悲しく想像され、少しでも早く小野へ行きたく思っているのに、

「そんなにまですぐにお駆けつけになるほどの御関係でもないではございませんか」

と家従たちが諫めるのを退けてしいて出て来たのである。しかも遠距離ですぐにも行き着くことのできない道は夕霧をますます悲しませたのであつた。山荘は凄惨せいさんの氣に満ちていた。最後の式の行なわれる所は仕切りで隠して人々は例の西の縁側のほうへ大将にまわつてもらつた。

妻戸の前の縁側によりかかつて夕霧は女房を呼び出したが、だれも皆平静な気持ちでいる者はないのである。大将が来たことで少し慰められるところがあつて少将が応接に出た。夕霧も急にものは言えないのであつた。すぐ泣くふうの人ではないのであるが、ここの悲しい空気に人々の様子も想像されて無常の世の道理も自身に近い人の上に実証されたことにひどく心を打たれているのである。ややしばらくして、

「少しおよろしいように伺つたものですから、安心していただけのですが、何たることが起こつたのでしょうか。どんな悪夢でもさめる時はあるのですが、これはそうした希望も持てませんことを悲しく思います」

と宮への御一挨拶あいさつを申し入れた。御息所が煩悶はんもんしていたことをお思いになつて、大将が原因で免れがたい運命とはいえ母君はお亡なくなりになつたとお思いになると、恨めしい因縁の人の甲問に宮はお返辞すらあそばさない。

「どう仰せられますと申し上げればよろしゅうございましょう。重

いお身柄をお忘れになつてすぐにこの遠い所をお弔みくちにおいでくださいました御好意を無視あそばすようなお扱いもありでございますから」

女房が口々に言うと、

「いいかげんに言っておくがいい。何を何と言つていいか今はそんなこともわからない」

宮がこう言つて横になつておしまいになつたのももつともなこの場合のことであつたから、女房が、

「ただ今のところ宮様はお亡かくれになつた方同然でいらつしやいます。おいでくださいましたことは申し上げておきました」

と夕霧へ言つた。この人たちは涙にむせかえつているのであるから、

「何とも申し上げようのないことですから、私の心も少し落ち着き、宮様の御気分もお静まりになつたところにまた参りましょう。どうしてそんな急変が来たのか、私はその理由だけを知りたい」

と大將は女房に言つた。露骨には言わないが少將は御息所の煩悶した一昼夜のことを少し夕霧に知らせて、

「そう申してまいればお恨み言になつていけません。今日は頭が混乱しておりまして間違つてお話し申し上げることがあるかもしれませんが。それでは宮様のお悲しみもいずれはおあきらめにならなければならぬことでございますから、御気分のお落ち着きになりますころにまたおいでくださいまし」

と言つた。その人たちも気を顛倒てんとつさせている様子を見ては、大將も言いたいことが口から出ない。

「私の心なども暗闇まっくらになつたように思われるのですから、宮様とし

てはごもつともです。極力お慰め申し上げて、あなたがたの力で今後少しのお返事でもいただけるように計らってください」

などと言いおいて、長い立ち話をしていることもさすがに出入りの人の多い今日の山荘では軽々しく見られることであろうとはばかつて大將は帰ることにした。今夜のうちに済ませるために納棺その他のことを着々進行させている物音にも、盛大ならぬ葬儀の悲哀が感ぜられて、大將はこの近くにある自家の莊園から侍たちを招いて、いろいろな役を分担して助けることを命じていった。急なことであったから自然簡単で済ませることになった葬儀が、これによって外見をきわめてよくすることができるようになった。大和守も、

「すべて殿様のありがたい御親切のおかげでございます」
と感謝していた。

母君を何も残らぬ無にしておしまいになったことで、宮は伏し転んで悲しんでおいでになった。親は子にこのかたがたのような片時離れぬ習慣はつけておくべきでないと思ひ、宮のこの御状態を女房たちはまた歎き合った。大和守が葬儀の始末を皆してから、

「こんなふうになさいまして、まだながく寂しい山荘においでになることは御無理です。いつそうお悲しみが紛れないことになりましたよう」

などと宮へ申し上げるのであったが、宮は母君の煙におなりになった場所にせめて近くいたいと思召す心から、このままここへ永住あそばすお考えを持っておいでになった。忌中だけこもっている僧たちは東の座敷からそちらの廊の座敷、下屋までを使つて、わずかな仕切りをして住んでいた。西の端の座敷を急ごしらえの居間にして宮はおいでになるのである。朝になることも夜になることも宮は

忘れておいでになるうちに日がたつて九月になった。山おろしが烈しくなり、もう葉のない枝は防風林でも皆なくなった。寂しさの身にしむこの季節のことであるから、空の色にも悲しみが誘われて、宮は歎きなげを続けておいでになる。命さえも思うどおりにならぬと悲しんでおいでになるのであった。女房たちも二重三重に悲しみをするばかりである。夕霧からは毎日のようにお見舞いの手紙が送られた。寂しい念仏僧を喜ばせるに足るような物もしばしば贈られた。宮へは真心の見える手紙を次々にお送りして、自分の恋に対して御冷淡である恨みを語るほかには、今も御息所の死を悲しむ真情を言い続けた消息であった。しかも宮はそれらを手に取つてながめようともあそばさないのである。あのいまわしかつた事件を、衰弱しきつた病体で御息所は確かに悲しみもだえて死んだことをお思いになると、そのことが母君の後世ごせの妨げにもなつたような気があそばされて、悲しさが胸に詰まるほどにも思召されるのであるから、大将に触れたことを言うと、その人を恨めしく思召してお泣きになるのを見て、女房たちも手の出しようがないのである。一行のお返事さえ得られないのを、初めの間は悲しみにおぼれておいでになるからであろうと大将は解釈していたが、今に至るも同じことであるのを見ては、どんな悲しみにも際限はあるはずであるのに、今になつてもまだ自分の音信たよりに取り合わぬ態度をお続けになるのはどうしたことであろう、あまりに人情がおわかりにならぬと恨めしがるようになった。関係もないことをただ文学的につづり、花とか蝶ちようとか言っているものであつたなら、冷眼に御覧になることもやむをえないことであるが、自身の悲しいことに同情して音信たよりをする人には、親しみを覚えていただけるわけではないか、祖母の大宮がお亡かくれになつて、

自分が非常に悲しんでいる時に、太政大臣はそれほどにも思わないで、だれも経験しなければならぬ尊親の死であるというふうに見ていて、儀式がかつたことだけを派手はでに行なつて万事一了おわるといふ様子であつたのに、自分は反感を感じたものだし、かえつて昔の婿でおありになつた六条院が懇切に身を入れてあとの仏事のことなどをいろいろとあそばされたのに感激したものである。これは自分の父であるというだけで思ったことではない、その時に故人の柏木かしわざが自分が好きになつたのである。静かな性質で人情のよくわかる彼は、自分と同じように祖母の宮の死を深く悲しんでいたのに心を惹ひかれたものであつた。この宮は何という感受性の乏しいお心なのであると、こんなことを毎日思い続けていた。夫人は山荘の宮と大将の関係はどうなつていたのであろう、御息所とは始終手紙の往復をしていたようであるがと臆おそに落ちず思つて、夕方空にながめ入つて物思いをしている良人の所へ、若君に短い手紙を持たせてやつた。ちよつとした紙の端なのである。

「#ここから2字下げ」

哀れをいかに知りてか慰めんあ在るや恋しき無きや悲しき

「#ここから1字下げ」

どちらだか私にはわからないのですから。

「#ここで字下げ終わり」

夕霧は微笑しながら嫉妬しつとが夫人にいろいろなことを言わせるものであると思つた。御息所を対象にしていたらうとはあまりにも不似合そんたくいな付度であると思つたのである。すぐに返事を書いたが、それ

は実際問題を選けた無事なものである。

「#ここから2字下げ」

何れとも分きて眺め^{なが}ん消えかへる露も草葉の上と見ぬ世に

「#ここから1字下げ」

人生のことがことごとく悲しい。

「#ここで字下げ終わり」

まだこんなふうに隠しだてをされるのであるかと、人生の悲しみはさしおいて夫人は歎^{なげ}いた。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったの

は、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

夕霧二

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）小野おのの

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）着一な馴ならした

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」帰りこし都の家に音無しの滝はおちね

「#地から3字上げ」ど涙流るる （晶子）

恋しさのおさえられない大将はまたも小野おのの山荘に宮をお訪たずねし
ようとした。四十九日の忌いみも過すごしてから静かに事の運ぶようにす
るのがいいのであるとも知っているのであるが、それまでにまだあ
まりに時日があり過ぎる、もう噂うわさを恐れる必要もない、この際はど

の男性でも取る方法で進みさえすれば成り立ってしまふ結合であるうとこんな気になつているのであるから、夫人の嫉妬も眼中に置かなかつた。宮のお心はまだ自分へ傾くことはなくとも、「一夜ばかりの」といつて長い契りを望んだ御息所の手紙が自分の所にある以上は、もうこの運命からお脱しになることはできないはずである。恃むところがあつた。九月の十幾日であつて、野山の色はあさはかな人間をさえもしみじみと悲しませているころであつた。山おろしに木の葉も峰の葛の葉も争つて立てる音の中から、僧の念仏の声だけが聞こえる山荘の内には人げも少なく、蕭条とした庭の垣のすぐ外には鹿が出て来たりして、山の田に百姓の鳴らす鳴子の音にも逃げずに、黄になつた稲の中で啼く声にも愁いがあるようであつた。滝の水は物思いをする人に威嚇を与えるようにもとどろいていた。叢の中の虫だけが鳴き弱つた音で悲しみを訴えている。枯れた草の中から竜胆が悠長に出て咲いているのが寒そうであることなども皆このごろの景色として珍しくはないのであるが、折と所とが人を寂しがらせ、悲しがらせるのであつた。

夕霧は例の西の妻戸の前で中へものを言い入れたのであるが、そのまま立つて物思わしそうにあたりをながめていた。柔らかな氣のする程度に着一馴らした直衣の下に濃い紫のきれいな攜目の服が重なつて、もう光の弱つた夕日が無遠慮にさしてくるのを、まぶしうに、そしてわざとらしくなく扇をかざして避けている手つきは女にこれだけの美しさがあればよいと思われるほどで、それでさえこはゆかぬものをなどと思つて女房たちはのぞいていた。寂しい人たちにとつてはよい慰安になるであろうと思われる美しい様子で、特に名ざして少將を呼び出した。狭い縁側ではあるが、他の女がま

たその後ろに聞いているかもしれぬ不安があるために、声高には話しえない大将であった。

「もう少し近くへ寄ってください。好意を持ってくれませんか、この遠方へまで御訪問して来る私の誠意を認めてくださったら、最も親密なお取り扱いがあつてしかるべきだと思えますよ。霧がとても深くおりてきますよ」

と言つて、ちよつと山のほうをながめてから大将がぜひもつと近くへ来てくれと言つので、余儀なく鈍色の几帳を簾から少し押し出すほどにして、裾を細く巻くようにした少将は近くへ身を置いた。

この人は大和守の妹で、御息所の姪であるというほかに、子供の時から御息所のそばで世話になつていた人であつたから喪服の色は濃かつた。黒を重ねた上に黒の小袿を着ていた。

「御息所のお亡れになつたのを悲しむことと宮様のいつまでも御冷淡であらせられるのをお恨みするのが私の心の全部になつて、ほかのことは頭にありませんから、だれからも私は怪しまれてしかたがありません。もう私に忍耐の力というものがなくなりましたよ」

これを初めにして、夕霧はいろいろと恋の苦しみを訴えた。御息所の最後の手紙に書かれてあつたことも言つて非常に泣く。少将もまして非常に泣く。

「その時のことでございますがね、あなた様がおいでにならぬばかりか、御自身のお返事もおもらいになれないままで暗くなつてまいりますのに悲観をあそばしましつてとうとう意識をお失いになりましたのに物怪がつけこんで、そのまま蘇生がおできにならなかつたのだと私は拝見いたしました。以前の御不幸のございました時にも、もうそんなふうにおなりになるのでないかと私どもがお案じいたし

ましたようなことがおりおりございましたが、宮様がお悲しみになつてめいっておいであそばすのをおなだめになりたいとお思になるお心の強さから、御健康をお持ち直しになつたのでございます。あなた様についての御息所のこのお悲しみ方を宮様はただ呆然ほうぜんとして見ておいでになりました」

あきらめられぬようにこんなことを少将は言っていて、まだ頭はかなり混乱しているふうであつた。

「そうではあつても、宮様はもう常態にお復しになつてしかるべきだと思う。私に対してあまりな知らず顔をお作りになるのは、思いやりのないことではありませんか。もつたいないことですが、孤独におなりになつた宮様にだれがお力になるとお思いになるのだろうか。法皇様はいつさい塵界じんがいと交渉を絶つておいでになる御生活ぶりですから、御相談事などは申し上げられないでしょう。あなたがたが熱心になつて宮様の私に対する御冷酷さをお改めになるようによくお話し申し上げてください。皆宿命があつて、一生孤独でいようとあそばしても、そうなつて行かないということもお話し申すといい。人生が望みどおりに皆なるものであれば、この悲しい死別はなされなくてもよかつたわけではありませんか」

などと夕霧は多く言うのであるが、少将は返事もできずに歎息たんそくばかりしていた。鹿しかがひどく啼なくのを聞いていて、「われ劣らめや」（秋なれば山とよむまで啼く鹿にわれ劣らめや独ひとり寝ねる夜は）と吐とい息きをついたあとで、

「#ここから2字下げ」

里遠み小野の篠原しのはら分けて来てわれもしかこそ声も惜しまね

「#ここで字下げ終わり」

と大将が言うと、

「#ここから2字下げ」

ふぢ衣露けき秋の山人は鹿のなく音ねに音ねをぞ添へつる

「#ここで字下げ終わり」

少将のこの返歌はよろしくもないが、低く忍んで言う声こゝろづかいなどを優美に感じる夕霧であった。宮へいろいろとお取り次ぎもさせたが、

「この悲しみの中から自分を取りもどす日がございましたら、始終お心にかけてお尋ねくださいますお礼も申し上げられるかと思ひます」

と礼儀としてだけのことより宮からはお返辞がない。大将は失望して歎なげきながら帰って行くのであった。途中も車の中から身にしむ秋の終わりがたの空をながめていると、十三日の月が出て暗い気持ちなどにはふさわしくないはなやかな光を地上に投げかけた。それにも誘われて一条の宮の前で車をしばらくとどめさせた。以前よりもまた荒れた気のお邸やしきであった。南側の土塀どべいのくずれた所から中をのぞくと、大きな建物の戸は皆おろされてあつて人影も見えない。月だけが前の流れに浮かんでいるのを見て、柏木かしわぎがよくここで音楽の遊びなどをしたその当時のことが思い出された。

「#ここから2字下げ」

見し人の影すみはてぬ池水にひとり宿一守る秋の夜の月

「#ここで字下げ終わり」

こう口ずさみながら家へ帰って来た大将は、そのまま縁に近い座敷で月にながめ入りながら恋人の冷たさばかりを歎いていた。

「あんなふうにしていらっしやることは以前になかったことですね。およしになればいいのに」

と言って女房らは譏そしった。夫人は痛切おつとに良人のこの変わりようを悲しんでいた。これは心がほかへ飛んで行っているという状態なのであろう、そうしたことに馴ならされた六条院の夫人たちを何かといえばよい例に引いて、自分をがさつな、思いやりのない女のように言う良人は無理である、自分も結婚した初めからそう馴らされて来たのであつたなら、穩健なあきらめができていて、こんな時の辛抱しんぼうもしよいに違いない、珍しく忠実な良人を持つ妻として親兄弟をはじめとして世間からあやかり者のように言われて来た自分が、最後にみじめな捨てられた女になるのであろうかと歎いているのである。夜も明けがた近くなるのであるが、夫婦はどちらも離れた気持ちで身をそむけたまま何を言おうともしなかった。

起きるとまたすぐに、朝霧の晴れ間も待たれぬようにして大将は山荘への手紙に筆を取っていた。不愉快に思いながらも夫人はもういつかのように奪おうとはしなかった。書いてしばらくそれをながめながら読んで見ているのが、低い声ではあつたが、一部だけは夫人の耳にもはいつて来た。

「#ここから2字下げ」

いつとかは驚かすべきあけぬ夜の夢さめてとか言ひし一言

「#ここで字下げ終わり」

「上よりおつる」（いかにしていかによからん小野山の上よりおつる音無しの滝）と書かれたものらしい。巻いて上包みをしたあとでも「いかによからん」などと夕霧は口にしていた。侍を呼んで手紙の使いはすぐに小野へ出された。内容の全部はよくわからなかったが、返事だけは手に入れて読みたいものである、それによつて真相が明らかになるであろうと夫人は思っていた。

朝おそくなつてから小野の返事が来た。濃い紫色の、堅苦しい紙へ例の少将が書いたものであつた。今日もまた自分たちの力で宮をお動かしすることのできなかつたことが書かれてあつて、

「#ここから1字下げ」

お気の毒に存じますものですから、あなた様のお手紙へむだ書きをあそばしたのを盗んでまいりました。

「#ここで字下げ終わり」

と書いて、中へその所だけを破つたのが入れてあつた。読んでだけはもらえたのであると、うれしくなる大将の心もみじめなものである。むだ書きふうにお書きになつたお歌は、骨を折つて読んでみると、

「#ここから2字下げ」

朝夕に泣く音を立つる小野山はたえぬ涙や音無しの滝

「#ここで字下げ終わり」

と解すべきものらしい。また寂しいお心に合いそうな古歌などの書かれてある宮のお字は美しかった。他人のことで、こんなことを夢中になるまでの関心をもつて楽しんだり、悲しんだりしているのを、齒がゆく病的なことに思っていたが、自分のことになると恋する心は堪えがたいものである、どうしてこうまでになったのかと反省をしようとするのであるが、それもできないことであつた。

六条院も大将の恋愛問題をお聞きになつて、この人がなんらの浮いたこともせず、批難のしようもない堅実な人物であることに満足しておいでになつて、御自身の青春時代に好色な評判を多少お取りになつた不面目をこの人がつぐなつてくれるものように思つておいでになつたことが裏切られていくような寂しさをお感じになつた。この事件の気の毒な影響から双方で犠牲を払う結果になるのである、全然関係のないところの女性ではなくて、妻の兄の未亡人の宮との問題であるから、舅とじふしの大臣などもどう思うことであらう、それほどの思慮を持たないのではあるまいが、宿命というものから人はのがれられずに起こつてきたことであらう、ともかくも自分の干渉すべきことでないとい院はお考えになつた。結局双方とも婦人の損になることで気の毒であると歎いておいでになるのであつた。御自身の経験されたことに照らして見、また大将のこの現状によつて、亡なきのちの世が不安になつたことを紫夫人にお言いになると女王にょおは顔を赤くして自分があとに残らねばならぬほど、早くこの世から去つておしまいになる心でおいでになるのであらうかと恨めしく思うふうであつた。

「女ほど窮屈なものはありませんね。心の惹ひかれることも、恋しい感情も皆おさえて知らぬふうをしておとなしくしていなければなら

ないので生きがいもなし、人生の退屈さと悲哀とを紛らすことができないではありませんか。そうかといって感情に乏しい女になつては無価値だし、どうしてこんなふうに育つたのかと親さえも軽蔑けいべつしたくなりますからね。ただ心でだけ思つて、お坊様が気の毒がる無言太子のようになつて、細かな感情も動きながら黙つていなければならぬ人にするのも無慈悲な親になる。こうであればああであり、それであればこうになる、どうして中庸を得るようにすればいいかと、そんなことを私が考えるのも、他の女性のためではなく女にち一の宮みやを完全な女性にしたいからですよ」

と院は言つておいでになつた。

夕霧が六条院へ来た時に、実状を知りたく思召おしほめす心から、院が、「御息所みやすどころの忌いみがもう済んだだらうね。時ははずんとたつからね。

私が遁世とんせいの望みを持ち始めた時からもう三十年たつている。味気ないことだ。夕べの露にも異ならない命を持つて安んじていられるわけではないのだからね。どうかして髪かみを剃そり落おとしたいと望みながらのんきなふうを装まつている。これはいけないことだね」

こんな話をおしかけになつた。

「不幸ばかりで、もうこの世に未練はなかりうと思われまます人でも、さて遁世はなかなかできないものらしいのでございますから、あなた様などは御無理もございません」

などと言つて、また大將は、

「御息所の四十九日の仏事のことなども大和守一人の手でやっております。気の毒なことでございます。よい身寄りのない人は自身に ついた幸福だけで生きている間はよろしゅうございますが、死んだあとになつてみますと気の毒なものです」

とも言った。

「御息所の仏事は院からもお世話をあそばすだろうよ。女二にょにの宮はみやどんなに悲しんでおいでになることだろう。その当時はよくわからなかったが、近年になって事に触れて私の見たところではあの御息所は相当にりっっぱな人らしい。院の後宮の才女には違いなかった。そんな人の亡なくなっていくことは惜しい。生きておればよいと思う人がそんなふうには皆死んでゆくではないか。院もお悲しみになったということだ。あの宮さんはここに来ておられる宮さんに次いで御愛子だったのだよ。きつとごりっばだろう」

「さあ宮様はどんな方でございますか。御息所は無難な女性と見受けました。そう親密につきあっていたのではございませんが、しかし、何でもない時に人格の片影は見えるものでございますからね」
 などと言って、女二の宮のことを話題にせず大將は素知らぬふうを見せているのである。これほど強い心でしている恋は、親の言葉くらいで思いとどまらせえられるものでない、用いない忠告を賢げに言うのもおもしろいことではないとお思いになって、院は何の勸告をもあそばさなかった。

大將は御息所の法事をするのにあらゆる尽力をしていた。こんなことはすぐに評判になるもので、太政大臣家へも聞こえていった。不都合な話であると女性の側の悪いようにそこで言われておいでになる宮がお気の毒である。法事の当日は昔の縁故で大臣家の子息たちも参会した。派手はでな誦経すきょうの寄付が大臣からもあった。寄付はただほかからも多く来た。競争的にこうしたことをするのが今日の流行である。

宮はこのまま小野の山荘とんせいで遁世とんせいの身になっておしまいになる志望

がおありになつたのであるが、御寺みでらの院にこのことをお報じ申し上げた人があつて、

「そんなことはよろしくない。皆がいろいろな変わった境遇にいることも望ましいことではないが、保護者のない者が尼になつたために、かえつて浮いた名を立てられることがあつたり、俗でいる以上に煩惱を作らなければならぬことができたりしては、この世の幸福も未来の幸福も共に無にしてしまうことになる。自分が僧になつてゐる上に、三の宮が出家をしている。今また二の宮が同じことをしては、子孫の絶えていく一家と見られるのも、世の中を捨てた自分にとってはかまわないことであるが、必ずしもまた今競つて出家は実現するに及ばないことだということとは自分にもできる。不幸な時にこの世を捨てることをするのは見苦しいものである。自然に悟りができてくる時節を待つて、冷静に判断をしてしなければならぬことです」

こんな意味のことをたびたび御忠告になつた。大将との恋愛事件がお耳にはいつていたのである。大将の愛が十分でないために悲観して尼になつたと宮がお言われになることを院はおあやぶみになるのであつた。そうとはお思いになつても公然大将の夫人になつておしまいになることを姫宮の完全な幸福とお認めになることもおできにならないのであるが、その問題に触れていつては宮が羞恥しゅうちに堪えられないであろうと思召おほしめすとかわいそうなお気持ちがして、せめてこの際は自分だけでも知らぬ顔をしていてやりたいと思召した。

大将も立てられる噂うわさに言いわけをしてきたこれまでの態度はもう改めるほうがよい時期になつたと思ひ、女二の宮が結婚を御承諾になるのを待つことはせず、御息所の希望したことであつたからと

いうように世間へは思わせることにして、この場合はしかたがないから故人にちよつとした責任を負わせることくらい許してもらふことにして、いつから始まつたということをあいまいにして夫婦になろう、今さら恋の涙のありたけを流して、宮のお心を動かそうと努めるのも自分に似合わしくないことであると思つて、山莊を引き上げて一条の邸へお移りになる日をおよそいつということもこちらできめた夕霧は、大和守を呼んで、大将夫人としての宮のお帰りになる儀式等についての設けを命じたのであつた。邸の修理をさせ、勝ち気な御息所が旧態を保たせていたとはいうものの、行き届かない所であつた家の中を、みがき出したように美しくして、壁代、屏風、几帳、帳台、昼の座席なども最も高雅な、洗練された趣味で製作させるように命じてあつた。

当日は夕霧自身が一条に来ていて、車や前駆の役を勤める人たちを山莊へ迎えに出した。宮はどうしても帰らぬと言つておいでになるのを、女房たちは百方おなだめしていたし、大和守も意見を申し上げた。

「その仰せは承ることができません。お一人きりのお心細い御境遇が悲しく存ぜられまして、御葬送以来ただ今までは、私としてお尽くしいたしうるだけのことはいたしてまいりました。しかし私は地方長官でございますから、お預かりしております国の用がうちやつてはおけませんので、近くまた大和へまいらねばならないのでございます。あなた様のただ今からのお世話をだれに頼んでまいつてよいという人もございませんから、どうすればよいかと思つております場合に左大将が力を入れてくださるのでございますから、あなた様御一身について考えますれば、御再婚をあそばすことをこれが最

上のことは申されませんが、しかし昔の内親王様がたにもそうした例は幾つもあったことで、御自分の御意志でもなく、運命に従って皆そうおなりになったのでございますから、何もあなた様お一方が世間から批難されるはずもないのでございます。

これほどのお方のお志をお退けになりますのは、あまりにも御幼稚なことと申すほかはございません。女性の方でも独立して行けぬことはないと思召すでしょうが、実際問題になりますと、御自身をお護りになることと、経済的のこととで御苦勞ばかりがどんなに多いかしれません。それよりも十分大事に尊重申される御良人にお助けられになってこそ、あなた様の御天分も十分に發揮させることができるのでございます。どうかそのお心におなりくださいませ」

大和守はまた、

「あなたたちが宮様へよく御一会得のゆくようにお話し申し上げないのが悪いのです。そうかというとまたこうしたことに立ち至る最初の動機などはあなたがたの不注意でお起こしになったりして」と少将や左近を責めた。

女房が皆集まって来て口々にお促しするのに御反抗がおできにならないで、きれいな色のお召し物などをお着せかえ申したりするまに宮はなつておいでになるのであるが、切り捨ててしまいたく思召すお髪を後ろから前へ引き寄せてごらんになると、それは六尺ほどの長さで、以前よりは少し量が減っていても、他の者の目にはやはりきわめておみごとなものに見えるのであるが、御自身では非常に衰えてしまった、もう結婚などのできる自分ではない、いろいろな不幸にむしばまれた自分なのだからとお思い続けになって、お召しかえになった姿をまたそのまま横たえておしまいになった。

「時間が違ってしまった。夜がふけてしまುದらう」

などと言って、お供をする人たちは騒いでいた。時雨しぐれがあわただしく山荘を打って、全体の気分が非常に悲しくなった。

「#ここから2字下げ」

上りにし峰の煙に立ちまじり思はぬ方になびかずもがな

「#ここで字下げ終わり」

とお口ずさみになったとおりに宮は思召すのであるが、そのころははさみ鋏刀などというものを皆隠して、お手ずから尼におなりになるよ
うなことのないように女房たちが警戒申し上げていたから、そんな
ふうにお騒ぎをせずとも、惜しく尊重すべき自分でもないものを、
しいて尼になってみずからを清くしようとも思わず、すればかえつ
て人の反感を買うにすぎないことも知っているのであるから、と思
召して宮は御本意を遂げようともあそばさないのである。女房は皆
移転の用意に急いで、お櫛箱くしばこ、お手箱てびら、唐櫃からびつその他のお道具を、そ
れも仮の物であったから袋くらいに皆詰めてすでに運ばせてしまっ
たから、宮お一人が残っておいでになることもおできにならずに、
泣く泣く車へお乗りになりながらも、あたりばかりがおながめられ
になって、こちらへおいでになる時に、御息所みやすじころが病苦がありながら
も、お髪かみをなでてお繕いして車からお下おろしたことなどをお思い
出しになると、涙がお目を暗くばかりした。お護まもり刀とともに経の
箱がお席わきの脇へ積まれたのを御覧になって、

「#ここから2字下げ」

恋しさの慰めがたき形見にて涙に曇る玉の箱かな

「#ここで字下げ終わり」

とお歌いあそばされた。黒塗りのをまだお作らせになる間がなく
て、御息所が始終使っていた螺鈿らでんの箱をそれにしておありになるの
である。御息所の容体の悪い時に誦經すききょうの布施として僧へお出しにな
った品であったが、形見に見たいからとまたお手もとへお取り返し
になったものである。浦島の子のように箱を守ってお帰りになる宮
であった。

一条へお着きになると、ここは悲しい色などはどこにもなく、人
が多く来ていて他家のようになっていた。車を寄せてお下りおになる
うとする時に、御自邸という気がされない不快な心持ちにおなりに
なつて、動こうとあそばさないのを、あまりに少女らしいことであ
ると言つて女房たちは困っていた。大將は東の対の南のほうの座敷
を仮に自身の使う座敷にこしらえて、もう邸やしきの主人のようにしてい
た。

三条の家では、だれもが、

「急に別なお家うちと別な奥様がおできになつたとはどうしたことであ
らう。いつごろから始まつた関係なのでしょう」

と言つて驚いていた。多情な恋愛生活などをしなかつた人は、こ
うした思いがけぬことを実行してしまうものである。しかしだれも
以前からあつた関係をはじめて公表したとと解釈していて、まだ
宮のお心は結婚に向いていぬことなどを想像する人もない。いずれ
にもせよ宮の御ために至極お気の毒なことばかりである。

御結婚の最初の日の儀式が精進物のお料理であることは縁起のよ

ろしくなく見えることであつたが、お食事などのことが終わつて、一段落のついた時に、夕霧はこちらへ来て宮の御寢室への案内を、少将にしいた。

「いつまでもお変わりにならぬ長いお志でございますなら、今日明日だけをお待ちくださいませ。もとのお住居すまいへお帰りになりますとまたお悲しみが新しくなりまして、生きた方のようにでもなく泣き寝におやすみになつたのでございます。おなだめいたしましてもかえつてお恨みになるのでございますから、私どもその苦痛をいたしたくございません。殿様のことを宮様に申し上げることはできないのでございます」

と少将は言う。

「変なことではないか、聡明そうめいな方のように想像していたのに、こんなことでは幼稚なところの抜けぬ方と思うほかはないではないか」

夕霧が自分の考えを言つて、宮のためにも、自分のためにも世間の批議を許さぬ用意の十分あることを説くと、

「それはそうでございますが、ただ今ではお命がこのお悲しみでどうかおなりになるのではないかということだけを私どもは心配いたしております、そのほかのことは何も考えられないのでございます。殿様、お願いでございますから、しいて御無理なことはあそばさないでくださいませ」

と少将は手をすり合わせて頼んだ。

「聞いたことも見たこともないお取り扱いだ。過去の一人の男ほどにも愛していただけに自分が哀れになる。世間へも何の面目があると思う」

失望してこう言う夕霧を見てはさすがに同情心も起こつた。

「聞いたことも見たこともないと申しますことは、あなた様のあまりにお早まりになった御用意のことでございますよう。道理はどちらにあると世間が申すでございますようか」

と少し少将は笑った。こんなふう**に**強く抵抗をしてみても、今はよその人でなく主人と召使の関係になっている相手であるから、拒み続けることはさせないで、少将をつれて、おおよその見当をつけた宮の御寢室へはいつて行った。宮はあまりに思いやりのない心であると恨めしく思召されて、若々しいしかただと女房たちが言ってもよいという気におなりになって、内蔵うちくらの中へ敷き物を一つお敷かせになって、中から戸に錠をかけてお寝やすみになった。しかもこうしておられることもただ時間の問題である、こんなふうにも常規を逸してしまった人は、いつまで自分をこうさせてはおくまいと悲しんでおいでになった。大將は驚くべき冷酷なお心であると恨めしく思ったが、これほどの抵抗を受けたからといって、自分の恋は一步もあとへ退くものではない、必ず成功を見る時が来るのであるということ。こんな自信を持ってこの夜を明かすのであって、溪たにを隔てて寝るといふ山鳥の夫婦のような気がした。ようやく明けがたになった。こうして冷淡に扱われた顔を見せることが恥ずかしくて大將は出て行こうとする時に、

「ただ少しだけ戸をおあけください。お話ししたいことがあるのですから」

としきりに望んだがなんらの反応も見えない。

「#ここから1字下げ」

「うらみわび胸あきがたき冬の夜にまたさしまさる関の岩かど

「#ここで字下げ終わり」

言いようもない冷たいお心です」

と言つて、それから泣く泣く出て行つた。

大將は六条院へ来て休息をした。花散里夫人が、

「一条の宮様と御結婚なすつたと太政大臣家あたりではお噂して
いるようですが、ほんとうのことはどんなことなのでしょう」

とおおように尋ねた。御簾に几帳を添えて立ててあつたが、横か
ら優しい継母の顔も見えるのである。

「そんなふうには噂もされるでしょう。亡くなられた御息所は、最初
私が申し込んだころにはもつてのほかのことのように言われたもの
ですが、病気がいよいよ悪くなったところに、ほかに託される人のな
いのが心細かったのですか、自分の死後の宮様を御後見するように
というような遺言をされたものですから、初めから好きだった方で
もあるのですから、こういうことにしたのですが、それをいろいろ
に付会した噂もするでしょう。そう騒ぐことでないことを人は問題
にしたがりますね」

と夕霧は笑つて、

「ところが御本人はまだ尼になりたいとばかり考えておいでになる
のですから、それもそうおさせして、いろいろに続き合った面倒な
人たちから悪く言われることもなくしたほうがよいとは思われます
が、私としては御息所の遺言を守らねばならぬ責任感があつて、と
もかくも形だけは私が良人になって同棲することにしたのです。院
がこちらへおいでになりました時にもお話のついでにそのとおりに
申し上げておいてください。堅く通して来ながら、今になって人が

批難をするような恋を始めるとはけしからんなどとお言いにならないかと遠慮をしていたのですが、実際恋愛だけは人の忠告にも自身の心にも従えないものなのですからね」

とも忍びやかに言うのだった。

「私は人の作り事かと思って聞いていましたが、そんなことでもあるのですね。世間にはたくさんあることですが、三条の姫君がどう思っていていらっしゃるかどうかとおかしいそうですよ。今まであんなに幸福だったのですから」

「可憐かれんな人のようにお言いになる姫君ですね。がさつな鬼のような女ですよ」

と言つて、また、

「決してそのほうもおろそかになどはいたしませんよ。失礼ですがあなた様御自身の御境遇から御推察なすってください。穏やかにだれへも好意を持って暮らすのが最後の勝利を得る道ではございませんか。嫉妬しつと深いやかましく言う女に対しては、当座こそ面倒だと思つてこちらにも憤むことになるでしょうが、永久にそうしていられるものではありませんから、ほかに対象を作る日になると、いつそうかれはやかましくなり、こちらは倦怠けんたいと反感をその女から覚えるだけになります。そうしたこと、こちらの南の女王の態度といい、あなた様の善良さといい、皆手本にすべきものだとは私は信じております」

と継母をほめると、夫人は笑つて、

「物の例にお引きになればなるほど、私が愛されていない妻であることが明瞭めいりょうになりますよ。それにしましてもおかしいことは、院は御自身の多情なお癖はお忘れになったように、少しの恋愛事件をお

起こしになるとたいへんなことのようにお訓さとしになろうとしたり、
 蔭かげでも御心配になったりするのを拝見しますと、賢がる人が自己の
 ことを柵たなに上げているということのような気がしてなりませんよ」
 こう花散里夫人が言った。

「そうですよ。始終品行のことで教訓を受けますよ。親の言葉がな
 くても私は浮気うわきなことなどをする男でもないのに」

大將は非常におかしいと思うふうであった。

院のお居間へも来た大將を御覧になって、院は新事実を知ってお
 いでになったが、知った顔を見せる必要はないとしておいでになっ
 て、ただ顔をながめておいでになるのであった。それは非常に美し
 くて今が男の美の盛りのような夕霧であった。今問題になっている
 ような恋愛事件をこの人が起こしても、だれも当然のことと認めて
 しまうに違ちがいがないと思召された。鬼神でも罪を許すであろうほどな
 鮮明びぼうな美貌びぼうからは若い光と匂においが散りこぼれるようである。感情に
 まだ多少の欠陥のある青年者でもなく、どこも皆完全に発達したき
 れいな貴人であると院は御覧になって、問題の起こるのももつとも
 である。女でいてこの人を愛せずにおられるはずもなく、鏡を見て
 みずから慢心をせぬわけもなからうとわが子ながらもお思いになる
 院いんでおありになった。

昼近くなって大將は三条の家へ帰ったのであった。家へはいると
 もうすぐに何人もの同じほどの子供たちがそばへまつわりに来た。

夫人は帳台の中に寝ていた。大將がそこへ行っても目も見合わせよ
 うとしない。恨めしいのであろう、もつともであると夕霧も知って
 いるのであるが、気にとめぬふうをして夫人の顔の上にかかった夜
 着の端をのけると、

「ここをどこと思っておいになつたのですか。私はもう死んでしまいましたよ。平生から私のことを鬼だと言いになりますから、いつそほんとうの鬼になろうと思つて」

と夫人は言つた。

「あなたの気持ちは鬼以上だけれど、あなたの顔はそうでないから私はきらいになれないだろう」

何一つやましいこともないようにこんな冗談じょうだんを言う良人おととを夫人は不快に思つて、

「美しい恋をする人たちの中に混じつて生きていられない私ですから、どんな所でも行つてしまいます、もうあなたの念頭になぞ置かれたくない。長くいつしよにいたことすら後悔しているのですから」

と言つて、起き上がった夫人の愛嬌あいきょうのある顔が真赤まっかになつていて一種の魅力をもつていた。

「子供らしく始終腹をたてる鬼だから、もう見なれて怖おそろしい気はしなくなつた。少し恐ろしいところを添えたいね」

と良人が冗談じょうだんごとにしてしまおうとするのを、

「何を言つているのですか。おとなしく死んでおしまいなさいよ。私も死にますよ。いろんなことを聞いていますますあなたがいやになりますよ。置いて死ねばまたどんなことをなさるかと気がかりだから」

と腹をたてるのであるが、ますます愛嬌あいきょうの出てくる夫人を夕霧は笑顔えがおで見ながら、

「近くで見るのがいやになつても、私の噂を無関心には聞かないでしょう。あなたはどんなに二人の宿縁の深いかを知らすために、私

を殺して自分も死のうたというのですね。二人の葬儀をいっしょにしてもらうというような約束は前にしてあったのだからね」

大將はまだ夫人の嫉妬しつとに取り合わないふうをして、いろいろにすかしたり、なだめたりしていると、若々しく単純な性質の夫人であるから、良人の言葉はいいかげんな言葉であると思いつながらきげんも機嫌が直つてゆくのを、哀れに思いながらも、大將の心は一条の宮へ飛んでいた。あちらも意志の強いばかりの女性とはお見えにならぬが、やはり自分との結婚を肯定することはできずに、尼にでもなつておしまいになれば、自分の不名誉であると思うと、当分は毎夜あちらに行つていねばならぬとあわただしい気がして、日の暮れていく空をながめても、まだ今日でさえお返事をくださらないではないかと煩悶はんもんされた。昨日から今日へかけて何一つ食べなかつた夫人が夕食をとつたりしていた。

「昔から私はあなたのために、どれほどの苦勞をしたことだろう。

大臣が冷酷な処置をおとりになつたから、失恋男とだれにも言われるのを我慢して、あちこちからある縁談を皆断わつて、すべて棄権をしてしまつていたようなことは女だつてそうはできないことだと皆言いましたよ。どうしてそんなにいられたらうと、自分ながら若い時の自重心を認めないではいられないのですからね。今のあなたは私をあくまで憎んでいても、愛すべき人たちが家の中いっぱいにいるのだから、あなた一人の問題ではなくなつたような現在に、軽々しい拳動はできないではありませんか。よく見ていてください。どんなに変わらぬ愛を持っている私であるかを、長い将来に見てください。命だけではあなたとさえ引き離されることがあるでしょうがね」

こんな話になって大將は泣き出した。夫人も昔のことを思い出すと、あんなにもして周囲に打ち勝って育ててきた恋から夫婦になっている自分たちではないかと、さすがに宿縁の深さも思われるのであった。曇み目の消えた衣服を脱ぎ捨てて、ことにきれいなのを幾つも重ね、薫香たきもので袖そでを燻くすべることもして、化粧そでもよくした良人が出かけて行く姿を、灯ひの明りで見ていると涙が流れてきた。夕霧の脱いだ単衣ひとえの袖を、夫人は自分の座のほうへ引き寄せて、

「#ここから1字下げ」

「馴なる身を恨みんよりは松島のおまの衣にたちやかへまし

「#ここで字下げ終わり」

どうしてもこのままでは辛抱しんぱうができない」

と独言ひとりごとするのに夕霧は気づくと、出かける足をとめて、

「ほんとうに困った心ですね。」

「#ここから2字下げ」

松島のおまの濡衣ぬれぎぬ馴なれぬとて脱ぎ変へつてふ名を立たためやは」

「#ここで字下げ終わり」

と言った。急いだからであろうが平凡な歌である。

一条ではまだ前夜のまま宮が内蔵くらからお出にならないために、女房たちが、

「こんなふうについてまでもしておいでになりましたは、若々しい、もののおわかりにならぬ方だという評判も立ちましようから、平生

のお座敷へお帰りになりました、そちらでお心持ちを殿様の御了解なさいますようにお話しあそばせばよろしいではございませんか」

と言うのを、もつともなことに宮もお思いになるのであるが、世間でこれからの御自身がお受けになる譏そしりもつらく、過去のあるころにその人に好意を持っておいでになった御自身をさえ恨めしく、そんなことから母君を失ったとお考えになると最もいとわしくて、この晩もお逢あいにはならなかった。

「あまりに、御冷酷過ぎる」

こんな気持ちをいろいろに言って取り次がせて夕霧はいた。女房たちも同情をせずにおられないのであった。

「少しでも普通の人らしい気分が帰ってくる時まで、忘れずにいてくださいたならとおっしゃるのでございます。母君の喪中だけはほかのことをいっさい思わずに謹慎して暮らしたいという思召しが濃厚でありあそばす一方では、知らぬ者がないほどにあなた様のこととが世間へ知れましたのを残念がっておいでになるのでございます」

「私の愛は噂うわさとか何とかいうものに左右ひだりみぎされない絶大なものなのだがね。そんなことが理解していただけないとは苦しいものだ」

と大将は歎息して、

「普通にお居間のほうへおいでになれば、物越して私の心持ちをお話しするだけにとどめて、それ以上のことはまだいつまでも待っていていいのです」

同じようなことをまた取り次がせるのであったが、

「弱いものがこんなに悲しみに疲れております際に、しいていろいろなおことをおっしゃるのが非常にお恨めしく思われるのでございま

す。人が見てどう私が思われることでしよう。その一部は私の不幸なせいでもあるでしょうが、あなた様がお一人ぎめをあそばしたからだとこれを思います」

とまた御抗弁になった。まだ親しもうとあそばすふうはない。そうは言っても、いつまでも真の夫婦になりえないことは、人の口から世間へも伝わるであろうから恥ずかしいと、この女房たちに対してさえきまり悪く思う大将であった。

「実際のことは宮様の御意志どおりの関係にとどめるにしても、この状態はあまりに変則だ。またそうであるからといって、私が断然来なくなったら、宮様はどういう世評をお取りになるだろう。あまりに人生を悲観なされ過ぎて、御幼稚な態度をお改めにならないのを私は宮様のために惜しむ」

などと大将が責めるのに道理があるように少将は思い、また夕霧の様子には気の毒で見えておられぬところがあつて、女房たちが通つて行く出入り口にしてある内蔵の北の戸から大将を入れた。ひどいことをする恨めしい人たちであると宮は女房をお思いになり、こうしてだれの心も利己的になるのであるから、これ以上のことを女房たちからされないものでもないとお考えになると、その人ら以外に頼む者のない今の御境遇をかえすがえす悲しくお思いになった。男は宮のお心の動かねばならぬようにして多くささやくのであるが、宮はただ恨めしくばかりお思いになって、この人に親しみを見いだそうとはあそばさない。

「こんなふうにあらん限りの侮蔑ぶべつを加えられております私が非常に恥ずかしくて、あるまじい恋をし始めました初めの自分を後悔いたしますが、これは取り返しうるものではありませんし、あなた様の

ためにももうそれはしてならないことです。ですからもう御自分は
 どうでもよいという徹底した弱い心におなりなさい。思うことのか
 なわなない時に身を投げる人があるのですから、私のこの愛情を深い
 水とお思いになつて、それへ身を捨てるとお思いになればよいと思
 います」

と夕霧は言った。単衣ひとえの着物にお身体からだを包むようにして、ほかへ
 お見せになる強さといつては声を出してお泣きになることよりおで
 きにならないのも、あくまで女らしくお気の毒なのをながめていて、
 なぜこうであろうか、こんなにまで自分をお愛しになることが不可能
 なのであろうか、どんなに許しがたく思う人といつても、これほど
 の志を見ていては自然に心のゆるんでくるものであるが、岩や木以
 上に無情なふうをお見せになるのは、前生の約束がそうであるため
 で、自分に憎悪ぞうおをお持ちにならねばならぬ運命を持つておいでにな
 るのではなからうかと、こんなことを思った時から大将はあまりな
 お扱いに憤りに似た気持ちが起こつて、三条の夫人が今ごろどう思
 つているかと考えだすと、単純な幼心に思い合つた昔のこと、近年
 になつて望みがかない、同棲どうせいすることのできて以来の信頼し合つた
 夫婦の情味などが思われて、自身のし始めたことではあるが、この
 恋が味気なくなつて、もうしいて宮の御一機嫌きげんをとろうとも努めず
 に歎き明かした。こんなみじめなことで来たり出で行つたりするこ
 ともきまり悪くこの人は思つて、今日はこちらにとどまっているこ
 とにして落ち着いているのにも、宮は反感がお持たれになつて、い
 よいようといふうをお見せになることが増してくるのを、幼稚なお
 心の方であると、恨めしく思いながらも哀れに感じていた。蔵くらの中
 も別段細かなものがたくさん置かれてあるのでなく、香からびつの唐櫃からびつ、お

置き柵だなどだけを体裁よくあちこちの隅すみへ置いて、感じよく居間に作つつて宮はおいでになるのである。中は暗い気のする所へ、出たらしい朝日の光がさして来た時に、夕霧は被かいでおいでになる宮の夜着の端をのけて、乱れたお髪くしを手でなで直しなどしながらお顔を少し見た。上品で、あくまで女らしく艶えんなお顔であつた。男は正しく装まつている時以上に、部屋の中での柔らかな姿が顔を引き立ててきれいに見えた。柏木かしわぎが普通の風采ふうさいでしかないのにもかかわらず思しい上がり切きつていて、宮を美人でないと思しうふうを時々見せたことを宮はお思しい出しになると、その当時よりも衰しえてしまつた自分をこの人は愛あいし続けることができないであろうとお考くえられになつて、恥ちずかしくてならぬ気があそばされるのであつた。

宮はなるべく樂觀れつげん的にものを考くえることにお努ゆめになつてみずから慰なぐさめようとしておいでになるのであつた。ただ複雑な關係になつて、あちらへもこちらへも済すまぬわけになることを苦くしくお思しいになるのと、おりが母君の喪中であることによつてこつした冷ややかな態度をおとり続けになるのである。

大将の手水ちよつすや朝餉あさげの粥かゆが宮のお居間いまのほうへ運ゆばれた。この際に喪の色を不吉として、なるべく目につかぬようにこの室の東のほうには屏風びよぶいを立て、中央の室へとの仕切りの所には香染めの几帳きちやうを置いて、目に立つ巻き絵物などは避さけた沈しんの木製の二段の柵たななどを手ぎわよく配置してあるのは皆一大和守やまとのかみのしたことであつた。派手な色でない山吹色やまぶき、黒みのある紅、深い紫、青鈍あおにびなどに喪服を着かえさせ、薄紫、青一朽葉くちばなどの裳もを目だたせず用いさせた女房たちが大将の給仕をした。今まで婦人がただけのお住居すまいであつて、規律のくずれていたのを引き締めて、少数の侍を巧みに使い不都合のないよ

うにしているのも、皆一人の大和守が利巧な男だからである。こうして思いがけず勢力のある宮の御良人がおできになったことを聞いて、もとは勤めていなかった家司などが突然現われて来て事務所に詰め、仕事に取りかかっていた。

実質はともかくも、この家の主人らしい生活を大将が一条で始めている数日間を、三条の夫人はもう捨てられ果てたもののように見て、これほど愛をことごとく新しい人に移すこともしないであろうと信頼していたのは自分の誤解であつた、忠実であつた良人がほかに恋人のできた時は、愛の痕跡も残さず変わってしまったものだと人の言うのは嘘でないと、苦しい体験をはじめするという気もしてこの侮辱にじつと堪えていることはできないことであると思つて、父の大臣家へ方角一除けに行くと言つて邸を出て行つた。女御が実家に帰っている時でもあつたから、姉君にも逢つて、悩ましい気持ちの少し紛らすこともできた雲井の雁夫人は、平生のようにすぐ翌日に邸へ帰るようなこともせず父の家の客になつていた。これはすぐに左大将へも聞こえて行つた。そんなことがあるようにも予感されたことである、はげしい性質の人であるからと大将は思つた。大臣もまたりっぱな人物でありながら大人らしい寛大さの欠けた性格であるから、一徹に目にも物を見せようとされないものでもない、失敬である、もう絶交するといふような態度をとられて、家庭の醜態が外へ知られることになつてはならぬと驚いて、三条へ帰つて見ると、子供は半分ほどあとに残されているのであつた。姫君たちと幼少な子だけを夫人はつれて行つたのである。父を見つけて喜んでまつわりに来る子もあれば、母を恋しがって泣く子もあるのを、大将は心苦しう思つた。手紙をたびたびやつて迎えの車を出す、夫

人からは返事もして来なかった。こうして妻に意地を張られるようなことは、自分らの貴族の間にはないことであるがと、うとましく思いながらも、大臣へ対しての義理を思つて、日の暮れるのを待つて自身で夕霧は迎えに行つた。

「寝殿にいらつしやいます」

ということ、平生行つて使つて座敷のほうには女房だけだ。男の子供たちだけは乳母めのとに添つてここにいた。

「今さら若々しい態度をとるあなたではありませんか。かわいい人たちをあちらこちらへ置きはなしにして、自身は寝殿でお姫様に帰つた気でいられるあなたの気持ちは解釈に苦しむ。私への愛情がそんなふうにならぬとは私にもわかつているのですが、昔からあなたにはばかり惹ひかれる心を私は持つていますし、今ではおおぜいのかわいなうな子供ができていますから、二人の結合のゆるむことはないと信じていたのに、ちよつとしたことにこだわつて、こんな扱いを私になさることはいいことだろうか」

取り次ぎによつて夕霧はこう妻を責めた。

「もうすべてのことがお気に入らないものになつてしまつたのですから、お困りになる私の性質は今さら直す必要もないと思います。かわいなうな子供たちだけを愛してくださいさればうれしく思います」

と夫人は返事をさせた。

「おとなしい御一揆あいさつだ。結局はだれの不名誉になることとお思ひになるのだろうか」

と言つて、しいて夫人の出て来ることも求めずに、この晩は一人で寝ることにした。どちらつかずの境遇になつたと思ひながら、子供たちをそばへ寝させて大将は女二にょにの宮みやの御様子も想像するのであ

った。どんなにまた煩悶はんもんをしておいでになる夜であろうなどと考えると苦しくなって、こんな遣やる瀬せない苦しみばかりをせねばならぬ恋というものをなぜおもしろいことに人は思うのであるかと、懲りてしまいそうな気もした。夜が明けた時に、

「こんなことを若夫婦のように言い合っているのも恥ずかしいことですから、だめならだめとあきらめますが、もう一度だけでもとおりになつてほしいという私の希望をいれたらどうですか。三条にいる小さい人たちもかわいそうな顔をして母を恋しがっていました、選よつて残しておいでになつたのにはそれだけの考えがあるのでしようから、あなたに愛されない子供達を私の手でどうにか育てましよう」

とまた多少一威嚇いかく的なことを夫人へ言つてやった。一本気なこの人は自分の生んだ子供たちまでもほかの家へつれて行くかもしれぬという不安を夫人は覚えた。

「姫君を本邸のほうへ帰してください。顔を見に来ることもこうしたきまりの悪い思いを始終しなければならぬことですから、たびたびはようしません。あちらに残っている子供たちも寂しくてかわいそうですから、せめていっしょに置いてやりたいと思います」

とまた大將は言つてよこした。そうしてから小さくてきれいな顔をした姫君たちが父のいる座敷へつれられて来た。夕霧はかわいく思つて女の子たちを見た。

「お母様の言うとおりになつてはいけませんよ。ものの判断のできない女になつては悪いからね」

などと教えていた。

大臣は娘と婿のこの事件を聞いて外聞が悪がつていた。

「しばらく静観をしているべきだった。大将にも考えがあつてして
いたことだろうからね。婦人が反抗的に家を出て来るようなことは
軽率なことに見られて、かえつて人の同情を失つてしまう。しかし
もうそうした態度を取りかけた以上は、すぐに負けて出てはならな
い。そのうちに先方の誠意のありなしもわかることだから」

と娘に言つて、一条の宮へ蔵人くらんじん少将を使いにして大臣は手紙をお
送りするのであつた。

「#ここから2字下げ」

契ちぎりあれや君を心にとどめおきて哀れと思ひ恨めしと聞く

「#ここから1字下げ」

無関心にはなれませんが因縁があるのでございますね。

「#ここで字下げ終わり」

この手紙を持って、少将はずんずん宮家へはいつて来た。南の縁
側に敷き物を出したが、女房たちは応接に出るのを気づらく思った。
まして宮はわびしい気持ちになつておいでになつた。この人は兄弟
の中で最も風采ふうさいのよい人で、落ち着いた態度で邸やしきの中を見まわしな
がらも、亡なき兄のことを思い出しているふうであつた。

「始終伺つている所のような気になつて私はいるのですが、そちら
では親しい者とお認めくださらないかもしれませぬ」

などと皮肉を少し言う。大臣への返事をしにくく宮は思召して、
「私にはどうしても書かれない」

こうお言いになると、

「お返事をなさいませんと、あちらでは礼儀のないようにお思いに

なるでございましょうし、私どもが代わって御一挨拶をいたしておいてよい方でもございせんから」

女房たちが集まって、なおもお書きになることをお促しすると、宮はまずお泣きになって、御息所みやすしろが生きていたなら、どんなに不愉快なことと自分の今日のことを思っても、身に代えて罪は隠してくれるであろうと母君の大きな愛を思い出しながら、お書きになる紙の上には、墨よりも涙のほうが多く伝わって来てお字が続かない。

「#ここから2字下げ」

何故か世に数ならぬ身一つを憂うれしとも思ひ悲しとも聞く

「#ここで字下げ終わり」

と実感のままお書きになり、それだけにして包んでお出しになった。少将は女房たちとしばらく話をしていたが、

「時々伺っている私が、こうした御簾みすの前にお置かれすることは、あまりに哀れですよ。これからはあなたがたを友人と違って始終まいますから、お座敷の出入りも許していただければ、今日までの志が酬むくいられた気がするでしょう」

などという言葉を残して蔵人少将は帰った。

こんなことから宮の御感情はまたまた硬化していくのに対して、夕霧が煩悶はんもんと焦躁しょうそうで夢中になっている間、一方で雲井の雁夫人くもの苦悶くもんは深まるばかりであった。こんな噂うわさを聞いている典侍ないしのすけは、自分を許しがたい存在として嫉妬しつとし続ける夫人にとって今度こそ侮りがたい相手が出現したではないかと思つて、手紙などは時々送っているのであったから、見舞いを書いて出した。

「#ここから2字下げ」

数ならば身に知られまし世の憂さを人のためにも濡らす袖かな

「#ここで字下げ終わり」

失敬なというような気も夫人はするのであったが、物の身にしむ
ころで、しかも退屈な中においてはこれにも哀れは覚えなくてもな
った。

「#ここから2字下げ」

人の世の憂きを哀れと見しかども身に代へんとは思はざりしを

「#ここで字下げ終わり」

とだけ書かれた返事に、典侍はそれとおりに思うことであろうと
同情した。

夫人と結婚のできた以前の青春時代には、この典侍だけを隠れた
愛人にして慰められていた大将であったが、夫人を得てからは来る
こともたまさかになってしまった。さすがに子供の数だけはふえて
いった。夫人の生んだのは、長男、三男、四男、六男と、長女、二
女、四女、五女で、典侍は三女、六女、二男、五男を持っていた。

大将の子は皆で十二人であるが、皆よい子で、それぞれの特色を持
って成長していった。典侍の生んだ男の子は顔もよく、才もあつて
皆すぐれていた。三女と二男は六条院の花散里夫人が手もとへ引き
取って世話をしていた。その子供たちは院も始終御覧になって愛し
ておいでになった。それはまったく理想的にいつているわけである。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。